

女性改造

二月號



女性改造二月號目次

近代の戀愛觀

厨川白村著

厨川氏著書中尤も快心の作にて
そして尤も得意とした戀愛論で
あるが故に、その賣行は依然白
熱的勢ひで、群書中に嶄然頭角
を抜く

紙型焼失のため永く品切中の所
漸く本日出來

八十七版發賣

□定價貳圓五拾錢□

四六判上製□送料十五錢◇

東京芝區愛宕下町　**改造社**　振替東京八四〇二



春のおとづれ

女權より人權へ

河田嗣郎

一　女權の相對性

女權の要求は男子に對する要求である。社會生存上に於ける機會均等を男女の間に實現せしめんとする要求である。されば若し現實に社會生存上に於て男女が平等に待遇せられ、政治的にも經濟的にも均等なる機會が與へられて居るならば世に女權の要求などいはるゝものの出て來る餘地はない。その意味に於ては勞働問題などの如きと同樣であつて、若し勞働者が經濟活動上に於て資本主と平等の待遇を與へられ、仕事の上でも報酬の上でも均等に取扱はれて居るならば、現今の所謂勞働問題なるものは起り得ない筈である。

たゞ現今事實に於て女子が一般的に差別待遇を受け、參政上に於ては勿論のこと、經濟的にも或は就職の上に於て、或は報酬の上に於て、男子に與へらるゝ機會が女子に拒まれたり、又は男子に與へらるゝだけの報酬が女子には與へられなかつたりするものだから、茲に女權の要求は起る。起つて男女の社會生存上に於ける平等待遇が主張さるるのである。そして事實としての不平等待遇は人類の歷史始まつて以來の久しい事實であるかも知れないが、現時に在つては社會生存の原理が人格價値の認識の上に築き上げらるゝまでに進んでしまつたものだから、その思想上の原理と現在の事實とが矛盾することゝなつて、茲に思想の要求が貫徹せられんとし、その要求にしつくりと適合した實際狀態の作り出されんために、問題は發生するに至つたのである。

獨り女權の要求といはず、すべて社會問題として表はるゝ所のものは、一として右の如き思想上の要求と現實との不一致より發生せざるものはない。人が無自覺的に生存して居て、社會生活上に於ける思想上の要求が、人格價値の認識の上に築き上げられて起つて來ることのない間は、たとへ事實としての不平等待遇は幾萬年の久しき事實として存在するともそこに女權の要求の如き社會的な問題の表はれて來ることはない。然るに若し人格價値の認識が明瞭になつてこれに基いて人生の意識が確立さるゝことゝなるに於ては、人生の組織的構成たる社會生活の上に於ても、人格價値の承認に伴つて當然に表はるゝ所の平等待遇の要求が、社會一般に渉つて擧げらるゝに至るは免れ難い。社會問題の發生するはこれが爲である。そしてその不平等待遇要求の一發現として女權の要求の出て來るは免れ難き所である。婦人問題の發生する亦これに因る。

何れにしても女權の要求は、讀むで字の如く女子の權利に關する要求なのだから、そが元來社會的の意味を有するものたるは、容易に了解され得べき所である。元來權利義務といふことは、人々相互の間の關係から出て來るもので、その相互關係の規矩準繩が社會的に認められて茲に權利となり義務となる。そしてその權利義務は、個人個人の間に於て成立す

ると同時に、男子と女子との間、父と子との間、雇主と勞働者との間、地主と小作人との間といふやうな或性狀や資格に依て分たれた區別の間にも成立ち得る。

従て女權の要求の如きものは、相對的の意味しかもち得ないのである。即ち女子が男子に對して平等の社會的地位を占むべきものなりとの主張の下に、社會生存上に於けるあらゆる機會を男子と均等にして貰はなければならぬといふ要求であつて、飽迄『對男子』である。即ち男子との相對關係に於て女子は何がゆへに常に社會的にその下風に置かれ常に劣れる待遇を受けねばならぬか、何等これを正常とするに足る理由はない。よし女子が一般的に男子よりも身體小さく腕力弱きものなりとしても、その天然的な區別が同時に直ちに社會的な區別とならねばならぬ理由はない。少くとも現時の社會生存の基礎を爲しこれを指導する原理としこの人生價値平等觀に照してこれを見れば　斯かる不平等待遇の是認さるべき理由はないといふのが、女權の主張である。そして此の主張からして、社會生存上に於ける男女の平等待遇が要求せられるのだから、その要求は飽迄も男子に對して女子の社會的地位を平等にせよといふのであつて、男子を比較上の對象とせないでは成立ち得ない觀念である。その意味に於てあくまでも相對的觀念である。

女權運動に取つては目ざす敵は男子だといはれるは右の意味からである。なにも男子が仇敵だといふ意味ではなく、女子の社會的地位を上ぼして男子對等の地位となすべく、その比較對象として男子を見、その運動の目標として男子の地位を見るといふほどの意味でなければならぬ。そして其意味に於ては洵に女權運動の目の敵たるものは男子であつて、女子はその意味に於て男子に向つて戰つて行かねばならぬ。それもし男子一般が女權運動に對して好意をもち、自ら進むで女權運動を助け、古き習慣を破つて新たなる社會生存上の原理を確立し實現するに努力するならば、右の意味に於てもこれを敵と呼ぶは聊か穩當を欠くであらう。然るに實狀に於ては、男子一般は女權運動に於て女子を助けないばかりでなく少數者を除いては、古來只管に女子を壓迫しこれに對して專制を行つて固く造り上げたる慣習を堅守するにこれ努め、女

權論者の如きに對しては、頭からこれを非社會的なりと罵り、甚しきに至ては、これを以て人の天性に戻るものとして非人道呼はりをする者すらある狀況である。從て女子の解放を要求し女權を主張するについては、この男子の反抗に對して戰はねばならぬことゝなり、玆に眞實の意味に於て、男子は女權運動の敵手たる實狀を呈するに至る次第である。

かゝる狀態は洵に好ましからざる狀態だけれども、古き慣習に依て利便を得つゝある者が、その慣習を革めて新狀態を造り出さんとする主張や運動に對して反抗するは、何れの邊にもこれを見る所で、止むを得ざるものといふ外はない。かの勞働運動に對して資本主が反對し、小作人運動に對して地主が反抗するのと皆一樣な譯合である。けれども兎に角事實としてその反抗の存する限り、主張が貫徹され運動がよく目的を遂せんためには、これに對して戰の行はるゝは避け難き次第である。戰はんがために戰ふにあらず、又必ずしも憎きが故に戰ふにあらねど、理の命ずる所に向つて主張を貫徹せんためには、その目的の遂せらるゝまで戰ふは、道程として避くるに由なき所と謂はねばならぬ。

已にその意義が相對的のものであつて、然かもその運動には歷々とした敵手がある。女權論の志す所愈々明確ならざるを得ない。然るにも拘らず、これに關する問題が、やゝもすればたゞ女性に關するだけの意味から成立するものと混同せらるゝ恐あるは如何なものであらう。問題の意義の認識すら確かでないやうでは、主張の不徹底や要求の中途半端なのは當然のことゝせなければならぬ。

二　女權から人權へ

女權の意義は上に示すが如く相對的のものであるからには、女權の主張は永久に存續すべき性質のものではない。それが永久に存續するやうでは實は女權運動は失敗に終つたわけで、所謂『女子の屈從』といふ事實は、永久に存續さることゝなる。卽ち女權の主張が女子の社會的地位をば男子の社會的地位同等に上ぼし、社會生存上に於て女子が男子と

均等なる機會を得るやうにせなければならぬといふに在るからは、その主張に依る女權運動が行はれて、その運動がよく目的を果し得るに連れて、女權の主張は漸次其の必要がなくなり、段々に消えて行かねばならぬ筈のものである。

醫師や病院の必要なのは、世に病といはるゝものが存するからのことであり、病が人生から跡を絶つに至れば醫師も病院も全く必要なきものとなる。そして現今醫師や病院が存在するにつけその存在と活動との目的とする所は、やがて世に全く病などゝいはるゝものなからしめんとすることに存せなければならぬ。即ち醫師や病院の如きものはやがて自己の存在する必要なきを至らしめんために存在する次第である。これと同樣に世に社會運動の行はるゝは、社會問題なるものゝ起り來るべき餘地を段々に無くし、やがてはそが根絶するに至らしめんためたるに外ならず、即ち社會運動は自己存續の必要をなくするために存在するものである。蓋し社會問題は現時の社會生活がその實狀に於て現時の思想の要求する所に合致し得ないで、そこに多くの社會的病患あるが故に表はれ來るものたるに外ならざれば、その問題の解決のためにせらるゝ運動の結果、社會生活上の病患が段々に消えてなくなれば、社會問題そのものもそれと共に消滅せざるを得ない筈である。この意味に於てすべて社會運動は自己滅亡のために行はるゝものと謂ふことが能る。

さればその社會問題の一としての婦人問題も、その社會的意味に於ける女權問題としては、現在女子の社會的地位が男子に劣り、男子と同一の生存の機會が女子に與へられない實狀あるがために、その實狀ある限りに於て發生するものたるに外ならぬ。從てこれに依る運動の結果、女子の社會的地位が段々に上ぼりて終に男子と平等たるに至れば、そこで即ち問題は解決され、運動の必要は消えてなくなる。それが消えてなくなるといふことが問題と運動との存續の終局目的たらざるを得ざること、洵に意義深長なる所とせなければならぬ。此の意味に於て女權運動は一種の水平運動たるに外ならぬのである。

斯るが故に女權問題なるものは、それ自身に於て終局的な意義を有ち得るものでない。どうしても其の基礎に於て人權

問題を有し、其の終局に於て人權問題と繋がれざるを得ないものである。これを基礎としこれに繋がれたるによつて始めて問題はその終局的な意義を有ち得る。

試にこれを思へ、女子は何がゆへに社會生存上に於て男子と對等の地位の保障を得べきものと考へらるゝか。何が故に均等なる機會の下に社會的生活を營むべき筈のものと考へらるゝか。それはたゞ苟も人たるものは、その人格的價値が平等であつて、社會的にこれを觀てその價値の上に差等の認めらるべき筈のものでなく、差等を認めんにもこれを認むべき何等の倫理的根據なきが爲めたるに外ならぬ。そしてそは苟も人たるものに就いて一般的に謂へることなのだから、男性たると女性たると、富者たると貧者たると、資本主たると勞働者たると、地主たると小作人たると、そんな區別は人格價値の上には何等の意義を有ち得ない。人の人格的な存在はかゝる、性や所有や職業やの區別を超越し、たゞ人間たる一般性に於て成立つものなれば、その一般性がかゝる區別に禍されて、そのためにその人格的存在の價値に差等の設けらるべき筈のものでないからのことである。

されば女權の要求は勞働問題に於ける要求と同じやうに、その意義の根柢には、人格價値の認識てふことが橫はり、これに依つてのみその問題としての又要求としての意義が成立ち得るものと見る外はない。その根柢を忘れて、たゞ女權問題のみについてその眞意義を見出さんとしても、それは不可能のことに屬する。たゞその主張としての表はれや、問題としての表面的な構成やに就いてのみ、その意義を見出さんとするに於ては、縱にたゞ便宜的な説明や世俗的な敍述やだけしか行はれ得ない。

果して然りとせば、女權論の主張の如きは、その根柢に存する所の人權の主張の一表現と見らるべきものたるに過ぎぬ人權の主張が、その表現の道筋として、或は婦人問題を通じて表はれたり勞働問題を通じて表はれたりするまでのことであるから、少しく物を眞劍に考ふる者は、たゞその表現の形象にのみ捕はれないで、深く探つて直ちに意義の眞諦を捕捉

することに心掛けねばならぬ。然もこれを把握するは何等大いなる困難を伴ふわけでなく、大哲人でなければ出來ぬやうなものではない。近世の初期以來多くの人々に依つて說き盡され謂ひ古された倫理觀たるに過ぎないで、今では殆んど通俗化してしまつたものを、たゞしつかりと捕へればそれでよいだけのことである。謂はゞ、これを捕ふるに難からず。たゞこれを確かりと捕ふることのやゝ容易ならざるだけのことたるに過ぎぬ。

然しともかく、女權の要求は、人格價値の認識の上に立つに依て甫めて意義を爲すものたるからには、女權の主張を爲し女權運動を行ふ者に於ては、たゞ水の表面だけを泳いで居てその底を知らないやうなことがあつてはならぬ。又その上層の流れをのみ知つて、その下層の潮流の方向を知らないやうなことがあつてもならぬ。常に時代を支配する思想の本流に棹して、その本流に從つて進むことに心掛くべきと同時に、その本流に沿ふて流るゝに當つては、その上層流と共に下層流を見究めなくてはならぬ。此の意味に於ては、主張は女權から人權へ、運動は女子解放から人生一般の解放に進み行かねばならぬものである。そして人權の主張は表はれて女權の主張となり、運動は又人生一般の解放運動の一發動として女子解放運動となり、二にして一たり、一にして二ならざる態度の持せらるゝを要する。

この一元的な態度よりしてこれを見れば、女權運動は勞働運動の如きと、その原理を同うしてその原動力を同うするものなのだから、その運動の表はれに於ても、共に軌條を一にして相携へ相助けて進み行くべきものたるを、否定すべき由もない。そして兩者が相提携して進み行かんことは、たゞに理に於て當然なるばかりでなく、その運動の效果よりこれを見るも、大いにその力を强くし兩者共によくその目的を果し得べき所以とせなければならぬ。ましてかの普選運動の如きは女權運動と同宗門の同行たること、誰の目にも明瞭すぎるほど明瞭のことなれば、兩者が提携互助しつゝ進み行くべきものたるは、言を俟たざる所である。

三　人權の絕對性

女權は人權を基礎とするもので、人格を離れて獨立に女權なるもの丶考へ得べからざること前述の通りであつて、然かもその女權はたゞ相對的の意義しか有ち得ざるものなりとせば、女權の主張に於て人格の價値に對する根本認識を忘れ、たゞ女子の社會生活上に於ける形體的なことばかりに拘泥し、半可通に狂奔絕叫をこれこと丶するものほど醜いものはあり得ない。

口に女子の解放を叫び、又女子は家庭を出でて社會的に活動せなければならぬといふやうな事ばかり考へて、たゞ飛び歩いて色々の計畫を立てたり何々會とかいふものを造つたり、何々事業とかいふもの行つたりし乍ら、その人格的な自覺に至つては頗る以て心元ないやうな婦人が、隨分此頃我國にも多いやうである。然し世にこれ程ど醜いものは少い。婦人が解放されて社會的に活動することは洵に結構なことで又是非必要なことたるは、上に論ずる所より推して明かな所である。けれどもその活動は是非人間價値の尊重といふ根本觀念と一致したものでなければならぬ。又人格價値の認識といふ自覺的な態度より行はる丶ものでなくてはならぬ。然るにその根本を忘れ、自らの行ふ所を見れば自らその人格價値を傷け、苟も自覺的な尊心あるもの丶これを爲し得ざるが如き行動を敢てして毫もこれを恥とも思はないやうな風であり乍ら、たゞ家庭を外に飛び歩いて、何かしら計畫を立て事業とかいはる丶ものを行ひさへすれば、それが直ちに女子の解放であり女子の獨立であるかの如く考ふる輩が、かなり世に横行しつ丶ある。

私はその事實を事實として苦々敷思ふといふばかりでなく、かく女權問題が誤解されて、又常に本末が轉倒されて、爲めに却つて女子に對する社會一般の輕蔑を增すが如き傾向あるを、殘念に思はざるを得ない。それといふのも畢竟は我國の婦人がとかく物事を眞劍に考へないで、ショールやパラソルの流行と同じやうに婦人問題の如きをも流行品扱し、これ

を振りかざして歩くことを以て一種の化粧と考へるやうな輕調な風に浸み込まれて居て、まだ一般に自覺に導く反省の足らないから起ることではあるが、かゝる無反省な無自覺な風潮ほど、女權の眞要求と相容れざるものはあり得ない。

何にしても女權の要求が人格價値の尊重に基くものたるからには先づ以て必要なのはその人格價値の認識といふことでなければならぬ。社會的なる活動はその根本認識が出來てからのことである。

然るにその人格價値の認識といふことになれば、これは人間の義務としても是非行はれなければならぬことで、然かもその價値は一と度認識さるゝ限り、實に絶對無限のものである。これは決してその一表現たる女權の如くその意義に於て相對的のものではない。而してその人格價値認識が社會生存に關する一般原理として表はるゝとき、それは即ち人權の主張となるものなれば、人權といふ觀念は、これまた實に絶對的の意義を有する。即ちそれは女子に於て妥當するが如く男子に於ても妥當する。最早そこには男女の區別はない。

此の絶對的意義に於ける人權の主張は、人間社會一般に渉つて、社會內に於けるあらゆる人格者の平等待遇の要求であり、生存上の機會均等主義の要求である。そして人格價値の認識が何故にこの平等觀に到達するかは、今更架說を俟たざる所であらう。たゞ念のためにこれを搔つまんで言へば、苟も人格價値の認識たる限り、その人格なるものは、人間存在の第一義たる獨立存在といふことゝ、獨立なるものゝ自由なることゝを前提として、これに依て造り上げらるゝ外はない。然るに已にその人格的存在が自由にして獨立なる存在たるからには、各々獨立なるものが相互的に他人の存在の價値を認むる際には、互に均等にこれを評價する外はなく、自己の獨立なる存在が無上の價値たる如く、他人の獨立なる存在も亦其人に取つては無上の價値であるから、自己存在の價値の尊重せらるゝと同じ程度に於て、他人の存在の價値も尊重せられねばならぬ。然らば即ち多數人に依つて成立てる社會一般よりこれを觀れば、各人各々對當平等なる存在價値を有することゝなる外はなく、社會的に觀たる人格價値の平等觀は玆に成立することゝなるのである。

此の平等なる人格價値の社會的一般認識が人權の主張たるからには、その人權の主張は、男女の差別に依て變ぜらるべき筈はない。その意味に於て絶對的である。

尚又此の人權の主張に至つては、苟も人間生存の續かん限り永久に存續すべきものであつて、そは他の何物に比較して成立てる觀念でもなく、又その主張は他の何物に對して行はるべきものでもなく、人間社會生活の根本としてたゞ確立さるればそれでよいものである。そして社會生存の實狀をしてこの根本原理に合致せしむるやう、その實狀の改革の行はれんことは、兩者合致の缺けたる限り必要なことだけれども、その合致が完全に行はれたる曉に於ても、人權の主張とその擁護とが意義を失つてしまうことはない。この意味に於ても人權は絶對的である。

ともかくこれ等の意義より出て來る人權の絶對性に至つては、動かすべからざるものであつて、然かも女權の主張の如きは、これに基きこれに繋がれてこそ甫めてその意義を完成し得るものたること、吳々も注意さるべき所とせなければならぬ。されば私は女權の主張をして眞劍なるものたらしめんがめに、この人權に關する根本觀念の十分徹底的に、婦人一般に行渉つて造り成されんことを、衷心希望せざるを得ない。この根本觀念が一般的に造り成されてこそ甫めて女權の主張は眞に力强き主張となり得るであらう。又永久の生命を有つものとなり得るであらう。

世にはかゝる明白の事理をもまだ辨へ得ないで、女權なぞといふものは、人間として生きて行くには餘計なものであるかのやうに思ふ人達が多いのみならず、女子の大多數はまだやはり女權などといふ危なつかしいものには、滅多に手など觸るべきものでないやうに心得て居るやうな有樣であり、更には又女權の主張者といはるゝ婦人の中にも、やゝもすれば上に述べたやうな人達を見出す有樣なる故に、茲に又野暮を顧みずこの一論を草する次第である。要するに吾々は男子といはず女子といはず、一般的に人間としての最高價値の認識に向つて突進し、この根本認識の上に吾々の生活を個人的にも社會的にも築き上げたいものである。たゞそれだけである。



永遠に女性なるもの

茅野蕭々

一

一切の過ぎ去るものは、
ただ譬喩のみ。
曾て及ばざりしもの、
ここには行はれたり。
名狀すべからざるもの
ここには遂げられたり。
永遠に女性なるもの、
我等をひきて行かしむ。

ゲヨエテがその生涯を通じて書いたとも云ふべき戯曲ファウストは、かういふ「神秘な合唱」で終つて居る。それ以來「永遠に女性なるもの」の一句は、幾多の人々によつて引用せられて、苟も文學に親みある輩には、常に口にせられる言葉と

なつてゐる。それではゲヨエテが指して「永遠に女性なるもの」と名づけたのは果して何であるか。私は今少しそれを考へて見たい。

二

先づ順序として私は戯曲ファウストの内容を語らなくてはならない筈であるが、それは限ある紙數の許さない所である上に、話の略筋は可なり廣く知られて居るやうであるから、此處には唯必要な部分だけを、その時に應じて略述するに止めて置かうと思ふ。云ふまでもなく、ゲヨエテのファウストが在來の傳說や世俗本と異つてゐるところは、全篇を貫流するその根本的イデエでなくてはならない。さうしてそれを最も簡明に約言すれば、善の勝利に對する作者の確信であると云つても差支はあるまいと思ふ。「天上の序曲」は最も明瞭にこれを表現して居るものであつて、其處には宇宙の主と惡魔のメフイストとが、地上の人間生活について語つた末、一種異つた賭をするのである。「人は努めてゐる間は迷ふもの」であるが、而も「よい人間は暗い衝動に促されても、常に正しい路を知つてゐる」と確信してゐる主は、人間の中での最も優れて居るファウストの名を擧げてその例證としやうとする。しかしながら卑近な現實の外を見ることの出來ないメフイストは、ただ「混沌として奉仕する」ファウストを認めるのみであつて、「天の一番美しい星を取らうとし、又地上の一番深い快樂を悉く極めやうとし」て、而も「深く湧立つ胸に滿足を得ない」彼の魂を理解することが出來ない。それ故メフイストは主の主張に反して、ファウストを魔道に陷れた後、墮落破滅の淵に沈め、好むで塵埃を食ふ蛇のやうにしてしまはうと賭けるのである。主は到底その不可能であることを知つてゐる。ファウストは今混沌の中に模索顚躓して居るものの、それも要する主に對する奉仕であつて、やがて「淸透の境」に入ることを確信して居る。それ故に主はメフイストに向つてファウストに誘惑の惡戯を擅にすることを許した。彼はファウストを誘つて所謂小世間、大世間を經繞り

ながら、あらゆる受用享樂の嵐にファウストの魂を掻り亂さうとした。しかし賭は終に破れた。既に「享樂は人を卑俗たらしめる」ことを覺つて、事業の生活に向ひ、荒びる海を埋めて新領土を開拓し、「自由な民と共に自由な土地に住む」至幸の刹那を想望して、「止まれ、お前は如何にも美しいから」と云ひながら地上に斃れたファウストも、其の殘骸をこそメフイストの手に委ねたけれど、其靈魂は終に天使のものとなつてしまつたのである。

惡の手から
靈の世界の尊い一人が救はれた。
「誰でも、斷えず努力してゐるものは、
われ等が救ふことが出來る。」
その上この人には
上の方からも愛の同情が加はつてゐる。
神々しい群が
心から此人を歡迎する。

ファウストの不死の靈はやがて「下界の縛を離れて、天上の新しい春と飾とを味つてゐる」神々しい子供等の群に受取られて、尚殘つてゐる地上の「綿屑を取去ら」れる。さうして見る見る著しい發達と生長とに彼等を驚かすのである。それでは斯うしたファウストの救濟を可能ならしめたものは抑々何であるか。

それはいふまでもなくゲヨエテの新しい宗教的信念でなくてはならない。然らばその信念とは何であるか。之れを一面から云へば神の内在に對する信仰である。「天上の序曲」に於て主が「よい人間は暗い衝動に促がされても、常に正しい路を知つて居る」と云つた言葉も、實に此の意味を語るものに外ならない。さうして之れを他面から見れば、自然を以て直

ちに神と考へる汎神論的思想であるといふことが出來る。ゲョエテがメフストを以て、主の絶對的對立者とせずして、寧ろ憎み得ざる滑稽な惡戯者とし、或る意味に於て神に隷屬する力の一部としたのは、その爲であらうと思はれる。斯ういふ見地から考へる時、人間はやがて神の一部分であり、神はやがて人間精神の無限な延長又は擴大となるであらう。それ故人間の享樂欲や知識欲も、その最も深い奥底に於ては、神に對する憧憬から產れるものであり、又は神に至る正しき路を間接に指唆するものであると考へることは決して困難なことではないであらう。更に進んで、人間の自己主張や、意志自律や、自由の要求も、必らずしも敬虔な精神と背馳するものでは無くなるのである。否な、自己の全力を傾け、自己の全體を出來得る限り展開して、最高の價値に向つて邁進する人間の努力こそ、實に人間が神の子である所以を證明するものでなくてはならない。「誰でも努力して止まないものは、我々が之を救ふことが出來る。」前に掲げた天使の此の言葉も、是に至つて一層の明晰と重量とを加へるであらう。

三

ファウストの救濟が以上の如き意味に於て行はれると考へるとき、換言すれば、人間を救ひの手に渡す唯一の切符は、人間不斷の努力を外にしてはあり得ないと信ずる時、「永遠に女性なるもの、我等を引きてゆかしむ」との結句は、果して如何なる意味を語つてゐるのであらう。ゲョエテはファウストの救濟を、單に內からの神性の展開のみでは足りないとして、其處に他からの力の働きかけることを必要としたのであらうか。努力の切符に鋏を入れる所謂「永遠に女性なるもの」と、人間內在の神性又は自然神とは如何なる關係に於て考へられたのであるか。そもそもまた此の美しい名辭は或る特定な靈に負はされたものであるか否か。

私は之等の問題に觸れる前に、なほ少し戲曲に歸つて語る必要を感ずるものである。

ファウストの靈が天使たちに伴はれて昇天する時、その下の谷や森や岩のすさまじい山中には、「沈思せる師父」と、「天使めく師父」と、マリアを敬ふ學士とがゐる。最も淨く、最も高い石の龕にゐるのがマリアを敬ふ學士であつて、最も低い所に居るのが沈思せる師父である。さうして其間の虛空を上下しつつあるのは「感　せる師父」である。彼等は主として「永遠の愛」が萬物を生育することを讃美してゐるのであるが、「蛹」のやうであつたファウストの靈が「神々しい童子等」の手に渡される時、一番高い龕の中の學士の眼には一群の女の姿が入つて來た。

あそこを、漂つて昇りながら。
女たちが通り過ぎる。
星の花輪をしてゐる。
眞中の立派な方、
あれが天妃だ。
あの光耀で私にはわかる。（狂喜して。）
世界の最高の女主よ。
蒼く張つた
天の帳幕の中で
御身の秘密を拜ませて下さい。
男の胸をば、
嚴かにもまたやさしく動して、
聖なる愛の喜を以て、

御身に運びゆく物を、許して下さい。
御身が至重に命ぜられると、
我々の勇氣は冒されず、
御身が滿足を與へられると、
灼熱も忽ち和らぎます。
最も美しい意味で純潔な童貞、
尊むにたへたる母、
我々の爲に撰ばれた妃よ、
神々と同じ生れである。

而も彼女を繞る贖罪の女等にもやさしい慈愛と力とを與へる神母は、斯うした學士の讃嘆の中に、赫奕たる光明を發しながら翔つて來る。共同團に附纏ふ贖罪の女たちは、優しい聲を揃へてファウストの靈の爲に「大なる罪ある女等をさへ傍より遠ざけず、贖罪の利益を永遠に加へ給ふ御身なれば」ここにも「ふさはしき御免を垂れ給へ」と願ふのである。見よ、贖罪の女達の中には、「嘗てファウストの戀人――グレエチヘンと呼ばれた」ものも交つて居て、「昔愛され、今は濁なき者」となつたファウストの近づくのを見る喜びに神母に縋りついてゐる。やがて愈近づくに從つて、ファウストの靈は「人の世の群から早く引き放された」童子等の靈よりも、「學んだ」が故に既に大きくなつて、彼に教へるに足りる程にもなつてゐる。これを見てグレエチヘンの靈は輕く神母を仰ぎながら云ふのであり。「有難い靈の群に取卷かれてゐらつしやる故、新參のあの方は自分で自分がお分りにならない位です。まだ新しい生活にお氣がつかれない位です。それでもう有難い方々に似ておいでになりました。御覽なさい。下界の絆を皆切つて、古い身の皮からそつくり拔け出しておしまひ

なさつて、新しい若々しいお力が、靈の衣の表に顯はれておゐでなさいます。あの方にお敎へ申すことをお許し下さいましまだ新しい日の光を眩ゆがつておゐでなさいますから。」と。聖母はこれに答へて、グレエチヘンに一層高い空へ昇れといふ。「お前がゐると思ふと、あの人もついて行くから。」

悔を知る優しき者等よ、
汝等皆な豈い境界に
虔みて身を置き換へんため、
救主のみ目を仰ぎまつれ。
凡てのより善き心は
皆汝が用をなさせよかし。
童貞よ、母よ、妃よ、
女神よ、永く惠を垂れ給へ。

うつ伏しながら學士がこの禮讃の言葉を述べ祈つた後、天の諸聲は全く一つの統一となつて、この文の最も初に掲げた「神秘な合唱」となつたのである。

斯うした環境を顧慮して考へるとき、此處に「永遠に女性なるもの」と名指されたものは第一にグレエチヘンの靈であるやうに見える。少くともフアウストの側から之れを見る時、彼をより高く引いて行くものは、贖罪の女の一人、嘗てグレエチヘンと呼ばれたものであることが神母の口から明白に語られて居る。彼女自身も明にまた「彼の方にお敎へ申すことをお許し下さいまし」と願つて居る。「是に至つてそれは最早フアウストとグレエチヘンではなくて、グレエチヘンとフアウストである。彼女が先きに立つて、彼が其後に從ふのである。彼女は最早や彼に敎へられる所はないのである」と

云つたクノオ・フイツシヤアの言は、然し至當であるやうに見える。しかし其處にはなほ考ふ可きことが殘つてゐはしないか。

四

先に私はフアウストの救濟を可能ならしめるものは、實に神の內在性に對する信念であることを說いた。さうして不斷の努力が天國に入る唯一の鍵であることを述べた。此意味に於てギヨエテの自然的汎神論の自然といふものは、安息靜止を與へる自然ではなくて、常に活動と展開とを續けてゐる自然でなくてはならない。斯ういふ風に神と人間とを考へる時天國に於て何故にグレエチヘンが導いて、フアウストが從はなくてはならないのであらう。それが第一の疑問である。更にまたグレエチヘンの救濟は如何にして可能であつたか。私は先づ第二の疑問に就て考へて見やう。

グレエチヘンは云ふまでもなく無智な、平民の一少女に過ぎない。彼女の生活は未だ曾て家庭の乏しい日常些事を超えたことが無かつた。母の看護、幼妹に對する心づかひを外にしては、何一つ取立て誇るに足るやうな出來事さへなかつた之れをフアウストの光彩ある異常な生活に較べて考へる時、彼女の生活の何處にも「努力してやまぬ」精神の發露と見られるやうな所は無いと云ふことが出來る。若し彼女をフアウストと比較して、その光耀を爭はしめる點を求めるならば、それは世にも珍らしい彼女の純眞純潔な魂であらう。實にこの點に於て、我々の可憐なグレエチヘンは、世界の文學中他にその比を見ない少女であると斷定しても、決して過言ではあるまいと思ふ。彼女は無知の爲めと、獻身的愛情との爲めに、誤つて母を殺し、兄の死を招き、生みの兒を水に投じた。しかしそれは總べて彼女の無知が產むだ恐ろしい罪であつて、純眞な彼女の魂はその爲に決して寸毫の汚れをも受けなかつたのである。彼女が水甕を抱いて井戸のほとりにリイスヘンと語つた時、その多辯な舌端からほとばしる、憐れなバルバラに對するはしたない罵詈を聞いた時、始めて我が身

を振返つてその過誤を知つてから、圓かな夢のやうな戀愛の樂しさは消えて、日夜苦痛と涙との生活が始つたのである。

痛み多きマリア樣。
お惠み深くお顏を向けて
私の惱みをば見そなはせ。

お胸を刃に貫ぬかれて、
千々の悲みをお覺えなさりながら、
御愛子の死を見そなはす。

天にいます父を見上げながら、
御子と御身との惱の爲に
歎のみ聲を空へ送り給ふ。

……………

哀れな胸が何を案じ、何の爲にわななき、
何をほしがつてをりますか、
それを知つてるのは唯あなたばかりでございます。

苟も魂の清淨を失つてゐる女は、決して受苦聖母の前に跪いてかうした涙の祈りをなすことは出來ないであらう。戀人の苦心と熱意とをも斥けて、その脱牢の企に應じないのは、さうして冷たい牢獄の死に甘んずるのは、魂を賣つ

て身の好きを願ふものの夢想だもすることの出來ないところであらう。斯く清い魂を守つて、その爲に受苦の熱い淚を流すものも、亦た一種不斷の努力をなしつつあるものと云ふ可きではないか。それ故彼女が半ば狂亂に近い程の苦惱に陷りながら、終に痛ましい死に抱かれる時、メフィストが「これが處刑だ」と罵るのに對して、「救だ」との聲が上から響くのも、必らずしもファウストの救濟と矛盾してはゐない。「とはなる喜の火。燃ゆる愛の契。湧きかへる胸の痛。泡立つ神の興。征箭よ、我を射貫け、槍よ、我を刺せ、杖よ、我を碎け。雷火よ、我を燒け。徒なるものを渾て散ぜしめ、とはなる愛の核心なる、とはなる星を照らしめよ。」感奮せる師父が歌つて居るやうに、受苦によつて「徒らなるものを渾て散ぜしめる」ことは、より高きものへ向つて生活の嵐の中を邁進する努力と、必らずしも徑庭があるとは云ひ難い。

以上の說明はグレェチヘン救濟が、ファウスト救濟の思想と一見矛盾するやうであつて、その實は決してさうでないことを立證するに足りやうと思ふ。しかし、天上に於てグレェチヘンがファウストを導く、あの優越性の根據は未だ少しも說明されて居ないのである。若し此處に假定したやうに、「永遠に女性なるもの」がグレェチヘンに與へられた名であるとすれば、其處にはグレェチヘンの中にあつて、ファウストより優る何物かが無くてはならない。我々は果してさういふものを認めることが出來るであらうか。

五

そのことを考へる前に私は他の一つの考を呼び起して見たい。それは神秘の合唱が「永遠に女性なるもの」と云つたのは、特にグレェチヘンを指して居るのではなくて、寧ろ神母を、或は神母を中心とした贖罪の女――その中にはグレエチヘンも居る――の群を云ふのではあるまいかといふことである。前に略述した所でも見得るやうに、ゲョエテはファウストの昇天をかくに當つて、その救ひの力の本源を、少くとも其の直接に湧き出でる泉をば、宇宙の主に置いて居ないで、

天妃、神母に置いて居る。その神母が基督教に於けるマリアと果してどの點まで類似して居り、またどの點に於て異つて居るかは、今此處で論ずる暇を有しない。ただ私の注意したいことは、神母が無限の愛の權化として書かれて居ることである。それは前にあげたマリアを敬ふ學士の言葉にも、贖罪の女の訴へにも明かに知ることが出來る。實に「觸れることは出來ないでも」、「誘惑に陷り易い人々が、頼りに思つて近づくことは禁じられて居ない」自然の愛が、この神母によつて象徴せられて居るやうに考へられる。さう考へて來るとき、私の眼につくことは、此の場面に於て、合唱する群や、師父等や、神々しき童子等によつて發せられる辭句が、悉く神の愛の讃美であり、神の愛の證左であることである。そしてそれ等は皆な「青い天の帷幕の中で」光り輝いて居る神母を中心にして繞つて居る事である。ゲヨエテが此處で特に力點を置いたのは、神即ち自然の愛であつたことは疑ふ餘地はない。

自然の愛、——それの象徴としての神母——が、我々の勇氣を不退轉ならしめ、我々の熱した心をも和らげ、我々の生活を不斷に淨化して、高きに登らうとする人間努力の一路を導く、さうした信念は戯曲ファウストのみではなく、ゲヨエテの抒情詩その他の諸作に多く覗ひ得る所である。さうすれば「永遠に女性なるもの」は、自然の偉大な愛、即ち神母の別名であつて、それが救濟せられたファウストの靈を高きに導くばかりではなく、動いて止まない自然の諸力をも「引き行く」ものと解することは、ゲヨエテの思想、ファウストの根本的イデエと何の矛盾もないばかりでなく、一層明かにそれを說明するものと云ふことが出來るやうである。

併し翻つて考へると、ゲヨエテの意味に於ける自然は、決して人間の對立としての自然ではない。人間をもその一部とする自然、人間をも含む自然でなくてはならない。それでなければ人間に於ける神の內在性も、自然即神の信念も努力による救濟も全く無意義なものとならなくてはならない。それ故、自然の愛はやがてまた人間內在の愛でなくてはならない

さうして人間至純の愛——此場合それは戀愛の形で現はれたけれども——の權化象徵として、グレエチヘンの至眞な魂を考へることは、許し難い冒瀆であるとはせられまい。

斯ふ考へて來るとき問題の解答は既に明である。神祕の合唱が「我等を引きてゆかしむ」と云つた、その我等が天上のものをさすと地上の人間をも含むとに論なく、「永遠に女性なるもの」とは卽ち愛である。至純至眞なる偉大な愛である。人間の內にも偏在する愛である。之れは自然の名に於て神母であり、人間の名に於てグレエチヘンである。流石に偉大なファウストも之に導かれて昇天の一路を進まなくてはならない。

六

然らばゲヨエテは何故に女性を以て「永遠に女性なるもの」としたであらう。私は尙それに就て語るべきことの多くを持つて居るが、今はそれに及ぶ時間を有しない。しかし要はゲヨエテの生きた豐富な體驗から生れた窮局の信念に歸すると思ふ。さうしてゲヨエテが此の一句を發見して以後、此句が今日まで多くの人々に愛好せられるのは、單に其言葉が美しい爲ばかりではなく、其處に深い永遠の眞理が含まれて居るからであらう。女性の本質は至純の愛でなくてはならない。我等もゲヨエテと共に堅くこれを信ずるものである。

衆議院議員の公娼觀

安部磯雄

婦人矯風會の御婦人達が昨年十二月十五日衆議院に押しかけ議員達に公娼廢止贊成の署名を求めましたが、贊成者が七八十名もあつたそうです。然し反對者も可なり多く、中には葉書で其理由を述べた人もあつたので、二三日後の某新聞には其中の一部の姓名と意見が掲載されて居りました。私はこれが間違なく報導されて居るかどうかは知りませんが、さすがに代議士だけあつて國民の中にある思想をよく代表して居ると思ひますから、これを先づ紹介することにいたします。

○伊澤平左衞門君『公娼廢止には反對です、理由は澤山ありませうが、公娼廢止の結果は私娼の增加が人間の本能から自然の歸結となります、我國婦人の知識程度は衞生觀念に充分でなく、私娼に依つて害さるゝ國民健康を憂ふるものです』

○伊坂秀五郎君『御心情は誠に麗はしく存じます、が我國の實狀は未だ其域に達せぬ樣思ひます』

○林川龜太郎君『私は重罪犯人、癩病瘋癲、白痴、遺傳疾患者の結婚を禁止する法律をつくりたい、而して此等のために性慾を滿足するの途を講じたいと思ひます。其途さへつけば公娼廢止に贊成です』

○小川平吉君『尚充分研究を要するものと思ふ。』

○濱田國松君『尚餘弊を豫防すべき對案を必要と思ひます』

○阿部武智雄君『第一風紀取締上第二衞生上今暫く公娼存置の必要があらうと思ひます』

○福井三郎君『私娼を防止するの明案あれば先づ之を聞いた上で贊成しませう、私娼の恐るべきは公娼の人道に反するの比にあらず』

○中野寅吉君『時期尚早し』

○小泉又次郎君『私は教育の根本社會組織の改善に努め、その曙光を認めたる後に公娼廢止を斷行すべき覺悟と誠意とを有します』

⊙岩本平藏君『遊廓の再興は都市の體面に關するものと認めず、生物の絕對制慾は不可能なりと認むるが故に』

○三枝彥太郞君『廢止は否、理由は說明せず』

以上の理由を綜合して見れば、つまり左の三點に歸着するやうに思はれます。男子の性慾は絕對的に抑制すべきものではないから、何等かの形式に於て賣淫制度を必要とすること。賣淫制度としては私娼よりも公娼が優つて居るといふこと。公娼制度は風紀上より若くは人道上より見て好ましくはないけれども、花柳病の蔓延を防止するには此方法を取るより外なきこと之れが公娼廢止に對する一部議員の反對意見であつて、私共が今日まで聽いた世人の意見も大體此三點に歸着するやうに思はれます。更に約言すれば花柳病の蔓延を防止するために公娼制度が最も有効であるといふことが彼等の強い信念となつて居るのです。此信念或は迷信のために彼等は八萬の同胞姉妹の貞操を犠牲にして顧みないのであります。これによりて全國到る所人肉の市場は露骨に公開せられ、清淨無垢なる青年にも遊廓なるものが何を意味するかといふことは充分に了解されて居ります。文部大臣や內務大臣を通じて青年男女に人格修養の必要を說いて居る政府は一方に待合や遊廓の存在を公認して貞操破壞の實物教育をなすといふ矛盾を敢てして居るのであります。裸體畫や猥褻記事を嚴重に處罰して居る所の警察が人肉市場の存在を許して居るといふことは實に大なる滑稽ではありませんか。英國に於て萬一私娼の抱主が發見される場合には笞刑に處せられることになつて居ります。英國では遠い昔に笞刑は廢止されたのでありますが、私娼の抱主は人間扱ひにする必要がないといふので今でも牛馬と同じく笞を以て打つのだといふことです。然ると我國の貸座敷業者は營業稅を納めて居るといふ理由から市町村議員は言ふまでもなく、府縣會議員でも國會議員でも選擧する權利を有して居ります。嘗て選擧權許りでなく被選權をも有して居ますから、震災前には東京府會議員の中に吉原遊廓の樓主が二名あつたといふことを聞きました。此の如き不都合なることが行はれて居るのも畢竟するに公娼制度あるがためで、更に其原因に遡れば公娼制度が花柳病蔓延の防止策として有効なりといふ迷信に基づくのであります。

　私は御婦人方に向つて花柳病の說明や論議をいたすことを頗る躊躇いたしますけれども、公娼制度の辯護としては花柳

病防止といふことが主なる理由となつて居るのでありますから、是非辛抱して聽いていたゞきたいのです。

御承知の如く公娼制度の下に於ては每週一回乃至二回遊廓附屬病院に於て身體檢査を行ひ、花柳病に感染したる者には相當の手當をなし、甚しき者は入院せしむることになつて居ります。これだけ聽けば公娼の身體には專門醫の保險が附いて居るように考へられますが、私共は現在行はれて居る身體檢査には二の大なる缺點があることに氣附かずには居られません。第一娼妓が永く入院して居ることは樓主のために大なる損失でありますから、樓主はなるべく早く娼妓を退院せしむるために醫師を買收したり、或は脅迫するのです。僅少なる俸給を得て居る醫師が良くこれに抵抗することが出來るか否かは皆さんの推測に任せますが、私は嘗て遊廓附屬病院に勤務して居た醫師から可なり詳しく聽いたのでありますから、以上述べた所は確なる事實であると信じて居ります。今一つの缺點は檢査の度數が少ないことです。若し檢査日と檢査日との間に病に感染した場合にはどんなになるでしようか。花柳病には恐るべき傳染性がありますから、其蔓延を防止することは殆んど不可能のことではありますまいか。

且つ一度花柳病に罹つた所の娼妓が容易に全治するものでないことは多くの專門醫學者の一致する所であるように思はれます。

ピンクス教授は左の如きことを言ふて居ります『男子の痳疾は之に適當なる治療法を加ふれば殆んど全治する見込があるけども、婦人の痳疾に至りては救治の望がない。……娼妓はよし激烈なる程度に於て病毒を受けざるも尙ほ多少傳染性を有す。彼が全く痳疾を治し得たと考ふるのは大なる誤りである』

ブタペスト市のハウアス教授は久しく娼妓を收容する所の病院に於て院長を勤めた人であります、彼は最初公娼制度の贊成者でありましたけれども、多年の經驗によりて終に熱心なる公娼反對論者となりました。彼は退院患者に全治といふ名稱を與へることを拒み、單に改善といふ語を用ゆることとにしたそうです。是は尙ほ傳染の危險あることを表はさんがためでありました。

花柳病の全治が斯る困難であるに拘らず、身體檢査の粗略なることは全く驚くの外はありません。獨逸に於ては二十四歲以下の娼妓に對して每週二回の檢査を行ひ、二十四歲以上三十四歲以下の者に對しては每週一回三十四歲以上の者に對しては二週每に一回行ふことになつて居ます。パリ市に於て

は娼家に合宿せる者に對して二週毎に一回の檢査が行ふて居ります。そして娼妓一人に對し檢査のため約幾何の時間を費しつゝあるかと申しますに、ベルリン市に於ては三分、パリ市に於ては一分半、ヴヰーン市に於ては五分と言はれて居ります。ゼニヴア市の醫師が一時間に八十六人の娼妓を檢査したといふが如きは全く亂暴であると言ふ外はありません。我國の身體檢査にどの位な時間が費されて居るか私は不幸にして統計を有して居りませんが、歐米諸國と大差はないだらうと考へて居ます。

以上述べたやうな身體檢査ならば全く形式的であつて、ほんの氣休めに過ぎないのであります。專門の醫師が漸次公娼制度に愛想をつかす樣になつて來たのは決して怪むに足りません。

ヴヰーン市のフインゲル教授は自ら公娼制度の贊成者であるに拘はらず、左の如きことを言ふて居ります。『公娼制度の利益に就き余は自己の經驗を基礎として語ることが出來る。而して其利益は決して大なるものではない』ブレスロウ市のナイセル教授は淋毒の黴菌を發見した人でありますが、公娼制度の贊成者であるに拘はらず、次の如きことを言ふて居ります。『若し根本的改革を行ふことが出來なければ、全然公娼制度を廢止するが宜い。現制度は啻に公娼の衞生を取締ることが出來ぬのみでなく、寧ろ花柳病の增加を大ならしむる傾向がある。』コローン市のチンセル教授も同じく公娼制度の贊成論者でありながら『今日まで一般に行はれたる身體檢査法が腐敗にして缺點多く、一切に改良の必要を感じ居ることは決して今日に始まつたことではない』と言ふて居ります。最後にハムブルヒ市のエンゲルライメルス博士の言ふことを紹介しませう。『衞生的に娼妓を取締ることは男子の間に黴毒及び淋疾の蔓延を防ぐには極めて微力である。此等の花柳病が私娼の跋扈せる所を同じく公娼の間にも流行して居ることは明かなる事實である』

英國と米國とは大分以前に公娼制度を廢し、身體檢査の如きは全然行はないのでありますが、花柳病の蔓延が歐洲大陸の諸國よりも甚だしいといふ事實はありません。群馬縣は公娼制度を廢止して既に三十年を經て居りますが、毎年行はれる徵兵檢査に於ては何時も好成績を示して居ります。大正十年の徵兵檢査に於て受檢者千人に對する花柳病患者は長崎縣が四十四人、高知縣が三十三人、東京府が二十人、大阪府及び神奈川縣が各十九人、群馬縣が十一人でありました。公娼存置論者は何とこれを說明するでせうか。

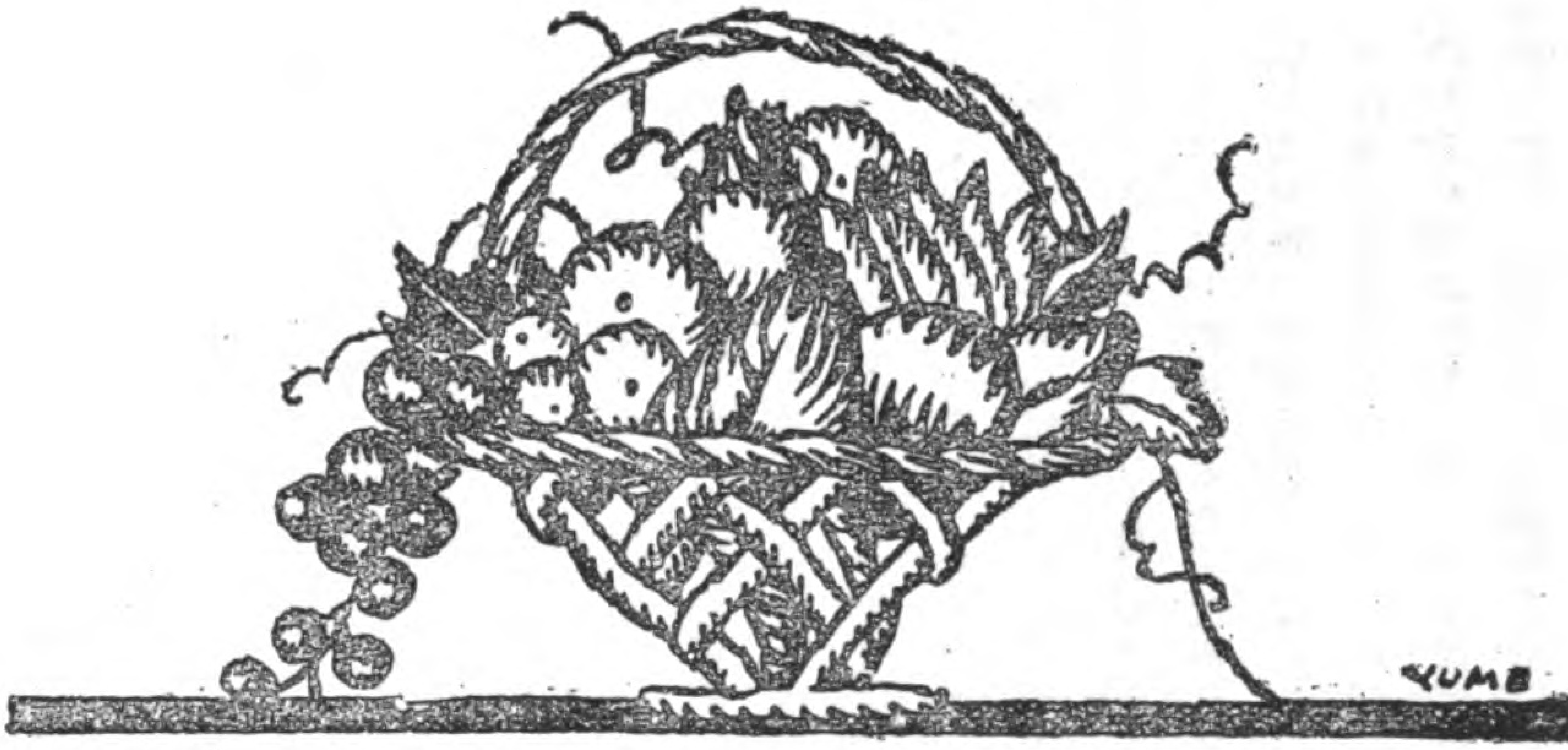
公娼にしても私娼にしても抱へ主の下に在れば充分に疾病を治療する自由がありませんから、花柳病の蔓延を防止することは困難でありますけれども、自分で自由に獨立的に醜業を營む婦人は同時に疾病を治療する自由がありますから、花柳病蔓延の程度は却て少ないと考へられる點もあります。少くとも此點に於ては私娼と公娼の間に著しき差がないと考へることが出來るように思はれます。

花柳病防止に關する公娼制度賛成論者の迷信が破壞されれば、私共は容易に議論の歩を進めて行くことが出來ます。

私娼が公娼より恐ろしきものでないといふことが明白になれば、私共は風紀の上から、即ち純潔なる青年男女を保護するといふ意味から、遊廓は勿論、待合、藝者屋の如き半公娼とも稱すべきもの全然廢止しなければなりません。私共の理想は凡ての不正なる男女關係を除去するにありますけれども、今日これを實現することは不可能であります。故に人目に觸れぬ社會の裏面に於て行はれる賣淫行爲までを追窮する必要はありませんけれども、一たび露骨なる形式を取つて社會の表面に現はれ來らば、警察は假借なくこれを取締るべきであります。要するに公娼制度が花柳病蔓延を防止するに足らぬことが明白となれば、私共の行くべき途は公娼制度を棄てゝ私娼制度に行く外はないのであります。

私共は飽くまでも各人の自由を重んじなければなりませんから、私娼制度が抱主の下に行はれることには絶對に反對でたします。萬一抱主といふが如き階級が發生いたしますならば警察は直にこれを檢擧して處罰に處するといふ法律の制定が必要となります。私共の所謂私娼なるものは全く自由意志によりて獨立的に稼業をなす者で、他人のために強制されるが如き奴隷的のものであつてはなりません。

私共が現在の公娼制度を攻擊し咒咀するのは其が奴隷制度であるがためです。男子が自分の慾を滿足せしむるために公娼制度の必要を叫ぶが如きは實に婦人を侮辱するの甚しきものであります。若し位地を換へて婦人のために男子の犧牲機關を設くべしと論ずる者があつたならば、男子は果してこれを甘受するでありませうか。公娼制度の存在する限り婦人は到底男子に尊重せられ、同等の待遇を受くる望はありません。然し娼婦を弄玩する男子は同時に娼婦のために輕蔑されるのでありますから。賣淫行爲の繼續する限り男子は婦人を侮蔑し、婦人は又男子を輕視することになり、人格尊重といふが如きは全然不可能となります。故に公娼制度の廢止は婦人の向上を意味すると同時に男子を救濟することにもなるのであります。



女性改造談話會

今後の經濟界と婦人の參加能力

出席者
堀江歸一
生江孝之
守屋東
三宅やす子
千葉龜雄

司會者　今夜皆樣からお話を伺ひたいと思ひましたのは、今後のわが經濟界と婦人の參加能力についてゞあります。この問題は日本及列國に渉る問題ですが、今夜は重に日本の婦人を中心に、今後の經濟社會に處するに婦人がどういふ方面に活動するのが適當であるか、男子の能力と婦人の能力とはどう違ふか、又婦人は現在の生活狀態からどの程度まで解放しうるものであるか、これらの問題について一つ堀江先生から先に御意見を伺ひたいと思ひます。

堀江　それは困りますが、さうですね、經濟社會に處すると言つても生

產經濟もありますし、消費經濟もありますし、何とか問題の範圍を限つたら如何ですか。この問題は大きく言へば婦人の財産權の問題ですね。現今の日本のやうに、子供は幾人あつても、財産は長男だけが繼いで、他の弟妹は身體一つである。娘は小さい時からその家で働いて一家の生産經濟に參加してゐながらお嫁に行く時は身體だけといふやうでは全く婦人に經濟的の基礎がありませんからね。

生江　婦人勞働者の問題はどうですか、近頃だん〳〵男子の職業に侵入したといつてとかく問題になるやうですが、婦人にあゝいふ筋肉勞働をさせるといふことに就いては……。

堀江　女の勞働者は使ひ易いといふこともありますが、一方から云ふと賃銀が安いから女を使ふといふやうな傾向になりますね。もつと進んで言へば女は弱いから腕力では男に及ばないから賃銀が安いといふ譯ですが。

千葉　それは男性と比較した場合に、女性の方が心的體力双方ともに微弱で疲勞し易く、且つ生理上の故障が多いといふことも有力な一つと思ひますが、それはともかく、どうでせう、問題の範圍が廣くなりますから、勞働者の問題はあとにして、消費經濟の方から、つまり家庭の婦人としての方からやつては。

三宅　私は日本の婦人が外に向つて發展出來ないといふとは、やはり衣服の改良などからやらねば駄目だと思ひます。今の日本の家庭から着物の世話を除いたら餘程活動する餘裕があるやうに思ひます。洋服を一部採りいれることも其一方法です。今のやうに料理も裁縫も洗濯もみんな主婦の手でやらねばならぬやうでは、子供の教育どころでなく、外で働く餘裕など全くありません。これは何とか一つの大きな機關で纏めて、洋服などは一つの工場で纏めて縫つたり洗つたりし、食事にももつと具體的なよい方法がとれたら大變主婦に餘裕が出てくると思ひますが。

生江　しかしそれには家屋の建築からかへてゆかねば困るでせう。

三宅　ですが、それは急には不可能の事ですから今のまゝでも洋服で生活出來ぬことはないと思ひます。私は出來ると思ひます。

堀江　自分のことを申しますが、私は家の者をみんな洋服にしたいのですが、どうも唯今の日本の家庭の狀態では、妻までを洋服にするといふ譯にゆきませんので、仕方がないから家内と女中だけは日本服にし、後は全部洋服にしましたが、それでどの位樂になつたかと言ふと殆ど樂にはなら

んのです。

生江　家屋はやはり西洋風で？

堀江　えゝ腰かけてやつてゐますが、坐るといふことも日本の家庭の一番いけないことですね。それから家庭內のみで秩序をたてて生活をしてゐても不時の來客などにより、主婦の秩序が外部から邪魔される場合もあり、訪問などももつと簡單に、なるべくは時間をきめるやうにしたらばと思ひます。

守屋　訪問などは要するに社會一般に規則がないことに起因すると思ひます。訪問する人も平氣だし、訪はれることも別に何とも思つてゐない風だから凡てがだらしなく秩序が破れるのだと思ひます。

堀江　今の婦人はまた大勢の人を一緒に集めて話すことには慣らされてゐない。やはり一人づゝ話さねば親しみが薄いやうに感じられるらしい。

守屋　言ひはじめてゆくと何もかも改良したいことばかりですが、訪問客の時間をきめるといふことは餘程むづかしいものですね。今の日本では訪問時間をきめるといふことは出來ますまい。

堀江　消費經濟といふ方から言つても、日本の現今の狀態ではうまくゆきませんね、外國では食事の獻立なども一週間分のをつくつておいて、それによつて主婦は買物をして、簡單に順序よく運ぶことが出來るのですが、日本ではそれが甚だ煩雜ですね。向ふでは一週間のうちに肉はいくら、野菜はいくら、といふやうに豫定がちやんとつくのですが、日本ではたとひ主婦がそれを作つても、市場が不完全だからメニューにあるものが間に合はなかつたり、先きに注文して無理に間に合せるやうにすると、却つて高くついたりして到底うまく行はれますまい。どうですか、今流行つてゐるマーケツトをもつと改良する方法はないでせうか。何でもかでも一々御用ききがきて、長い時間をかゝつて、主婦がそれと交渉して魚一匹買ふといふやうでは、餘りに煩雜すぎますな。

守屋　さあ改良できないこともないでせうが直ぐといふ譯には。

三宅　私は今の主婦から着物の世話をとるだけでも隨分樂になると思ひます。私は今自分で、着物や食事の注意をみんなやつてゐますが、洋服が半數ですから割合に苦勞とも思ひません。しかし和服はほんとに厄介でぬいだ物を疊むだけでも大變です。それがなくなれば主婦はもつと〳〵働

けようと思ひます。

守屋　家の構造もつと働くに都合のいいやうな造り方にしないといけませんね。何もかも根本的に改善してゆくよりほかはないでせう。

生江　婦人が外へ出て働くやうになりますと、家の留守番はどうなりますか。結局時間はあつても外へ出ては働けなくなりはしませんでせうか。

三宅　家が安全でなくては何も出來ませんから、自分で留守にして出れるやうな家をつくるためにも一方積極的に働かねばなりません。

千葉　あいた時間は何か生産のためになさらうといふおつもりですか。

三宅　あいた時間は修養と生産に使ふことにしたいのです。消費者にだけなるといふのをやめたいと思ひます。

堀江　さうして婦人が働くといふことは、一方にはまた別の問題を起しますね。小學校の男教員が生活に困るやうになるといふのも近頃女教員が殖えたために原因することがあります。勿論女教員の素質が惡いといふ意味ではありませんが、今の窮迫した町村の財政では、なるべく給料の安い女教員を使ふ方が樂でもあるといふ風になるのですが、結局給料の安いといふことが直接原因でせう。まアそのために男子の教員が壓迫を受けてゐるといふことは事實ですね。

千葉　すると女子の職業を現在より擴張することは男子の職業を奪ふといふことになつていかんといふことになるのですか。言を換へて言へば、女性が男性の勞働の世界にきり込むのが、社會經濟の原理としてどうしても許され得ないものだといふ前提が下されるといふのですか。私はさうは思ひませんが……。

堀江　いけないといふ譯ではありませんが、一つの職業を兩方から奪ふといふことになつて、どつちかゞ一方失業する。つまり今の場合では女子のために男子が失業するといふことになるのです。

　それにとにかく子供が何人もあるといふやうな主婦が、外に出て働くといふことは、收入の方からいふといゝですが、消費の方がうまくゆかぬことになりはしますまいか。家庭の整理も子供の教育といふことも充分にはゆきませんしね、女教員の場合など、女子がとる分を男子の方に融通して收入を多くし、一方家庭では所得を有効に使ふといふやうにゆけばいゝですが。

三宅　それは家庭經濟の消極的方面だと思ひます。今の若い人達の俸給では儉約したところで妻子を養つて安心して充分に生活できませんから、自然と女子が外に出て働かなければならない必要も起ります。

生江　それは現狀でやむをえぬことであります。併し夫の收入だけで一家族が生活出來ないといふのは、現在の社會制度の缺陷ですが、女子が働いてそれを補助するやうでは、いつまでも制度の缺陷を經驗してゆかねばならなくなります。夫の賃金が少いから女子が働くといふやうでは社會の制度を病氣のまゝでいつまでも維持することになります。それで、主婦が働くと云ふよりも、夫の收入を增す運動が必要でありますまいか。

三宅　理論としては左樣かもしれません。けれども女子の職業は、男子のを奪ふといふ意味ではなくて、女子でなければ出來ぬ、或は女子の方が適當であるといふ意味から女子の職業として是認されるものがある筈ではないでせうか。女子が家庭に引籠つて何が何處の店より何錢安いとかいふことばかりに神經を使つてゐたら男と對等になる時がいつまで經つてもこないと思ひます。

千葉　私はそれには異論があります。それは勿論只今のお說のやうに、女子が職業をもつて外に出て働くといふこと、そのことには贊成します。又今の場合さうしなければならんことも分つてゐます。たゞ婦人が家庭の消費經濟を、一口に、つまらぬ無駄な勞働のやうにお考へのやうですが、私はさうではないと思ひます。私は消費といふ事を司どる點において、或る意味で一體に女子は男子よりもよい仕事を與へられてゐるのではないでせうかと思ひます。卽ち今日の男子の工場生活などでは、自分の生產する仕事については、自分でその全體をどうすることも出來ない全く機械的な、部分的な仕事だけをやつて居るのです。ところが女子は家庭の仕事については、自分の思ふまゝに出來るので經濟のうまい婦人などはそこに創造的な樂しみを感じてゆくべきだと思ひます。自分の仕事の經費として夫から月給の袋を渡されるといふことに、非常な樂しみを感じなければならぬと思ひます。一體私は消費と生產といふものは、云はゞ一つのものの表裏ではないかと思ひます。生產には材料の消費が伴ひます。けれどもその材料を、どれほどでも浪費してよいといふのではなく、出來るだけ材料を必要だけに切りつめて、それで立派なものを生產するのが、本

濟の生産だと思ひます。つまり生産にも、消費の能率化が必要なわけです。一方生産は、ほんの必要な消費だけのものを生産するのが、一番よい經濟組織なのですから、そこでその主人公になるものは、生産者でなく消費者でなければなりません。生産があつて消費があるのではなく、消費の慾望があつて、始めて生産があるのですから……すると問題は、消費者が、自分達の必然に、消費すべき、もしくは消費せねばならぬものが何々であるかを正確に知ることが、――從つて如何に能率的に消費せねばならぬか、そしてそれによつて、いかに無用な生産を省かねばならぬかを知る事が、唯一の問題になつて來るわけです。そこで消費の問題は、さうつまらないものとして、一口にけなしてしまふやうな、現代の婦人達の輿論に賛成する事が出來なくなるのです。徒らに生産、生産といつても、消費を浪費にして置いては、折角の生産がみな生産しないよりも惡い事になります。詮する所、生産も、消費も、同じ理窟を共通に基底に潛めたもので、その共通した一つの理窟とは、どちらに於ても、物の能率化といふ事になります、そして家庭の消費は其能率化の小規模な模型で、これにさへ卒業すればたとへどんな生産に參加しても立派に卒業する事は出來るのです。然るに日本の婦人は經濟上のことに關して一般にこの能率といふことを考へないと思ひます。能率とは物の性質をきわめて、そのマネエジメントを最高に經濟的にやることです。さうしてさへ行けば與へられた範圍で、生活をきめてゆくといふことに充分な樂しみがあります。また物質的な餘裕、時間の餘裕も、今日の日本の家庭からでさへも、相應に浮び出されるのだと思ふのです。これが出來ないといふ現代婦人の缺陷はこの物の能率化が教へ得ることの學術的の教育を與へられてゐないといふことに大きな原因があると思ひます。つまらん金を惜んだり、夫から與へられた金が不足だとばかり考へてゐるが、足らないものを足りるやうにしてゆくことが或る點まで必要であります。日本の婦人はその點に於て能力が少いと思ひます。それを考へてやつて貰へば、家庭經濟といふものが、もつと有効になると思ひます。そして男子の職業に對してもつと理解をもつて國家の經濟狀態に參加する氣持があつたらいゝと思ひます。つまり消費するものの出來を辿つて行けば、どうしたつて生産の問題までに考へ至らねばなりませんから、足らない多いは別として今少し經濟を創造的にやつてみるといふ知識と、教養が與へられねばならんと思ひます。

三宅　もつと頭を使へば創造的な家庭經濟を營めるんですが今の家庭で普通に行はれてゐる經濟生活は隨分つまらぬものです。頭を使へば當然出來ることが出來ないでゐるのですから。

守屋　それに今一つは男子の月給をあてにしてゐても、主人が自分で勝手に使つて、僅かばかり殘つたのを妻君に渡す有樣で、月給の全部を與へないから駄目です。總じて男子が取まとめてゐるから駄目ですね。それで思ひ出しましたが私の感心してゐる家庭は安部磯雄先生のお家です、收入全部を公開されて、奥さんがその責任を持つて居られるのです。そのために萬事が明かになつて非常にゆとりも出來るといふ譯です。とにかく主婦は家庭のクヰーンとしての位置を認められねばなりません。そして餘裕出來た時間を訪問にあてたり修養にあてたりすることです。主婦にとつては與へられるべきものが與へられるといふことが必要だと存じます。日本の婦人は餘り男子に信用されてゐないと思ひます。もう一つ先に行けば信用されるだけの教養が與へられて居ないと思ひます。何事も根本から行かねば駄目だと思ひます、今の女學校教育なども、もつと偏つた教育でなしに、實際の教育をしなければなりません。少くとも男子の中學校程度の學校を備へたいものです、折角公設市場が出來ても、それを一つ使ひこなせぬやうな主婦ばかりでは困ります。

堀江　どうです、日本の各家庭で一週間位のメニユーをつくることは出來ますか。

守屋　メニユーをつくることは出來ませうが、メニユーをつくつてもそれを實行出來るやうに設備が出來て居りませんでせう、肉にしても野菜にしても適當に買ふ人に滿足され、また便利に分類されて賣つてゐませんもの。

堀江　公設市場を改善すれば出來ますか。

千葉　公設市場ばかり改善しても、家庭の能率化が伴はなければ、折角の公設市場も、功能の半分を失うと思ひます。

守屋　簡易食堂でなくて、別に食物の調理だけしてくれるところ、つまり今迄の煮賣屋のやうたものをいくらか文化式にして各家庭に供給するもの〻ある物は、そこから供給するといふ樣にすればいゝと思ひますが。

生江　中央市場から自働車にでものせて一般に運搬するやうになるといゝかも知れませんが、今のやうでは魚一匹買ふにも毎日値がちがふからメニユーをつくつても駄目ですね。西洋でやつてゐるやうに、値段を一定にして配給する

といふことがうまく出來るといふのですが。

堀江　簡易食堂でなくて、食物を調理するところが出來れば一家の食膳にのせても不調和でないものが出來るでせう。罐詰などの調理もやり方によつてうまく出來る方法はいくらもありますから。

千葉　私はそれについて疑ひがあります。さういふやうに今迄主婦のしてゐた仕事を統一的にやるところが出來れば、非常に便利で簡易ですが、しかし、もう一度深く考へるとそれだけで片付くものとは思ひません。たとへば今までの主婦の仕事をなくして食物を調理することもしない、着物を縫ふ必要も洗濯もいらないといふやうになると、家庭に創造的なところがなくなりはしないでせうか。私は一軒の家々には主婦と云ふものがあつて、あの家ではある魚をあらひにするがこの家には刺身にするといふ風にめいめいの趣味を現して貰ひたいと思ふ。着物も家屋も單に寒さが凌ぎさへすればいいといふのでは面白くない。やはり個人個人の家族には、個性あり、趣味があつてそれの反映する色彩が生活を彩るといふことは、極めて必要なことだと思ひます。醫者は、平生健全な子供にも、せん病質な子供にも、同じ病氣の場合に、同じ藥をやるのではありません。若しそれがカーキー色を着たやうに一枚に統一されてしまつて主婦の性格が反映しないとなると、家庭は非常に殺伐な、單調なものになつてしまふと思ひます。さればといつて、私は、今の主婦を家庭の煩雜から免れしむるといふ事をいけないといふのではありません。たゞ能率的に、あらゆる無駄を省いた生活が必要だといふのであつて、それが極端になつて、何もかも原始的に統一的になるといふ事は、却つて女子の本質から生れる能率を抹殺することではないかと思ふのです。男子の世界に、女子が柔い色彩を與へてゆくといふ事は、お互に生きてゆく上に極めて必要な事と思ふのです。そしてそれが少くとも現代の世界では、立派に兩立し得ると思ふのです。

三宅　それは、婦人がさういふのは、決して衣食の事をやりたくないからではありません。婦人は、本能的にさういふ事をしたいのですが——現今のやうでは、夫の收入だけでは生活を支へる事が出來ぬので、止むを得ずさうなるのでせう。若し、主婦に職業がなくても生活が出來るものなら、喜んで家庭の仕事に專心すると思ひます。

千葉　然し婦人の頭の働かせ方によつては、家事を處理しつつ修養も出來、働く事も出來ると思ひます。

三宅　と申しますと、具體的にどういふ方法によるのでせうか。

千葉　それは生活の方法になりますが、たとへば、無駄な着物を、たんすの底にしまつて置いて、夏冬の洗濯や縫直しに、無用な時間を費やすやうな事を避けるとか、家屋ならば少くとも泥棒の入らない程度の戸締りの出來る家に住んで、自由に公設市場に物を買ひにゆくとかその事も考へられますね、少し注意すればさういふ位の家に住む事はできるでせう。

三宅　ほんとうに夫婦が安心して一所に働くためにはさういふ戸締りの確な家に住みたいものです。嫁入の時の着物を儉約してそれを結婚後の住宅の方にかけるといゝと思ひます。

守屋　それはいいお考へですね。

千葉　それから婦人の方ばかり攻撃するやうですが、婦人が議會に於て聲をあげるのは一番だと考へるのはどうでせう。近頃婦人の團體運動が盛んでありますが、あれを、もつと政府の方面の運動に向けてはどうかと思ひます。この頃大阪で婦人團體が試驗廢止の運動をした事がありますが、東京の方では餘りやらないやうですね。政治的方面にばかり運動しても餘り直接の効果がないが、婦人が團結して社會の實際問題に當つて運動したらいくらも効果があがると思ふのですが。それから今の女學校では、もつと經濟的の問題を教へる必要があります。

三宅　今の女學校はだめですね、御用きゝから物を買ふ事一つ出來ない有樣ですから。

守屋　全くさうですね。

千葉　教科書や、教案などを調べて見ても、生産の事も、消費の事についても、女學校では經濟に關する事は少しも教へないですからね。

堀江　それぢや仕方がないですね。女學校を二つにわけたらどうですか。家事を教へる學校と、頭腦を造る學校とに分ければいゝですね、日本では隨分反對があるでせうが。

守屋　震災後に出來たのですが第一高等女學校ではその教育法をやつてゐます。まだ始めたばかりでどうなるか分りませんが、とにかく父兄の承諾をえて喜んでやつてゐるやうです、文部省も默認してゐるさうです。ほんとうに今の女學校の教育とは、娘に何か一つの職業を見つけておいてやりたいといふ必要があつても駄目ですし、嫁入の資格をつくるだけに學校へ入つてゐるやうなものですからね。しか

しさういふやうに女學校の素質が悪いといふ事を、何故父親の方から叫ばないでせうか。それこそ團體的に叫んで運動して頂きたいものです。

千葉　それは父親の方でもやつてるのです。

守屋　もつと組織立つてやつてもらひたいものです。

堀江　私などは言つてゐますよ。しかし第一女學校が淺草ではとても遠方で娘をやれぬといふことになる。

千葉　私の知つてる娘などはまるで駄目ですね。鐵瓶の湯が煮え立つてゐるのにどんどん炭をつぐ。何をするのかと云ふともつと沸すのだといふのです。沸騰點に達すれば、それ以上湯は熱しないものだ位の理窟は、尋常科で已に習つた筈ですのに。今の女學校は科學教育は非常に疎末にしますね。

守屋　今の女學校教育では極く大切なことが分らないのです。學校の教室で教はつたことは外へ出ると何にも役立たないのですから。電氣が一寸消えても職工を呼んでこなければつかないといふ有様では駄目ですね。

千葉　洋服々々といつても洋服のあつかひ方も知らずには、却つて洋服は高價になります。一寸した、ほころびでも洋服やにやつてもらふといふのでは。元來廉價であるべき洋服も結局高いものになつてしまひます。

三宅　さつき男子の職業を奪ふといふやうなお話しがありましたが、女子にも特有の仕事がありはしないでせうか。

堀江　これは產婆は從前からありました。しかしそれを養成するにもつといゝ學校を作る必要があるですね。その外にも女醫とかタイピストとか今では餘程ありますね。女教員なども適當な職業でせう。

守屋　中學校の校長を女子にすればいゝと思ひます。各役所の吏員とか、視學官とかがもつと面倒臭くなく女子を任用するといゝんですが、今のうちや、小學校の校長さへも女が出來ないのですからね、何んでも女がやれば直ぐ珍らしがるのですから困ります。

千葉　女子が男子に出來ない仕事、つまり女子の本質だけに出來得る仕事をどんどん發見して それをやつて行くことは非常によいことです。勿論今迄男子がやつてゐた事で女子に適する事があれば、またそれをやつてもよいでせう。之れは男子の領分を侵すといふ事ではなくて、自分も一所に出て働くといふ意味です。それだけの事は家庭をもつてゐても出來るのです。さういふ意味で女子職業無用論は私には賛成いたし兼ねます。

生江　家庭をもつてゐる人は、原則として外へ出て働くといふ事は困難です。婦人といふ者が一旦家庭を作つた以上は、出ては社會の母となり入つては家庭の母となる樣にしたいと思ひます。主婦がさういふ方面へ入つて生産能力があるからといつて男子とともに働くといふ事は私の考へではむしろなるべく避けたいと思ひます。

三宅　理想的に云へばそれが一番いゝのですが、そうして家庭が救はれるでせうか。

堀江　家族制度を改正して財産を男女の子供に平等に分配するといふやうにすればいゝでせう。つまり資本を小さくしてしまふのです。今のやうに偶然長男に生れた一の男子に向つて、其長男に生れたと云ふ理由の下に財産を相續させてしまふといふのは甚だいけないと思ひます。そんな制度がある爲に、財産をもらつて却つて安逸なる生活に耽る者を生ずるのですからね。又此制度は親の愛情を子供達に平等に發露する上にも邪魔になります。そして女子は嫁入道具の代りに女學校の教育殊に高等教育は必ず受けさせてもらふといふ樣にしたらどうです。然し男女ともに、平等に財産を分配するとしたら日本では隨分反對もあるでせう。

守屋　さういふ風になると女の氣持も餘程變つてきませう。

生江　平等にせずともパーセンテーヂを強くしたらそれでもいいでせう。

千葉　それでは折衷論ですね、私はあゝいふ分配制度は根本から破つたらいいと思ふ。

守屋　今日迄の男子は女を隷屬してゐると考へてゐるのですから——もう女の氣もちは到底男子には解らないんです。財産についても何んにつけても優先權をもつてゐる男子に對する女子の心持ですね、から何んといひますか、突つかかりたくなるやうに、男子も女子に對してもこんな氣もちがあるのではないでせうか。もつといへば、女に力をつけるやうに、能力をあげる事が出來る樣に、男子の力からやつてもらはねばなりません。今までの家庭では男子ばかりに利益が多すぎたのです。

三宅　若し女に生産的な能力がなくてもいいといふ事になるとその家庭に萬一不幸などのあつた時に困ります。

生江　それに就いてアメリカでは、目下やつてゐる事ですが、マーザースペンションロー即ち母子扶助法と云ふて十年程前から起つたのですが今では四十八州中四十州で實行して居ます。それは寡婦になり、子供を持つてゐて生活の脅威を受けて居るものは勞働をしないといふ事を條件として扶

助料を下附してゐるのであります。また、長い間夫が病氣してゐて困るものにも同樣の制度があります。勿論それは地方によつて違ひますが、なまけものの夫が生きてゐた時より樂だなんて喜んでゐるものもあるさうです。そしてその子どもを保護してくれるのです。內務省の社會局などでもその方法を考へてゐますが、折々そういふ事を法律にする樣に努力してゐるのであります。けれどもまだ〳〵日本ではだめですね。若しそういふ事にでもなればあなたの(三宅さんのこと)考へてゐられる事も心配がなくなるであらうと思ひます。

三宅　しかしそれには、餘程の財源が要りますから、今の處では急には出來ますまい。

堀江　私は震災後の知識階級の婦人をどうして救濟するかといふことも　非常に重大な問題だと思ひます。その一方法としては、銀行や會社に向つて臨時雇として供給するのもいいと思ひます。今の銀行や會社などには仕事が澤山ある時ですから。從來は今迄使つてゐた社員に少しばかりの特別手當をやつて夜半までひつぱつてやらせてゐたのですが、それはよくないことですから、さういふ失業者を雇入れて臨時の仕事を埋合せる方法をとるのですね。さうしたら知識階級の失業者も餘程緩和されるでせう。そのためには職業を求める者が一緒になつて團體をつくり、さういふ要求があつた時に直ちに供給に應ずるやうな組織をつくつておいたらいいと思ひます。學校などでもさういふ團體をつくつておいて臨時の間にあふやうにしておいたらよほど圓滑にゆくと思ひます。そして訓練を絶えずやつてゐることですね。

守屋　それは大變よろしうございますね。

堀江　しかし、職業婦人を使つてゐても、熟練してきたと思ふと止めてしまふ樣では、使ふ方でも困りますね。結婚するとすぐやめてしまふといふのが多いのですからね。

千葉　だから、私は、やはり家族制度では、財産を平等に分配するといふ事がどうしても必要だと思ひますね。男と女の差別なく平等にしてしまふのです。今日では、親が子供を教育する心もちの上にも男の子と女の子とでは、それに對する態度が著しく違つてゐます。女の子の教育や、ま

たは次男以下の教育はまる切り無駄な事のやうに考へてゐるんです。東京などはまだ女學校もたくさんあるので親たちは出來るだけ出したいと思つてゐる樣ですが、地方などでは全くつまらん事の樣に考へてゐる有樣なのです。もし財産を平等にすればそれを使つて男子に今迄屈從した女子を餘程救ふ事が出來ると思ひます。そして男性から自由に獨立させることが出來ます。ですから財産を平等に女子にも分配するといふ事は、私有財産制度のある以上は必要な事だと考へます。

守屋　さういふ意味からいつても今の女子は、男子に屈辱されてゐるわけですね。

千葉　婦人に財産があればそれをどういふ樣に使つて自分を教育しやうかといふ事が、婦人自身に考へられて來る樣になると思ひます。またそれによつて、職業教育を、自由に受け得る女性も澤山出で來ます。今日は女は長女でさへも財産を平分されぬ爲に、婦人は悉く夫の財産によらねば生活されぬのでとかく遠慮があつてしつかりした事も出來ぬのですが、もしさうして婦人にも自分の財産があるとなれば、隨分しつかりした事が出來ると思ひます。結局××××を破るといふ問題となればいゝですね。

生江　それに就いて一寸申しますが、現在の統計に於いては、所得税を納めるものが一割二分で、所得税を拂へないものが八割八分だといふ事ですが 今のやうに財産を分配するといつても、財産のあるものはいゝでせうが、何しろ分配すべき財産のないものが八割八分もあるのですから結局財産を平等に分配したために得るところあるのは全國民の一割二歩しかないといふことになりますから、その爲めに多くの國民が生活上ゆたかになるといふ事はどうかと思ひます。つまりそれは、たつた一割二分の國民の問題である樣に思はれます。

千葉　それは、今日の資本制度では、教育機會均等は全く奪はれ、教育を受けてゐるといつても全體に受けてゐるのではありません。比較的生活の程度の高いものでなくては、高等教育を受けることが出來ないのです。然るにこの一割二分は、比較的生活程度が高くて、やらうとすれば家族全體に、相當な教育が施せるのに、例の長子制度でそれが出來ぬのです。

もし財産を公平に分配したならば、その一割二分の家族の中で、今まで教育を受けられなかつたものがみな受けられ

ることになります。それだけでも大へんなよい改革だといはねばなりません。他の八割八分の教育は、問題が全く別に解決さるべきものと思ひます。

生江　さうですね、家族の俸給は別にして、分配された財産によつて根本的な教育は出來ますね。その點からいへば、たとへ一割二分の問題でも、女性の教育の上から見ると利益はあります。

堀江　さういふ制度が實現すれば無形の結果としていゝ事が現はれますね。女子に教育も出來るから、女性の位置も高める事も出來るし、また、親が子に對する愛情も男女平等にすることも出來ます。しかしまた只今の女の教育程度では、女子が親から財産をもらつて、それをもつて嫁入りしたとしても、夫にすぐごまかされてしまひませう。

守屋　夫婦の内でも、夫が財産を殖やすといふばかりでなく、なか／＼金儲けについては妻君の方がうまいのも少なくないやうです。それでゐて、その細君が金でも出して社會事業に働きたいといふ時に自分の財布ぢやないから思ふ樣にはゆかないといふ人が多いのです。もし、離縁にでもならうものなら自分が儲けた金もある、財産もあるといふものでも一文も持たずに出てゆかなければならないのですから。

千葉　だから婦人に對する法律を改正するといふ事が必要です。世の中から民法學者がこれまで男性だけによつて、男性の都合のよいやうにばかり作られて居た法律を改正する事も急務でせう。

堀江　今の法律の中から男女の不平等な點を擧げても非常に多いでせう。むしろ、さういふ點は探し出して、比較發表するといふやうな方が直接團體運動をするなんていふ事より必要でもあり、有効でもありませんか。

守屋　それは必要です。從來感付いてゐる點だけでも大部ありますからね。それをあげただけでも議會の問題にはなりますからね。何しろ、女はいくら働いても財産の管理權がないやうではつまりません。

女だつて中々しつかりした人がありますよ。私の知つてゐる人で魚津の人ですが、下谷の仲御徒士町に四間間口のバラックを建て、呉服屋をやつてゐるのですが、高い物を罹災した人々にやるのは氣の毒だといつて、自分で木綿の安いものを仕入て來て、鐵道も特別運賃でもつて、すつかり獨力できりもりしてやつてゐるのです。そして、之れは東

京の復興に對する自分の務だといつてゐるのです。自分はかういふ氣もちでやるんだから、なるべく安いものを人々に賣るやうにしたいといつてさま〲に苦心して、一ヶ月の收入から支出までずべて自分で見積つてやつてゐます。それでゐて廣告はビラ一つまかないのです。あんな人の足の下に踏まれるやうなものはいやだといつて、その代り何んでもいゝから店へ買ひ物に來てくれた女の人に字を書いてもらつてそれを店に貼りつけておくのです。さうするとその客も店に愛着が出來るだらうし、何よりいい廣告だと云つてゐるのですが中々品物も安いのです。一番安いものは、或る大きい店よりも一圓も安いものがあつたさうです。どんなに澤はないといつても十五錢は安いといふ事でした。之が教育もろくに受けないといふ女の人なんですから實に感心します。主人の在世中より店を大きくしたといふ事です、さういふ人すらあるのだからやらうと思へば女にだつて出來るのです。だから何んでも出來る人にはしつかりさせたいものですね。

三宅　男女の平等を叫ぶにしても家の中にばかりゐてはだめです。それではやうやく戸を通して叫ぶだけにすぎないのですから。

千葉　やはり生江さんのさつき云はれたやうに生活を合理化するのですね。教育が不平等で殊に女子教育といふものがまだ低い程度のものですから、從つて男子とは智識の程度が相違してゐて、夫婦間の調和といふ事も困難ですね、妻は女學校、夫は大學を出たといふのでは、智識の比例がとれません。その爲めに妻は夫から壓迫を感ずるといふ事もあります。女子高等師範も奈良と東京にしかないんですね。なぜもつと女子の高等教育機關が設置されないかと思ひます。お母さんが子どもに教へる事は何かといふと至つて程度の低い事で充分に子供に滿足を與へることも出來ん有様で、女學校では教つたがもう忘れてしまつたといふやうな今の時代では情ないものです。從つて生産でも、消費の方でも、結局は女子教育をもつと盛んにしなければたらんといふ結論になると思ひます。それと婦人の婚期を遲くして、もつと學問すると共に、今の高等女學校を、男兒の中學校程度以上にも引き上げる事。

守屋　少くとも中等學校までは男女同等にしておく必要はありますわ。今度私たちがさういふ事を叫んだ時にはどうかしつかり應援して頂きたうございます。(笑ひ)

司會者　震災後新たに生まれた工業方面の仕事で婦人が中心になつてやれるといふやうなものはないでせうか。

堀江　さア、特に婦人が中心になるといふやうなものはないでせう。今では、手工業ではなくて、主に機械工業ですから、格別さういつたものはないでせうね。さういふ事は何れの國でもおなじでせう。

千葉　では今後の經濟界に於いて、今度出來た大きな不足を償ふために、特に女子が主動的地位に立つといふ事は出來んといふ事ですね。

三宅　然し、女に子供を産ませ御飯もたかせてその上男とおなじ樣に働けといふのは無理ではありませんか。

守屋　炊事を全般的にやる方法にすると女がそれだけらくになるし、その外の事もさういふやうにすれば女が家にくすぶつてゐるといふ必要もなくなりますね。時間と勞力が經濟的になるわけですから。

堀江　子どもを育兒院にあづけておくといふ事は女子にとつては不愉快な事でせうね。

三宅　それは勿論いい氣持はしません。そんな事をしなくてもよい方法をとればよいのです。

堀江　つまり必要に迫られて働くといふ場合が多いのでせう。

守屋　しかし今は必要に迫られる人と、好きでやる人と半々位ではありませんか。

生江　これは、御參考までに申しますが、統計によると東京府下の工場數が、四千七十九で（工場法で認められたもの）うち男工が十一萬人で女工が六萬二千人でしたが、今度の震災で損失を受けた工場はその中一千九十五で失業した男工が四萬三千人に對し女工は二千九百人です。それから工場法適用以外の工場數が一萬二千で、男工が二萬五千人に、女工は二千五百人でしたが、その中燒失した工場が九千で、失業男工一萬九千人に對し、女工は一千八百人の割です。そして東京市の職業紹介所は總計三十六ケ所ありますが、求職者は一番多い時で、一日男子は一千二百人内至二千五百人で、女子は百二十人内至三百人です。その中勞働者は男子五千三百人から六千二百人に對し、女は僅かに三人に四人の少數で職業紹介所を經てくる者が非常に少いのです。殆ど無いと言つてもよい位です。つまり男子熟練職工でも日雇になるといふわけで、それより外に仕事がないのだから仕方がありません。女は此際仕事がないといふのは多くは内職を失つたからで、そのために非常な打擊を受け

てゐるのです。以前東京府下に内職を持つてゐる人は十五萬人あつて、その賃金總額は四百九十萬圓に上つてゐたのですが、震災後急に減つて、今では以前の十分の一になつたといふことです。婦人が内職を失ふことは今の家庭では非常な損失で、婦人に適當な内職を與へることだといふのが理想論を離れて實際論から申せば非常に必要であります。乃ち理想から云へば内職などをやらない世の中をつくりたいのですが、何しろ現在の有様ではそのために多くの家庭が生活の脅威を受けてゐるのですから仕方がありません。

堀江　女の美顏術師などはどうですか。

中屋　今では殆ど皆回復したやうですね。

堀江　あれはえらく金をとるのでせう。

中屋　隨分とるやうですね。

千葉　堀江さん、あなたの御意見では、女が經濟界に參加するに就いては直に生産者としてですか、消費者としてお考へになりますか。

堀江　生産者としてなら先づ女工ですね。それ以上生産者の領分に入るとすればもつと教育をしなければならないと思ひます。タイピストなどもいゝでせう。とにかく男子が女子に職業を解放してやる心がなければなりません。女子がマネージメントをするには更にずつと教育もいりませう。それには先きのやうに財産を親が分配してやるといふ事が必要ですね。

三宅　私は智識階級の婦人も何かしなければ家族が樂に暮せる事は出來ないと思ひます。内職をやつてそれでやうやく生活が出來るといふものが多いと思ひます。さういふ婦人には文章の仕事などもいゝと思ひます。

堀江　たとへばそれはどんな仕事ですか？

三宅　校正などの仕事ですね。

堀江　それではあまり金になりますまい。

司會者　さうでもないですよ。

千葉　堀江さん、消費經濟の方面で婦人に就いての御意見はいかゞです。

堀江　それは、今迄やつてゐたところをもつとよくやつてもらふといふ事ですね。例へば公設市場をもつと改善して、各家庭では一週間位のメニユーを作つて、それによつて食事をとゝのへるといふ方法などですね、現在の日本では、一週間でなくとも、一ケ月の經濟を豫定してそれに從つてやつただけでも餘程違ひませう。

守屋　けれども婦人だけでやつても男子がこれを助けてくれなければだめです。

堀江　さうです。日本の家庭では、男子が專制君主ですからね。そしてその友だちがまた專制君主と來てゐるからどうも外で呑む事になつてしまふのですね。處がアメリカの婦人は、あの禁酒令で後悔してゐるさうです。つまり酒でものんで外へ出ていつてもらつてゐた方が、やかましくなくていいといふんですね。

三宅　そんな人も一人や二人はありますでせう。

堀江　例へどんなお客さんにでも、家庭では酒は出さないやうにしてもらひたいものです。あれだけは、何んとかして、婦人の勢力で止めてもらひたいと思ひます。所が、私は酒をのまないものだからうちの子供なんか、どうもお父さんは酒をのんでゐた時の方がよつぽどいいといつてゐますよ。酒をのんだ時は機嫌がよくて、何か買つてくれなんていつても『ウンよし〳〵』なんて、すぐ色々買つてもらへたが、酒を止めたら、妙に眞面目にばかりになつてゐてむづかしい顔ばかりしてゐるなんていつてゐますよ。だから世の中の事は一利一害ですね。しかし生活をもつと簡單に規律的にしてゆくことは肝要でせう。

司會者　はゝあ唯今のお話は機微に觸れたところがありましたね。

堀江　生活をもつと合理化し、單純化して婦人に余裕を作り出させて、勉强をして貰ふんですな。

司會者　女性の生活をほんたうの意味で向上させるにはやはり女性が生產經濟にたづさはることでせうね。

三宅　私はどうしてもさうだと思ふのです。

千葉　日本の社會が女性といふものに對する在來の心理の改善も必要ですな。何でも女が外へ出さへすればお轉婆だと云つてさわぐことは止めて貰ひたいのです。女性に對する變な特殊な偏つた心持を除くことも必要でせう。婦人事業家が外で寫生をしてゐても直ぐ何とか云つて評判するので旅行は勿論、落着いて寫生も出來ないさうですからね。そんなやうぢや困ります。

堀江　現狀では其樣の風があるとしても、追々婦人の知識が向上し、世間に出て、重要な働きをするやうに爲れば、評判とか、批評とか云ふやうなことは、自然に直らうと思ひます。

司會者　それではもう余程遲くなりましたから今日はこれで止めることに致しませう。どうも御苦勞樣でした。

外國婦人の職業及副業狀態

職業婦人としての獨逸婦人

稻垣守克

獨逸婦人の殆んど全部が職業婦人であると云つてもよい。約六千萬の人口の中職業に從事してゐる男女の數が約二千二百萬で其中婦人は約半數である。職業婦人の割合は戰時中及戰後に俄に增加したのである。戰前に於ては一八八二年には五百五十萬人(有職者の二割四分)一八九五年には六百五十萬人(二割五分)一九〇七年には九百五十萬人(三割)であつた。然るに戰後の今日は約五割である。

何が現在の獨逸婦人に流行する副業であらうかと云ふ問題は今日の獨逸婦人には當嵌まらない。副業ではなく本業である。生死の境に立つてゐる問題である。只一寸目に付くものは此二三年以來の編物の流行である。丁度日本と同じやうである。特に服裝として編物のジャンパーが流行して來たから誰にも出來る內職として毛糸及び人造絹絲でジャンパーを編むことが歡迎されてゐる。

獨逸婦人を日本婦人と比較すれば未婚の婦人の數が甚だ多い。從て家內職業ではなく外勤の職業に從事する婦人が大部分である。外出の出來ない老人や、子供を澤山持つてゐる婦人の家庭內職としては以前から人形の着物を造ること、皿や花瓶に繪を畫くこと、其他造花などが主なるものであつた。此二三年以來は編物が第一位を占めるやうになつて來た。

外勤の職業としては、雇人としてタイピスト、速記者、書記、帳簿係り、會計、給仕、商店の賣子、其他銀行會社のお勤め人である。又學校の教師、醫者、看護婦、藝術家等の數も甚だ多い。上品な仕事としては良家の家庭教師及びお相手婦人である。家庭教師とは讀み書きのみならず子女の行儀作法凡てを教授するのであるから其責任は中々大である。又相手婦人とは良家の主婦のお相手として雇はれるもので、主として老いて淋しい生活をしてゐる主婦の爲

めにピアノを彈き、小說を讀んで聞かせ、散步の時に同伴するのである。勿論「良家」と云ふ舊式の言葉も考へも今の獨逸からは消え失せつゝあるから此種類の職業は減少して行く傾向である。其他郵便配達、牛乳配達、新聞賣り、ガイド、切符賣り、開札、理髮師、洗濯屋（アイロンかけ）、家庭出張洗濯婦、裁縫婦、派出婦等は顯著なる婦人職業である。

獨逸勞働者の現數は二千二百七十九萬二千人である（全有職者三千二百十五萬人中、獨立者二百七十三萬人、半プロレタリア三百四十七萬人、被傭人三百二十一萬人、勞働者二千二百七十五萬人）。婦人勞働者の勞働組合に對する關係を見るに紡績勞働者組合及び金屬勞働者組合に加入してゐるものが、最も多數である。婦人の數が過半數を占めてゐる勞働團體は十一箇ある。例へば家庭雇人團體では九割二分、煙草勞働者團體では七割四分、製本業勞働團體では六割九分が婦人である。婦人が主として働いてゐる工場は紡績、煙草の他にコルセット工場及び人形工場である。

世界大戰の結果最も重い負擔を背負はされた民族は獨逸國民である。國民の窮乏は其極に達してゐる。どうにかして此難局を切りぬけなければならない。昔から勞働の國であつた此國には、戰後益々、勞働の元氣が充ち滿ちて來た。働かなければ實際に食へないし、又働かなければ惡者のやうに思はれる。實際のところ一般民衆に對して惡者である人々のみが働かないで食つて行けるのである。何か不正のことをしなければ今日の獨逸では働かずに生きて行かれない。

巴里では夕方事務所歸りの婦人どもがお白粉つけて「手さげ」を持つてブルジョア式の樣子を見せやうと努力してゐる。其氣分が全市の中でよく見える。然るに伯林の婦人は大威張りで鞄をかゝへて歩いてゐる。お白粉を付けてゐる女はあやしい女と見られる位である。

これからの世の中は勞働の國が榮えて行く。婦人の能率の點から考へて見ると獨逸では男子と婦人とが二人で働いてゐるに反し、日本では未だ男子一人で働いてゐるやうなものである。婦人が職業に就くことが「神聖なる」家族制度と相反するや否やは別の問題として、兎も角一本立ちとしての日本の將來は獨逸に負けて行くものと想像される。獨逸より遙に天然の資源に乏しい日本に於て未だ勞働を輕視する氣風があり、勞働運動などが極度に壓迫されてゐる。資本主義を擁護する國粹派の勢力が强く、一般の教育程度が其樣である。

獨逸婦人の職業として男子と區別すべきものは殆んど見當らない位に凡ての職業に婦人が立ち入つてゐる。只特に力を要する勞働、婦人の體質に不適當な勞働は男子のみの職業と見ることが出來やう。然しながら特に何が婦人の內職又は副業として流行するかと云ふ問題、今日の獨逸婦人の勞働の問題としては餘りに小さ過ぎて之を取り出すに困難である。それ程獨逸婦人の殆んど凡てが殆んど凡ての職業に從事してゐるのである。

フランス婦人は二頭仕立の馬車

横山正幸

日本に於ける婦人の社會的活動狀態を、男子に比較すれば自動車に對する人力車位の程度である。勿論これは一般を指したものであつて、女性改造の讀者諸姉の中には、自動車と對抗して活動してゐられるお方も多いには相違ないと思ふ。

英米の婦人は、人力車にたとへた日本婦人から見ると、自動車位の活動能力をもつてゐる、男子が大形自動車なら婦人は小形自動車くらゐでせう、處が今私がお話しやうと思ふフランス婦人はまあ二頭仕立ての馬車位のところであらうか。

幾多の波瀾曲折を經た後最近に到つて漸く英米の婦人は、男子と同樣に、參政權を獲得するに到つたが、曾つては彼の有名な、ジャンダークを出したフランスに於いては、まだ日本と同樣に婦人の參政權は認められてゐない。

併し乍ら、戰後に於ける婦人の地位は大いに異つて來た。地位の向上と共に當然與へらるべきこの權利は、最近に到つてそれを得やうとする運動が益々彼女等の間に熾烈になつて來た。而して、最初は、縣、市、郡、などの自治團體議員の選擧權を得度いと云ふ位であつたが最近一躍して國會の議員の選擧權及被選擧權迄も獲得する勢を示し、此提案は遂に下院のみは通過したが、上院に於いて握りつぶされてゐるやうな仕末である。さて、フランス婦人の職業に就いて、尤も私は主として都會の婦人に付て申すのであるが、それを智識階級から見てゆくと、そこには專門の政治家や正當の官吏などはまだ見當らないが、辯護士としては卓越した技倆を持つてゐる人が多い。又科學の方面に於いては、ラヂウムの發見によつて世界に名聲を博した、キューリー夫人を初めとして、相當の專門家が少くない。

又、コンテスドノアイ夫人は文藝家中では錚々たるものであるが、こゝにはなほ有名無名の數知れぬ婦人の畫家があり、美術方面にもサロンに入選するのは、限ずしも男子に限られた譯ではない。ピンクの憂愁を有する、ローランサン夫人などは我國にも廣く知られてゐる。

然し職業として婦人が男子を遙かに凌いでゐるのは、劇と音樂界に於いてである。彼女等の美しい容姿や動作は、女優として男子を壓倒してゐる。近く逝いた、サラ、ベルナールの如きは全く世界的の藝術家であつた。彼女等の收入は月額何萬フランを以て數へる事が出來る、勿論それは餘程の技術を有してゐる人々ではあるが。

上流婦人の間にもたゞ安閑として、化粧と訪問と夜會とに、一

生を送るのではな、戰時中は特志看護婦として戰線に立ち、戰後もなほこの方面に盡力してゐる婦人が多い。山の手あたりの、かなりな金滿家の娘さん迄ですら、よく下町あたりに出かけて行つて、藥種店の店先に出たり、救濟事業などに從事したりしてゐる。

次に婦人が獨力で商業を經營してゐる方面を云ふと、家具裝飾、料理屋、婦人の衣服帽子化粧品販賣などに多い、これ等は日本に於いても見る事であるが、殊に室内裝飾の請負、家具の配置、窓かけの見立てなどにはフランス婦人獨特の技術を發揮して活動してゐる。

中流階級以下の婦人で、直接勞働に從事してゐるのは、商店の賣子、モデル、タイピスト、などあつて彼女等の收入は賣子で月、五百フラン内外、タイピスト六百フランから七百フラン位だと云ふ。

特に通信事務にたづさわる婦人の成績は、非常に良好で、フランス政府に於いては益々この方面に婦人を採用する方針をとつてゐる。戰後の男の不足から、之等の事務員などよりもつと過激な勞働即ち、電車や自動車汽車の車掌等に、又自動車の運轉手などとしても働いてゐるが、柔よく剛を制すのたとへにもれず、男子よりもむしろ良好な效果をあげ、特に交通整理などには、彼女等の力に待つ事が多い。而してこれ等の收入はやはり凡そ五百フラン位であらう。

斯の如く一般に社會的に活動する婦人は、日本に比して遙かに多い。而してこの傾向け戰後特に著しくなつて來た。現に或る地方では婦人の商業經營の利益の爲めに、商業裁判所判事の選擧に就て選擧權が與へられた。近い將來においては上院も亦、一般婦人の參政權を認めるやうになるかも知れない。

フランス婦人はかやうに、社會的に活動してゐるが、然らば家庭と云ふものを等閑に附してゐるかと云ふに、決してさうでないし、又子供の教育を無視してゐる譯でもない。然らばどうしてかく時間の餘裕を有するかと云ふに、家庭内には日本のそれよりも、はるかに仕事に規律がたつてゐるし、又子供の育て方も違ふやうだ。日本では子供のある婦人だと、それのみに没頭して少しも他に餘裕を持たない。――もつとも近頃ではよく編物などやつてゐる婦人を多く見うけるが――向ふの婦人け子供が早くから母親の手を煩らはさないやうに、一人で遊んだり、勉強したり出來るやうに躾られてゐる。

又一方では、向ふの婦人が體力の旺盛であると云ふ事も、これ等外的の活動に、あづかつて力があると思ふ。

日本では托兒所の設備の少い不便もあるが少くとも、日本の今日の狀態から抜け出て、男子の社會上の活動を補助する方面に働く必要があると思ふ。然りとて、今まで人力車式の生活を續けた日本の婦人方が俄に一足飛びに歐米婦人の眞似をして、自動車式の最大速力を出し過ぎると、忽ち墜落したり壁に衝突つたりする、さう云ふ實例も二三あるではないですか――ですからまづ順序として佛蘭西婦人程度の馬車ぐらゐの活動から始めになることが一番よいと思はれる。

刺繍に堪能な支那婦人

田村松枝

支那の手藝は清朝時代最も發達した樣におもはれる。其の時代の製作品たる極彩色の華麗なる刺繍や精巧なる緙絲（つゞれの錦）は實に立派なる技術を示してゐる。支那婦人は手工に就て優れたる技術を有してゐる。殊に刺繍については獨特のものである。此國では刺繍は被服調度類等に用ゐられどんな家庭でもなければならぬものであるから一般に行き渡つて行はれてゐる。

支那政府でも之を奬勵し、又學校其の他の婦人團體に於てもその事業の一として刺繍を奬勵してゐる。學校では上海の美術學校、蘇州の武陵女塾、長州の衡粹實科女學校、北京女子職業學校、等は其の主なるものである樣である。

支那に於て最も刺繍の發達せる蘇州の如き街々では、店舖軒を並べて羅紗掛、靴、着物等を賣つてゐる。此の地方では農村でもよく行はれて農閑期など男子は上海に出稼し女子は刺繍の製作に從事す。又共進會などでも刺繍が數多く出品されてゐる。

刺繍の他にレースが漸く普及しつゝある樣である　これは主に外國人宣教師等の力によるもので上海のドア・オブホープや、除家匯の聖母院の如き其の主なるものである。ドアーオブホープは千九百年の創立にかゝるもので賤業に陷りたる娼妓を救濟す。授産教習の上、良縁を媒し或は高等の教育及び布教につかしむるを目的としてゐる。作品は上海の直營店舖にて販賣する。北京のウーマンスエックスチエンヂは北京政府の後援により米國宣教師の經營せる所である。不具者、未亡人孤兒等を收容し其の仕事の工料によりて生計を營ましめてゐる。製品は孰れも簡單な刺繍を主として、テーブルクロース、子供服ハンカチーフ、アンダーシャツ等である　總て純外國式の縫方で、擬古地方の風俗や北京近在の牌樓等をクロスステッチで縫ひ現はし此の地に遊ぶ人々の土産物としてゐる。

支那の上流婦人は社交に費やす暇があつても、家庭の職業等に就ては考へない者が多い樣である。又生計困難なる家庭の婦人は大小の工場に通ひ或は外人の家庭に雇はれて働いて居るものが多いが、家庭的に此種の仕事を營むことは餘り盛ではない。支那婦人の職業に就ては女醫、女教師、看護婦、銀行家、裁縫師、洗濯師等がある。

支那の婦人の中には新らしい思想に傾いてゐるものと舊來の因襲に囚はれてゐる者と、それが極端なる隔を持つてゐる。所謂新らしい婦人は歐米化をもつて自ら得意としてゐる。かうした人達の間には我國の婦人團體等とも連絡をとり協力して東洋文明の爲に盡粹したいと望んでゐる樣な次第である。

婦人團體では有名なる天津の廣仁堂がある。廣仁堂は光緒年間の

設立にかゝるもので、其の目的とする所は未亡人を救濟する爲適當なる仕事を授けるのである事業としては、織物、刺繍、裁縫、等を敎へ、未亡人をして悲慘なる境遇に陷らしめない樣に力めてある。キリスト敎關係の慈善團體に於ても此種の事業を行ふものが多い。

現によく行はれて居る刺繡は其の意匠圖案等在來のものを模倣し所謂純支那趣味のものが多く、偶々歐米化した意匠等の研究に力めてゐる向も見えるが、それは上流婦人間の一部に過ぎない。深窓に籠るを常としてゐる此國の婦人は、未だ職業として此技に携はるもの少なく家庭に於て勞力と時間とを惜まず丹念に製作に從事するものである。中流以下の家庭で職業的に之を營んでゐる者もあるが、之とてまだ〱行き渡つてをらない。長日月を費して精巧なる品を製作するものがあるが組織的に纏まつた量を作ることは少ない。

支那婦人の手藝は此國の人達が自覺することによつて改良されるであらう。さうした曉に於ては實に有望なる手藝の國となるのである。

英國と白耳義婦人の家庭副業

河野富子

英國の家庭副業について話せとのことでしたが、歸朝以來もはや七年にもなりますから現今の事については充分に御話も出來ません。しかし折角の仰ですから自分の見聞した事について少し御話致しませう。少しでも皆樣の御參考になれば仕合せで御座います。

家庭副業の種類

英國では御承知でも御座いませうが一般の婦人が大抵は丁年に達すれば其家庭の貴賤に係らず一つの職業を持つて自ら社會に立つて働きます。或は學校敎師となり、或は事務員となり、或は商館の女店員となつて。然し是は皆外に出て働くので御座います。

こゝに家庭副業としては

（一）ドレッスメーカー（女仕立師）
（二）ウオシュングウーマン（女洗濯屋）
（三）ニードルワオーク（女工）

ドレッスメーカ、はまづ我國の女仕立屋で男子なればテーラーといつて本職ですが婦人が内職的に家庭でして居るのであります。重に婦人子供物を致します、夫も外套などはテーラー仕立になります。無論テーラーより安價ですから大したものでないものは皆此ドレスメーカーにさせます。收入もなかなか少なくはありません。

ウオッシングウーマンはロンドリー（西洋洗濯屋）に出すほどのものでないものは此ウオッシュングウーマンに出します。勿論ロンドリーに出す半分値で洗つてくれます。そして取りに來て又持つて來ます。是は各家庭から極つて其仕事をうけて居ります。隨分收入も

あるもので、家庭副業としてはよい方であります。此一と二は副業と申しても婦人の立派な職業の内であります。

ニードルウオークといふのは編物、刺繍、レース等の手工であります。編物は最近にも一般にせられて居りましたが、現今では世界各國を通じて流行して居りますから盛んに副業として製作せられて居る事と思ひます。

刺繍は殊の外に外國人の嗜好に適ひテーブル掛、クッションカバー、テーブルセンタードイリー等又婦人子供洋服の裝飾、カラー、カフス等種々の用途が多いので御座いますから、家庭副業として一般に行はれて居ります。勿論一般家庭に於ても此精巧なる手工品を愛する爲に皆忙しい間に閑を作つて製作しクリスマス或は誕生、祝の贈答品とするといふ美點があります。レースはCottage indu[illegible]として名高いものであります。然し之は一定の生産地があつて其土地に限られて居ります。又土地によつて生産するレースの種類も異にして居ります。此國のレースで名高いものは、ホニテンレース、スパッキンガムレース等又アイルランドのアイリッシュクロシ・ーレース、レモレックレース、ホャリクマクロースレース、アイリッ ト シュロージズポイントレース等最も賞讃せらるゝものであります。

生産の有樣

之等は如何いふ樣にして生産して居るかと申しますと、農家漁家などの家庭副業として因襲的に親から子にだん〳〵と傳授され、其の案の如きも一定して居るのもあります。又尼僧の經營せる學校に貧困者の娘や不具者を集めて數へ一定の期間に練習を經へしめて學校に於て又家庭に於て副業に從事せしめて居ります。

賣捌きの方法

各家庭の生産品は主に仲買によつてレース店に集められます。又生産者とレース業者と直接契約の成立して居るのもあります。又停車場附近の村落などでは、旅客を目的に賣りに行くのもあります。又學校などは、注文によつてのみして居るのもありました。アイルランドの尼僧の學校などでは遠く亞米利加から注文を取つてして居ります。

然しレース業者は大抵之を都に送り出し市場に表れる樣になつてゐました。

奬勵の方法

機械製レースの製作せらるゝ樣になつてから中流以下の家庭では安價で巧妙に各種に渉つて製作せられて居るものを多く用ゆる樣になりましたから、手工レースは機械製レースに壓倒され、手工レースの需要者は只中流以上の家庭にのみ限られる樣になりました。從つてだんだん之に從事するものが少なくなつて來ましたから、政府は此種のレースの絕える事を憂ひて奬勵の一方法として巡回教師を雇つ

て各村落に派遣し、土地の小學女生徒に放課後、週二回若くは三回教へて、一定の期間の練習が終つてから直ぐ副業に從事せしめる様にして居りました。

倫敦のウエストスクエアーのセントラルスクールでは學科の外に實科として女子には裁縫、圖畫、手工等を授けて居りました。そして十一、二歳の女生徒でも必ず學校の制服は自分で縫はせ、スエーターも又編んで用ゐさせて居りました。手工品も自ら圖案して刺繡レース等を實用品に装飾品に自由に製作させてゐるのを見ました。

此等の生徒は皆各家庭や商店の注文を受けて製作して居りました。

又ショーデッチの實業學校でも裁縫科、圖案科、手工科、等がありまして家庭副業的に授けて居りました。

白耳義婦人の副業

白耳義の家庭副業としては世界に其名を博して居るレース製造があります。

主にフレミッシュ人によつて作業せられて居りますが、女子は老幼の別なく、糸卷又針を手にすることを自分の天職の如く考へ、他の工業の勃興に依つて影響を受け幾分レース業の衰減を來した土地でも、尚レース製造の子女に缺乏を感ずることがないといふことであります。

又白耳義にはレース製作を教へる特殊學校が百六十校もあつて其大半は修道院の管理する所であります。

白耳義國では此レース副業は非常に重要視されて皇帝自ら獎勵賞づきで圖案を募集され其獎勵に努められます。

元來白耳義のレース製造は依然手工のみに依り實に精巧無比の良品を出すを旨とし、他國の如く機械に於て廉價なる中等以下の物を作ることを爲さず、内職者は祖先傳來の經驗によつて他國人の企及せられざる老熟の技術を有するものが多く、而も今日に於て機械利用珍奇を極むるに至るとも、未だ同國の如く精巧なる物を製し得るの域に達せず、是を以て同國のレースは名聲を世界に擅にし、今日機械製のレースが市場に跋扈するも、猶まだ手工レースを需要する上流社會に向つて其勢力範圍を擴張するに至らないのは主として白耳義が今日も尚手工レースに全力を注ぐが爲であります。

此國で行はれてゐるレース製作品の取引に三種の方法があります。

第一は商業上の約定者又は製造家が注文を受けたる時、生産品を集め、或は販賣を豫想したる時、仲継の媒介に依つて買占むるものであります。

第二は仲継で、此は時としては代理店となつて賣買し、或は商業約定者の爲に生産品を集むるものであります。

第三は自家に於てレースを製造するものが直接代理店より圖案及支拂を受け決して約定者又は仲継の手を借らないものです。

そしてレース製造の工賃は個數に對して支拂はれる慣習になつて居ります。

米國婦人の生産能率

辻井日出

一口にアメリカと申しても、それは面積にして日本の數十倍、或はもつともつとそれより大きい國でありますから、國の北と南、或は東と西によつて、其風俗習慣が必ずしも一樣と申す事は出來ません。例へば世界中の凡ゆる人種を集めて居ると云ふ紐育と、未だに私刑の盛んに行はれる南部地方とは、自ら異つた風俗習慣があるのは當然のことでありませう。實際南の方では今でも活動寫眞で見る樣なピストルを持つたカウボーイが居るのであります。

こんな風ですから、婦人の家庭生活も場所によつて多少の相異があるわけであります。一體米國婦人は家庭内職を全うしないわけではありませんが、金を儲ける必要のある人達は、工場、事務所、商店などに出かけて働くのが大多數であります。之等の職工、事務員、タイピスト、ステノグラファー、賣子などは、日本では未婚婦人が殆んど全部でありますが、アメリカではその中に既婚婦人或は家庭の主婦が、かなり澤山混つて居ります。彼國では生活の樣式が日本のそれと全く異つて、婦人が家をあけることが左程困難を伴はず出來る樣になつて居りますから、このやうに一家の主婦といへども、家庭外の仕事にたやすく從事することが出來るのであります。又一面商業が機械的に充分發達した社會では、多量生産を行ふ結果、生産品の原價が手工品に比して著しく低下いたしますから、そのやうな社會では一般的に申せば、家内工業或はもつと小さく婦人の家庭内職の如きは、當然衰へることゝなるのでありませう。

其上米國に於ける婦人の社會的位置の高いこと、その教育の進んで居ることなどは、婦人が家庭外にあつて男子と伍して働く機會を、益々多くするのであります。デパートメントストーアの賣子、女事務員、婦人記者、電話交換手などが婦人であることは、何の不思議もありませんが、日本では男子に限つて取扱はれて居る鐵工場の或種の機械の如きまで、婦人の手によりて動かされて居るのを屢々見うけることがあります。又一般に分業の發達して居ることは職業數を多くいたしますから、從つて婦人の職業をも増すわけであります。卑近の例を云へば同じ女事務員にしても、タイピスト、簿記方等の外に單に書類の綴込のみを專門とする仕事もあります。小學教員の如きも殆んど多數は女教員であります。しかもその教養程度は中々高いもので、BA或はMAの稱號を持つて居るものは、そんなにめづらしいわけではありません。

此やうに婦人の家庭外の職業が、男子と同樣とまでは申すことは出來ませんが、餘程廣い範圍に於て其領分に侵入し、之と競爭し、或は協力して働いて居る有樣でありますが、それならば婦人の家庭内職が全然ないかと云へば必ずしもさうとは申すことが出來ません。紐育市の如き多數外國人の住んで居る所に於いては、數萬ある婦人

の比較的高價なる内職として語學の個人教授が、ボツボツ行はれて居ります。それは必ずしも米國の國語である英語に限つたわけではありません。フランス語、スペイン語なども亦數へ得る外國語通の婦人が澤山あるのであります。之等の個人教授はどう云ふ順序に行はれるかと申せば、ニューヨークタイムス、トリビューン、ウオールド等の一流新聞の『よろづ案内』に語學個人教授の廣告をして、生徒をひきよせる方法もあります。又反對に語學を學びたい人達が之等の新聞に廣告して居るのを見て手紙で訪問を受ける日時或は更にくわしく報酬等のことを返事いたします。之に依つて生徒と會見をなし、一週二時間或は三時間等の時間割を定め、多く教師の家庭に於て教へるのであります。報酬は此婦人の教養程度により高下がありますが普通一時間二弗乃至三弗位といたします。此の内職にたづさはる婦人の大多數は、やはり女教員であります。しかし大學生なども相當交つて居る樣に見うけられます。生徒が必ずしも婦人のみに限らず、多數の男子が其教へを受けて居るのであります。之は上品にしてしかも時間を多く費やさず、資力を要せず、わづかの勞力のみにて行ひ得る仕事でありますが故に、教養ある婦人の内職としては、まことに都合よきものであります。只絶えず生徒を一人なり二人なりつかまへて置くことは或は都合よく行はれぬ場合がありますから、その點に於て稍不安定なものと思はれます。

之は普遍的に行はれて居ると申すわけでもありませんが、一部の家庭主婦の行ひ得る面白い内職として菓子、主としてペーストリー或はケークの類を、家庭で小規模に製造し附近の八百屋、食料品屋等に卸すことが行はれます。之は彼國の普通の家庭には、料理用ストーブがありますから、少しく心得のある婦人ならば菓子を焼く位のことは日本の婦人がおすしだの、おしるこをこしらへる程度に、容易になし得るところであります。又附近の商人と特約して置けば、收入を得る點に於て至極安全であります。殊に日々少量の品物を作るのでありますから、多くの資本を必要とせず主婦の家計の一部を融通することにより充分に行ふことが出來ます。

それよりも最も廣く行はれる婦人内職は貸間であります、之は殊にニューヨークの如き大都市に於ては、婦人の獨立せる一つの職業と申すも差支なきまでに發達いたして居ります。從つて未亡人其他の獨身婦人が多數此の仕事を選んで居るのを見うけるのであります。貸間と申しましても、日本のそれとは稍趣が違つて居るのは申す迄もありません。それは丁度ホテルと似た樣な制度で、室の他にベッド並に之に附屬したる寢具を貸し、其上一週間に一度新しく洗濯をして熨斗をかけたる敷布及びタオル數枚を供給するのが普通であります。電燈が室代に含まれて居るのは申す迄もなく、普通の家ならば入浴も自由にさせるのであります。室代としては一例を申せば、六疊乃至八疊位の室にてベッド一臺の外椅子二脚、机簞笥（鏡附）等の家具をこめて一週八弗から十五六弗位が普通であります。此他止宿人の希望により、朝食を給する如き場合は別に一週四、五弗を餘分に請求することは申す迄もありません。

例へば夫婦に子供一人位の家族が、居間、食堂、臺所、浴室等の外に寢室二ツ位のアパートメントを、一ケ月百二十弗の家賃で借りた場合に、其寢室一つを前記の如き方法で一週十五弗にて貸せば、家賃の大半は生み出すことが出來るわけであります。勿論十五弗の中には諸雜費が含まれては居りますが、それは大した金額ではありません。主婦が、庭外にて働く場合は、時間を多く費すのみならず服裝、電車賃等に相當の冗費を免がれることが出來ませんから相當の收入があれば家庭內職を希望する事は當然であります。此の意味に於て貸間の如きは、甚だ都合よきものと云はねばなりません。殊に彼國の家の構造は、各室獨立して居りますが故に、室を貸すことに依つて家庭生活の不便を覺されることが、甚だ少ないのであります。結婚生活をせざる獨身婦人にありては、數多き室の中幾分の室に臺所と寢室一つを殘すのみにて、他の全部を貸することにより、家賃の全部と生活費を得るのみならず、之により多少の貯へまでもなすことが左程困難ではありません。止宿人を求めるのは專ら新聞の「よろづ案內」によるので、たまには家の窓などに貸間の札を出して居るのもあります。

其他にも刺繡、編物、靴下製造、葉卷煙草製造等の內職が行はれぬわけでもありませんが、前述の如き事情にて工場工業の爲め壓倒されそれらは殆んど大したものではありません。

口繪解說

本誌の口繪春のおとづれはサマレンドラナード・グプタと云ふ、印度のベルガル派の新人の畫です。

印度の詩の中に、戀人の信條の一つとして郭公の鳴き聲は、愛人同志がお互に離れてゐる時に、双方の胸の中に、やる瀨ない淋しさを思ひ出させるものだと云ふのが、戀をする身にあり勝ちな思ひなしの一つに數へられてゐます。

春のおとづれは森の中を、よぎる乙女がフト郭公の聲を聞いて、ハツト立ち止まつて想度も〳〵その心持を味はつてゐる處を、あらはしたものです。

藝術的に見た海外婦人の家庭製作品

山中省二

海外に於ける手藝の歷史を調べて見ると、太古の時代から婦人の手によつて行はれて居たやうに思はれる。希臘の神話によれば刺繍はミネルバの神から授けられたと傳へられ、又古い詩篇や傳說にも、常勝將軍が刺繍を施せるきらびやかなる凱旋服を着飾つて群集の歡迎を受けて居る光景や、戰爭や獵場の出來事を金絲銀絲を以て縫取り國王に獻上したることなどが書かれてゐる。

聖書の詩篇にも次のやうなことが記されて居る――

『ソロモン王レバノンの木もて己れの爲に輿を造れり、その柱は白銀、その欄干は黃金、その座は紫色にて作り、その外部にはイスラエルの女子らが愛もて縫たるものを張りつく』

愛を生命とする優しい女性は、王冠を飾り、玉座を飾つたそして心をこめて製作したる之等の刺繍は寶物として後世に遺されてゐる。

中世紀に於ける歐羅巴の文明が爛熟の域に入つた時、貴族にも牧羊者にも等しく受け入れられたるものは藝術であつたそして婦人の手藝は此時代に於て著しく發達した。

刺繍及レースはやがて伊太利、佛蘭西、英吉利、獨逸白耳義、露西亞の諸國に行亘つた。ある國に於ては民族的趣味として奬勵せられ、又國によつては婦人の必ず修むべき技能の一として重んぜられた。

それ等の國々の婦人達は、家庭經濟の上を考へ、又藝術に親しむところから、丹念にその製作に從事する。それはその國の都市でも、田園でも、またどんな家庭でもへだてなく行はれてゐる。

伊太利は昔から刺繍やレースで名高い國である。此國の婦人達が手藝に親しんでゐる有樣ほど床しいものはない、古い歷史に、物語に、書き殘されたるものを見るにそれは宛らに詩であり、繪畫である、中にも田園を背景として描き出され

てゐるものが多い。

伊太利の田園に於ける婦人達は野の森や牛舍等で、レースを編んだり、機を織つたりして餘念なく働いてゐる。夫の爲に羊毛と木綿とよりなれる衣服を織り、美しい刺繡を以て家畜の装具を飾り、又荷車には赤と空色の線を施し、その線の上に薔薇、雛菊、蛇、龍、マドンナの像などを描き、角の長い牛に牽かせて、穀類や葡萄を運搬する收穫時の賑やかなる光景は此國の一農村の情調である。

羊の群が一帶の高原を埋めて居る村の有樣が想像せられる牧羊者の小さな家に夕陽が瀕る頃まで、婦人達はせつせつと働いてゐる。刈り取られたる羊の毛を洗つて、野の花や木皮、果實の汁で染色し、それで毛氈を作るのが婦人の仕事である。かくて野原の中の仕事場で自ら意匠圖案等を考案し、いろ／＼な製品を作りあげる。

伊太利の婦人達は非常に刺繡を好む、農家などでも、一日の仕事を終へて野良から歸つた婦人はその勞を慰めるために刺繡に親しんでゐる。趣味と慣習に心を寄せて居る此國の婦人達は思ふ儘に自分の創作的才能を發揮することに力める。

伊太利では大切なる行事として祝祭が賑やかに行はれる。祝祭日には市が立ち、山車が競ふて作られる、ヴイテルボの聖徒等が多勢集まつて、高さ六丈もある鐘樓に象どれる山車を狹隘の街に引き出せることや、メシナ附近の丘陵に住める黑マドンナの信仰者が驚くべき大きな山車を作つたことなどもある時代の夜話の種であつた。

その祭日を迎へて樂しげに唄ひ合ふ村の若者や娘達の樂しさうなる有樣は、祭日服に縫ひこまれたる美しい刺繡や、うるはしい古風なる歌謠のうへにも偲ばれる。

新婦は嫁入道具に、若き妻は嬰兒の衣服や襁褓に、老婦は最後の日に用ゐる壽衣や枕覆に刺繡する。ある旅行者の旅日記に、ヴエニスの片田舍ではよく墓地に三角形の小旗が立てられ、軟かい風に吹かれてゐるが、それは愛兒を失へる母親が、悲しいこころを慰めるために、小さな旗に自分の思慕の情を刺繡し、墓標の傍に立てるのだといふやうなことが記されてある如く、刺繡がいろ／＼に用ゐられてゐる。

伊太利婦人の手藝に對するこころは、傳統的である。藝術の國としての古代の伊太利の面影や、ゴンドラに打興ずる新らしき若き伊太利の情緒は、何れも限りなき懷しみを抱かしめるものである。

露西亞は農民工藝の發達せる國である。その原因は天候の

關係上野仕事を休む期間が長い爲、農夫等はその冬の間家庭に於て手工に從事するからであると云はれてゐるが、露西亞の民族的氣風もその發達に與つて力があるのである。

露西亞の婦人は手藝に對して深い親しみを持つてゐる。この國の男子が手工に長ずる如く、**婦人は手藝に堪能である。**ある史家は此國の婦人が手藝に携はるやうになつた動機は耶蘇教の傳來とビザンチン文學の影響であると稱へてゐる。そして禁欲思想の爲に婦人が僧院の中に幽閉された時代から手藝が起つたといふことをその證にしてゐる。

サモワルの周圍で暮す長い冬の間は、露西亞人に取つては禮拜の時であり、思索の時である。彼等が家族團欒の樂しい生活を爲すのもこの時である、サモワルの歌を聽きながらこつこつと手仕事を續け、蘇るやうな四月の空を見るまでは雪に埋もれたる小屋の中で日を送る。

冬の露西亞の光景は露西亞人の思想と生活とを其の儘に表はせるものである、殊に田園の冬は一層情趣深き感がする。ツルゲネーフの作品からその叙景の一節を引いて見る――

眞白な冬が來た。冴え〳〵とした霜の嚴しい靜けさ、深く積つてぱりぱりと鳴る雪、樹々の梢の薔薇色の霜、色褪せたる緑玉の空、煙突の上の烟の環、ちよいと開かれたる扉から寒氣に打たれた樣な爽やかな顏と共につと流れ出る蒸氣の雲、寒氣に顫へる馬の早足、凡てのそれ等と共に冬が來た。正月はもう終りかゝつて靜かな空氣の中の夕暮の寒さは一層強くなり、色褪せたる夕日は見る間に消えて行つた。マリノーの家の窓には數々の燈火が輝いてゐた。フローフイツチは黑いフロツクコートを着て、白い手套を嵌め特に几帳面に七人の食卓を並べてゐた。一週間程前に小さな村の教會で二組の結婚式が行はれたのであつた。

復活祭の前後は此國の婦人達に取つて忙しい時である。信仰心の強い露西亞婦人は復活祭を迎へる爲に、その準備に心を奪はれる。聖壇を飾る刺繍をしたり、聖像をつつむ造花を拵へたり、贈物の工夫をしたり、晴衣の意匠を考案したり……これ等の準備が整へられると、樂しい復活祭が來る。

祈禱に明くる復活祭の式場は、總てが壯麗であり嚴肅である黄金の十字架の前に額づく銀線の祭服を纏つた牧師や、赤い絹のハンカチを頭に纏き、黑い天鵞絨の袖なしジヤケツ、青や赤の華美なる色のスカートをつけたる婦人達の合掌したる姿など、蠟燭の灯に照らされてゐるのも興床しい。

宗教が露西亞の藝術に與へてゐる影響は偉大である、復活祭を中心として此國の婦人達が手藝の製作にいそしむ、その

敬虔なるところの如き、みな懐しいものである。露西亞婦人の手になる、クッション、テーブルクロース等のその一つを取り上げて見ても、民族的特色が表はれて居り、又何處へ出してもその製作品の價値が立派に維持せられてゐる。

大露にも、ウクライナにも古い時代からの立派な婦人の家庭製作品が遺つてゐる。そして此國の婦人の手によつて製作されつゝある刺繍、レース等が地方的特色と民族的趣味を表はし、露西亞婦人の性格及傳統的氣風を語ると共に、特殊なる、その技術は世界的地位を占めて居る。

獨逸は家内的小工業の盛んな國である、殊に婦人の爲に此種のいろ／＼な施設がされてゐる。森林溪谷の間にある孤村に刺繍學校が設けられて居たり、湖岸の小さな町にレース專門の學校が見出されたりすることも、その實際のことどもを表はすものである。

獨逸の田舍には斯うした婦人專門の手藝學校が設けられて此國の婦人に、職業教育を授けてゐるので、婦人はよく職業に對して理解を持ち其の國の産業の助長及國民生活の安定に力を盡しつつあるのである、夫等の婦人技藝學校の目的とする所は、何處までも地方的特色を失はしめざることに努め、高尚なる職業教育を授くると共に、其の技術の修練についても實利的のものであり且藝術的價値あるものたらしむることを主として居る。

地方にはいろ／＼な慣習があり、又特殊な事情があることに鑑み、それ等に對する適切なる施設を爲してゐることも學ぶべきものであらう。其中でも農閑期の間丈開かるる技藝學校の如きはその珍らしい一つである。農村のことであるから耕耘に忙しい春があり、收獲に多忙なる秋がある、斯かる季節になると、婦女子も外で働く時間が多い關係から、斯うした地方では農閑期の間丈學校を開いて農家の娘達を收容するやうにして居る。

獨逸に於ける婦人の技藝教育に關しエディス、エドルーン女史が英國政府の委囑を受けて親しく調査を爲したる、その報告書によくその實情が記されてある。

エンヘンロイトに於ける刺繍學校――一九〇〇年政府は此地に夏期學校を開設して、女子に職業教育を施すこととなりミュンヘン美術工藝學校出身なるマイヤ、コルネリエウス女史を聘して計畫せしめ、一九〇三年に及びて開校の運びに至つた。農家の婦人は戸外勞働に從事するため粗糙なる手を有して居るものが多いので、直に此等の婦人達に美術的業務を

授くることが困難である、されば此學校では、つとめて汚れの見えない彩色刺繍の如きものを課し、且專ら實用向の中等品を製作せしめた。それから手が揃つて來るにつれて、その製作品の販路を研究した。此地方は寒村であつて、農業といつても馬鈴薯の栽培に止り、副業でもしなければ立ちゆかぬやうな所であつた。最初百名位の婦人を收容して、クッション、窓掛、テーブルクロース、婦人用外衣、子供帽子、婦人上衣等を作らしめ、特色ある刺繍を施すことを工夫した。後此學校を中心として發達せる此地方の刺繍が全獨逸及海外に名聲を博するやうになつた。此學校の方針は生徒をして美術的にして需要多き品を製作せしめ又製作品に就ては、製作者に相當價額を支拂ふた。製作品は總て賣品として製作せしめ、其の意匠圖案等は外國向のものに對する研究を怠らなかつたのである。

テイーヘンバッハに於けるレース學校——一九〇七年の開校に係り、校內に販賣組合を有して居る。ピロレースを敎授するもので、七歲より十六歲に至る女子を收容し、課程は、第一級初學者及普通能力を有する者、第二級稍進歩せる知識を有する者、第三級技術に卓越せる者と分ちて居る。授業時間は一日四時間とし、每年八月又は九月に開校する。授業方針は「趣味」、「淸潔」、「優雅」を旨とし、一般行儀作法をも併せて課してゐる。

ウオルフシュルウゲンに於ける官立刺繍學校——本校は白地布刺繍業に從事する自治團體內に在る。其の目的は地方產業の發展を圖り、注文を調達して賃金の增加を計ることを主としてゐる。技術が進むに隨つて生徒は學校に在りて他よりの注文の製作に從事し、其の製作材料の供給及賃金等も商店の婦人代理人と直接交涉することになつてゐる。

獨逸には刺繍、レースの專門學校が各地方に設置せられ地方婦人の職業的觀念を鼓吹してゐる。されば此國の婦人達は自然に時間の確守、秩序、用意、綿密等の諸德が訓練されてゐる。斯く手藝が普及發達し、婦人の職業が重んぜられてゐるに對して、其の家庭に如何なる影響を及ぼして居るかを知りたいのであるが、之等のことに就て次のやうな事が述べられてゐる。婦人が職業に從事してゐる家庭では食物及衣服が改善せられ、各種の稅金が容易に納附せられる。家庭職業の盛なる地方では、婦女子は冬期間協力して仕事を營み快談又は合唱等をして樂しみ合ひながら働いてゐる。又貯蓄を樂しみ、イースター祭の晴衣の如き各自の働いて得たるもので其れを調へる。

白耳義は精巧なるレースを製作する國として名聲を世界に擅にしてゐる。白耳義婦人の製作するレースは他國人の企て及ばざる特色を有して居る。ピーローレースのボビニをあやつつてゐる婦人達を軒並に見受けることなども此國のレースの盛んなることを證するものである。此國には多數のレース學校がある。亞麻の産地としての白耳義が之を加工して、立派な品を作りあげ、世界の市場に其名を爲して居るのである。

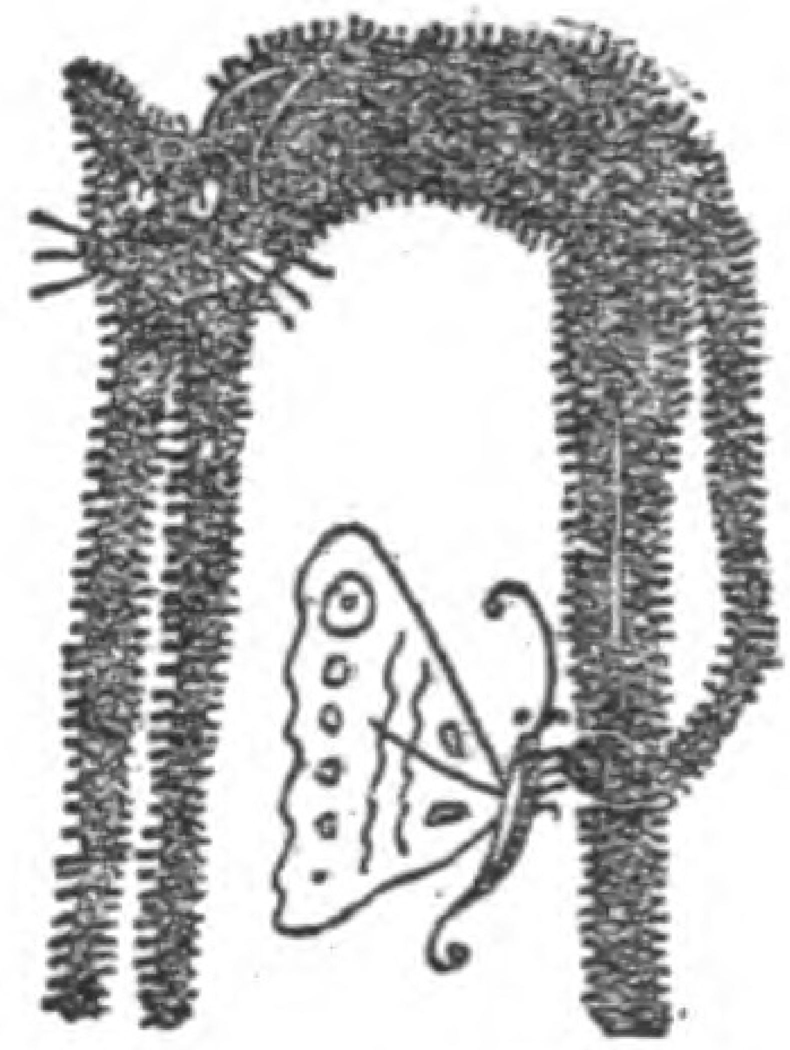
佛蘭西、西班牙、英吉利等も婦人の手藝について夫々特色を有してゐる。殊に佛蘭西は何んと云つても美術の中心地だけあつて、手藝についても、優れたる製作品を出してゐる。

最初婦人の手藝は希臘から伊太利に移された、北伊太利に於て最も盛に行はれ、ヴェニスが刺繍やレースの世界的中心地となつた時、その技術が進歩し美術化するに至つた。ヴェニスからやがて佛蘭西に移つた。ヘンリー三世の時フレデリツクヴインシオロをヴェニスから招聘して宮中用のレースを製作したことなどもその沿革の中に數へられてゐるが、最熱心に斯業の爲に力を盡したのは、ルイ十四世である。此時代に於て政府は補助金を出して奬勵に努め、その卓越せる製作品はヴェニスの製品を遙に凌駕するに至つたのである。

文明史に燦然たる光彩を放つてゐる國には宗教、文學、哲學と共に藝術があつた。そして藝術が國民性の根帶を形づくる時に、その國の文明は爛熟の域に達したのである。

トルストイの言葉にも「吾々は藝術の思想に浴することを悦ぶ」とある如く、藝術は吾々の日常生活に於て無ければならぬ最も貴い糧である。生活を趣味化し、温かく且潤ひあらしむる爲に、選ばるべきものの一つは藝術味である。殊に家庭の建設者としての婦人が、此方面に意を致すことは最も必要なことである。

婦人の嗜みとして、又家庭經濟の上から必要とせられてゐる各種の家庭製作品は天賦とも云ふべき器用なる婦人の織手によつて、世界的に普及發達し、やがて立派なる藝術として尊重せらるることとなるであらう。



萬璞女史に會ふの記

――支那女子參政權運動の一片影――

南部修太郎

昨年の秋、北支那の旅を濟まして上海に着いた ちやうどその日の晩方だつた。私はM君に伴はれて排日紙として知られてゐる中華新報社を訪ね、同紙の主筆張織章君に會つた。張君は東京の高等學校に在學した事もあると云ふ支那の所謂新人で、慇懃な態度、穩かな話振の內にも、鋭い頭の閃めきのほの見えるやうな少壯の論客である。論談數刻の後暇を告げようとすると、同君はふと思ひ出したやうに云つた。

「北京から萬璞女史が來てゐますが、一度會つて御覽になりませんか？」

「萬璞女史とは？」

私は尋ね返した。

「おお、まだ御存じないんですか。支那のパンクハアスト孃ですよ。」

張君はその童顏に微笑を浮べながら、私を見詰めた。

支那に婦人の女子參政權運動者がゐる？ 私はちよつと意外だつた。意外だと感じたすぐあと、張君を見返しながら、私は思はず微笑を洩らした。張君の微笑と私のそれと、その意味が同じものだつたかどうかは知らない。が、私はとに角不思議な、と云ふよりも寧ろ可成りをかしい氣持がしたのであつた。

「河南路の宿屋に滯在中ですが、御紹介しませうか？」

張君は微笑を續けながら、また云つた。

「ええ、どうぞ……」

その主義主張を聞いて見ようなどと云ふよりも、さう云ふ人物に會ふ事その事に興味を感じながら、私は張君に答へた。

「承知しました。なかなか面白いです。」

張君はから云つて、すぐに名詞の紹介狀を書いてくれた。謝辭を述べ、再會を約して、程なく私はM君と共に暇を告げた。

それまでの旅行中、私は支那の普通の家庭の夫人なり娘さんなりと一度話し合つてみたいと思つてゐた。が、その希望はとうとう充たされなかつた。機會がなかつたと云ふよりも支那の生活に慣れた人の話で、さう云ふ種類の婦人は譬へ紹介者がどんなに信用ある親しい人であらうと、見知らぬ異國の一旅行者に面會など絶對にしないと云ふので諦めるより外なかつたのである。いや、それより以上に、支那に長くゐて或る家庭の主人と可成り親しくなり合つても、その細君や娘に紹介される事などは慣習上殆どないと云ふのであつた。

「支那くらゐ婦人の人格の認められてゐない國はありません。そして、また婦人自身もそれに滿足し、保守と因襲の穴倉に閉ぢこもつてゐるのです。」

北京で知り合つた或る支那の紳士はから私に云つた。

隨つて、支那の婦人で私が間近に會ひ、多少ながら詞を交へ合つた婦人と云へば、結局所謂くらうとの婦人ばかりだつた。然し、例へば北京の中央公園などで傍觀した普通の家庭に屬するらしい夫人や、娘や、女學生達、殊に私のとまつた北京ホテルの舞踏會の晩に西洋人達の中に立ちまじつて、日本の鹿鳴館時代もかうかと偲ばせるやうかハイカラ姿で輕妙に踊り廻る上流社會か金持階級の婦人達、さう云ふ中には私が日本で想像したより以上に開けた。極端に新しい型に屬するらしい婦人達の多くを見出した。が、人口二億の半分が婦人であるとして、そこにさう云ふ型の婦人達を置いてみたにくても、それは殆どゐないに等しいと云ふ事が斷言出來る。云つてみれば、支那の婦人の殆ど全體は無教育である。そして、さつきの紳士の詞が暗示するやうに低級で、無自覺で、固陋で、退嬰的で、その社會的地位などは無論の事、家庭的地位さへ殆ど何物も持つてゐないと云つて好いらしい。で、婦人の人格の認められてゐない事は、とても或る時代の日本どころの比ではない。ちよつとした小役人でも數人の婢妾を持つたり、婦人が單純な商品として公然賣買されたり、到る處に夥く程多數の藝妓娼妓がゐたりすることなど、その明かな證據である。そして、さう云ふ婦人國の中に一人のパンクハアスト孃を見出す事、それはをかしいなどと云ふよりも、寧ろ悲慘な感じたつた。

極端と極端と、それは支那の色色な事象の中に見出される云つてみれば、多くの日本の人達が好む處の中庸とか、溫雅

とか、適度とか云ふやうな、中ぶらりんな、生ぬるい、不徹底な感じのものは甚だ少い。萬里の長城や大同石佛寺などの營造の馬鹿でかさと。上京の武英殿などに見られる骨董品の細工の馬鹿こまかさと金持と貧乏人の生活の素晴しい隔り。大欲と無欲と。美と醜と。多識と無智と。古きと新しきと。進歩と保守と。あらゆるものがすべてでなければ無である。そして、その二つの對照の矛盾の中に少しも爭ひがない。例へば金持は金持、貧乏人は貧乏人と云つた風に互互に風馬牛である。つまりあいつ金持だから羨ましいとか憎いとか、あいつ貧乏人だから可哀想だとか馬鹿だとか云ふやうに思ひ合はない。それぞれに自分の分に、若しくは運命に徹底し安んじて、そこでやたらに苦しみ悶えたりしない。支那人の生活態度は大體に於てさうである。そして、さう考へてみると、無智蒙昧な婦人の多數の中に、その對照があまりに突飛な一人のウウアマン・サツフラジストを見出す事も、支那人としては少しも突飛な事ではないのである。無智蒙昧さも徹底しゐると同時に、突飛さも徹底してゐる。然し、それだけに、恐らくは馬の耳に念佛にも等しいだらう處の無智蒙昧な婦人達の中にあつて、萬瑛女史がどう説きどう動かうとしてゐるか？その萬瑛女史はどんな人物か？　私の訪問の興味はさう動いて行つたのであつた。

その翌翌日の朝だつた。私はまたM君に伴はれて、萬瑛女史の訪問に志した。からりとした秋晴れの日ながら、水蒸汽と煤煙の多い上海の町空はうつすりと曇つてゐる。いつものやうに世界のあらゆる異人種達を集めて雜沓してゐる白渡橋のほとりから、私達は黄浦江の支流に沿うて歩いて行つたM君は巡捕に二三度道を訪ねた。そして、私達はやがて女史のとまつてゐる通江第一臺旅社を河南路の狹い通に見つけ出した。どう見ても、立派な宿屋ではない。支那宿の常で、門をはいると四角な野天の土間があり、まはりにあまり綺麗でない處の客室が並んでゐる。土間にはうすぎたない身なりの宿泊人らしい男達が四五人ぶらぶらしてゐた。

「支那でも新思想家などと云ふものは物質的にあんまり仕合せではないな。」

私は一種支那くさい異臭漂ふあたりを見廻しながら、すぐにかう思つた。

支那に永く住み慣れ、支那語の巧さ恐らく支那人とあまり變るまいと思はれるM君は、傍の小さな部屋から出て來た中年の番頭らしい男に何かを云ひながら、二人の名刺を手渡した。と、この男も何故か微笑を浮べて頷いて、私達の眼の前

二間とは離れてゐない薄暗い、小さな客室の扉の中へつかつかとはいつて行つた。

「ほお、あすこにゐるんですかね？」

私はかうM君を顧みた。張織華君の口振から察すれば、萬璞女史の名は支那四百餘州に聞えてゐるらしい。その有名な人物と、そのみすぼらしい客室との對照、それはあまりにふさはないものだつた。

「さうでせう。」

M君も微笑しながら頷いた。

番頭らしい男はすぐに引き返して來て、その室の方に向つて「どうぞあちらへ……」と云つた身振を示した。

なかばあいた扉の空間には、だいぶ古びて處々しみのついた白金巾のカアテンがさがつてゐる。それをかきのけて先にはいつたM君のあとに續いた私はうしろの扉を靜に締めた後ぐるりと體を廻して、さて部屋の中を眺めようとした。と、二人を少し待たせて置いて、新人らしい、しやれた洋裝か何かで次の部屋からおもむろに姿を見せるのかと思つた萬璞女史は、私のすぐ眼の前に微笑しながら、平凡な支那服姿で立つてゐた。

「日本小說家……」

先に一揖したM君は例に依つてそんな風に私を紹介した。

女史は何か云ひながら、私に向つて慇懃に一揖した。支那語の不案内な私はだまつたままそれに禮を返して、すすめられた粗末な椅子にM君と並んで腰を降した。

M君はすぐに女史と會話にはいつた。

當り前の事だが、私にはそれがちつとも分らない。仕方がないので、煙草に火をつけて吸ひながら、女史の風貌と、部屋の樣子をそれとなく眺め始めた。

六疊間ぐらゐの部屋、處々よごれた白壁、奥の方に支那風の四角な寢臺、甚だとぼしい光の差してくる窓に向つて無骨なテエブル、その上には帖面や紙片などが雜然とのせられ、はしの方に規約書か何からしいうづ高い印刷物、女史はそれに向つて演說の草稿でも作つてゐたものと見えて、書きかけの紙片の上に一寸餘りになつた短い鉛筆がのせてあつた。處でそのテエブルに片肘かけてM君と早口に話し合つてゐる女史は無造作な七三の分け髮、質素な白地の上着に黑の股引、無論纒足などである筈もなかつた。年はもう三十を越えて見えるが、恐らく二十五六ぐらゐなのであらう。ひどく頰骨の高い、幾らか青白い、角張つた顏。そして、行儀の惡い、大きな甚しい出つ齒をのぞかせた口が、その顏のなかばを占め

てゐる。低く据わつた鼻。殘念ながら、どうひいき眼に見ても女史は美人ではない、眼は優しく、如何にも正直らしいまばたきを繰り返す。然し、多くの支那婦人の顔のやうに間がぬけて見えない。流石に人を怖れない慓悍さが、時々その表情の内にほの見える。だまつて見てゐると、M君との會話は高潮して、行くらしくその出つ齒が盛んに活躍してゐる。

「なる程、こりやあウウマン、サツフラジストにふさはしい顔だ。」

私は心密にかう思つた。

暫く話し續けてゐたM君はやがて私を振り返りながら云つた。

「北京に北京女子參政協進會と云ふのがあつて、萬璞さんはその首唱者で、今、會員が百三十人とかあるさうです。そして、今度その支部設置と宣傳のために上海へ一人來たんださうです。どうも馬鹿に早口なんでよく聞き取れないんですが、何かお聞きになる事があつたら通じて上げませう。」

「さうですね。お願ひしませう。然し、流石になかなか能辯家らしいぢやありませんか？」

私は苦笑を感じながら云つた。

「いや、能辯以上です。」

M君はだいぶ閉口してゐるらしい口振で、微笑した。

「ぢや、とに角思ひついた事を聞いてみますから、どうぞ……─」

「宜しいですとも……」

M君は頷いて、女史に何かを云つた。女史は私を見詰めながら微笑──と云ふと綺麗に聞えるが、實は馬のやうな出つ齒を突き出して大口に笑ひ返した。私は遠慮なくすぐに尋ねかけた。

「お國の御婦人達はあなたのお說をどんな風に思つてゐますか？」

「多數はまるで理解してくれません。然し、熱心な贊成者がなかなかゐます。」

「男の方、殊に識者はどうです？　督軍、議員、政府の役人などは？」

「男子はまだ大抵不贊成です。然し、今までの處、議員三十人程の承認を得ました。」

「北と南と、どつちが熱心です？」

「北京の方です。一昨日當地で私が宣傳演說會を開きましたら、大變彌次られました。」

かう答へた時、女史の顔はちよつと澁面になつた。然し、

一一よどみなく、如何にもはつきりした返事振であつた。

「お國の御婦人達の多數の狀態から見て、參政權などの要求はまだ早いやうに思はれますが、あなたの御意見は？」

私は暫くしてから尋ねかけた。

質問ごとに女史の態度は熱心になり、全く誇張のない處口角泡を飛ばして早口にまくし立て、流石のM君もたじたじして、その半分も聞き取れない樣子だつた。が、私がその質問を出して、それがM君に依つて傳へられた刹那、女史は待ち兼ねてゐた質問だとばかりに急に眞劍な表情になつた。そして、すぐに答へ始めたが、その眼には優しさが消えて、熱心さが光り輝き、兩手は胸や膝のあたりで自然にゼスチユアレ顏ぢうが口になつて出つ齒が躍るやうに上下する。その主義を説く意氣のまともさ、一生懸命さ、どうしてをかしがつたりする隙間があらう？　私は感心しながら、その辯を聽き、その身振をぢつと見守つてゐた。

「どうも一一聞きとれないんですが……」

から云つて、M君は女史の長い返答を通じてくれた。

「殘念ながら、それはお詞の通りです。然し、早いからと云つて諦めてゐたら、中國の女子は男子に抑へられたまま、いつまでたつても覺醒しません。その覺醒のために私は主張を主張としてゐるのです。それに婦人の狀態がいけないから參政權を與へるのは早過ぎると云ふ反對論に對しては、私は婦人に參政權の與へられる事が早ければ早いだけそのいけない狀態が救はれ改善されるのだと答へたのです。」

「なる程……」

私は頷いた。

「それで、今支那で假りに婦人に參政權を與へようとなさるなら、どの程度の婦人にですか？」

「女子中學校卒業生以上に……」

これに就いて女史は存外單純だつた。

「あなたは外國語をお讀みになるんですか？　外國の女子參政權運動に就いての本は？」

「外國語は讀めません。然し飜譯でエレン・ケイ女子の著書や、英國の女子參政權運動に就いての本、殊にパンクハアスト夫人の書いたものを讀みました。」

「フオオセツト夫人に就いては？」

「フオオセツト夫人？」

女子は小首を傾けた。この名に就いては何にも知らないらしかつた。が、やがて今度は女史の方から尋ねかけた。

「お國の女子參政權運動は？」

「小數の熱心な婦人達に依つて大分主張されてゐます。然し一般はまだ時期尚早論にあるやうです。」

女史は深く頷いて微笑した。

「何かあなたの會の規約書と云つたやうなものがおありですか？」

私はふと尋ねてみた。

「あります。」

女史はかう答へて立ち上ると、机の上に積んであつた例の印刷物を取つて、一つをM君に一つを私に手渡した。見ると粗惡な薄い西洋紙の表に「北京女子參政權協進會宣言　附簡章」と現し、內に宣言文や規約の條文を印刷した小型のパンフレツトだつた。無論、それは支那の白話——言文一致の文體で認ためてあるので完全には分り兼ねるが。頁を繰つてみると、宣言の處には「凡そ人類は男女を分かたず同等の參政權を交受すべきものなり」とか「在來の民衆政治は有產階級の小數政治のみ」とか云ふ型通りの文字が見え、本會目的として「一、男子の爲めに設けたる憲法を擴張して、女權の保障を求む。二、男子のみに與へらるる世襲財產權を打破して、經濟的獨立を求む。三、家政を專らとする敎育制度を打破して、知識の平等を求む。本會は以上の三目的を達せんが爲めに女子參政權を要求するものなり」と、大文字で印刷してあつた。一覽して、私はそれをポケツトにおさめた。

間もなく、さつきの番頭がお茶を持つて來た。茶碗を起して、それに急須から茶をそそぐ女史の手振は流石にどことなく女らしく優しい。女史は愛想よく それを私達に勸めた。

「當地でまだ演說會をお開きになるんですか？」

私はまた尋ねた。

「ええ。もう二三回。それから杭州、南京へ廻ります。」

「ずつとお一人で？」

「さうです。」

女史は強く答へた。

會談約一時間、女史の樣子が忙しいらしく見えたので、私達はやがて暇を告げた。女史は異邦人の私達からその主義に就いて訪問を受けた事が非常に嬉しかつたらしく、M君に對して數言を費しながら幾度となく會釋し挨拶した。私達が部屋を立ち出ると、女史はカアテンの影からその顏をのぞかせながら、例の微笑を送り續けてゐた。

「熱心なものですね。」

宿屋の門を出ると、私はかうM君に囁いた。

「ええ。然し、驚きましたよ。支那人を訪問して、あんなに

しやべり立てられた事は初めてです。」

「ははは。けど、全くあの人は口から先に生れたと云ふ感じそのままです。宿命的なウウマン・サッフラッスト……」

「はははは……」

二人は相顧みて笑つた。

然し、私は心から笑ひすませるやうな氣持ではなかつた。女史の頭は實に單純だ。そして、その女子參政權に對する信仰はちよつと無智な老婆の佛様信心と似てゐるやうだ。あの無自覺な、保守的な、退嬰的な、無智蒙昧な同性の多數に取り巻かれながら、それは無感と云ふのか、冷淡と云ふのか、超越してると云ふのか、少しの逡巡なくその信仰に突き進んで行く。またその主張の依つて來る處も英國あたりの女子參政權運動の飜譯的な鵜呑みにあるらしい。が、とに角それを取つて以て直に信仰とし、主張として、それにひた向きに邁進するあの意氣、あの情熱、あの勇敢さ、それはその信仰や主張の是非、適不適に拘らず、私を感心させた。實際、北京から天津へ、それは國内ながら人情風俗の全く違つた、幾百里の遠い異境である。そこへ單身、その信仰主張をひつさげてあらゆる無理解、漫罵、嘲笑、彌次を物ともせずに戰ひ歩く、それは大した事だ。

豫言者は市に容れられず、先覺者は常に虐げられる。現代支那の政治界、わけても女史の目標とする議院政治の狀態はどうか？　また國人一般、わけても女史の同胞である婦人達の狀態はどうか？　それを思ふ時、女史の爲さんとする處は實に突飛だ、奇警だ。見方を變へれば馬鹿馬鹿しいとも、滑稽だとも云へる。そして、恐らく女史の踏まんとする道は遠過ぎるくらゐ遠いと云へるだらう。然し、とに角女史は自分の信仰主張に徹底して生きようとしてゐる。それだけは人として確に貴い事だ。

今年の十月初め頃の事だつた。或る朝新聞を讀んでゐる、女史の主宰する北京女子參政權協進會を會の名を以て日本の女子參政權運動に應援しようと決議したと云ふ記事を見出した。私は思はず微笑を感じた。そして、ちやうど一年前に會つた女子のあの顏、あの素晴しい出ばつた齒をすぐに思ひ出した。

「世界の人類は互に平等の權利と、自由とを享受しなければなりません、然して、今や私共の主義の姉妹である日本の女子參政權運動者達はその要求のために戰ひつつあります。私

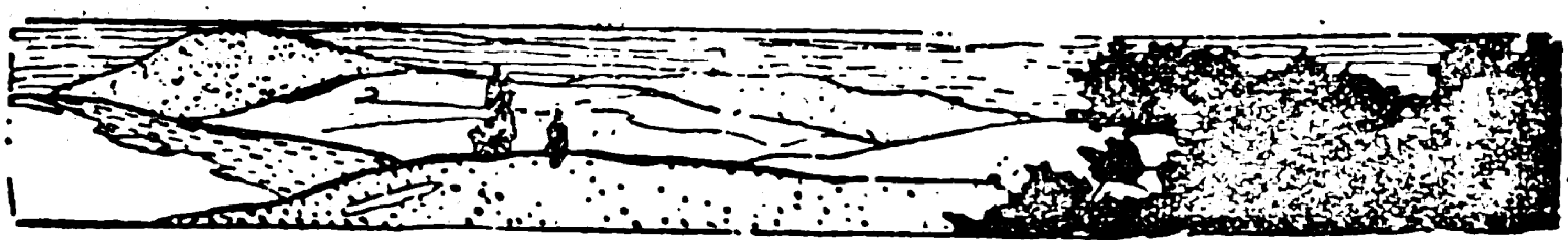
共は日本から幾多の國恥を受けました。然し、主義と國恥とは自ら別問題であります。私共は主義のために彼女達に應援しなければならない義務を感じます……」

恐らく議長席に就いたであらう萬璞女史はあの出つ齒を活躍させながら、口角泡を飛ばし、卓を叩いて、かう叫んだに違ひない。私は日本の女子參政權運動者に就いてはさう深くを知らない。然し、萬璞女史達の如く異邦の姉妹に向つてまで應援しようとするやうな素晴しい意氣を持つてゐるかどうかは疑問である。とに角、眼覺めつつある支那、私達がぼんやり冷笑や蔑視を送つてゐる内に、或は日本より先に女子參政權の實施を見るかも知れまい。何しろあの意氣、あの情熱あの勇敢さ、萬璞女史よ、健在なれ！

——十二年十二月——

茶の湯、生花の哲學

私の友の大學生は聊か茶の湯の心得がある。千家だか遠州だか其の方面の智識のない私には解らないが、大學生の話だけは心に殘つた。彼は或る日、その道の大家達が集つた茶席に案内された、そして、なみなみと滿した小さな茶碗を兩手に捧げて、すり足で疊一枚ほどを歩いた。いつしか茶碗の中は波うつて水がこぼれさうになつた、斯麽筈 なかつた、と彼は臍下丹田に力を入れて暫く足を踏み停めた。すると深さ一寸にも足らぬ茶碗の底が、まるで千仭の谿谷を瞰下するやうに感じられた。花を生ける、一尺の枝の中に天地人の宇宙がある。宇宙の森羅萬象、觀念の世界も現象の世界も僅一寸の杯の中に、一尺の枝の中にコンデンスするにあらずして發見するところに茶の湯、生花の哲學があるんだ、と其の友は語つた。

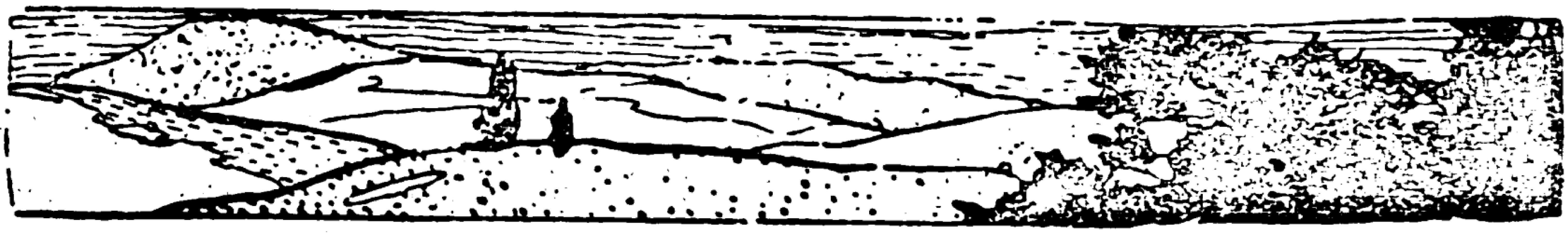


冬の原

澤ゆき子

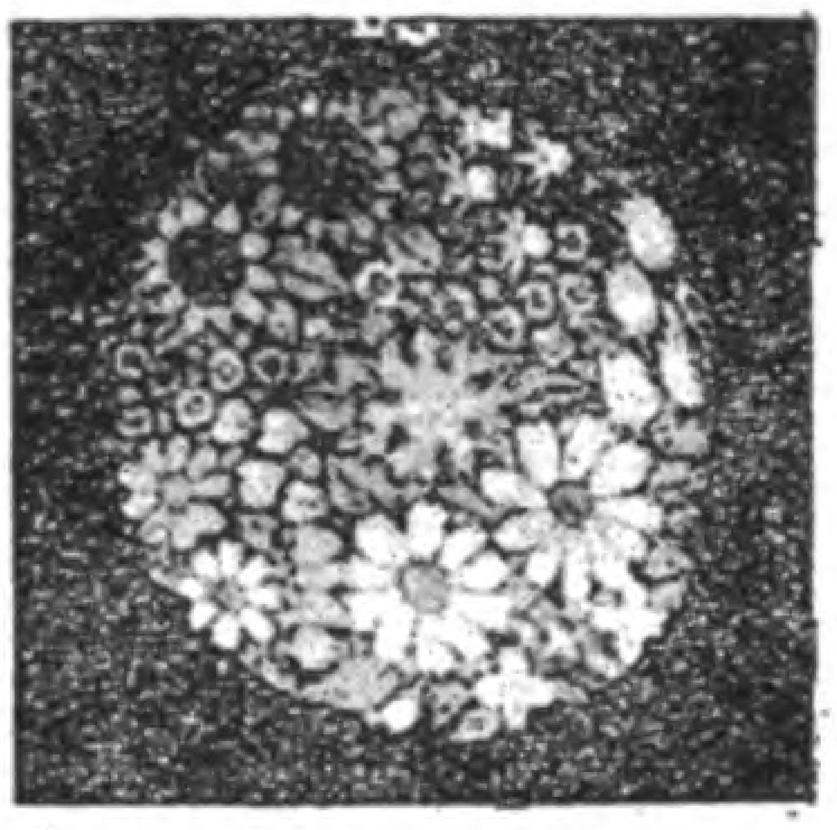
野良—
月の匂がする。
銀鈴が鳴る時の悲しみが
お前の泣き聲に渡つてゐて
もの靜かな夜の娘よ、
ときいろの私の娘よ。

野良の中の小屋に
醉ひどれてゐる住民。



一日を光の中にたちまじつて、
夜は幻のやうにかげ深い心にむせぶ里の人に
おまへのかほはみんな正しい。
行き過ぎにも
笑ひかけたやうにする可憐な住民
なにをいそぐのです
おあいさうものの村の人よ

おまへたちは慰められてゐるの——
——星をかぶつた屋のむねの中で、
ああそれともまた
どうしてゐるの



女性殉教記

渡邊庫輔

腦貧血

秀吉が施政のころである。數名をマリイと呼ぶ女が京都にゐた。家は耶蘇教社の師父の家の近くにあつた。高貴な女で殉教の志願を起した者が此家に集つた。皆白衣を着して、ひたすらに死刑の命の下るのを待つた。

女たちが寄寓した理由は、「刑部官吏の追捕の勞を省かんが爲う」ださうである。又、「官位極めて高き婦人あり、自宅に在れば官吏も來り捕ふるを憚らんと恐れて」ださうである。僕はこれを史家の筆の文だとおもつた。さうでないとすれば決して同情の出來ない女たちだとおもつた。相手は秀吉である。官位の極めて高い女でも、手心は加へないであらうとおもつた。いくら勝氣な女たちでも、かうした態度に出るのは嫌味だとおもつた。しかし集つたのは事實であつたのに違ひない。

女たちは殉教の幸福を互ひに語つた。中の一人はかう云つた。

「わたくしは教法の爲に死ぬのは結構だとおもひますの。だけど、生れつき弱い質でしてね。ちよつと氣になることが……」

言葉を切つた。更に言葉と云ふよりは餘りに淡い調子でかう云つた。

「お羞しんですが、刄や槍を見たら、え、ええ、眼の前で閃くとすぐに、氣が遠くなつちまうんですよ。それで、もしものことがあつて歩み得ないかと存じまして……」

もう現場に來てゐるやうな顏付をした。おもひ切つたらしく云ひ放つた。

「皆樣のお力で、わたくしを獄卒の前へ引き出して下さいま

し。これをお願ひ申したいのでございます」

僕はこの女だけは同情してもいいとおもつた。

トマスの理窟

トマスは年十六であつた。父は奉教者であつた。京都から三日程で行き得る某地の師父に就學してゐた。

父は奉教人誅殺の事を聞いて、トマスに遺言した。

「近いうちにキリスト樣へ一命を捧げようとおもひます。それで遺産は全部お前に讓りませう」と父は手紙に書いた。

「地上に遺す財寶はわたくしに下さいますのね。それだのに、なぜ天上に獲る幸福は下さいませんの」と京都に歸つたトマスが云つた。

神佛に關する問答で、親が子にやり込められるのは徒然草ばかりではないとおもつた。しかし、これに續くトマスの言葉は贊成出來ないものであつた。

「子は父に從つて死ぬのが至當かと存じます。父の死に就くのを見て、共に死ななければ無恥の者として嗤はれるのでございませう。如何でございませうか。まして、お父上は教法の爲に死なうとなさるのに、從はなかつたらば神人共に惡み賤み遊ばすだらうと存じますが」

心持には掬すべきところがあるが、やはり少女だと云ふ氣がした。

母と子

加藤淸正は法華信者として知られてゐる。そして、耶蘇教にも造詣が深かつたとは知る人が少い。

淸正は宣教師に云はせると評判のいい方ではなかつた。「千六百二年に當て、暴慢の一漢現出して血を流し、斬害を縱にするは、猛惡なる野猪、天主の葡萄園を亂暴するが如し」と云はれてゐる。それから、「是れはドム・オーギュスタンの仇敵にして、オーギュスタンの死後、基督信者十萬人の居住する肥後國を領するカンジユエ（主計）どのなり」と說明してゐた。淸正は大名であつた。大名は宗教も時によつて方便にする者である。それを知らないからかうした事も云ふのであらう。

淸正が奉教人を誅殺した時であつた。ジャンと呼ぶ武士がゐた。ジャンは逮捕された。頭上には法華經が戴かせてあつた。そして、「カンジユエどのより送られたる佛僧の住所に」拘引した。

ジャンの妻はマデレエンと呼ばれてゐた。ジャンが拘引さ

れる時に、マデレンは後を追つて走つた。

「……もしもの事があつても、きつと法敎に背戻するやうでは駄目ですよ。しつかりして下さいましね。きつとですよ。忘れないで下さいよ。でなかつたらば、わたくしは貴方にもう二度とお目にかからない積ですから。口も利きませんよ。ね。夫ともおもはないんですから」

マデエレンの言葉が利き目があつたかどうかはわからないしかし、ジャンが背戻しなかつたのは事實であつた。

淸正は怒つた。中に立つて改宗を勸める者もゐた。ジャンは決して背戻しなかつた。淸正はジャンを死刑に處するやうに命じた。

ジャンは侯の堂中に導かれた。佩刀を脫せられた。ジャンは扈從に佩刀を渡した。三人の兵卒が進んで來た。ジャンは覺悟して佇立した。その時、又二人劍を提げて帷幄の中から出て來た。公命と云ふのだつた。

ジャンは座に就いて首をさし延べた。そして、マリアとキリストとの聖名を唱へた。四人は刀で首を刎ねた。

時に千六百三年である。ジャンは年三十五であつた。ジャンに扈從した者の一人は基督信者であつた。他の一人は佛徒であつた。二人はジャンの死骸を埋葬する爲に擔つて歸つた後に有馬の基督敎師の寺院に送つた。侯はジャンの扈從の一人が佛敎であつたのを滑稽におもつた。

ジャンの同僚でシモンと云ふがゐた。淸正はジャンと共に處刑する事を命じた。しかし、中に立つた奉行の方策でジャンに後れた。

シモンの妻はアアンと云つた。シモンの母はフエリシテイやシンフオロオズに均しい功德を持つてゐた。そこで、アアンが天主に身を供する決心があるのを覺知した。

「嫁の願ひをかなへておやりな」と母がシモンに云つた。

シモンは從つた。そして、髻を截斷した。

その後であつた。燭臺には火が點じてあつた。シモンはキリストの肖像を持つて來るやうに命じた。キリストの肖像は火影に明るく見えた。シモンは片手に母の手を把つた。他の片手で妻の手を把つた。そして、次のやうに云つた。

「もう、これが最後のお別れなんです。この世で面接することの終りでございませう。しかしながら、間もなく來世では再會出來るだらうと存じます。わたしはお先に參りまして、幸福をお分ち出來ますやうに、つまり天堂にお招き出來ますやうに、天主に懇願致すでございませう。きつとさう取はからひますから……」

云ひ終らないで、シモンは母と妻とを抱いて泣いた。それから高聲にコンシテオオルを唱へた。三同唱へた。

シモンは平身低頭してキリストの像に對つた。キリストとマリアとの名號を唱へながら地に頭をつけてゐた。ジプヰオワアが後ろに廻つて一刀に首を刎ねた。首はジョアシイムの脇に落ちた。ジョアシイムは敬して首をその死體の上に置いた。座中の人は悲歎の余り號泣した只母と妻とは感動しないやうであつた。

母は死體に近づいて首を取つた。數回接吻した。

「これは善人の首ですね。今名譽の冠を戴いた貴顯の首とおもひますよ。身分を附與して下さつた天主に、これを返還することの出來たシモンは何と云ふ幸福者でございませう。わたしたちの爲に愛子キリスト樣を犧牲になさつた天主——今は天主の名譽の爲に犧牲にしたわたくしの愛子を、お納め下さいまし。お願ひでございます」と母は云つた。

妻のアアンも尊敬して首に接吻した。涙が流れてゐた。嗚咽してゐた。その中でとぎれとぎれに次のやうに云つた。

「とうとう請願は遂しましてございますね。わたくしは殉教して天堂に行き得る人を夫に致しました。幸福な夫は今天主と共に住んでゐるのでございます。夫は悲哀するわたくしを遺忘れないでございませう。きつと遺忘れないで欲しいとお願ひするのでございます。わたくしも速かに天堂にお招き下さいまし。そして永久の居を占むるやうに天主にお願ひ下さいまし」

シモンの首は八代から熊本へ送られた。熊本ではジヤンの首と共に罪案に揭げられた。そして、相對して官道に梟首された。後にシモンの死體は棺に收めて長崎に送られた。長崎の基督教會では寺院に葬つた。

或日暮れであつた。ジヤンの寡婦マデレエスはルウヰと云ふ七八歳の小兒と共に、人に伴はれてシモンの寡婦アアンを訪れた。ルウヰはジヤンの兄の子であつた。ジヤン夫婦に子がなかつたので養子としてゐた。

二人は共に死刑に處せらるるルウヰを氣遣つた。

「お前はね。おとうさんに逢ふ爲に天堂に行かなければならないのよ。もし手を左右に啓いて、お仕置を受けることがあればね。ゼシウ・マリヤ樣のお名號を唱へるのを忘れてはいけませんよ」とマデレエヌが云つた。

「おかあさん、わたくしは注意してそれを忘れますまい。命の絶えない間はきつとお名號を唱へませう」とルウヰが答へた。

マデレエヌは胸のつまつて來るのを覺えた。接吻した。泣いた。

　執行は、マデレエヌやアアンの處刑に夜を選んだ。白日は人が雜沓するだらうとおもつたからであつた。女たちは、祈禱をした後に最上の美服を着けた。

　三個の鑾輿が迎へに來た。アアンとその母とが各輿に乘つた。マデレエヌとルウキとは共に輿に乘つた。

「キリスト樣がアルウエエルに赴かれた時には、ひどい疲勞を遊ばしても徒行でございました。どうしてわたくしたち罪業人が鑾輿に駕して參られませう」とアアンが云つた。

　女たちは輿を下りることを頻りに欲した。監護の吏員は決して許さなかつた。

　刑場には四個の十字架が建て設けてあつた。處刑さるる者はジャンとシモンとの一家ばかりであつた。シモンの母が立つた。

　シモン所有のキリストの肖像を持つてゐた。松明を照らしてこれを女たちに拜させた。女たちは跪拜した。そして、やがて天堂に會する名譽を謝した。

　第一に十字架に繋がつたのはシモンの母のジャンヌであつた。

「キリスト樣は磔刑に處せらるる時に、針で手足を貫き、ひどい痛苦をお受け遊ばしたさうでございます。わたくしも是非さうして頂きたいのでございます。皆樣は憚ることなくあらゆる處刑の痛苦をお與へ下さいまし。力を盡して手足を緊縛あそばされるやうお願ひ致します。けれども、只一つお願ひがございます。それは、祈願を連唱したい爲と、仲間の者に最後の意志を說明致します爲に、首を少し緩く、そして、自由になるやうにして頂きたいのでございます。この一つがお願ひ申したいのでございます。」とジャンヌが云つた。

　司刑卒はジャンヌの希望通りにした。ジャンヌは見物の諸人に向つて演說を初めた。司刑卒は直ちに槍を把つて脇肋に一刺を加へた。演說を中止させたい爲であつた。しかし、全く胴貫させる事が出來なかつた。

「その槍は駄目でございますね」とジャンヌが云つた。そして、ゼシウ・マリヤを唱號した。

　司刑卒は再び强くこれを突いた。左の脇肋から貫いた槍尖は右の肩に出た。血はその傷口から逆流した。

　僕はこれを知つた時に、幾人のジャンヌが婦人矯風會にゐるだらうとおもつた。

　第二に磔刑に處せられたのはマデレイヌであつた。母が緊

縛られるのを見たルウヰは、進んで母の如くして頂きたいと司刑卒の前へ出た。

「お前は死ぬのが怖しくないのかね。お前はすぐに死ぬのだよ」と一人の司刑吏が云つた。

「わたくしは死ぬのは怖しいとおもひません。おかあさんと一緒に死にたいのです」とルウヰが云つた。

司刑吏はルウヰを捕へた。そして、マデレエヌの十字架と相對した小架に縛した。緊束されるルウヰは苦痛の聲を發した。司刑官長はこれに泣かされた。繩を弛めるやうに命じたルウヰは高く掲げられた。始終眼を母に注いでゐた。母も亦ルウヰを注目してゐた。

「おかあさんと一緒におとうさんのところへ参りませうね。神様もいらつしやるんですよ。しつかり勇氣を出して、ゼシウ・マリア様をお唱へするんですよ」とマデレエヌが云つた。

ルウヰはゼシウ・マリアを唱へた。マデレエチはこれに和した。

司刑卒はルウヰの脇肋を突いた。槍尖は滑つた。するとマデレエヌが云つた。

「ルウヰよ。お忘れでないよ。セシウ・マリア様をお唱へなさいよ」

マデレエヌはルウヰの處刑をまざまざと見せつけられた。司刑卒はルウヰに向けた槍をマデレエヌに近づけた。その鋒は尚ルウヰの血を點滴してゐた。司刑卒は暫く槍を止めた。やがて左の乳房の下を突いた。

最後はアアンであつた。アアンは十字架上に縛せらるゝを欲したが、誰一人としてこれに近づく者がなかつた。アアンは司刑卒の膽を落すのを見て、自分で十字架に上つた。そして適宜に裝置した。只緊縛して高く掲げることが出來なかつた司刑官も亦それを命じやうとしなかつた。

群集の内に佛徒がゐた。その中の一人は命を受けずに進み出でゝアアンを緊縛した。十字架は高く掲げられた。刺す者も亦なかつた。これも佛徒の幾人かによつて成された。

時に千六百三年十二月九日であつた。

教會の教師はこれら三婦一子の死體を求めた。清正は許さなかつた。基督信者に對して畏懼を感じさせる爲に、一年間これらを十字架上に曝らすやうに命じた。しかし、纔かに許されるところがあつて、これらの死體は後に長崎基督教會の寺院に送られた。

世人は三婦一子が刑殺された後に、その死體の上に靈奇の

光輝するのを見たさうである。いや、そればかりではない。シモンが刎首された後にも、夜中大きな火毬が天から降るのを見たさうである。しかし、諸君はこれを信用なさいますか。

盲目のマルト

僕たちは貞婦烈女とか、若しくは良妻賢母に關する話を澤山知つてゐる。しかし、以上記したやうな女たちの話は餘り傳へられなかつた。傳へられてはゐないが、行爲の上から見て僕たちが知つてゐる女たちに劣るものとはおもはれなかつた。只以上記したやうな女たちは、どこまでも理性を働かしてゐないやうにおもはれた。惡口を云へば、キリストやマリアと心中する氣かも知れないとおもはれた。

日本殉教史中で、最も盛大とされてゐるのは千六百十九年十月七日の事件の時であつた。日は既にたそがれ頃であつた。積まれた薪には火が點じられてゐた。炎焔は天に亘つてゐた。見物は涕泣し、刑卒は號叫した。囚徒は稱名した。暫時間囚徒の形は烟に覆はれた。聲々は四面を動揺するのであつた。

リユシイヌは最よく默想した。「車上に在る時、跪いて默することと良久しく、宛も魂の天外に遊ぶが如し」と傳へられてゐる。

リユシイヌの娘はマルトと呼ばれた。マルトは容貌美麗であつた。官吏は初めこれを遠ざけて逃脱させやうとした。マルトは母を慕つて泣き叫んだ。そこで、仕方なしに一旦獄舎に入れて母と同居させた。その後屢訴した。永く此所にゐれば水火の苦責を免れないだらうと云ふのであつた。若し能くその志を改むるならば京尹から厚賞を賜るだらうと云ふのであつた。マルトは只母と共に教法の爲に死ぬやうに欲した「衛士は頻りに之れを感歎せり」と傳へる。これはどうだかわからないとおもふ。

マルトは獄中の瘴氣に感じて盲目となつた。益々母の傍を離れまいとするやうになつた。刑場に赴く時は、固く母の袂を捉へてゐた。そこで、母と共に十字架に同縛されて焚死した。

マルトと共に刑死した中で、最も著名なのは橋本太兵衛であつた。「富貴にして智勇兼備の人」ださうである。その妻をテクルと云つた。二人の中には五子あつた。女カテリヌ、男トマス、同じくフランソワア、同じくピエル、女リエウス、さう云つた。十二歳、十一歳、八歳、六歳、三歳と云ふ順序であつた。テクルは懐胎して殆臨月に近かつた。

テクルは妊娠中なので獄外に置かれてゐた。そこで、夫が刑場に赴く時に使ふ美服を裁縫した。未だ分娩でなかつたが

處刑の期が近づいたので再び獄舍に入れられた。

或夜であつた。一人の子が手錠を施されたのを夢見た。大いに畏れてテクルに告げた。テクルは腹の中の子を考へた。子に對つてはその死を畏れないやうに戒めた。

テクルが車から下りて刑架に赴く時であつた。錦桂を被つて徐々と進んだ。

テクルは三歳のリユウスを抱いた。トマスがその右に繋がれた。フランソワアはその左に繋がれた。カテリイヌとピエルとはその次に繋がれた。

テクルは十字架に縛せらるゝ時に微笑して吾子を見た。慰焼する爲であつた。火焔は漸く盛んになつた。

「もう眼が見えませぬ」とカテリヌと云つた。

「すぐに天堂に行くんですよ。マリア樣とキリスト樣に擁護をお願ひなさいよ」とテクルが慰めて云つた。しかし、テクルも亦熱に堪へられなくなつてゐた。

テクルは懐にあるコウスの頭背を撫した。これを抱擁して吹川した。

後に死體が撿された時に、テクルとリウスとは母子一體の如くして離れなかつたと云ふ。史家は、「教會草創の際に死せし聖女フエリシツテイ・シンホロスに比すべき者なり」と云つてゐる。

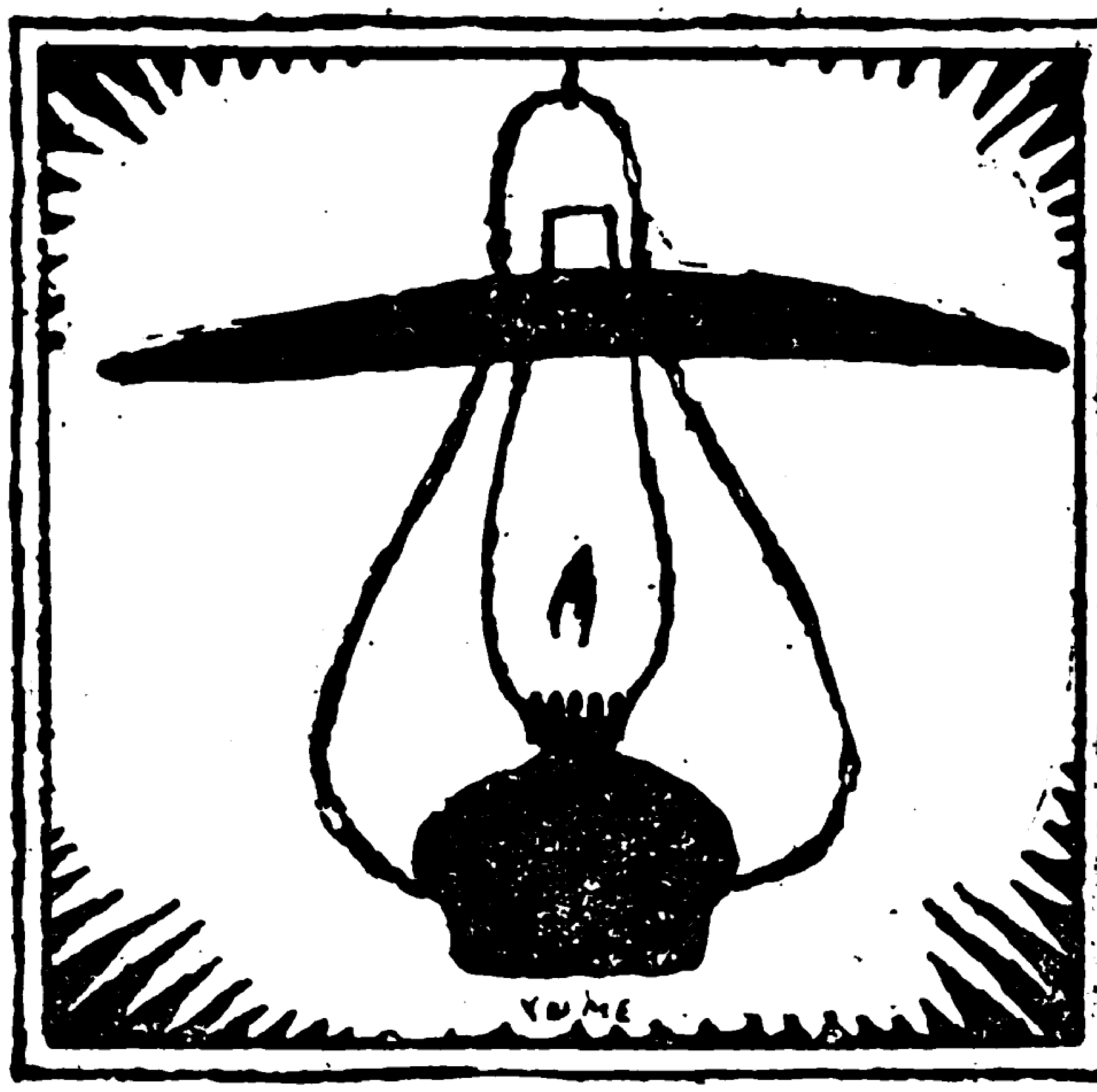
裸體のマデレエン

チヨアシイムは大石を抱かせられたが、遂に變心しなかつた。そこで、これを杭柱に緊括した。その妻を赤裸にして又杭柱に繋ぎ相對せしめやうとした。詰責を倍にしてジヨアシイムを苦惱させる爲であつた。

門閥家の一人がこれを止めた。恥辱とすべき不情の行爲だからと云ふのであつた。

妻はマデレエンと云つた。夫と共に舟に乘せられて、嘗て多くの奉教人を刑した一孤島に伴はれた。

奉教人に對する仕打は甚だ慘酷なものであつた。パルチザンを啗へないとおもふ程のものもあつた。しかし、中にはからした道徳的な行爲が加はらないではなかつた。



ストーブ雜話

解かれた象

吉村冬彦

上野の動物園の象が淺草花屋敷へ引越して行つて、其處で既往何十年とかの間縛られて居た脚の鎖を解いて貰つて、久し振りでのそのそと檻の内を散歩して居る、といふ話である。話を聞くだけでも何だかいゝ氣持である。肩の凝りが解けたやうな氣がする。

事實はよく分らないが、傳ふる處によると此象は若い時分に一度肝癪を起して亂暴をはたらいた事があるらしい。それがどういふ動機で又どういふ種類の行爲であつたかを確める事が出來ないのであるが、兎も角も、普通の温順なるべき象としてあるまじき、常規を逸した不良な過激な行爲であつた事だけは疑ひない事であるらしい。さういふ、行爲を敢てするといふ事は、即ち彼が發狂して居る事の確な證據であるとかういふ至極尤もらしい理由から、彼は狂氣して居るといふ事に極めをつけられた。其結果として、それ以來はその前後の脚を、たしか一本づつ重い冷たい鐵の鎖で縛られた儘で、不自由な何十年とかを送つて來たのである。

頸は脚に喰込んであの淺草紙で貼つただんぶくろのやうな脚の皮は、その爲に氣味惡く引き釣つて醜い皺が出來て居た。當人は存外馴れてしまつたかも知れないが、はたで見る目には妙にいたく\しい想ひをさせた。一體夜寢る時には、あの脚をどういふ風にして寢るのだらうといふ事が私にはいつでも起る疑問であつた。事によるとあゝやつて立つた儘で眠るのではないかとも考へられるのであつた。

檻の前に集まる見物人の中には、此象の精神の異狀を聞き知つて居るものも少なくなかつた。『オイ〱、なるほど變な眼付をしてやあがるぜ』などと話し合つて居るのを聞いた事もあつたが。さう云はれゝば成程私にも多少さう思はれない事もなかつたが、その眼付きが果して正常な正氣の象の眼付きとどれだけ違ふかを確める事は私には出來なかつた。

果もない廣い森林と原野の間に自在に横行して居たものが、一寸した身動きすら自由でない窮屈なかういふ境遇に置かれて、そして、いくら氣の永い、壽命の永い象にしても、十年以上もかうして縛られて居るのでは、さう〱好い眼付きばかりもして居られないではないかといふ氣もする。そして一體何の爲に縛られて居るのか象にはそれが分らない、假令それが分つても、それを云ひ解くべき言葉を持たないのである。餘り機嫌のよい顏も出來ない道理である。

動物園で永い間氣違ひとして取扱はれて來た象が、今度花屋敷へ嫁入りする事になつた そして花屋敷の人間が來て相手になつて見ると、どうも一向氣違ひらしくなくて普通の常識的な象であるといふ事になつたさうである。此れは新聞で見た事であるから事實はどうだか分らない。しかしさういふ事は事實有り得べき事だらうと思はれる。若し事實だとすると、此れはどう解釋さるべきものだらう。實際昔發狂して居たのが何時の間にか直つて居たのではあるか、或は今でも矢張氣違ひであるけれども其時に發作が起らなかつたといふだけであるのか、それも或はさうかも知れない。併し又元來少しも狂氣でないものを、誤つて狂氣と認定されて今日に至つたものかも知れない。萬一さうであつたとすると象にとつては甚しき迷惑な事であつたと云はなければならない。

此の問題に對して何等かの判斷を下し得る爲には先づ第一に動物特に象の精神病に關する充分な學識が必要であり、第二には此の象が狂氣と認められるに至つた狂暴な行爲に關する正確な記錄の知識が必要である。第三には彼がさういふ行爲に出づるに至つた動機とゆきさつについて充分な參考材料が必要である。

不幸にして私には此等の必要條件のどれもが具備して居ないから、從つて私は此の具體的の場合について何等の尤らしい想像すら下すだけの資格もない。

併し私は唯一つの有り得べき場合として次のやうな假想的の事件を想像して見た。

此の象は始めから狂氣でもなんでもなかつたのである。至極御心よしの純良な性質であつた。唯餘りに世間見ずの我儘な御ぼつちやんの象であつた。それで此の見知らぬ國へ連れられて來て僅の間に、相手になる日本人の氣心を呑み込んで卑屈な妥協を見出すには餘りに純良高尚過ぎた性質をもつて居たのである。處が又此象を取扱ふ人間も亦生憎極めて純良で正直であつて、此の異郷の動物の氣持などをいろ〳〵と推測してそれに適合する事を敢てするには餘りに高い人格を持つて居たのである。かうした二つのものが相接觸すれば何時かは喧嘩になる事が當然過ぎる程當然な歸結である。

それでとう〳〵感情の背反が起つて來た時に、此れが兩方共人間であるか、或はいつそ　事兩方共象である場合には却つて仕末がいゝかも知れないが、困つた事には一方が人間で一方が象であつたのである。一方は口が聞けてそして仲間が大勢居るのに、一方は全く口が聞けなくてそして唯の一人ぼつちであつた。此れが大なる不幸の主なる原因であつたのである。

喧嘩をする時には誰でも少し位は氣が狂つて居る。そしてお互に相手の事を、彼奴は氣違だと觸れ廻つても大抵聞く人の方で相手にしないから、結果はそれつきりで何等の後難を惹起す恐がない。

處が現在の假想的事件の場合に於ては、象が人間の云ふ事を聞かないから人間が怒つた、それから象が怒つたのであつても、其人間が仲間の人間に此事件の顚末を話して聞かす時には、屹度象が怒つた事實の記述の方に念が入り過ぎて、つい象が怒るに到つた原因の方の説明を忘れ勝になるのである。此れを聞く人の方でも勿論象の恐るべき行爲で頭の中が一杯になつてしまつて、象を怒らせた人間の行爲などはとても考へて居る餘裕のないのが普通であらう。適には其處迄立入つて考へ得るだけの能力をもつた人があつても、直接何等利害の關係のない象の爲にそれを考へてやるだけの暇をもた

ないのが通例であらう。

それで結局、何等の異議もなく此象は狂氣して居るいふ事が人間の仲間から仲間へと傳へられる。其間に象の狂暴な行爲は色々に誤り傳へられるが、其度毎に少しづつ恐い方へ〳〵と變化して行くのが通則である。

此の善良な人間達は暇に任せて象の其後の行動に注目する。さうして彼等の期待に合ふやうな象の行爲を發見する事の滿足を求めやうとするのである。その滿足が得られない場合には、それが得られさうな機會を積極的に作る事さへ厭はない。成程此奴は氣違だといふ事が腑に落ちる迄は安心が出來ないのである。考へて見ると甚だ不可思議な心理ではあるが、畢竟は人間が其所信に對する確證を求めやうとする眞面目な慾求に外ならないかも知れない。

それはどうでも宜いが、此場合迷惑至極なのは象である。腹が立つても、どうする事は出來ない處へ、かういふ境遇に置かれてプレデュデスの眼鏡の焦點になつては全く遣瀬がない。若しも一つ處に象の仲間が大勢居て、そして仲間同志で話をする事が出來たらそれなら何でもない。さうなれば象仲間で人間の方を氣違にしてしまつて、そして象同志で仲よくして居ればよいのであるが、悲しい事には、此象にはさういふ自分の世界が惠まれて居なかつた。

此場合象が氣違ひ扱ひを免れる方法は唯一つしかなかつた。即ち多數者たる人間と妥協する事であつた。不幸にして此の象はそれを敢てするには餘りに正直で善良であつたのである。其結果はあの通りである。

此れは唯一つの有り得べき場合の想像に過ぎない。併し若し此の想像が本當であつたとしたら、今度思はぬ機會で今迄とはちがつた人間の群の中に迎へられて、さうして、氣違ひでない當り前の象として見られ取扱はれるやうになつた事は此象に取つてどんなに嬉しい事であつたらう。想像するだけでも私は胸の奥底迄晴れ〴〵とするやうな好い心持がする。

事實は全くどうだか分らない、唯以上のやうな場合が今後にもあり得るものとすれば、私は多くの善良な象の爲に又其の善良な飼養者の爲に、此れだけの事を參考の爲に書いて置くのも無駄な事ではあるまいと思つたのである。

（一二、一二、二〇）

凄い烏のはなし

長谷川時雨

　人間を食べた烏や、またはその烏の子や孫のいけない烏──烏に馬鹿にされたの、泣かされたのといふと、おとぎばなしのなかの阿呆のやうですが、あたしだつて泣きだしかけた一人なのです。

　鷲に子供をさらはれたとか、鷹にものをとられたとかいふのならば昔からある話です、鳶に油揚げをさらはれる位は誰でも知つてゐます。ところが烏が鶏を追つかけたり、お鍋の御飯をさらつたり、お辨當箱を盗んでいつてしまつたりするそんな話がありませうか。嘘ではないあつた事です。

　濃には近いが、山深いところで、住民の土丹が甚しく濁るので、ちよつと聞き馴れないものには意味がとれないやうな邊鄙なところです。峠に電信線をひつぱつてゐた工夫が喧嘩をはじめました。それは昨日は誰とかの辨當が紛失し、今日はまた誰とかのが見えなくなつた、仲間のうちに盗んで食ふものがある筈だといふのではじまりました。切角のおひる休みも、樂しい煙草の時間もむだにしてのトツ組みあひで痛い目を見たものもあつたでせう。ところが其中の一人が氣附きました。「あツ、あれだ！」と怒鳴つたので、みんなの目はその方へ向けられました。

　烏はびくともするどころではない、悠々と皆の目の前で、強い嘴で、辨當包みの結び目をほぐして、辨當箱の蓋をはねのけると、大威張りで四邊の人間を睨み廻しながら中味を食べてしまつて、プイと飛んでいつてしまひました。工夫たちは嘆息と感服との叫びを集めて、やつとこさで「畜生ツ」とどなりつけましたがあとの祭りです。でもこの連中は山の中の人の赤ん坊が目玉を食はれそくなつた事なぞを知つてゐますから、「全くしどい奴だな。」と呟いた位で、烏を追はうとはしませんでした。追つたりしたならば、どんなに澤山出て來て

いけない事をするか知れないからです。
ですが私は話半分より以下に思つてゐました。いくらいけない烏だからつて、東京に居て、朝などカア／＼と鳴く聲や夕方の空をフワフワ翅をうごかしてとんでゆく、どこか懷かしみのある黒い翼の鳥をさう惡くは想像してゐませんでした。尤も惡い烏にあふ日まで、私は東京に生れて東京にばかり住んでゐた娘でした。するとある日白いものが庭の松の木からパラ／＼とこぼれて來ました「あら、雪！」その土地の雪の深いことを聞いてゐたので、直ぐに私はさう言ひました。するとその家の主婦が、「また盜られた。」と叫びました。「ばあや、鷄を盜つたよ、鷄を盜つたよ。」と金切り聲で騷いでも、松の木の上の烏は平氣な顏で、眼をギヨロリ／＼させた、鷄の白い毛をすつかり毟つてしまうと、足でおさへて嘴つついて食べはじめました。鷄も妙な鳴聲をたてました。男達がよばれて來る時分には、食べたいだけ食べて投りだして飛んでいつてしまひました。それから後、鷄が騷いでゐる時、猫か鼬でもとりに來たのかと思ふと、遊んでゐた鷄たちが烏に追はれてゐるのだといふことを見出しました。
あらい目の網が軒さきから格子のところにまで張つてあるので、何のためにするのかと思つてゐましたら、烏が家の中へはひるのをふせいであるのでした。烏の羽根と首が竹の棹のさきに釣るして軒さきに出してあるうちもあります。私は雨傘をある日干して、すつかり破いて食べられてしまひました土地の人は雨傘など用ひませんが、油紙などをほして矢つ張り裂かれて怒つてゐました。鍋つこに入れたまま飯をとられた――見なければ實際噓のやうです。火のついた蠟燭をとられるとあぶないと風のある日など用心します。
山の水をひいた細流が飲水でもあれば雜水でもあるので、雨が降つても雪が降つても濡れるかくごで炊事の仕度をするやうになつてゐました。ある年の大海嘯で、おぢいさんやおばあさんや、親達もなくなして、その烏たちの先祖に食べられた娘がお米を磨いてゐますと、向ふ側の雜木の枝にとまつて、一羽の烏が、いたづらをしたさうに待つてゐました。娘は嫌なものが居ると思ひましたがやりかけた仕事なので、氣にしい／＼磨いてゐると、もうやがて磨ぎしまひにならうとする時分から烏は意地惡く娘の頭の上をグルグルと廻つて、

やがてヒヨイとをりて來て、折角笊へあげた白米をひつくりかへして、細流の中にこぼしてしまひました。冷たい〳〵寒いころの、しかも氣のせく夕暮れなので、娘は手をまつかにして、泣く〳〵水の中に流れもせず沈んだのだけを、底の小石の間からすくひあげてゐると、すこし笊にたまるとまた下りて來てひつくりかへすのです。あげくのはてに、娘の頭へむさいものをひつかけて逃げていつてしまひました。

その翌日、私はそれを聞いてゐたので、隨分用心をしてかゝつたのですが――よせばよいのに、馴れもしないのに大きな生鮭をもつて細流のところへ出かけたのです。ところが、鮭の皮は凍つてゐて堅いのに、風はつめたいし、力を入れると指の節の皮が破れて血がにぢみ出すので、大きな鮭につかまつてしまつたかたちになつてどうにもならなくなりました。すると、どこに見てゐたのか、例の烏が、四五羽集まつて來ました。一間ばかり離れてゐるのもあれば、一尺ばかりの手許に來てゐるのもある、そしてさも不器用だなと言ひたげに、間遠しさうに何か待つてゐるやうでしたが、漸くのことで鮭のお腹を割つて腸をひきだしかけると、待ちきれないやうに、私がするのより器用に素早く、一羽が寄つて來て、グイとひつぱり出していつてしまうのです。と、おかはりがもう不興氣に近よつて來るのです。そしてどの烏も、みんな私の手許を一心に見つめてゐる、ぐづ〳〵すれば怒つて私の頭をもつつきかねない樣子なので、とうとう私は出刃庖丁も投りだしてしまひました。

阿呆〳〵と――それよりももつと口惜しさうに烏は怒鳴りました。鮭がドンドン流れていつてしまつたので、烏たちはよつぽど殘念だつたのでせう、その報ひに私の方へせめて來さうなので、私は全く怖くなつて家の中へ馳け込んでしまひました。

その烏たちが、沖から鮭の群を追ひかけてくる沖鷗と黑白相爭つて、山川の流れの裾のそゝぐ海岸で、鮭の生む子を拾つて食べる物凄さ――鮭は淺瀬に生んで、すぐに尾で砂をかけてかくしてゆくのですが、それをもほぢりかへして食べるのです。大雪の日など、鷗の羽毛は見えないで、烏ばかりが眞黑く、飛立ち飛下りしてゐます。その辺りの壯美なのは、烏のにくらしいのを忘れさせて眺めさせられます。

爐邊卒感

馬場孤蝶

（上）

女性教育の一般傾向が、所謂良妻賢母主義の名の下に、父母の氣に入るやうな、舅姑の氣に合ふやうな女性を造ることをのみ目標とした保守的のものであつたことは拒み難い事實である。今日では流石に前日のやうな融通のきかぬところは大部少くなり、何と云つても、時勢に押されて、敎へられる女性自身の欲求が餘程參酌されるやうになつてはゐやうと思はれるもの丶、まだ本當の新女性の敎育といふところへは、進んでゐないものと見做さゞるを得ない。

けれども、世間の俗流の男性の考が只管に、女性の進むのを所謂生意氣と見做すといふ傾向の止まざるかぎり、男性に對し、父母から見て、謂はゞ被支配階級であるところの女性の敎育に多大の變革を來たさうとは思はれない。

現下のところでは、男性から見て、父母から見て、舅姑から見て、從順な女性といふのが、それ等の人々の理想であるやうに思はれる。妻としても、子女としても、嫁としても、よく命令を奉ずる人形のやうなものを要求するかのやうに思はれる。美くしかれ、おとなしかれ、しとやかなれ、或はあどけなかれといふのが、優者たる男性、支配者(今のところ)たる父母、舅姑の、妻、娘、嫁に對する欲求であるのは、一應その心持だけは理解のできぬことはないが、かういふ欲求はホンの皮相的の考から成れるものであつて、決して思慮ある欲求でないことは明である。

男性の敎育といへども、未だ十分保守的の考を脫して居るものとは云ひ難いのではあるが、何と云つても、男性の世界は女性の世界よりも幾分か廣いのであるから、男性の方は自ら新しき路へ出て行く利便があるとはいふ迄もないことである。

男性にして、今日の勢衰へずして、次第に少しづゝでも進んで行くものとし、女性の方が現下の有様からさう大して進まないものとするといふと、女性は男性の伴侶としては、まことに頼み難いものとなつてしまうであらうと思はれる。美くしさ、おとなしさ、しとやかさ、などは、若き妻にはまことによくそぐうであらうが、美くしさは、何時まで續くものではなし、世間見ずのおとなしさ、しとやかさでは、妻として、一人前の女としては立つて行けない年齢が直きに來てしまうのである。

若いお嫁さんとしては、成る程從順一方なのは可愛く見えて結構かも知れぬが、三十面をさげてまでも、無識ぼん暗の女房では、良人たるもの決して不滿なしではゐられなからうと思ふ。尚その上に、從順とか、あどけなさとか、つゝましやかさといふやうな德は若き女性に於ては比較的容易に持ち得るものであるのだが、三十以上の女性になれば、何うしても、何んな女性でも自分の考といふものができるのであるから、若き妻のやうには從順であり得ない。さて、さうなつた場合、無理解な女は大抵所謂婢婦の傾向を示すのは、世上に實例が乏しくないと思ふ。知識足らず、智慮乏しき中年以上の女性の扱ひ惱いことは、大抵の男性の經驗してゐることであらうと思ふ。一知半解の教養があつて反省の考の乏くなくなつて居る女性が一層扱ひ惱いことも、此れ又、可なり多くの男性の知つて居るところであらう。所謂女性に對する教育に就ての呪咀の聲は一つにはさういふ頑冥な女性を見るが爲めに起つたものと認めるべきである。

（下）

さうして見ると、今の俗流の男性の女性に從順ならんことを求めるといふのは、唯一時だけの都合を欲するといふに過ぎないものであつて、長い間には結局自分等の損になることであるのは明である。

教育のある女性はいけないといふやうな考は、もう今日では古い考になつてゐると思ふのではあるが、それにしてもまださういふ考の影が幾らか少し舊式な俗流男性の間には殘つてゐるやうである。しかし、これ等の非難の聲は、女性の教育が徹底して居らなかつたが爲めに起つたものだらうと思ふ。所謂女性の中等教育といふのが、卒業しても唯だ裁縫と料理法を少し覺えた位に過ぎなかつたといふ程度のものであるに拘らず、さういふ教育を卒へた女性自身は一かどの知識を得たやうな心持で居つたが爲めに、一部の男性の不滿と

嫉視とが相俟つて、謂はば女子の初等以上の教育無用論ともいふべき考が、俗流の男性の間に抱かれたものと見ざるを得ないのである。

詮ずるところ、今よりずつと多く知識を女性――知識階級の子女に授けること、一口に云へば、さういふ子女にもう少し學問をさせる必要のあることは疑ひないところだと思ふ。今日の女性教育制度を標準にして云へば、この上もう三年ほどの所謂專門學校的教育を授ける制度を設けるのが宜しからうと思ふ。その上で、また進んで本當の專門的學問をしたいと思ふ女子は、男子の大學へ入つて、十分に研學することにすればいゝのである。

男性の方は何代もの間の訓練を經て今日のところまで來てゐるのであるから、さういふ訓練を經來つて居らぬ女性が、皆が直ぐに男性に追ひつかうとしたところで、それは無理であらうし、又男性と女性とは人間としての任務がそれ〴〵違つたところもあるのだから、男性と全く同樣の程度の教育を一般女性に施すには及ばぬかとも思はれるのだが、今の知識階級の子女に對する教育組織では何うも完全でないやうに思はれる。

勿論、今日の中等教育でも、今少し女性に學問をさせるやうな程度にまで、これを進めることは不可能ではないとは思ふのだが、それにしたところで年數と、學ぶ者の年齡とを考慮する時は、今日の程度よりさう〳〵進ませるとこの不可能なことはいふまでもないであらう。

要するに、今一段高い女性教育の機關を設けるのが必要だと思ふのである。

マストドンの立像

神近市子

この事を私はロシアを旅行したことのある篤學な人に訊て見たいと思ひ乍らまだその機會を得ないでゐるのですが、本

誌の讀者の中に觀光の爲めにか商務の爲めにか、嘗てモスカウとペトログラードとを訪ねたことがあると云ふ方はないでせうか。そしてそのどちらかの博物館でかの巨大な古代生物マストドンの世界に類のない完全な骨を見たと云ふ印象を殘して居られる方はないでせうか！

由來ロシアと云ふ國は地形的に民族的に彪大であると同時に、歴史的に精神的には多くの神秘を含む國として、世界の學者に注目されてゐる國であります。その國で世界發生後第三紀に棲息してゐたと想像されてゐるマストドンが、生ける時の儘の姿で發見されたと云つても、何だか少しも不思議には思はれない――寧ろ當然な若し現在の世界がマストドンの生ける姿を見るべきならロシアこそその國である――やうな氣さへします。

さて、ロシアが生けるマストドンを見た話と云ふのはかうです。何時のことだかそれはハツキリしませんが、五十年から百年位前の話であることは事實です。ロシア人の若い技師が北極の近くにある一つの礦山に働いてゐたことがありました。そこは冬になつて出かける時には人々は毛皮で張りつめた橇にのり、途中ではまた何度となくそれをとび下りて、馬の鼻面にできる氷柱を拂ひ落す爲めに、その鼻をしたゝかに打ちたゝかなければならないやうなところでありました。荒涼たる寒野は薄光の空の下に無限に擴がり、そこには礦山に働く僅かな人の他には、エスキモー人に似た土人の小屋が、そこゝに散在してゐる丈けでありました。

遂に長い／＼冬が了りをつげる日が來ました。春がめぐつて來た時に、技師ははじめて極地の氷が割れる音を聞きました。それは壯嚴とも凄絶とも形容することの出來ない、實に驚くべき不思議な音でありました。

丁度その時期に、ある冬のこと技師は土人達が全家族を引連れて家財道具を橇につけあわてふためいて南の方に逃げ行くのを見かけました。彼等の顏は恐怖の爲めに死人のそれの如くに蒼ざめ、且つ何物かに追はれてゐるものゝやうに、絶えず後方を振り返り／＼して居りました。人々の問に答へて彼等の想像も言葉も及ばない巨大な怖るべき怪物が、北方から除々に彼等に向つて押しよせて來ると云ふのでありました。これが間もなくその地方の人々に傳へられると、彼等も變にひしめき立つて、逃げる爲めに荷物をまとめ始めました。

その間にあつて、技師は漸く二人の土人を引止めて、彼と共に北方に歸つて行くことに同意させることに成功しまし

た。この二人の土人を案内者として彼はその怪物が襲ひ來ると云ふ方角をさして出立しました。彼の住居から二十哩をはなれ、谷が急に開けて千古の氷野が彼の眼前に展開された時技師は正しく文字通りに髪の毛が一本々々にその根に立つた程の怖るべき光景を見たのでありました。

一つの氷原が、丁度赤兒が這ふ位の速度で彼が立つてゐる方向に向けて流れ下つてゐました。その氷原の正面に、一大ホテルほどの氷塊がつき立ち、その青くみがいた硝子でもあるかのやうに透き通つた氷の下に、何千萬年の昔に捕はれた巨大なマストドンの全軀が、生けるが儘の姿で、一本の毛一片の肉をも失はないで突つ立つてゐたのでありました。そして極地の薄光の下で、彼等と怪獸との間を遮る氷があることは肉眼には識別できない位であつたので、怪獸が彼等の方に向つて聲もなく近よるのを見た時、二人の土人は聲をあげて知る限りの神々の名をよび乍ら逃げ去つて了ひました。

しかし若い技師は急に一大義務を負はされたことを感じました。彼はこの世界に又とない古代生物の研究資料を、責任ある人々の手に渡さなくてはならない任務を帶びてゐることを感じました。彼は自分の小屋に歸ると同時に十二疋の犬に引かせた橇にのり、二百哩を南に、一路一番近い電信局にかけつけました。そしてペトログラードにある博物館に向け詳細な電報を打ちました。

二週間經たぬ間に、百疋の馬が巨大な橇を引いて極地にかけつけました。しかし人々は辛うじて間にあつたのでありました。異常に暖かな極地の春光に、マストドンを封じてゐた何千萬年かの氷が始めて解け、怪獸は今や有が儘の姿を人々の眼前に曝してゐたのでありました。

この尊い研究資料は、直ちに橇に積み込まれ、南方の文化に向つて長い旅に發程しました。しかしロシアから派遣された一團中の少數の兵士では、夜中怪獸の肉の香を慕つて襲ひ來る狼群を充分に防ぐことは不可能でした。それで怪獸がペトログラードに到着した時には、その肉は殆どむしりとられ、たゞ首のみが大體に於いて完全に殘つてゐたのでありました。

これは新しい紐育の作家で、革命後久しくロシアにあつたエルネスト、プールの新著の一つにある一挿話です。筆者はこれが事實あつた話であるのかまたはつまり小說家の作り話の一つであるのか判斷はできません。しかし珍らしい、又實際に有りうべきことでもあるやうな氣持がして、何時までも忘れ切れないで爐邊の一つ話にして居ります。

科學爐邊ものがたり

石原純

寒い期節が來ましたね。

こんな折にはあの黒く重たい鐵で背後をまるく圍んだ暖爐のなかに、ちら〳〵と赤い石炭の焰の燃えるのをながめながら、幾脚かの安樂椅子をそのまへに並べて、しんみりとお話をするのが、どんなに親しく懷かしいことでせう。どうもみんながやはり黒勝ちな毛織物を纏つてゐるのが、そこにはふさはしい氣持がしますね。すこし重々しい氣分のなかに何とも云へぬ落ちついた、そして人間だけの親しみのある世界が湧き出てくるやうに思はれます。

さあ、併しそんなことを言ひましても、日本のやうな明るい冬をもつた國では斯う云ふ氣分は味はれないかも知れません。殊に震災後のすつかり自然に解放されたやうな燒跡に間に合せの板張りの家が並んでゐるのを見ては、もつとそはそはした、何もかも動いて止まないやうな氣忙しい心をもちしか起らないかも知れません。私はあのトタン屋根に白くきらつく陽の反射を見たり、板張りの隙間からひゆう〳〵と吹き入る寒い風を浴びると、まるでちがつたもう一つの世界にゐるやうな氣がします。ですが人間はそのために落ち着きを失つてはいけません。淺く動いてゐる心から時々はもつと悠たりした氣もちに歸つて、永劫な深刻な姿を省なくてはなりません。せめては夜のじつと靜まつた頃に炭火を取り圍んで瞑想を深めてごらんなさい。限りない究まりない奥ぶかい世界がそのときあなたがたのうちに展げ續けることでせう。

そこには一時の人間の生活を離れて、遙かにとほく之を超越した永遠の心がはたらきます。人性の最も奥底に流れる響き、そのあらはれは時にはかすかに見遁され易いものではあつても、しかも本質的には驚くべく力づよい確さをもつて私

たちに迫らずにはゐないところのものです。あの私たちが深く感動させられる昔からの名だかい多くの藝術もそこに根づいてゐるものです。殆ど神秘の域に立ち入つて宗教と面接しやうとしてゐる近代の科學の眞髓もまたそれでなければなりません。人間がさう云ふものを捉まないでひたすらに現實の生活ばかりに齷齪としてゐなければならないとしたなら、それはどんなに憐れな淺はかなものであるでせう。深い根本に突き進むことは、やがて現實に慰めを與へ、安らかさを贏ち得ることです。私は今さう云ふ心もちであなたがたに科學の意味をお話しやうとしてゐるのです。

現實の喧騷から攪亂されないために、私はあなたがたを靜かな爐邊に導きませう。その前に並んだ一つ〳〵の椅子に落ちついて坐つて下さい。そんな部屋を今私たちはいつてゐないと仰しやるのですか。え〻、本當に私にだつてさう云ふ準備は持ち合はせません。ですが、それは現實を超えてさう云ふ用意を整へるのです。私たちの肉體の眼がお互に對き合ふのではありません。でも心の眼は私をあなたがたのまへに坐らせて、もの懷かしい爐邊を取り圍むのを見ることができるでせう。それは私たちの心における一つの形像です。

形像、この言葉をじつと靜かに考へてください。私たちの科學、いな自然科學と云ふのは、私たちの心における自然の形像なのです。私はそのことを先づあなたがたにお話したかつたのでした。

一體、自然科學と云ふと、やたらと自然に存在する事物を取り上げて、その性質はどうの斯うの、その形狀變化はどうのかうのと、こまかしい面倒至極のもの〻やうに思ふ人があるやうですが、それは自然科學をさつぱり知らないもの〻考へることなのです。あなたがたが部屋一ぱいに品物を散らかしておいて、何はどこにある、何は彼處にあると調べただけで、そしてそれを一々覺えてゐただけで、それらの品物を何かの入用の際に取り出すには役だつかも知れませんが、併し抑もその部屋に品物がさう散布された理由について尋ねることがなかつたなら、いつになつてその部屋を氣もちよく整理することが出來るでせうか。それも品物が僅かなら一々の在り處を覺えきれもしませうが、數限りなくたくさんにあつたなら、とてもそんなことは出來ますまい。私たちに與へられた自然は、その儘では亂雜な部屋のやうなものです。しかもそのなかにある品物は數限りもなく多いのです。私たちはたとへそれらを實用に供しやうとする目的だけから云つても、之を亂雜の儘にしておくわけにはゆきません。圖書館の書物

にしても、それを部類分けしてめい／＼の書棚に整頓しておかなくては、さあ何か必要だと云つても探すのに幾度も同じ勞力を繰り返さなくてはなりますまい。書棚に整頓して目錄をつくつておけば、それで部屋は立派に見よくなるでせう。そしてどの書物がどう取り出されてゆくかと云ふことも判るわけです。

ところで部屋――私は意味をもう一段深めてゆくために、圖書館の例で續けてゆくことにしませう――を整頓したと云ふことの効果は、決して書物の探し出しに便利であると云ふだけには止まりません。こゝが私のお話しやうとする大切な處なのです。みなさん、椅子を近づけて聽いてください。

つまり、私たちはもと／＼閲覧に便利なために書物を書棚に整理したのですけれども、さて整理した上で之を能く／＼眺めて見ますと、いかにも體裁の美しく整つたばかりでなく、もつと／＼おもしろい事柄があらはれて來るでせう。即ちこれ／＼の種類の書物は、どんなものがどれ程あつて、又どのやうに關係してゐるか、どんな風に書かれてゐるか、又他の種類の書物にくらべてどうであるか、抑も亦人間全體の文化がこれだけの書物を生むために、時代的に又は地方的にどうはたらいてゐるか。内容や體裁のうへに之を究めて行つたなら、さま／＼の深い問題が湧いて來ることでせう。書物は人間文化の一つの産物なのです。書物に限りません一番最初に舉げたやうにすべての品物について、上のやうなことを研究し盡したなら、そこに人間文化の本當の姿があらはれることでありませう。こゝで私はあなたがたに、書物やその外の品物の代りに、それについて考へたことを自然の事物に移してごらんになるやうに望むのです。私たちはそのときどうすれば、いゝのでせう。

書物は書棚に整頓することができますが、自然の何でもを一つの部屋のなかに實際に持つて來て片づけるわけにはゆきますまい。そこで私たちは頭腦のなかにさう云ふ部屋を想像し、しかもそれは自然のすべてのものを整理するのに最も都合のいゝやうに之を設計するのです。圖書館で云へば目錄のやうなものでせう。目錄にはたゞ書物の名や要項だけしか載つてゐませんが、私たちはそこにすべての内容を整理しながら含ませるのです。さうすればそこには整理せられた形で自然の一切が再現するわけです。これが即ち私たちの思惟のなかにつくられる自然の形像なのです。私たちは之を世界形像と名づけ、之を構成することを自然科學の最後の目的としてゐます。

私は最初に、あなたがたと一緒に暖い爐邊に坐ると云ふ一つの形像を考へましたつけね。今もその爐邊でお話してゐるつもりなのです。石炭が少なくなつたら、焚き足しませう。寒くはありませんか。私たちはこの形像のなかでどんなにでも暖かくして愉快にお話し續けることが出來るんですからね。ところで自然の形像も私たちが自然を整理するのに都合のいいやうにつくつてゆかなくてはなりません。これを容れる部屋――科學の殿堂――には無用な裝飾は要りません。ですが自然の一切を包容するには、何から何までゆき屆いてゐなくてはなりません。私たちはそれをむやみな勝手な形につくることはできないのです。ちよつとの間はどうでもいゝやうに見えても、それからそれへと自然のあらゆる物を容れやうとすると、だん／＼になほしてゆかなくてはならなくなります恐らく私たちに唯一つの最も適當なものが見出されるより外に、さう自由は與へられてゐないのです。それでこそ科學の殿堂は「美」であり、自然の形像は「眞」であるのです。恐らく斯う云ふ意味の美や眞はさう幾種類もあると云ふわけではありますまい。唯一つ、それが自然科學の尊いところであり、そして私たちがこの形像を通じて宗教的な神と面接することの出來る所以なのです。私が爐邊の形像を通じてあなたがたと對き合つて話してゐるやうに、神は私たちの自然の形像のなかで私たちに言葉をかけてゐるのです。私たちはそれに聽き入ることによつて、自然がどんな意味をもち、どんな關係をもつてはたらきかけてゐるかを推知することが出來ます。そこには私たちの思ひ及ばないみごとな關係があらはれて來るでせう。それが自然の神秘の啓示に外ならないのです。自然科學は世界形像をつくつて之等を明らかにするのが目的なのであつて、決して單なる博識を與へやうとするのではありません。

圖書館の書物の整頓が之を探し出すと云ふ實用上の目的に始まつてゐるやうに、私たちの自然科學も原始的には自然の事象を人間の實用に供しやうとする目的から起つた事實なのです。力の利用、熱の利用から、力學や熱學が出來、物質の利用のために化學が始まり、鏡やレンズの使用につれて光學が發達しました。近頃の電氣學なども電信、電話、電燈、電車その外の電力機械などに用ゐられて、あらゆる文明設備を生むやうになつたのです。けれどもさう云ふ實生活に役だつものばかりが自然科學として研究せられるのではありません。それらは本來から云へば自然科學の餘澤なのであつて、自然科學それ自身は人間の精神に取つてもつと崇高な尊いといふ

柄を與へるものなのです。その點では宗教や哲學や藝術とちつとも變りはないので、宗教、藝術が直觀的感情に依るのに對して、哲學と科學とは概念的認識を經るのであり、そしてそれだけに最初から私たち人間に普遍的であることが出來ます。

どうも科學と云へばすぐに實生活のためばかりのやうに思はれて困りますが、藝術だつて實生活に影響することは同じ事なのです。今の科學を教へてゐる人たちは、どうも科學の本當の意味を忘れてゐるやうです。いゝえ忘れてゐるのでなくて、もとからそれを知らないのではないかと私には思はれるくらゐです。科學の話と云へば、實利ばかりを主にして話すのは私には情ないやうな氣がします。それは科學に基礎つけられなければ、しつかりした設備はできますまい。殊に震災で破壞し盡された都市を新らしく築きあげるのには充分にこれを顧慮するのが至當であつて、恐らくこれ程思ひ切つたことの出來る絕好の機會はないでせう。でも人間の現に便利だと感ずる處ばかりが本當のものではありません。思はぬところに却つて大きな缺陷のあることは、謂はゆる文明偏重の弊として屢々經驗せられたところです。そしてそれは科學の本來の意味を忘れて、その全體を透見することが出來ないで、却つてその末であるところの個々の產物ばかりに眼を眩惑されてゐるからだと私は思ひます。科學の眞の姿は決して大工場の煙突の並んでゐるところにあるのではありません。これは寧ろ非自然的に人間がつくつた一時的な工作なのです。そこには科學はもう死んでその殘骸を人間が使役してゐるに過ぎないとしか私には見えません。科學の精神がもつと生きて使はれたなら、すべてがもつと自然的なものになつたでもありませう。たゞそれは非常に難かしいことで、人間はそれ程ゆつくり考へ拔くことが出來ない程、生活に齷齪と囚はれてゐるのです。ですが、お互に出來るだけの餘裕をつくつて自然の本當の意味を省みなければなりません。これを怠つたなら、自然のおそろしい反逆がいつか人間に酬ひられるでせう。

自然の形像、それを私たちはしつかりと心にもたなくてはなりません。科學のことは科學者にまかせればいゝと世のなかの人が思ふのは間ちがつてゐます。新らしい研究は、それは科學者がしてくれるでせう。けれども科學そのものは、すべての人に宗教や藝術や哲學が必要であるやうに全く同樣に必要なのです。それによつて私たちが、どれ程より能く自然を、そして自然との交渉に立つ人生を知ることが出來るのでせう。

だいぶ時間が經ちましたね。この暖かい爐邊を去るのはでも惜しいと仰しやいますか。それなら今度はみなさんと心おきない雜談にでも移りませう。

珈琲を啜りつゝ

宇野浩二

　これは本當のストオブを圍んでの物語である。その代りつまらないかも知れない。暮の二十二日の晩、町で落ち合つた三人の友達――一人が文士で、一人が新聞記者で、一人が會社員、――が最寄りのカフエーの腰かけに這入つて、珈琲を啜りながらの無駄話に、

「君なんかの仕事は正月だつて、休日といふものはないのかね？」

「まあ、ないと言へばないやうなものだよ」と新聞記者が言ふには、「然し、幸ひ正月といふものは殆ど新聞種のない時でね。さうだらう、政治の方だつて休だし、經濟記事だつてないし、三面の方だつて閑散なもんだからね。」

「成る程、政治や經濟の記事のないのは當然として、……さうか、成る程ね、泥棒や人殺しにしたつて、三ケ日は差し控へるといふ譯だらうな。」

「さうだよ、自殺や心中も、大抵は暮のうちにやつてしまふか、正月になつたら、よく〳〵の奴でない限り三ケ日位は控へてゐるのが普通だらう。まあ、正月だつて何だつてかまひなしなのは、電車の事故に火事位なもんだ。」

「ぢやあ、一つ正月に大泥棒をするとか、大騷動を起すとかすると、新聞記者には氣の毒だが、やり甲斐があるつてもんだね。」

「もつとも近頃ぢやあそんな大泥棒なんて滅多になくなつたね、最近あちこちの新聞で、物珍しさうに大正の天一坊だとか何とか言ふ見出しで書き立てゝゐた、川島某とかの話など

も、何だかそんなに惡い事をしてゐたやうでも、惡い人間でもなささうぢやないか。」
「あんなのは屹度新聞社が東金とかいふ、あれを捕へた警察にうまく宣傳されたんぢやないかね。あんな風に新聞に書かれたら、東金署が餘程大捕物でもしたやうに見えて、署長以下の者たちが早速出世するからだらう。」
「まさか、そんな事もないだらうがね、無論、あれは詐欺とか、その外あり觸れた罪を犯したゞけなんだが、つまり自分を死んだものにしたところが天一坊と似てゐるのと、藥品で姿を變へたり、座敷に犬を飼つたり、堀をこしらへたり、さういふやり方が活動寫眞的な興味があつたからなんだよ。」
「僕はあの記事を讀んであの男に同情したね。あゝいふ相當な位置の、相當な教育を受けた男が、ついした事から法律に觸れるやうな罪を犯して、それを隱したい爲に、だん〳〵自分でも驚くほど大袈裟な隱れ方をする氣持は分るぢやないか。殊にあの男など或意味で極く氣の小さい男で、極端な脅迫觀念に襲はれて、あんな防禦法を講じるやうになつたんぢやないかね。」
「それや、そんな事も言へるだらう。何しろ泥棒とか詐欺とか言つたつて、これや學校で習へるもんぢやなし、つまり藝術見たいなもので、天才の仕事かも知れないよ。」
「無論、僕もさう思ふよ。河内山宗俊なんて泥棒は、全く惚れ〳〵する程才氣潑溂としたところがあるからね。」
「下谷の練塀小路の彼の屋敷といふのは、何でも最近まで殘つてゐたさうだね。」
「さういへば近頃、墓地を取拂つたとかどうとかして、問題が起つたやうだが、あれや鼠小僧だつたかね。」
「噓言へ、あれに一立齋廣重の墓だよ。そんな鼠小僧と一緒になどしたら、廣重が地下で怒るよ。」
「先の説で言ふと、どちらも天才なんだからいゝだらう。」
「墓地といふと、寺領といふものは、あれは地租免除のものだらう。それにも拘らず近頃の寺は實に慾張つてゐるね、地租のない地面を貸すのに高い地代を取るんだからね。この間も千葉縣の田舍の話なんだが、僕の知人の家で、死人の遺言で土葬にするのに、寺へ地面の交渉に行くと、坪百五十圓なんて言ふんださうだからね。もつとも、談判すると、三十圓に負けたさうだよ。」
「百五十圓が三十圓は驚いたね。……」
――さつと斯ういふ風なものである。考へて見ると、ストオプを圍んでの雜談などといふものは、子供がやる、尻取遊

び」といふものと似てゐる。即ち「ろーそく」「くら」「らくだ」「だいぶつ」「つばき」といふのと、同じ流儀で新聞記事から泥棒の話から寺と地面の話に移つて、それから暴利の話、政治の話、言ふには何、言ふには何、と時間がつづく限り、人々が飽きない限り、無限につづくものである。もつとも、この晩のストオブを囲んでの話は、話手に人を得なかつた爲であらう、殊に甚だつまらないものであつたが、女性改造の記者が何としても私を開放しないので、彼を辟易させるつもりで強いてこんな話を傳へたのである。讀者には甚だお氣の毒である。

夜のモスクヴァ

昇曙夢

共産主義時代に飢餓に陥つたモスクヴアは一旦凡ての犯罪が跡を絶つて了つた。泥棒したくも盗る物がなく、淫賣を買ふにも資本がなく、乞食をしても恵んで呉れる人が無かつたので。是等の暗い職業は一時モスクヴアから影を潜めたのである。所がネエープ時代（新經濟政策）の好景氣に連れて、掠奪者と泥棒とは再び各潜伏地から赤い都に集中し、街上には再び乞食の群が現はれ、ツウエルスコイ遊園地には淫賣婦がうろつき始めた。昨年の中頃はモスクヴア中の淫賣婦が全部動員されたと言はれたくらゐで職業賣淫の外に、ツウエルスカヤ、ヤムスカヤ、ドルゴルコーフスカヤ界隈では各家庭の婦人や娘までが、自宅でこの職業を營んでゐたといふ話である。勿論街上淫賣とは異つて、相手は確かな紹介のある物に限つたのである。

今ではそれ程でもないが、『夜の蝙蝠』（街上淫賣婦）は依然誘惑の網を張つて到る所に活躍してゐる。夜に入つて街燈の點火する頃になると、ツウエルスコイ遊園地や其他の並木公園には、羽毛を飾つた帽子や、赤く染つた唇や、絹の靴下や穴だらけの木綿の靴下やが現はれ始める。枝の茂つた菩提樹

の下では盲目の大道音樂者が古いヴイオリンを弾いてゐる傍で、十四五歳ぐらゐの少女が年に不相應な聲を張り上げて、昔の『バイカル』か何かの唄を歌つてゐる。惡どい香水の香がぷんぷん鼻を衝く後から、金歯を入れたニエープマン(新經濟政策の成金)が女の尻を追ひ廻す。あたりの窓を明け放つたレストランからは絶えずピアノの音が流れ、素晴らしい美裝をした幾組かのダーマやカヴアレルが踊り狂つてゐる――斯うした光景はニエープ時代の夜のモスクヴアでなければ見られない圖である。やがて十一時になつて大道音樂も止み、レストランもお仕舞になると、あとは蝙蝠のみの世界となつてツウエルスコイ遊園地のプーシキンの銅像のあたりからアルバートのゴーゴリの銅像のあたりへかけての並木公園は忽ち淫蕩の巷に化する。そして十二時頃になると、てんでに相手の男と連れ立つて、怪しい時間外のレストランや、曖昧な宿屋や、秘密な夜の茶屋などに姿を消すのであるが、性急な連中は直ぐ附近の薄暗い樹蔭で無雜作に用を濟ますのもある。我々の一行中には特に斯ういふ方面の實地視察を專門の目的に出掛けた連中もあつて、さういふ連中は『ロシヤの女は天性淫賣婦に出來てゐる』とか『何しろ五六人も眞ツ裸になつて踊つてゐる傍から氣に入つたものを一人々々選り取つて行くのだから……』とか、盛んにその活躍振を吹き立てたものだが、底を洗つて見れば斯うした遊園地の安物買ひに過ぎない。

ソウエート・ロシヤではビール、葡萄酒の販賣は自由に許されてゐるが、ウオーツカの販賣は國法で固く禁じられてゐる。若し犯す者があつたら、財産を沒收した上に五年以上の禁錮に處することになつてゐる。所がウオーツカはロシヤ人に取つては生命の糧である。これなしには生きてゐられない國民である。これさへ完全に禁止が出來たらソウエート萬歳であるが、さすがのポリシエウイキイも是だけは手におへないと見えて、今でもウオーツカの密賣所は各所にある。で、ウオーツカ通は豫てちやんとそれを嗅ぎつけてゐて、夜中ひそかに其所へ集まることになつてゐる。そのうちウオーツカの常連が出來て、それがまた階級によつて分れてゐる。車夫と露天商人とを華客としてゐる所もあれば、小さな投機商とツウエルスカヤ街の淫賣婦とで占有してゐる所もあり、または泥棒と贓品買占人とを常客としてゐる所もある。第二ツウエルスカヤ街には泥棒の巣窟と曖昧な宿屋との中を行つてるやうなウオーツカ密賣の居酒屋がある。或るニエープマン(成金)のお上さんが經營してゐるのである。レストラントに入

るだけの餘裕の無い連中は大抵此所で夜を明す。客は農場主を初め、泥棒、電車從業員、醉拂つた俳優、露天商人、探訪記者等で、ウオーツカの杯を手にしながらお互にはてしない話に夜の更くるも知らない有様である。

モスクヴア市中にビーヤホールとカフエーの多いのには驚く。殆んど一丁おきぐらゐに立つてゐる。それがまた何れも勞働者のお客で繁昌してゐる。オーケストラの音が晝夜絶えたことがない。試みに最初の室に入ると、若干のテーブルと椅子とを並べ、その一方に帳場があつて、此所にはビール シトロン、葡萄酒、ザクースカ（料理）などを供へて、何喰はぬ顏をしてゐる。それだけの事なら別に問題は無いのだが、一旦奥まつた事務室のやうな第二の室を覗くと、此處は光景一變、全くの別世界を現出してゐる。其所からは絶えず醉漢の歌と怪しい女の笑ひ聲とが聞えて來る。無論お客はビールだけでは滿足せず、『チト、ト、クレープチエ』（何かもつと強い奴といふ意味で、ウオーツカを指す）を要求してゐる。

カフエーの多數も水を割つた白いコーヒ（ウオーツカ）を飲ませる。無論初めてのお客には用心するが、一二度行つて慣れると、こちらから要求しなくとも、先方でちやん氣を利かして要領よく持つて來る。やがてお客がいゝ加減醉拂つて了ふと、顏を染め、異樣な帽子を被つた女が何所からとなく入つて來て、變な眼色をしながらジロ〳〵相手を探しまはる。そして誰でも妥協の成立つた男の傍に坐つて飲食する。斯ういふ場所は通常十二時には閉店する規則になつてゐるので、それからはお客の一部は溫なしく歸り、一部は相手の女と携へて、また夜の茶屋に宿換へする。

茶屋と言つても色のついた茶を飲むのではない。禁制の茶を啜るのだ。お客は大抵他のレストランがしまつてから、夜の十二時後にやつて來る。だから晝間行つては何の奇も無いが、夜はまるで變つた光景を呈する。ゴーリキイの「どん底」の一面を想ひ出させる。其所には何所にも行き所のないボロ〳〵の着物を着た無宿者と並んで派手な衣物を着飾つた紳士の一團も來てゐる。盛んにビールを啜りながら例の女を相手に巫山戲てゐる。時々誰かの手が卓の下の床の上から土瓶を取上げてはビールコップに注ぎ込む。これがビールの色に似てゐないのだから不思議である。間もなくこの一團が別室に姿を消すと、やがて明方近くになつて、何所からとなく賭博者の一團が舞ひ込んで來て、禁制の茶を要求しながら一しきり賭博の話で賑ふ。直ぐ眼の前に張り出したアルコールの禁令も、賭博の禁止令も眼に入らないかのやうに。

食パン

丹野てい子

私は小さい時分、食パンが大好きでした。世の中に西洋料理ほど御馳走はない。そして食パンは西洋料理でいへば御飯だと思つてゐたからでせう。食パンにジャムでもつければ非常な御馳走だと思つてゐました。ある時庭さきに黄色い蝶々のとんでゐるのを見て、私は父に黄色い蝶々がとんでゐるから、近い内にきつと雨が降るといひました。私の七八才の時分は、どういふわけか、子供たちはみんな、黄色い蝶々がとべば雨が降るのだと言つてゐました。父はそんなことはないと言ひました。私はどうしても雨が降るといつて、しまひには母にまで、「黄色い蝶々がとぶと雨が降るのですね。」と念を押しに行きました。母は、母の小さい時分にも、黄色い蝶を見ると雨が降ると言つたと、私に賛成しました。父は、そんな筈はない。では、賭をしよう、もし雨が降つたら何でも御馳走すると言ひました。私は早速、もし雨が降つたら、食パンとジャムを御馳走して下さいと言ひました。二三日すると雨が降つたので、父は苺ジャムと食麺麭を買つて來てくれました。私はそんな大した御馳走をやす〳〵と買つてくれたのがむしろ不思議でした。ことに晩の御飯になつて、父も母も私のパンなどには見向きもしずに、いつもの通り御飯を食べてゐるのが不思議でたまりませんでした。大人といふものは、こんな大御馳走を食べたがらないのかしらと思ひました。私は食パンをそれほど大したものだと思つてゐたのでした。

その當時は廿二三年も前のことですから、私の住んでゐた麴町へんにも空地がいつぱいありました。その空地の地ならしをする土方が、しよつ中七八人ぐらゐづつ私の家の門際で休んだりお辨當を使つたりしてゐました。あるお晝です。私はさん〳〵遊び廻つた揚句、お晝御飯を食べようと思つて、

家の方へ馳けて來ました。門のわきにはいつものやうに大ぜいの土方が、めい〱お重のやうな大きなお辨當箱を持つて一所にお辨當を食べてゐました。私は普段母から、土方や車夫は下品だから余り側に行つてはいけないと言ひ聞かされてゐましたので。その側をいそいで馳けて行かうとしました。けれども私は思はず足を停めました。そしてそこに立ち止つてしまひました。一かたまりになつてゐる人たちから離れて、一人の年とつた土方が、食パンのお辨當を食べてゐるのです。それは見るからに貧つぽく痩せて髮の毛も頰髭も白くぼそぼそとした貧乏くさい土方でした。その土方が食パンのお辨當を食べてゐるのです。何ていふ贅澤なことでせう。私は驚いて眼を見張つて老人の顏とお辨當を見比べてゐました。新聞紙に包んだのは少し汚らしいけれど、半斤丸ごと一人でその老人は食べてゐるのです。みゝが茶色に焦げたおいしさうなパン。私は見てゐる中に、羨しくなりました。私はぼんやりそこに立つたまんま、そのパンを握る手許と顏を見比べてゐました。おそらくかなり長い間私はそこにさうして立つてゐたのでせう、土方の顏にふと困つたやうな極りの惡さうな色が浮びました。その顏色を見ると、私は子供心にもそこに立つてゐるのゝ惡いのに氣がついて、自分の家へばた〱と馳けて歸りました。そして母を見るといきなり、

「お母さん〱、土方が食パンのお辨當を食べてゐてよ。」

と言ひました。

「さう、可愛さうにね。」

「どうして？ お母さん、」

私にはなぜ食麺麭を食べてゐるのが可愛さうなのか分りませんでした。そして母からその土方はお米を買ふことが出來ず仕方なしにパンを食べてゐるのだと聞かされますと、今まで羨しかつたのが急に可愛さうに思へて來ました。

「どんな人かい？」と母が聞きました。

「お爺さんよ。白髮が生えてゐるの。」

「氣の毒だねえ。」と母は本當にさう感じたやうに言ひました。

「そしてね、パンにバタもお砂糖も何もつけずにたゞ食べてゐるのよ。」と私は老人の可愛さうなことを更に說明するために言ひました。

「お茶でも飮みながら食べてゐるの。」

「いゝえ、お茶も何もないの。たゞ、パンばつかりよ。」

「まづいだらうね。可愛さうにお腹がすいてゐるのに。」

「家のお茶を持つて行つて上げませうか。」

「およし。そんなことをすると怒るから。」と母がとめました。

私は今になつても時々食パンとこの土方のことを思ひ出すのです。その時分からもう廿年余りもたちますから、その年寄だつてとうの昔死んでしまつたでせう。きつとあのまんま貧乏のし通しで死んだに違ひありません。三四年前の勞働者の景氣のいゝ絶頂まで生きてゐたならば、お米の御飯を鱈腹食べたり少しは面白い思ひも出來たでせうが、あの當時あの年では、どうせ慘めな活しをし通しで終つたにちがひありません　さう思ふと、妙に人の一生といふ樣なものまで考へられて來て淋しくなつて來ます。ほんたうに他愛もない話ですが。

萩子とアンナ

岡本かの子

萩子が外國へはたらきに行つた夫と別れてもう七年もたちました。夫は國を出がけに、心細がつてどうにかして引き留めやうとする萩子をなだめるためにいろいろな萩子のよろこぶ言葉をのこしました。「わしが成功すればお前は毎日自働車で物見遊山だぞ、待つてお ゐで、三年すれば屹度金貨を脊負つてかへつて來る。」が、夫は、萩子へ時折の仕送りはおろか三年たつても五年たつても一向かへつて參りません。その上夫が外國で身をもちくづして惡い仲間に這入つて居るといふやうな噂も聞えました。辛棒強い萩子も、さすがにいまはだまつて居られず、日頃からしたことのないうらみやらいさめやら、さては懇願をあつくこめた長い手紙を夫の許にさし出しました。夫からはめづらしく返事がまゐりました。あけて見ると「ダイヤの指輪一個、眞珠の首飾一連フランスちりめん五反、金子三百弗、自働車一臺送る。直ぐあとより予も歸國すべし。但しこれはみなウソなり。」とありました。このひとを馬鹿にしたやうな白々しい夫の返事を前に置いてしばらく萩子はあきれて居りました。が、やがて何事か案出したらしく、萩子はにこりと怜悧に笑つて筆を執りあげました。

「わが愛する夫よ、

わらわはいかにおん身の志をうれしとよみしか。たとへこ

はすべて僞にてもあれ、
世のよそ人のいかほどのまことにも增しわらわはわが愛するおん身の僞をよろこぶものなり。」

萩子はこの詩を封じこめる時、さすがにくちをしさの涙が眼ににじんで居りました。しかし面にはいかにも怜悧と熱意があふれて居りました。

半年たちました。突然、萩子の夫は外國から萩子の許にかへつて來ました。そして驚き果てた萩子の前へ「ダイヤの指輪一個、眞珠の首飾一連、フランスちりめん五反、金子二百弗、いや三百弗、五百弗、八百弗、いやいや千弗、一萬弗、……………自働車は何れあとから船で着きます。」と品々をならべ、その上まへより一層、健康さうな笑を見せました。容姿もさすが七年以上外國で仕上げて見替へるほどに立派にハイカラになりました。

「お前はわしの馬鹿々々しい手紙に對してよくあんな宜い詩を與れました。わしはあの詩を見てお前の誠意と怜悧をしみじみ感じた。そして今までの自分が恥かしく濟まなく思へて仕方がなくなつた。わしは發憤して直ぐにのらくら仲間から拔けすこしのもとでで事業を始めた。すると仕合せなことにはまたたくうちにそれが當つて、これこのとほりさ、ね、わしは、わしの僞をすつかり本當にして早速お前の許にかへつて來ました。」——(醒睡笑、妣心より飜案。)

パリー〇〇街のとあるアパートの六階の夜、消えかかつたストーブの火をつがふともせず、若いマダム、アンナは室の中央の小卓の上に顏を伏せて、折々すすり泣きの聲をもらして居ります。

「今晩は。」

「アンナさん。」

「さあ皆さんを連れて來ました、しつかりなさいよ。」

いちばんあとから室へ這入つて來てドアをなかから閉したのは向ひの室の中年の官吏の細君です。アンナのこの度の不幸を一番始めアンナの友達のうちで知つたのはこのしつかり者でとほつた細君です。すこしふるえ聲で「今晩は。」と云つたのは右隣の店員の後妻と、それからもひとりは眼が變に釣つては居ますが、ほかはすつかり柔和に出來て居る左隣の三十前後の婦人です、ぬいとりを內職にして居る或る工場付だつた技師の未亡人です。——アンナの背後の室には、アンナの今の不幸の全部にかかはるアンナの夫、アンナのあまり內

氣なのをどうも彈力性に乏しくてつまらぬ、今宵こそ離別するから。とつとと行けとアンナの何かの返事が少し覺束ないのを楯にとつてアンナを突き出したムシユ、ソレル君が氣むづかしい顏をしてどれも消えかかつたストーブの火をつがふともせず、苦り切つて居ります。

小官吏の細君。「出されるのも仕方がないが、せめて當分困らない樣にしてお貰ひなさいよ。それにはやつぱり、お金が一番いいぢやないか、ね。」

アンナは默つて首をふりました。

店員の後妻。「この寒空に新らしいショールの一枚もなくつてはね。」

アンナは默つて首をふりました。

技師の未亡人。「では靴下の半ダースぐらゐ…………」

「いいえ皆さん、私は夫といふ一番惜しいものを失すのですほかに何にも惜しいものや欲しく思ふものはありません。」

今こそアンナは、彼女が甞て一度も人に示したことのなかつた凜々しさで云ひました。

友達はみな驚いたり腹を立てたりでぶつぶつ云ひながら室の外へ出て行きました。その時アンナの背後につかつかと進み寄つたのはムシユ、ソレル君であります。

「アンナよ、お前の一番惜しいものを、私は取りあげることは出來ない。可愛相なことだつた、私はもう、お前の一番欲しいものを、いつまでも、死んでも取りあげやうとはしませんぞ。」――(醒睡笑。桃心より飜案)十二年臘月末。

食ひしんばう

上司小劍

一

から物騷な世の中になつては、食物の話でもしてゐるのが一番無事だ。いくら腐敗しても政治を食ふ人間は多いが、食

物の腐敗したのは、豚でもなければ、ちよツと鼻を摘まむ。清新といふことの最も歡迎されるのは食物だ。思想の清新は危險がられ、食物の清新は安全がられる。たいした相違と思ふ。

二

單に口腹の慾めの食物としてならば、私は支那料理が好きである。支那へ行つて本場のを味はつたことがないから、通がつたことは言へないけれど、地震前の横濱にあつた萬珍や聘珍あたりので、私の舌鼓は十分に打てた。會芳樓・中華第一樓、陶々亭、上海亭なんぞ、東京のは、だん／＼に日本化して、西洋料理との合ひの子のやうになつてゐたと、本場を知らぬ私にも感じられた。

三

支那料理の嫌ひな人は、必ず日本料理を稱揚する。しかし支那料理と日本料理とは比べるのが無理だ。支那料理は口で喰べるやうに出來てゐるし、日本料理は眼で喰べるやうに調へられる。支那料理は腹で喰べ、日本料理は頭で喰べるとも言へるであらうか。山海の珍味といふやうなことは、支那料理でないと當て篏らないし、淺酌低唱の氣持ちは日本料理にある。牛飲馬食とか、且つ飲み且つ食ふとかいふ言葉は、支那料理或は西洋料理を思はせるが、日本料理に對してさうしたあくどさは考へられない。さツぱりしたといふ感じが、日本料理の特色で、分析すれば七八分通り水分になるのが、日本料理の實質だ。日本の菓子が大部分砂糖の變形であるが如く、日本料理の大半は水の化け物であらう。さま／＼の形にして水を飲むやうなものだから、日本の酒客は肴を食はぬ。酒を飲んで水を飲めば、腹に水分が溜まりすぎるからであらう。しかし膳の上が淋しくても、酒はうまくないといふ。即ち眼で食ふ料理なんだ。

四

日本料理の粋は懐石にあるのであらう。盛る器具に藝術的の働きを要する。これは他の國の料理にないことであらう。たゞ清らかなもの、美しいものといふだけでは、濟まされな

いのが、日本料理の器具である。床の間の掛け物や花いけから、膳の上へ聯絡をとり、庭の泉石もまた膳の上の食味と交渉をもつてゐる。庭の泉石は、時候の自然と相通じ、若くは自然を縮めて、技巧的に象徴したものであるから、日本料理は即ち自然の風色を膳の上に載せたものと言はれる。秋は秋の、冬は冬の、春は春の、夏は夏の、時候に應じ、自然を描いたものが、庭と室と膳の上の器具と食味とに融け合つたものが日本料理で、一幅纖細な山水畫の如き藝術とも言へる。單に口腹の爲めのものでないばかりか、寧ろ口腹を第二位或は第三位において、膳の上に自然の姿を鑑賞しやうとするのが日本料理、就中茶道を中心とした懷石である。日本料理は空腹の時に食るべきものでなくて、滿腹の後に味はう筈のものである。

五

支那料理は日本料理と殆んど全く相反した地位におかれてゐる。單に食ふ爲めの料理としては、日本料理の遠く及ぶところでない。食はせよう食はせようと持ちかけるのが支那料理で、其の中にはもちろん日本料理のもつやうな淡泊さもあるけれど、濃厚と淡泊とを交互錯綜せしめて、人の食慾をそそるところはえらいものである。材料の上から、時季と自然との上に交渉はもつけれど、日本料理の如く、膳の上に自然を描いたものではない。從つて日本料理が四疊半式の纖細な周圍と調和し、淸素枯淡の閑寂に適してゐると異なり、支那料理は多人數を集めた玉樓の大饗宴にふさはしい。眞に食味の中に耽溺するといふ趣きは支那料理の特色で、こぼしたりよごしたりして食はなければほんたうの味ひは出ないのであらう。淸朝の盛時には三日三夜の大饗宴と言つたやうなことがあつて、四百種とか五百種とかの料理が出たさうな。食つては寢、起きては食ひして、晝夜を通じて食物に溺れるといふ大規模、食味の爲めには、國を滅し家を失ひ身を殺しても厭はぬといふ大抱負は、流石に大陸で、食物までが島國のこせ／＼したのとは違ふ。

山荘の美女

高須芳次郎

わづらはしい紅塵の巷を離れて、靜かな海邊の村荘へ來て大きな松林を前に、遥かに咽ぶ波の音や、松風の音づれを聞いて居ると、私の思ひは、時に現代の空氣から離れて、クラシックの世界にさまよふのである。私は近松や西鶴のロマンスを思ひ、光源氏をめぐる古錦襴のやうな戀愛悲史を思ふのである。

私は火桶を擁しながら、空想の翼を平安朝の時代に馳せた『源氏物語』のうちに住む美しい男女の俤が、そこに綵繪のやうに、廻燈籠のやうに、髣髴として現はれてくる。私はぢつとそれらの俤を心眼に見つめて居た。そのうちに、一段色濃く浮彫りにしたかのやうに二人の美女の姿が頻りに胸のうちを往來した。その一人は白百合のやうに氣高かつた、今一人は、黄菊のやうに美しい品位があつた。それは、久しく京を離れて宇治の山荘に育つた大姫と小姫とであつた。私は何となく、この二人の美女に深いなつかしみを感じた。

それは、平安京の女性が、爛れた戀、上すべりした戀、褪め易い戀、戯れのやうな戀に浮萍の如く身をまかせて居るうちに、大姫と小姫とは、どこまでも純一な戀、白熱の戀、眞劍な戀を求めてやまなかつたからである。椎の葉がさびしく風に鳴る山荘にこの二人を見出して喜んだのは、薫の君や匂の宮などの貴公子のみではなかつたであらう。

それにしても、私には、大姫、小姫を清く、美しく、氣高く、素直に育てあげた八の宮のことが、ゆかしく思はれてならない。八の宮は、當時の貴族的な伊達男、美男の代表者と云ひたい光源氏の弟である。兄が戀から戀へ、歡樂から更に歡樂へ押し移つて、恰度蜜蜂が花の香をあさつて歩くやうに浮かれきつて居るのにひきかえて八の宮はまるで聖者のやうな生活を續けた人である。

八の宮は中途、その愛妻に別れた悲みを身にしめて味つたからばかりでなく、元來、宮は花やかな、そしてともすると虹のやうに消えやすい生の幻影に迷ひ得ぬ性質の所有者であつた。魅惑の強い歡樂の奥に一種不安な影が動いて居るのを見逃せない人でもあつた。戀の合奏樂の後に沈んだ哀歌の響きが人の耳を脅かすであらうことを思はないで居られぬ人でもあつた。それで宮は、唯大慈大悲の佛の手にすがつてそこに生の安心を得ようと、日夕行ひ澄ました小さな聖者であつた。

かうした淋しい生のうちで、宮の心を慰めたのは、二人の愛孃が、年毎に健かに育つてゆくことであつた。宮は二人のために、後妻をも迎へないで、自分の理想通りに大姫、小姫の純な性格を形造ることにつとめたのである。そして宮は、その愛孃に音樂を敎へた、佛の慈悲を敎へた、また人生の幻影が蓮の葉の上に浮ぶ露の珠よりもはかないものであることを敎へた。

姫たちは、八の宮の感化を受けて、世の塵に染まないで、白い翼を持つ天使のやうな清い少女となつた。彼の女らの姿は、頽廢した山莊のうちに光りを放つた。二人共、美しかつたが、大姫は容姿よりも氣品の上ですぐれて居た。普通の少女にくらべると、ずつと落着いて、何となく、考へ深いところが、目立つて居た。小姫は氣品もあるが、その風姿が一段立ち優つた。そして鷹揚なところ、あど氣ない趣があつた。そして二人は、素直に八の宮に孝養をつくした。それらの生活を考へると、淸いが、いかにも淋しい。平和だが、その底に沈んだ色彩が見えた。それでも、大姫や小姫は、いつまでも、その心を掻きみだされることなしに、老いてゆく父と長く一緒に暮らしてゆかうとのみ思ひ續けて來たのである。松風村雨、そこに單調な平和が續いた。

けれども悲しい運命は、やがて彼の女らの平和を掻きみだしはじめた。それは八の宮が重い病に罹つて、未だ彼の女らの前途をはつきり見極めないうちに、落日のやうにこの世を去つてしまつたことであつた。宮の沈んだ顏には、明かに彼の女らが、自分の死後、どうしてゆくであらうかと心痛した色が浮んで居た。宮は彼に代るべき保護者として、光源氏の愛兒夕霧の友である柏木中納言の息、薫の君を選んだ。薫の君には、相當の位置があつた、財産もあつた、勢力もあつたそして若くて沈着で美しかつた。が、それでも、宮は尚ほ愛孃のことを思ひ惱んで「私はお前たち二人のことが、どうも

氣になつてならない。世の中には、いろいろの誘惑がある、陷穽がある。だから、私の死後、お前たちは成るべく、この宇治の山莊から離れないやうにしてほしい。それになやましい浮世の風に當つて、煩惱の夢に囚はれないやうに氣を付けてほしい。」と云ひ殘した。かうして宮は、佛の御名を唱へつゝ靜かに永久の眠りに入つた。

あとに山莊に殘つた二人は、只管父のことを思つた。そして薰の君の保護の下に立つた。この新しい生の展開の前に先づ起つたのは灰色の戀愛悲劇である。宇治に來た薰の君は、唯一目、大姫を見た最初から、もう大姫に戀したのである。薰の君が大姫を戀したのは、その容姿よりも、その氣品の上にあつた。自分と同じやうな沈鬱な一面があるところに自然共鳴したのである。それは悲しい戀の芽生えであつた。

薰の君の樣子は、大姫にもよくわかつた。が、大姫には、父の最後の一言が強く深く身に染み込んで居た。「成るべく、宇治の山莊から離れるな、浮世の子となつて、煩惱の風に吹かれるな。」と云ふ言葉が、大姫の耳許からどうしても離れなかつた。父がない後に彼の女は、何彼につけて淋しい、やる瀨ない、心細い思ひをした。時々、夢に父の姿を見ることとさへあつた。椎の葉が風に鳴る山莊の夜の眠りはつめたかつた時には、大姫も淡く戀心がきざして來ないのではなかつた。人なつかしい思ひが胸一杯にならぬでもなかつた。不圖思ひつめて、薰の君の白い手にその身をまかせようと吾知らず熱してくる時さへもあつた。「それにしてもこの浮世の風は：……」と考へると、そこに冒險の恐ろしさが先づ彼の女を脅かした。

歡樂の奧には、憂愁の影がある、戀の花陰には咀ひの荆棘がある。大姫には、それがどうしても忘れられなかつた。そして力めて、自分を抑へ付けて、薰の君に逢ふと、薰の君には、その樣子が餘りに冷やかに見えた。また餘りに無情に見えた。時に侵し難く見えた。大姫は、それについて何とか云ひたいと思ひながら、沈默勝ちに過ぎた。内には暖かい人を抱きつゝ――

「私は朽ちぬ戀を求める心から何處までも戀ざめの悲みを見たくない。私は矢張、いつその事童貞を固く守つてゆかう、一生、淸い孤獨で終らう。」

大姫は、かう決心した。それでも流石に彼の女は、薰の君の心を思ひやらずには居られなかつた。「せめて私の代りに妹の小姫を薰の君の妻として戴いたら、私の重苦しい心も急に輕くならう。」と不圖ある時氣付いた。

三個月の月日が過ぎた。

ある日、今まで堪えて來た溫和な燕の君が山莊を訪うていつもの樣子とちがつた稍激した色を見せた。その時、彼れは大姬に三年續けて來た烈しい戀の心をすつかり打開けた。

「私がこれほど强く、强く思ひつめて居るのに、貴女はまた餘りに冷やかである。」

と思ひ餘つて、苦しさうに告白した燕の君の面は熱して居た。大姬は憎くない人にさう云はれることが、身を切られるやうにつらかつた。大姬は、餘りに眞劍で、また純眞であつた爲めに、却て冷靜な醒めた女のやうに思はれたのである。

大姬は心に泣いた。

「私は貴君の御心を知らぬのではありませぬ。私は木石では御座いません。けれども私は父がその臨終に固く私に言ひ殘したことが御座いますので、それを眞面に守つてゆかうと思ふ餘り、冷やかに見えるやうになつたで御座いませう。それに私は今、親もなく、兄姉もなく、後見者もなく、孤獨ですから、結婚するには、ふさはしくありませぬ、殊に今盛り年の妹が未だお嫁入りしないで居りますから、私は兎も角、妹だけは早く誰かに差しあげて、あれに人並の暮しをさせたら存じます。私はいつまでも、埋れ木の儘で、孤獨の生活を續けたい心算で御座います。」

と大姬は、それとなく、妹を自分の代りて燕の君に嫁せしめて、その心の眞實を示さうとした。が、それは燕の君を怒らせるだけで彼れに少しも滿足を與へなかつた。燕の君は何一つ不足のない貴公子であるだけに、大姬を疑つて、その餘りに冷やか過ぎる樣子を怨んだ。

「嗚呼私の心が、あの愛する人にわからぬのであらうか。」

から思ふと、大姬はぢつと坐つて居ることさへ出來なかつた。と云つて、父の遺言に背き、自分の本眞に背いて、荒い浮世の風に當り、もまれ、ゆられて、最後に煩惱の子となり切つてしまふだけの强い心が、どうしても生れては來なかつた。すべてを抛つて、燕の君に自分を許さうか、燕の君に怨まれようとも、かねて志した淸い孤獨の道を只管に辿つてゆかうか。思ひつめ、思ひ返した末は、長い苦惱が、毒蛇のやうに大姬に纏ひ付いた。

大姬は到頭、病み付いた。

小姬は、姉の靑ざめた顏を見て、深く心を痛めた。いろいろ手をつくすが、大姬の病は日毎に重くなつた。彼の女の顏

には、はつきり死を求める心持が出て居た。最後の解決はもう出來た。大姫は淋しく微笑して、小姫の手を強く握つた儘佛の手にすがつて呼吸を引取つた。その報知を受けて、燕の君が夢中に山莊へ馳け付けて、灯を手に取りながら、ぢつと大姫の顏を見つめた時、大姫は生前と同じやうに氣高く、美しかつた。今にも唇を動かして、朗かな聲で話し出しさうに見えた。が、彼の女は永劫に歸らぬ。後に殘された燕の君の心は、どんなに重苦しかつたか。その夜、山莊に聞いた夜風の淋しさ！

　私はこれ以上、更に小姫の戀愛悲史を語るに忍びない。父の遺言に背いて、匂の宮と戀に落ちた小姫の幻滅時の悲み！私はそれを述べることを茲に思ひ留つた。夜はもう更けた。松籟、濤聲を耳にしながら、私は筆を措かう。

關西人の目と口

木村恒

一等席の客

　京都の文樂座へ案内されて一等席におさまつてゐると、夕方の六時頃、隣席のお客がアルミニユームの辨當箱を取り出して食事をしはじめた。ふと見る氣もなく覗くと、お菜は紅鮭の燒いたのである。私は異樣のものを發見したやうな心持に打たれた。――芝居の一等席のお客が、アルミニユームの辨當箱持參で、そのお菜は燒いた紅鮭！　とても關東では見られない圖だ――

　ところが彼方此方でむしや〳〵食事をはじめたのを見ると皆持參の辨當を開いてゐるので、それが何れも紅鮭程度のもので、ちつとも氣取つたのや御馳走らしいものはない。私は茶屋から辨當を取るのが恥かしい位だつた。

　其後からした場面を至る所で見る、そして始めて、關西人

が目と口とに嚴重な區別をつけてゐることを知つた。

芝居へ行くのは演劇を觀て樂しむのが第一の目的である。關西人はこの第一目的を最も經濟的に果さうと考へる。即ち目に重點を置いて考へる。そこで觀ると云ふ第一目的以外の範圍に屬する食ふと云ふことなどは出來るだけ儉約する。それがアルミニユームの辨當箱となり紅鮭の燒いたのともなるのである。かうすれば芝居見物の費用と云ふものは半減される。芝居茶屋の高い料理を食つて十圓かゝるところなら、關西人は、自分の持つていつた辨當で腹を滿たして、五圓で費用を濟ませ、そして二度見物する。これは一年に一度でもいいから見物するなら酒食を充分にして懷中にあるだけの金を使つて來ようとする關東人と全く異つた考へ方で、關東人が目と口とを常に一緒にして樂しまふとするのに對して、關西人は目と口との樂しみに嚴重な區別をつけてゐるのである。そして關西人は口よりも目の方へ非常に多くの樂しみを負擔させてゐる。

休み日に一家の者が辨當持參で野外散策をする習慣はこの目の樂しみの内の一番重きを置かれてゐるものだらう。私の友人は或人から『あなた金閣寺へ幾度行かれましたか。』と問はれ、一つ所へ度々行つて恥かしいやうな氣を感じたから、『もう三度行きました。尤も二年ばかりの間にです。』と答へると、其關西人は笑つて『私達は一年に少くも十度は行きますつせ。』と云つたので、私の友人が何をしにそんなに幾度も行くのかと問ひ返すと、關西人は、春夏秋冬の金閣寺を觀に行くのは勿論のこと、雨の日のそれ、雪の折のそれ、曇つた空の下の風情と云ふやうに、その折々の風趣を觀て樂しむから、十年に十度位は大抵の人が同じ場所へ行くとの說明だつた。その代り、かう云ふ散策も目の樂しみで、口の方は大抵の場合に持參の辨當で間に合せるので、十度に一度位しか料理屋で飯を食つて歸ることはない。そして氣輕に經濟に目の樂しみをたのしむのである。

粥の小學生

この目の樂しみを主として口の樂しみを從にするのが極端に進んで、それが習慣性となつて、關西人の日頃の食物は關東人に比べると隨分粗末なものである。今でも朝は大抵かゆである。

これについて面白い例がある。

或小學校で、先生が自分の受持の九十人ばかりの生徒に、『朝、おかゆの人は手をあげて』と命ずると、四十四人の生徒

が手をあげた、五十幾人の内で朝飯が粥でないのは僅かに六人しかゐない。そこで殘り六人の生徒に今度は、『朝、溫かい御飯を食べてくる人は手を擧げて。』と命ずると僅か二人だけが手をあげた。その二人――朝、溫かい飯を食べてくる生徒――の、一人は市會議長の息子で他の一人は關東人の子供だつた。

これは京都でのつい最近の例だが、商家などは大きくやつてゐる家ほど、この朝粥の習慣を嚴守してゐて、十人位の家族で米五合にいもを少し入れた粥である。味噌汁なども大抵の家でつくらない。そして午飯に溫かい飯を焚くので、商業地として昔から發達して來た關係上からの影響もあらうが、口の樂しみを非常に虐待してきた習慣である。

朝粥でない家は冷飯で、湯さへ沸かせばそれで朝の食事は濟んでしまふ。魚の切身でも、かうした口に儉約の土地でゐる爲め、關東の切身の半分も無い位に小さい。そして一尾の魚を買つて、刺身も取れば吸物も作り煮燒の切身も取ると云ふ習慣である。

これは無論人の精力に關係を及ぼしてくる。小學校で、種々の運動をさせると、關西人の子供は直ぐにへたばつてしまふ。氣力がつゞかない。關東人の子供と一緒にすると、どうしても置いてぼりになる。そこで小學校ではこれは大問題だと云ふので、昨今は頻りに『朝粥廢止、朝飯は關東流に溫い炊いた飯を食ふこと』を小學生徒の親達にすゝめてゐると云ふ騷ぎだが、なか〳〵朝粥は廢止されない。そして前に書いたやうな例が一般なのである。

京の着倒れと昔から云ふが、これも目の方の樂しみで、口の方とは全く關係がない。

そのくせ大阪などには街に非常に飲食店が多い　これは然し口に日頃極端な儉約を命じてゐる反動で、誰しも時には外へ出てうまいものを食つてみたくなる。そこをつけ込んで、また人口の增加につれて、飲食店も增加して來てゐるのらしい。そして時折料理屋で食ふ時はなか〳〵やかましい批評をするので、自然料理法は發達して來たのである。

來て二ケ月ばかり、私の目に映つた關西人の目と口とが以上の如きものである。



阿部次郎氏の土産話

阿部次郎氏が歐羅巴の旅に出られたのは一昨年の四月である。現代の日本に於て、思想の深刻さと人格の玲瓏さを兼ねられた人と云へば先づ阿部氏を推すことを躊躇すまい。氏を知る程の人は悉く氏を敬愛せずにはおかれまい。昨年の十月下旬、歸朝された阿部氏を迎へた人々は、氏の思索と觀照の世界が一層深刻な光彩を添へたであらうことを樂しみながら喜び迎へたのである。さる日、女子大學の文藝研究會で、阿部氏の歡迎會を催した。その時渡歐前そのまゝの質朴な風采の阿部氏が、お茶のあとのくつろいだお氣持で、みんなにせがまれながらヨーロッパの土産話を二時間餘もなすつた。自分は今度の旅で別に變つてきたところもないが、強いて云へば少し圓々しくなつた位であらうとおつしやつて圓々しくなつた譯をお話になつたが、とりとめぬ雜談の中にも氏の觀照と思索とは、自ら素朴な玲瓏さに輝く。氏の物の見方考へ方の中には、今の日本の女性の心にも是非貰はねばならないものが澤山あると思つた。よつて其の日のお話の中から本誌の讀者に紹介することを許して貰つてその大半を左に記す。（一記者）

私はこれから一人の日本人が歐羅巴に行つてどんな取扱ひを受けたかといふことを中心に話たいと思ふが、それでもつて歐州人が日本人に對する態度の凡てを推すことが出來ない。それには澤山の人の經驗を含まねばならないが、こゝでは私の經驗と感想の中から拾ひ出して話してみる。

最初私の心に鮮かな印象として殘つた思ひ出はコロン

ボにある。船が港へ着かずに小蒸氣でコロンボの街に出たが、その郵船の艀の中に僧衣を著た印度人の僧さんが乘込んだ。僧さんは一寸樂ないい席に腰をかけた。すると殖民地ずれのした惡こすい顏のイギリス人(一體に殖民地にゐる英國人は惡賢い)は、「ブラック」は其處へ乘つちやいけない。」と言つてとう〳〵立たせてしまつた。私は敗けて立上る印度の僧さんを見て餘程何か言つてやらうかと思つたが、其儘見遁したことをあとになるほど殘念に思つた。歸朝の途次もう一度コロンボへ寄つた時、又かういふことがあつたら呼んできて自分の側に席をとつてやらうと思つたが、その時は生憎ゐなかつた。それが東洋人が受けてゐる取扱ひを見た最初の印象である。

船はスエズからポートサイドに着いた。そこには日本人專門のサーラーといふ案内人がゐて、我々の一行を迎へにきた。埃及ではアラビヤ人も中央アフリカから來た土人達も我々に好意を持つてゐて丁寧に取扱つてくれた。カイロの美術館で見た印象が面白かつたので、正月にまた行つてみたが、前のサーラーがその時も十日ばかり附きりだつた。

「イギリス人やアフリカ人は鼻がこんなになつてゐて、こすくつて嫌だから私は日本人專門になつてゐる」と言つてゐた。「用事がある時に呼ぶから他の日には來なくていい。」と言つてゐたのに始終一緒に來た。それは金離れが割によくて、面倒なことを言はぬから日本人に附くので、慾と深く結合した親みである。かういふ人達を一緒に仕事をする友達として見るにはなか〳〵間がある。

歸りにアメリカ廻りが面倒になつて再び印度洋を通つた。一つは歐羅巴を見た眼でもう一度東洋を見たいと思つたからだ。港々に船が着くと土人が物を賣りに來たり、海を泳いで船の周圍に鵜のやうに集つてきて船から金を投げるとそれを競つて拾つたりする。金を貰ふことに恐ろしく熱心で、十錢や、二十錢を貰ふために、船が出る間際になつても去らないのである。見てゐると情ない氣持がする。あれ程の熱心があるなら、何故もつと大きなところへ目をつけて歐羅巴人に馬鹿にされないやうな仕事をしないのか、欲の深いのは歐羅巴人も同じだが、印度人や支那人は、一錢二錢に目をつけて、大きな利益を自分で作らうとはしない、かなり情ない感じが多かつた。

下等な無智な人間が、吾々のすぐ近くで下等な狡猾な人間から虐げられながら自分を卑くしてゐることを我々は考へなければならぬ。

さういふ人を今少し人間らしくするために吾々にも義務があると考へたい。一體に日本を離れてみると、日本を全體として考へる氣持が、日本の中にゐる時より痛切に心に響いてくる。先に滿洲に旅した時にも思つたが、今度の一年半の旅では今一層それについて考へた。日本を如何にすればよいかと云ふことが、日本にゐる時よりももつと重大な問題として考へられる。日本を如何にすればよいか――これは歐羅巴へ行つて貰つてきた大きな問題だが今なほこの問題は解きかねてゐる。

ポートサイドを出てマルセイユに着いた時心強く感じたことは、フランス人で街を歩いてゐる人間の中には鼻の下に髭をはやしてゐる小母さんだの、下等な人間を澤山見かけたことで、下等な人間の多いのは日本のみではない、外國にもゐる。だから我々の傍に下等な馬鹿な人間が多いからと云つて、それをヨーロッパ人に對して特別氣おくれする必要はない、それを恥づるのは天道様に恥ぢるので、ヨーロッパ人に恥づる必要はないと考へたことである。尤もかういふ「心强さ」を感ずるのはあまり上等なことではないのだが、兎に角實際さういふ氣がした。

マルセーユに一泊してリヨンに行き、翌朝パリに着いた。

丁度巴里にゐる友人にオペラを見に行かうと言はれて出かけて行つたが、そのオペラの歸りに日本人として特別の取扱ひを受けたのだらうと思はれる、一つの事件があつた。十二時頃、友とオペラを出て前の廣場にゐたら誰か私の肩を叩く者がある。巴里には友達が澤山ゐるから「誰だらう」と思つて振返ると四邊には誰もゐない、唯向ふの方に一人の女が笑ひながらふりかへつてゐる、あとで考へて見ると、それはどうも日本人として叩かれたのではなからうかと思はれた。宛もカイロで案内人のサーラーが日本人を歡迎すると同じ意味で、彼女達にも評判がいいのかも知れないと思つた。さういふ女を獨逸では街の女(娘)と言ふが、日本では籠の鳥と云ふ。さういへば彼女達は夜の蝶とでも云ふべきものだらう。今のヨーロッパの大きな町にはその夜の蝶が澤山彷徨してゐる。日本に歸つてきてみると、震災後この問題が非常

に乏しくなつてゐるが、僅かな金で人間を籠の鳥にしておくことの廢止には私も贊成だが、それを放つと夜の鳥になることの危險も思はねばならぬ。籠の鳥が夜の鳥になるのも、吾々人間が見逃しておけないことである。

日本の現在は少くとも今のヨーロッパよりは風俗がいい。この際夜の鳥が巷に彷徨するとしたらそれは恐るべきことで、日本を歐羅巴にする危險がある。さういふ點で今の日本人としての我々は天に耻ぢても、ヨーロッパに耻づることがないのである。で貴女方は籠の鳥を放つ運動をすると共に、夜の鳥の始末も考へて貰ひたい。

巴里には二週間ゐて、その間ルーブルの美術館に通ひ、それから伯林に行つた。伯林は戰爭前には榮華を極めたところであつたが、今は急轉直下して貧窮の底に陷ちてゐる。殊に女は戰前の習慣になれて贅澤を愛してゐる。贅澤をしたい人が贅澤の出來ない境涯に置かれたらどうなるか——その結果は想像するに難くない。で伯林が嫌になり、落着いて本を讀みたいと思つてハイデルベルヒといふ田舍へ隱れるやうな氣持で遁れて行つた。松井須磨子の「思ひ出」といふ芝居で貴女方も知つてゐられるだらう。森の城よりは少し高いところに、私の下宿をした家があつたが、その家は町の舊家で金持でもあり、いい人達であつたから此處にゐた六ケ月間は非常に氣持よく暮した。獨逸人の生活にも親しみ、又一方に日本が獨逸の有識者間に、どんな風に思はれてゐるかも知ることが出來た。

宿の細君は私が行く前から日本贔負で小泉八雲の飜譯を讀んでゐたが、私がゐる間に殘りの二三冊も讀んでしまひ、歸る頃には殆ど日本氣狂ひのやうになつてゐた。初めて行つた時の土産に歌麿の繪をやつたので、日本の女が酷く好きになつて逢ひたがつてゐた。或日H君の夫婦が巴里から瑞西へ行く途中に寄つたのでH夫人を紹介したら、歸つてから「あの奧さんのはにかんだ樣子と優美な樣子は何とも言へない。フラウーHの眼は光つてゐる。」なぞと言つてゐた。

一體に獨逸人は非常に善良でロマンテックなところがあるから好きになると馬鹿に好きになる。併しハイデルベルヒに六ケ月の滯在中獨逸人と日本人の間には修養や趣味に於て非常な相異のあることが分つてきた。私の友達夫婦が訪ねてきたあとでよく細君は「ドイツ人ならあ

あいふきれいな女の人が來たら若い男などは爭つて外套を着せてあげるのに」と言つて貴方はなぜそれをしないのかと言つた。日本人はあんまりおしつけがましいやうでそれをしないのだといつたが、この相異はたゞ單に風俗や習慣といふのみではなく、その根本を考へたらかなり深いところにまで行くと思ふ。その一つを擧げると、一體に西洋人は、言葉以外の方法で互の意志なり感情なりをあらはすのに幼稚である。言ひかへると沈默の意味を解しあふことが幼稚である。東洋では微笑や、內輪で物を言つて感情をおさるへところに、お互の心持の細かさがあるが、歐羅巴人は最大級の言葉を使ふことが好きである。例へば獨逸ではコロサール、英吉利ではワンダーフルとか佛蘭西ではトレビヤンとか、言ふ最大級の言葉を何でもないことに使ふが、私の趣味から言へば品の惡いことだと思ふ。日本人は隨分感心した時でも「かなりいい」といふが、歐羅巴人のやうな大袈裟なものいゝやうは私の趣味には合はぬ。我々はヨーロッパ人の眞似をしないで、我々の先祖から傳つた氣品の高いカルチュアを持ちつゞけてゆく必要がある。

アメリカ人が女を大切にするのはどんな心持であるか

それは見ないから知らぬが、歐羅巴人は一體に女を非常に大切にしてゐるやうに見えるが、一つは習慣だから大切にするといふやうな內容をかいた行爲と、又もつと惡い意味で、男の狡いところから女の機嫌をとつて大切に見せかけるところが多分にあると思はれた。だから內面的に言つて必ずしも日本の男女關係が惡いとも劣つてゐるとも言へない。私がさう言つたら下宿の細君も「自分もさう思ふ」と言つてゐた。我々は日本の習慣を其儘いいとは言はないが、表を綺麗に見せかけて、內實を隱すことの多い今のヨーロッパ人に比べてひけを取ることはあるまいと考へる。例へば西洋の女には我々のやうに結婚してから一年も二年も一人で旅行をすることなどは到底理解されないことである。それは腹の底から夫を信ずる心が多數の西洋婦人にかけてゐるからである。それは亦信じられないところが多いからだと思ふ。

若しアメリカ邊の奧さんが日本の演壇に立つて、日本の風俗がよくないから西洋の風俗を取りいれるやうに言つたとしたら「それは神樣に代つて言ふのならいいが——」と今のあなた方は言へると思ふ。日本の女の辛抱強さと、男を信ずることは西洋婦人の及ばないところであ

る。

話はもとに歸つて、小泉八雲氏のものはドイツでは可成讀まれてゐてそれによつて日本の觀念が出來上つてゐる。藝術としては八雲氏とマダムバッターフライのものが日本の觀念をつくつてゐる。ドイツではたま〳〵戰爭後、日本に捕虜になつて歸つた人が日本を紹介してゐるが、その影響は極めてかすかである。今一つは岡倉覺三氏の「東方の理想」と「茶」とが一般に讀まれてゐる。かうして西洋人に日本を紹介する人として有名になつてゐる人から考へてみても、今の西洋人の頭にある日本は今の日本ではないことを想像出來ると思ふ。今の日本から言へば底の方に沈んで表面に浮んでこない昔のお伽噺の日本が描かれてゐるのである。始終陽の光が照つてゐて、櫻の花が咲いて、女は絹の着物を着てゐる國だとしか想つてゐない。さうして彼等は日本が歐米の影響を受けてその特色を失ふことを惜むといふ。しかし私は將來の日本をつくる一部分の責任を果したいと思つてゐるから、お伽噺の日本を保存することを第一と考へてはゐられないと言つたが、これは兩方自說を執つて物別れになつてしまつた。

私の考へによると、日本は今最後の峠を越えんとしてゐる。今までは支那や印度の文明を受けいれ、明治以後は西洋の文明を受けいれて世界的の文明を作り出さうとする時期にある。この峠を上り越したなら西洋に效へるところのものがあらうと話たがその意味はなか〳〵聞かれなかつた。

今一つ日本の物で有名になつてゐるのは藝者と着物である。彼女達はよく日本の着物のやうな感じのする幅の狹いスカートを着けてゐる。又リボンの幅の廣いやうなもので胴を卷いてゐる。胸もゆるく裁つてゐるなど日本の風俗が大分影響してゐる。併し私は西洋の今の女の衣物を好まない。日本で拔衣紋と言つて白粉をこつてり塗つて衿をぬくのは玄人のすることだが、西洋の女の着物はそれよりももつと酷くて、はりきつた肥つた胸を水落のところまで露出してゐる。手をあげると脇下がすつかりあらはれる恰好など今の西洋の女の風俗は面白くない傾向である。西洋の女は肉體を以てコケツトリーをしてゐるのではなからうかとも疑はれる。肉體にぴつたりす

るやうに狹く仕立れば姿はスラリとするが、大股で歩く時などは肉體がその儘着物の線になつて卑しい。歐羅巴にゐるうちに新聞で見ると、日本でも衿をあけて袖を短くすることが流行してゐるといふことだが、殊に日本の女のやうに痩せた人は、體をかくせばかくす程、精神的な美しさが出てきていいと思ふ。日本の着物が非常に有名になつてゐることは到る處で實感した。

伊太利人は泥棒であるやうに聞いてゐたが、私は旅の後半を殆ど一人で歩いてゐたが、泥棒らしい者には一人もであはなかつた。私の見た伊太利人は投げやりなやうな無遠慮なところがあるが、さつぱりした國民である。我々を見かけると直ぐ「あれは日本人か支那人か」と言つてきく。日本人の中にはそれで氣を惡くする人があつて、「それぢあ君は伊太利人か亞弗利加人か」と言ひ返してやつたといふ人もあるが、惡氣でなしに彼等には實際のところ見分がつかないのである。

支那は古いだけに伊太利の下層には深くしみこんでゐて、教育の無い人は日本人を見るといきなり支那人だと思ふ。少し教育のある人は支那人か日本人かを聞く。いきなり日本人だと見て話しかける人は餘程教育のある人である。吾々が行くと、殊に日本の女の人でも行かうものなら歩けない程我々の周圍に集る物見高さは、何も惡意を持つてゐるからではなくて物珍らしいからである。

一ケ月半程ローマに滯在してから、聖フランシスの生れたアッシージに行つたが、そこのホテルの主人は餘程日本贔負だつたと見えて、滿員だつたのにいい部屋を都合してくれた。夕陽の沈む頃で山の上からウンブリアの原を染める夕陽を見渡すことができた。

サングミアーノの寺にはサンタキヤーラの死んだ部屋などがある。その寺の僧は我々が行くと肩に手をかけんばかりに親しく近づいてきて、「此間日本の天子樣の兄弟が來て、そこの崖の上をかう廻つて、かう往つた――」と、指で輪をかきながら熱心に告げようとするのであつたが伊太利語が出來ないので私にはそれ位しか解らなかつた。皇太子殿下でもおいでになつた時のことを言ふのだらうと思つてゐたら、翌日サンフランシスコの寺で偶然日本の畫家に會つて北白川宮の御遭難のことを知つて、

はじめて昨日の僧侶がそのことを教へてくれたことの意味が知れて感謝した。

アツシージから馬車でベルジュアに行く。丁度ゲーテの通つた道を逆に過ぎたことになる。それからフローレンスに行つて一ケ月程滞在した。ダンテがビアトリチェを見初めたと言ひ傳へられてゐるところが直ぐ近くにあるが、そこでも赤宿の女中頭から「日本の女は絹の着物を着るでせう。」と聞かれた。

フローレンスから二時間ばかりシエーナといふ町に着く。シエーナは文藝復興の起りで有名である上に、街も面白く、風景も美しい。そこの廣場でパー、ジャツボーネといふ酒場を見出した時はこんな山の中にと妙な氣持になつた。

フローレンスを立つてラエンナに行つたが、そこにはダンテの墓がある。墓の番人が軍人であつて、日本人を非常に強いと思つてゐると見えて私が行くと「勇敢な日本人」と言つた。

（それから氏がワグナーハウスを訪ねられた話、リツプスの家族の話、ワイマールでゲーテやシラーの遺跡をたづねられ、ニイチエの妹や遺族とお茶の會を共にせられたお話など、どれもこれも紹介したいものばかりだが、それらは省略して最後に氏が巴里で、日本の地震の報導を受けられた時のお話を加へたい。）

私が地震の報導を受けた時は丁度巴里にゐたが、それを聞いた時に外國にゐる日本人としてどんな氣持がしたかと言ふに、先だつものはやはり心配であつた。心配と言つても先づ自分の家族のことが氣になるが、それは別にして、電報を見ると政府や當局のやることがかなりテキパキしてゐて氣持がよかつた。非常な打擊に遇つても恢復しうる力があると考へられたことは、あの際離れてゐた者から思ふと感謝していゝことだと思ふ。今一つは歐羅巴人には日本の地理に對する知識がまるでないことで、沼津がナマズと譯されてゐたり、東京の死者三百萬人と傳へられたりした。日本の不幸を報ずる各國の新聞の調子によつて腹の底から我々に同情を持つてゐるか否かが強く響いてきた。その一々について言へば、フランス新聞は大體から言つて心から同情してゐる。フランス

は政治上から日本の好意を求めることが多く、利害關係の衝突が少いからかも知れないが、同情を手段で現す力はともかくとして心持は純粹であつた。「ニウヨーク・ヘラルド」や「シカゴ・トリビユーン」の大陸版を見ると、「これによつて日本は少くとも一時代後れるであらう」といふのを大見出しに、日本のこの不幸に對して最初に助けに立つたのはアメリカであるといふことを自慢さうに記してあつた。

私はこれを讀みながらアメリカの一部には何とはなしに日本の不幸を腹の底で喜んでゐるやうな氣がした。といふのはアメリカが日本を助けたのは嘘だといふのではない。個人個人の氣持には勿論純粹なものがあることは疑へないが、この事實を報道する新聞の一部には恐い者が一つなくなつたといふ安心に似た感情があつたことも記憶して置かねばならぬ。イギリスの新聞――殊にタイムスなどは流石に落着いた書振をしてゐて、中にはある女學校の先生が「私の好きな日本人は一體どうしたらう」といふ見出しで次の樣な追憶の一節などが書いてあつた。

川上夫人が私の家にゐた時に日本の大風の話をしてきかせた。それによると子供は皆自分達の學校の包みをかゝへて來てお母さんの膝のまはりに集るといふことだが、その自分の好きな日本人はどうしたのだらう。

といふやうな私のない同情なども書かれてゐた。併し「デーリー、ミラー」といふ寫眞新聞は、僅か五分間のうちに、世界の歴史が流れをかへて今まで一流だつた國が第二流第三流になり下つたとも書いてあるのを見た。彼等の中には日本の勢力が幾分か殺がれたことをやれやれと思つた氣持もあつたらうと思ふ。それで吾々の災難が純粹な氣持で同情されたとのみ思ふのは人がよすぎる。

一體に言つて今度の旅行中、私が歐羅巴で東洋の人、日本の人として受けた待遇は惡くはなかつた。これが二三十年前だつたらこんな取扱ひを受けられなかつたらうと日本がこれまでに進んできたことを感謝した。

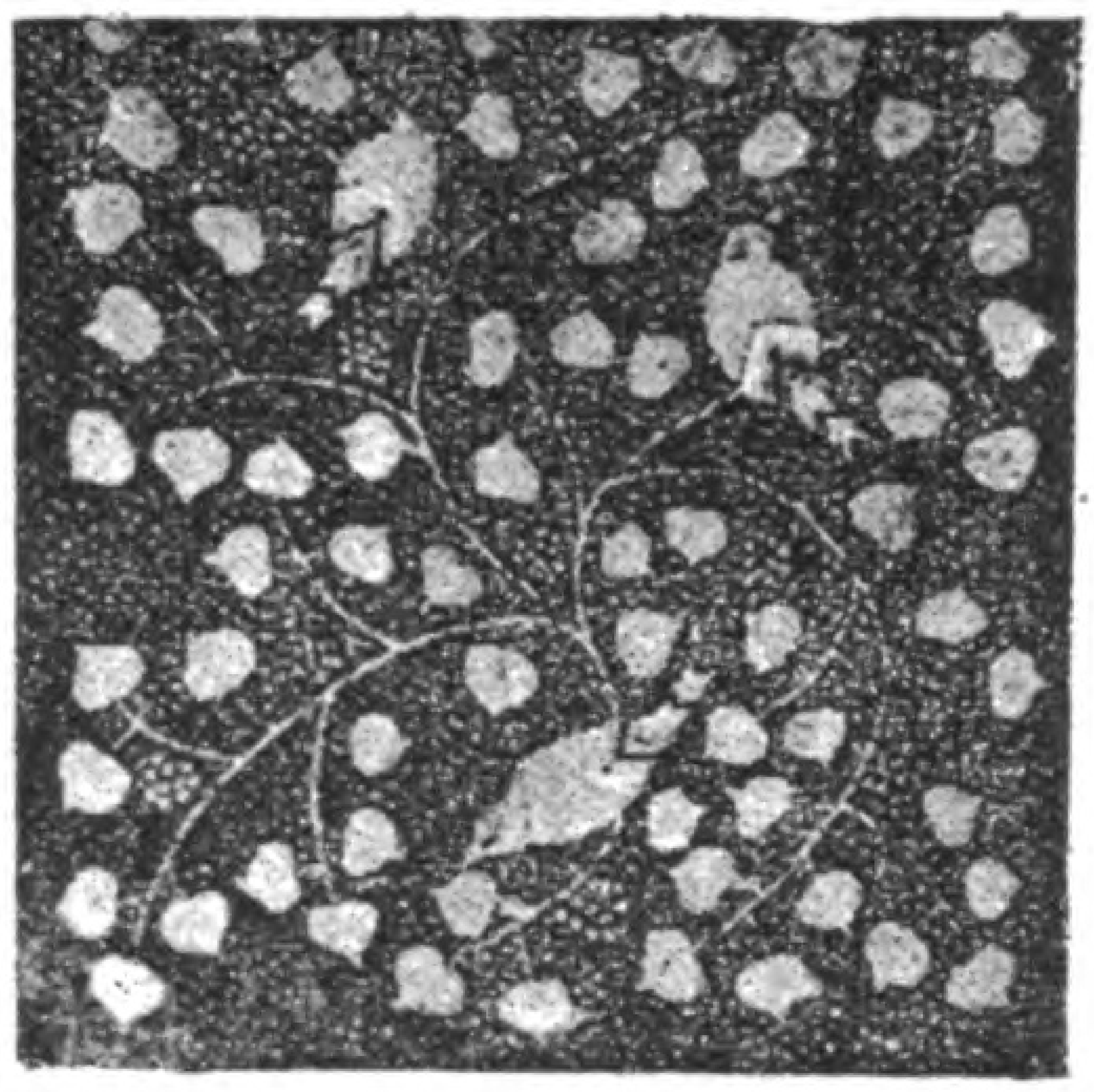
併し私が見た今の歐羅巴の國と國とは自分の國を守るため、又は自國をたてて他國を排する氣持が熾で、お互にたてあつて行かうとするところは殆どない。だから現今の歐羅巴は國家主義になつてゐるといふ人があればそれは事實に當つてゐるといはなければならぬが、それだからといつて日本も亦歐羅巴流の國家主義を奉じなければならぬといふ理由はない。今の歐羅巴は各國ともさういふ排他的な氣持で經濟的に道德的に共倒れをしようと

してゐる。この歐羅巴人の愚を繰返さぬやうにするのが吾々の用心である。たゞ吾々は吾々の主義をかへずに吾々の立つてゐる現實を明かに見ぬいて、この國家的利己主義の眞中にゐて吾々の世界協同主義の實現を求めて行く道を見付けなければならないのである。さう考へると吾々は一方この日本を外から侵されないやう内を充實してゆくことを十分に考へねばならない。又一方には新しい文化を他國に送り出すことを考へねばならぬ。しかし現在の世界の如くナショナリズムでもつて醜くこせり合つてゐる中で、吾々の守りを捨てゝまで一足飛びに世界主義に躍りこむことは出來ないことである。世界に對する義務と共同思想とを持ちながら、自分の國のことを考へねばならない。吾々は先づ日本の力をもつと強くしたい。其上で日本が東洋並びに世界に對する義務を果したい。さうするには一體今の日本はどうしたらいゝか——この問題を私も考へるが貴方もよく考へて貰ひたい。

私は今度の旅によつて、今までのやうに日本人として西洋人に對して臆する氣持がなくなつてきた。はじめに私が圖々しくなつて歸つたといつたのもその意味である。もう一つは今の世界の潮流の中で一體日本はどうしたらいゝか、自分をどうしたらいいかといふ問題を大きい荷物として背負つて歸つて來た。

神本意の思想と人間中心の思想

文藝復興期と（十五世紀）中世紀の思想の相異は、神を本位にする思想と人間を中心にする思想の違ひである。中世紀の宗教は最も人間離れのしたものであつたが、ギリシャの宗教は最も人間的であつた。神々は酒を樂しみ、女神は美貌を誇つた。かやうに人間本位の宗教と神本位の宗教に對して、僧侶が神を方便にすることを卑しみ、人間の思想や、力でもつて宇宙の眞理を追究し、その眞理に歸服しようとしたのが文藝の復興である。中世時代のキリスト教は、現世と來世を區別して神と人間の世界は全然異つてゐて、人間の中には神らしいものは宿つてをらぬと考へてゐた。恰もその頃ダンテはその「神曲」によつて、中世文學の反逆者だと云はれた。それは戀人ビアトリチエの中に神の心は宿ると書いたからである。ダンテの如きは文藝復興時代の思想が人本の中に眞に求めるものを探及しようとした代表者であらう。



繪畫は斯く見る

黒田重太郎

繪畫の見方と云ふことを述べるには、先づ繪畫とは如何なるものかと云ふことを説明せねばなりません。繪畫とは三つの延長——高さ、廣さ、そして奥行——を有つた世界、即ち立體的な自然を、二つの延長——高さ、廣さ——を有つた世界、即ち平面的な作品に縮約するものであります。そしてこの縮約する手段を指して表現と云ひます。これは日本畫洋畫を通じて、變らない條件であります。

石を以て壁に描いた愛人のプロフィル

或る美學者の説に依りますと、藝術は具體にはじまつて抽象に終るものだと云ひます。別な説明を用ゐますと、先づ自然物の模倣から始まつて、その再現を經、創作に到達してはじめて其本來の使命を達することが出來るのであります。昔、春の和やかな日射しを浴びて若い戀人同仕が、その切な心を語りあつてゐた時、壁にうつる女の美しい横顔を、男が石を拾つて印づけたのが素描と云ふものゝはじまりだと、西洋の讀本で讀んだ事がありますが、眞僞の程は保證しかねるとして、藝術と云ふものゝ始原を、可成り無邪氣に説明した話でないかと思ひます。人間の心に最初働きかけるものは所有の本能であります。そして此所有の本能に續いて保存と云ふ欲望が起ります。愛人の姿を壁に刻みつけた若い男の心は知るよしもありませんが、物皆な移り變つて暫くも同じ姿を止めない自然から、何か恒久的なものを獲得したいと云ふ心が藝術の始原となつたのではないかと思ひます。そして茲でその手段として用ゐられたのが模倣と云ふ事でありませう。初期の、智的能力の發達の極く最初の階段を踏むでゐた人達は、

この模倣と云ふことさへも、僅かに對象となつたものの形を辨別し得る位の範圍で滿足してゐました。併し、追々智的能力が發達して來るに連れて、模倣と云ふことも完備の域に達しました。この時、人々の心には何か不滿足なものを發見したに違ひありません。即ち模倣が完備する程、外形が整つて内容が空虚になるのであります。こゝで模倣は一轉して再現と云ふ手段を講ずる様になつたのであります。人々は其注意を外形よりも内面に向けるやうになり、外形はそれ程整つてゐなくても、内面に充實した生命を掴み得ればいゝと云ふ事に氣がついたのです。併し再現は模倣を轉化した手段に過ぎないのでありまして、いまだ對象の外面的なあらはれから、全然制約を受けないまでには參りません。こゝで表現手段は再轉して創作となつたのであります。作家は今や其感激の全部を發露せしめるために、對象の具體的な説明を棄てゝ、抽象的な形や色彩の律動を以てするやうになつたのであります。

繪畫と彫刻の表現に於ける三ッの形成

繪畫は彫刻と共に此表現手段の一部として扱ばれたものであります。彫刻は『空間に於ける一つの觸知し可き物體』として、即ち實際的に立體としての表現手段を有つてゐるに對して、繪畫は前に云つた如く實際的には平面としての表現手段を有つてゐるのであります。この手段を構成す可き要素として、形、線條、色彩、明暗があります。

いま繪畫の各部門に亙つて、これ等の要素が如何に働いてゐるかを考へて見ますと、素描（木炭畫、鉛筆畫等の洋風畫、墨畫等の邦式畫）には形、線條、明暗が重要な働きをなすのであり、彩畫（日本畫洋畫を通じて）には、色彩が上掲の諸要素に君臨的な働きをするのであります そして作家が以上の各要素の均衡若しくは律動の孰れかにその主要點を置く事で、作風乃至様式が變化するのであります。

混血狀態の邦畫と殖民地的の洋畫

日本畫に北宗、南宗、狩野、四條、倭繪、浮世繪等の諸派があり、洋畫に古典、浪漫、自然、寫實、印象、後期印象、フォーヴ、立體、未來、表現等の諸派があります。いまその一々を説く事は餘り煩瑣に亙りますから省略しますが、私はすべての藝術表現を通じて、大別して三つのあらはれがあると思ひます。私は假りにそれ等に考案的形成(configuration conceptive)、誇張的形成 (configuration exagerative)、豫測

的形成（configration preconceptive）の名を與へてゐます。第一の考案的形成と云ふのは、作家が自然から得た感興を一つの表現上の法則に矩つてあらはすのであります。アングルの作品であるとか、または近く決定的な價値を認められる樣になつたピカソ以下の立體派畫家の最もよき作品はこの例にあてはまります。日本でも推古期の佛像や、法隆寺の壁畫なぞにその例を見出すことが出來ます。茲に貴ばれるのは線條や色彩や乃至明暗、形などの律動的な構成でありまして、常に一つの均衡を有つてあらはされてゐます。第二の誇張的形成と云ふのは、作家が其感動を最も自由に發表するために、すべての法則の羈絆を脱して表現しやうと云ふのであります。ドラクロアのある作品、ヴン・ゴオグのもの、又はフォヴヰズム、表現派のある作家のものはこの好例でありませう。日本でも鎌倉期の彫刻繪畫には間々同じ趣きのものを見受けます。茲に貴ばれるのは色彩、線條、明暗等の奔放な律動でありまして、常に一つの破衡的な表現を有つてゐます。前者の藝術に對する時、私達は何か靜穏な、恰も『靈魂の隠れ家』とも形容したいやうな、落ちついた、しみじみとした心地を感得するのでありますが、後者のそれに對する時、それはまざまざと作意の不安な、異常な精神狀態をあらはし、從つて私達の神經も知らず識らずの裡に緊張するのであります。前者は『生の法則』を、後者は『生の表現』を志すものでありまして、共に眞の表現に到達しやうとするものゝ、一つを選ばねばならないものであり、その孰れを是とし、非とする事は出來ないのであります。第三の豫測的形成は、豫め表現手段を定めて置いて、後に自然に對するものであります。これは藝術史上頽廢期の作家や、他の模倣を專一とする作家、又は外形の整備を主とする作家のものに見られる所でありまして、藝術としては最も劣等な階段に屬するものであります。私は日本畫洋畫を通じて、此範疇に屬するものを、その作風樣式の新舊に區別なくアカデミズムとして排斥します。

畫題にとらはれず概念を捨てたい

偖て愈々當面の問題に移りますが、現代日本の邦畫洋畫を通じて、その大體の流風を一言にして蔽せば混血狀態と云ふことに歸着すると思ひます。由來ロ癖の樣に『彼此長短相補ふ』事を說いて、また實際そのことに長けてゐる日本人は、物質文明の余惠に依る交通機關や印刷術の發達のために、海の彼方に行はれる藝術や思想の變遷の薰化を受ける事が殊更甚だしく、その反動として畫壇の一方に『東洋流系の保存』

だとか『日本趣味の發露』だとか叫ばれてゐるに拘らず此頃は常に弱く打消され勝であります。これを畫壇の實際に徴して見ますと、帝展、院展、國展等を通じて、日本畫では極めて小數の作家を除く外、前に掲げた諸流派の純粹なマニエールを保持してゐる人はないのです。のみならず、時としては浮世繪に伊太利千四百年代をロダンに山樂を、大津繪にフォーヴイズムを折衷しやうと云ふ樣な、大膽にして且つ無謀な作家もゐることも尠くないのであります。材料の上から云ふと、元來宗達派を以て目されてゐる日本畫がさうであります。況んや洋畫に至つてはその大部分をフランス、續いて獨逸、露西亞、少數の英米と云ふ樣な割合で、それ等諸派の殖民地たる觀があります。それから、現代日本美術に對する外國美術の影響は、主として洋畫家に依て日本畫家に傳へられる氣味があります。これは私自身が洋畫家であるから我田引水の論をすると思はれると困りますが、事實に於て斯う云ふ順序をくり返してゐるのであります。先づこれで現代畫壇の混血狀態と云つた意味がお解りになつたかと思ひます。

此混血狀態は素より喜ぶ可き事ではありません。併し私は思想、藝術の諸問題に對して急激に覺醒した日本現代の情況としては止むを得ないかと考へます。寧ろ狹い意味の『東洋流系の保存』とか、『日本趣味』とか云ふものに執着してゐるよりは貪慾に何も彼も取り入れる方が、よしそれが無秩序であつても活氣があるだけよくはないかと思ひます。今に誰れか一人天才でも出現してくれゝば、當然緒に着くものは着いてくれるでせう――稍々脫線の氣味ですが、先づこの『混血狀態』を云つて置かないと、皆さんが展覽會へ行かれても、假りに浮世繪派は斯うで、印象派は然々と定義をお話ししたところで、極く少數の外はその型を眞面に保つてゐるのはないのです。なまじつかな尺金を與へることは反つて皆さんを迷はせるもとでせう。

例へば日本でアカデミズムの洋畫を見得るのは帝展を最としますが、あすこに示されてゐるアカデミズムは、多少共に印象派の光と色の考案を受け容れた、變形した、新舊兩面に融通の利くアカデミズムなのです。其他の展覽會に在つても對象の具像化と抽象化との、二つの表現要素が一つの畫に混合してゐる事は珍らしくありません。で、私は何派とか何主義とかで斯う云ふものであると云ふ事に就ては茲に述べません（私は『現代美術の諸傾向に關するノオト』と云ふのを『中央美術』に發表しつゝあります。强ゐてそうした說明を求められるならばそれに就かれた方が便利でせう）また現代日本

の何と云ふ作家は斯うした風だと云ふ事に就ても述べません。若しさうした尺余を皆さんに與へるなら、それは私が間接に作家達を煩はす事になるでせう。

作品から事實の說明を求めず只見た儘に

然らば如何なる方法に依て繪畫を見たらばいゝか？恐らく皆樣は斯う反問せられるでせう。私はそれに答へて、展覽會へおいでならうとせられる方は、何よりも先づすべて畫と云ふものに對する概念をお棄てなさいと云ひませう。これは美術愛好者の人達、殊に所謂畫の見巧者と云はれる人達に取つて、最も必要な勸告であらうかと思ひます。この勸告を徹底させるためには、以上私が述べた所のことさへも徹囘するに躊躇しません。何故なれば概念をすてゝ直接作品に臨まれる事に依て、始めて皆さんはその作品が展開する世界に何のこだわりもなく入り込む事が出來るのです。

其ために皆さんは作品から說明を求めてはなりません。事實の正確な報告を求めてはなりません。アカデミズムの作品は屢々事實の正確な報告を齎らしますけれど、その眞實の意味を忘れてゐます。眞實な作品が斯樣に齎らすものはそんなものではないのです。前にも云つた如く繪畫は三延長の世界を二延長の平面に縮約したものであります。ですから、その出發點からして、事物の姿を其まゝにあらはし得ない運命にあるのです。繪畫は色彩と線條と形の諸要素に依つて、皆さんは視覺を通して、心理的に何者かを語るのです。たとへば、今度二科會の特別陳列で皆さんはピカソの『靜物』を御覽になるでせう。あの畫の美しさは壺とか卓子とかゞ、ありのままにあらはしてある點でなく――寧ろさうした物象を無視してありますが――線で云へば弧線、半圓周線、垂直線、水平線、斜線等の弛張兩樣の線條幾何學的な對比と照應とその律動に依て、色で云へば青、綠、灰色の寒い色彩と、赤、淡黃などの暖かい色の對比と均衡に依て、ある快い影像を皆さんの胸裡になげかける筈です。何が描いてあるかわからなくとも、その美しさは皆さんに感能がある限り享受出來る筈なのです。これはデュツフヰの『シシリー風景』でも、ブランシヤールの『農婦』でも、その畫面を構成する要素の組み合せにちがひがあるばかりで、それ等は均しく美しくなければならない筈です。玆に於てか皆さんは先ず『解らぬものはよくないもの』と云ふ偏見を棄てねばなりますまい。

畫から說明を求めないために、皆さんは『畫題は此れと彼れとを區別するための附箋に過ぎない』と云ふことをはつき

り心に止めて置かねばなりません。何故なれば畫題は時として作家の着想や、題材などを知る便宜を與へますけれど、多くの場合畫題のある事に依て、觀賞家は其繪の純粹な要素に接觸する前に、其繪があらはす以上の意味を附會して了ふ事があります。つまり畫題を見ることに依て、觀賞家は屢々躓きの石を與へられることになるのです。狡猾な作家は時として此間の消息を知るがために「生の惱み」とか『信仰の喜び』とか、其作品があらはし得るよりも、もつと大きな範圍の意味で受け取れさうな畫題を附することがあります。そしてありもしない深遠さや幽玄さを衒ふ事があります『知者は其知に依て倒る』と云ふ諺のある通り、よく文學者出身の美術批評家は、おぞくも此奸計にかゝるのであります。また作家にそんな狡智がないにしても、間々文學的内容を有つた畫題を附することがあります。其場合にも同じ樣な事があるのをよく見受けます。最近ジョアキム・ガスケと云ふ人のドラクロアの『シオの虐殺』を評した文章を讀んで、その文章が鮮麗巧緻を極めてゐるに拘らず、作品其者の眞の要素に觸れてゐないのに熟々此感を深くしましたが、皆さんもこうした顰みに倣つてはなりません。つまり繪畫と文學とは全然違ふのでありますから、畫から物語りを求められないやうにするのが肝要であります。

純粹な感能の混亂作家の名聲が邪魔

繪畫と云ふものゝ眞の要素と云ふものに觸れるためには、皆さんは皆さん自身の眼を以て見られるのが肝要であります。其ために展覽會を見られる時、何かの批評に據られると云ふ事は絶對に避けねばなりません。他人の批評を讀むと云ふことは、同じ作品に對して自分より違つた角度から見た結果を教へられる點で益のない事はありませんが、さうでなく全然それに依頼ると云ふ事は、折角純粹な皆さんの感能を混亂して了ふことになります。皆さんの正しい心の鏡に唯だ作品のありのまゝを寫して見て下さい。そして其處に皆さんの知らなかつた、光彩ある一つの世界が展開されるならば、すなはち皆さんは皆さん自身に取つて價値のある作品を見出した幸福な人なのです。

私は皆さんに何んな世評をも便りになさるなと云ひました。これはまた何んな作家の名をも便りになさるなと云ふ事になります。明治以來日本の畫壇に其聲名の嘖々たるもの十指を以てしても數へ難い程であります。併しこれ等の名ある作家が悉くよい作品を提供し得るものだとは何うしても私

には信ぜられないのであります。或る作家は以前に非名聲を恥かしめない程のものを發表した事がありませう。併しその後名聲の揚がるに連れ、生活の安易に馴れて精進勇往を怠つてゐる人もあるでせう。また環境と時代のひよつとした拍子から、實質上それ程でない人も、大家たる名聲を博する事もありませう。その他これに類した、又はこれ以上雜にすることを憚る程のある術策に依て名聲を保つてゐる人もあるでせう。さうした内面的な事情を皆さんは知る必要はありません。唯だ皆さんが何か買物をされる時、必ず信用あり名聲ある店舗に就て求められるのと同じ筆法を、繪畫の鑑賞にも用ゐられるのは危險だと云ふに過ぎないのです。實際生活の必要を充たすそれ等の諸店舗は、多くの場合皆さんの信用を裏切らないでせう。併し畫壇の信用あり名聲ある店舗――即ち作家は時としてまがひものを提供するかも知れないからです。勿論其作家自身の製品たる事に於て決してまがひものではないのですが、その實質に於てまがひものである事を云ふのです。如何に無名の作家のものであるにしても、それが皆さんに或る眞の感動を與へるものであるなら、それは皆さんに取つて有名無實の名家の作品よりはずつと價値あるものではないでせうか。十九世紀の末年、巴里のクロオゼル街に繪具屋をしてゐたタンギイと云ふ爺さんは、何等の教養もなかつたに拘らずその時代の聰明な批評家達よりもずつと早くセザンヌ、ヴン・ゴオグの價値を知つてゐました。また一九一〇年に死んだ不遇の大家アンリ・ルッツオの畫の美しさに感じたのは、彼の周圍にあつた或る貧乏な家族だつたさうです。彼等はその家族の最愛の一員たる幼兒の肖像を此畫家に依囑したために、三百法と云ふ身分不相應の金を支出して、殆ど倒產に瀕したと云ふ話があります。『神はその叡智を智者學者に隱して、おさな兒、無智なる者に示す』と云ふことは何時までも眞理だと思ひます。

一知半解よりも寧ろ無智でありたい

さうです。皆さんは皆さん自身に取つて最もよき鑑賞家たるために、先づイノッサンであらねばなりません。以上述べたところも、なまじつかな知識を注ぎ込むよりも、寧ろこれから新たに經驗をはじめやうとする人になつていたゞきたい爲に述べたに過ぎません。藝術家自身に取つてもさうですが、鑑賞家に在つても一知半解と云ふ狀態は最も好ましからぬ狀態である。最も聰明でない限り、最も無知なことは寧ろ望ましい事です。これは單に繪畫ばかりでなく、すべて藝術の領

域に屬するものを鑑賞する上に必要な事です。唯だ皆さんの純粹な感激が皆さんを叡智に導くでせう。若しも斯うした立場に居られる場合、前にあげた豫測的形成の範疇に入る、表面ばかり美しくて、內容に眞實のない作品などは皆さんを感動させない筈です。斯うして皆さんがすべての概念を棄てゝ、混亂的命へ臨まれるとき、若しも其所に皆さんの足をとゞめるものがあり、皆さんの衷心に何か美しい感激を與へるものがあれば、それこそ皆さんに取つて純粹な智的收獲となるものです。よしその作品が本職の美術家や批評家に取つて一顧を値ひしないものであり、又は、北嗤笑を買ふに過ぎないものであるにしろ、それが皆さんに取つて何でせう。皆さんの純粹た鑑賞眼に依て拾ひあげられた作品や、借りものゝ知識を机上で積んではくづし、折衷附のものしか賞め得ない現代の批評家連がもち上げる作品よりは、もつと皆さんに取つて貴い筈です。何故なれば本當に繪の見方を知りたいと思はれる皆さんは、まさかそれから得た知識を金剛石や眞珠の飾りを身につける様に、人にひけらかす爲ではないでせう。すればそれで充分ではありませんか。

何うか概念や偏見を棄てゝ、素朴な見方から出發して下さい。そして純粹な自己の立場に立つて畫を見る經驗を重ねて下さい。寧ろ前の經驗を後の經驗に依て展開して行つて下さい。恐らくそれは皆さん自身の益を成すばかりでなく、小知識や小才能の堆積した、餘りに小ざかしい畫壇や評壇の現狀に取つて、たしかに一つの規箴を與へると思ひます。これは殊に、種々なカリテエの差違に就て、本來敏感である可き女性に向つて望み得る事だと思ひます。以上述べた所の眞意を若し少數の方でも理解して下されば幸福だと思ひましたので、敢てこの匆卒裡に草した一文を『女性改造』を通じて、すべての美術愛好家たる女性達に贈ります。



自然の息自然の聲

若山牧水

私はよく山歩きをする。
それも秋から冬に移るころの、ちやうど紅葉が過ぎて漸くあたりがあらはにならうとする落葉のころの山が好きだ。草鞋ばきの足もとからは、橡は橡、山毛欅は山毛欅、それ〴〵の木の匂を放つてゞも居る樣な眞新しい落葉のから〳〵に乾いたのを踏んで辿るのが好きだ。黄いな色も鮮かに散り積つた中から岩の鋭い頭が見え、其處には苔が眞白に乾いてゐる。時々大きな木の根から長い尾を曳いて山鳥がまひ立つ。その姿がいつまでも見えて居る樣にあらはに明るい落葉の山。
それも餘り低い山では面白くない。海拔の尺數も少い山といふうちにも暖國の山では落葉の色がきたない。永い間枝にしがみついてゐて、そしていよ〳〵落つる時になるともうす黝く破れかぢかんでゐる。一霜で染り、二霜三霜ではら〳〵と散つてしまうといふのはどうしても寒國の高山の木の葉である。從つて附近での高山の多い甲州信州上州といふ風のところへ私はよく出かけてゆく。今年もツイこの間そのあたりを歩いて來た。
　昨年の十月末であつた、利根の上流にあたる上州の片品川の水源林をなす深い山に入り、山中に在る沼で鱒を飼つてゐる番人の小屋に一晩泊めて貰ひ、翌日そこの老番人を案内に

穎んで金精峠といふを越えた。その山の尾根は上州と野州との國境をなすところで、峠上の路ばたには群馬縣栃木縣の境界石が立つてゐた。それも半ば落葉に埋つてゐた。越えて來た方は峽から峽、峰から峰にかけて眼の及ぶ限り、一面の黑木の森であつた。栂や樅などの針葉樹林であつた。そして、これから降りて行かうとする眼下には、遠い麓の湯元湖の水がうす白く光つて見えた。その湖の緣には今夜泊らうとする湯元溫泉がある筈であるのだ。

正午近い日がほがらかに照つてゐた。尾根の前もうしろも見下す限り茂り入つた黑木の森だが、僅かに私たちの腰をおろして休んでゐる頂上附近だけそれが斷えて、まばらな雜木林となつてゐた。無論もう一つ葉も枝にはついてゐない枯木の林だ。其處へほつとりと日がさして、風も吹かず、鳥も啼かない。まことに靜かだ。

不圖私は自分の眼の前にこまかにさし交はしてゐるその冬枯の木の枝のさきに妙なものゝ附いてゐるのを見つけた。初めは何かの花の蕾かとも思つた。丁度小豆粒ほどの大きさで幾重かの萼見た樣な薄皮で包まれてゐる。然し、いま咲く花でもあるまい、さう思ひながら私はその一つを枝から摘み取つて中をほぐして見た。そしてそれが思ひがけないその木の芽であることを知つた。木の芽と云ふが、それが開いて葉となる、あれである。

一つ葉も殘つてはゐないと云ふものゝ、ほんの昨日か一昨日散つてしまつたといふほどのところであつた。さうして散つてしまつたと見ると、もう一日か二日の間に次ぎの年の葉の芽が斯のやうに枝ぢゆうに萌え出て來てゐるのである。私はまつたく不思議なものを見出した樣な驚きを覺えた。

これら高山の、寒いところの樹木たちは斯うして慌しい自分等の生活の營みを續けてゐるのである。暫くもぼんやりしてゐられないのだ。少しの時間をも惜しんで、自分を伸ばして行かうとしてゐるのである。霜がおりて葉が染まる落ちる程なく雪がやつて來るのである。そしてそれからの永い間を雪の中に埋つてゐるのだ。その間こそ、彼等のどうにもならぬ永い〳〵休息の時である。年を越えて、恐らく五月か六月の頃までさうして靜かにしてゐねばならぬであらう。サテ雪が解ける。それとばかりに昨年の秋からこらへてゐたその芽生の力をいつせいに解きほぐすのである。

さう思ひ始めると私はその靜寂を極めた冬枯の木立の間にまことに眼に見えず耳に聞えぬ大きな力の動いてゐるのを感ぜずにはゐられなかつた。大きな力が、何處ともなしに力向

を定めて徐ろに動いて行きつゝあるのを感ぜずにはゐられなかつた。

峠をおりて私は湯元温泉に一泊した。そして翌朝其處を立つて戰場ヶ原の方へ出やうとして不圖振返ると、昨日自分等の休んだ峠からやゝ南寄りに聳えて居る尾根つゞきの白根山には昨夜一夜のうちに早やしら〴〵と雪の來てゐるのを見た。

それは樹木の場合である。さうした山國の山の奥で人間たちの營んで居る生活に就いても同じ樣な感慨を覺えたことがある。それは畑ともつかぬ山畑に一寸ばかりも萠え出て居る麥の芽を通してゞあつた。

信濃から嬬戀を越えて飛驒へ降りたことがある。十月の中旬であつた。嬬戀に近い山腹に十軒あまりの家の集つた部落があつた。そしてその家のめぐりの險しい傾斜に小さな畑が作られ、其處に青々と伸び出てゐる麥の芽を見て私は變に思つた。暖國に生れ、現に暖い所に住んでゐる私にとつては、麥は大抵十二月に入つてから蒔かれ、五六月の頃に刈取られその間に稲が蒔かれ刈らるゝものといふ考へしかない。それが此處では十月の半だといふに、もう一寸も伸びてゐるのである。その事を連れてゐた案内者に云ふと、もう半月も前に蒔かれたもので、これを刈るのは七八月ころだと答へた。すると一年の殆んど全部をその山畑の僅かな麥のために費すことに當るのである。これとても半年以上を雪のために埋めらるゝ結果であること無論である。そしてその僅い乏しい麥をたべて彼等は生きてゆくのだ。

何といふみぢめな生活であらうと私は思つた。自然と戰ふといふは無論當らず、自然の前に柔順だといふのがやゝ事實に近からうが寧ろ彼等そのものが自然の一部として生活してゐるのではないかと私には思はれたのであつた。

暖國ではどうしても人は自然に狎れがちである。ともすると甘えがちで、どこか自然を馬鹿にする所がある。都會人、ことに文明の進んだ大きな都會では殆んど自然の存在するのを忘れてゞもゐる樣な觀がある。唯だ人は人間同志の間でのみ生活して、自然といふものを相手にしない。相手にするもせぬも、初めからその存在を知らない、といふ風のところがある。そして日一日とその傾向は深くなるかに思はれる。

此間の樣に大地震があつたりなどすると、『自然の威力を見よや』と云ふ風のことをいふ人のあるのをよく見かけるが、

私は自然をさうした恐しいものと見ることに心が動かない。あゝした不時の出來事は要するに不時の出來事で、自然自身も豫期しなかつた事ではなからうかと思はれる。大小はあらうが、自然もまた人間と同樣。あゝした場合にはわれながらの驚きをなす位のことであらうと思はれる。

そして私の思ふ自然は、生存して行かうとする人類のために出來るだけの助力を與へようとするほどのものではなからうかと考へらるゝのだ。多少の曲折はあるにしても、その生存を共同しようとする所がありはせぬかと考へらるゝ。と云ふより、自然の一部としての人間人類を考ふることに私は興味を持つのである。

たゞ、人間の方でいつの間にかその自然と離れて、やがてはそれを忘るゝ樣になり、たま／＼不時の異變などのあつた際に、周章へて眼を見張るといふところがありはせぬだらうか。

火山の煙を見ることを私は好む。

あれを見てゐると、「現在」といふものから解き放たれた心境を覺ゆる樣である。心の輪廓が取り拂はれて、現在もない過去もない、未來もない、唯だ無限の一部、無窮の一部として自分が存在してゐる樣な悠久さを覺ゆる。

常にさうであるとは云はないが、折々さうした感じを火山の煙に對して覺えたことがある。自然と一緒になつて呼吸をしてゐる樣な心安さがそれである。心の、身體の、やり場のない寂しみがそれである。

高山のいたゞきに立つのもいゝものである。

一つの山の最も高い尖端に立つ。前にも山があり、背後にも見えて居る。そして各々の姿を持ち、各々の峰のとがりを持つて聳えて居る。

靜まり返つたそれら峰々のとがりに、或る一つの力が動いてゐる樣な感覺を覺ゆることが折々ある。峰から峰に語るのか、それらの峰々がひとしく私に向つてゐるのか、とにかくそれらの峰のとがりの一つ／＼に何か知らの力、言葉が動いてゐる樣な感じを受取つたことが屢々ある。

いま斯う書きながら、回顧し、空想することに於てもそれと同じいものを感じないではない。

雲が湧く。深い溪間から、また、おほらかにうち聳えた峰のうしろから。

その雲に向つても私は私の心の開くのを覺ゆる。煙の樣にあはい雲、摑み取ることも出來る樣な濃いゝ雲、湧きつ昇りつしてゐるのを見てゐると、私の心はいつかその雲の如くになつて次第に輕く次第に明るくなつてゆく。

眼を擧げるのがいゝ時と、眼を伏せるのゝ好ましい時とがある。更らに唯だじいつと瞑ぢてゐたい時もある。

伏せてゐたい時、瞑ぢてゐたい時、私は其處にかすかに岩を洗ふ溪川の流を見、糸の樣なちひさな瀧のひゞくのを聽くのである。

溪や瀧の最もいゝのも同じく落葉のころである。水は最も痩せ、最も澄んでゐる。そしてそのひゞきの最もさやかに冴ゆる時である。

捉へどころのない樣な裾野、高原などに漂ふて居る寂しさもまた忘られ難い。

富士の裾野と普通呼ばれてゐるのは富士の眞南の廣野のことである。土地では大野原と云つてゐる。見渡す限り、いちめんの草野原である。この野原を見るには足柄連山のうちの乙女峠、または長尾峠からがいゝ。この野の中に御殿場から印野、須山、佐野などいふ小さな部落が散在してゐるが、いづれもその間二里三里四里あまりの草の野を越えて通はねばならぬ。

富士のやゝ西に面した裾野はまたいちめんの灌木林であるそしてその北側はみつちり茂つた密林となつてゐる。いはゆる青木が原の樹海がそれである。

八ヶ岳の甲州地の廣大な裾野を念場が原といふ。一方八里と云はれてゐるこの原を越えてゆくと信州地に入る。そして其處に展開せられた高原を野邊山が原といふ。

野邊山が原から御牧が原を横切つてゆくと淺間の裾野に出る。追分、沓掛、輕井澤あたりの南に面したあたりもいゝが本統に高原らしい荒涼さを持つてゐるのはその裏山にあたる上州地の六里が原である。これはまた打ち渡した芒の原で、二抱へ三抱への楢の老木がところ〴〵に立ち枯れになつてゐる。富士の大野原は明るくやはらかく、この六里が原は見るからに手ざはり荒く近づき難い。

阿蘇山の大古の噴火口の跡だつたといふ平原は今は一郡か二郡かに亘つた一大沃野となつて居る。この中央の一都會宮地町から豐後地へ出ようとして眞直ぐの坂道を行き行くとやがて思ひもかけぬ懸崖の根に行き當る。即ちこれが昔の噴火

口の陵の一部であつたのださうだ。私の通つた時には、その脇には唯すら登る事が出來なかつた。九十九折の急坂を登つてゆくと、路に山茶花の花が散つてゐた。息を切らしながら見上ぐると其處に一抱へもありさうなその古木が、今をさかりと淡紅の花をつけてゐたのである。私はいまだにこの山茶花の花をえ忘れない。そしてその崖を登り切ると其處にはまた眼も及ばない平野がかすかな傾斜を帶びて南面して押し下つてゐたのである。私はこの崖——たしか坂梨と云つたとおもふ——を這ひ登る時に、生れて初めての人間のなつかしさ自然の偉大さを感じたのを覺えて居る。まだ十七八歳の頃であつた。

芒が刈られ楢が伐られて次第に武藏野の面影は失せてゆくとはいへ、まだ〳〵彼の野の持つ獨特の微妙さ面白さは深いものである。彼の野をおもふと、土にまみれた若い男女をおもひ、また榾火の灰をうちかぶつた斧をおもひ鍬をおもふ。かとおもふと其處にはハイカラなネクタイも目に見え、思ひ切り踵の高い靴のひゞきも聞えて來る。芒がなびき、楢の葉が冬枯れて風に鳴る。

これらの野原がすべて火山に緣のあるのも私には面白い。武藏野はもと〳〵富士山の灰から出來た野であるさうな。

人は彼の樹木の地に生えてゐる靜けさをよく知つてゐるであらうか。ことに、時間を知らず年代を超越した樣な大きな古木の立つてゐる姿の靜けさを。

獨り靜かに立つてゐる姿もいゝ。次ぎから次ぎと押し並んで茂つてゐる森林の靜けさ美しさも私を醉はすものである。自然界のもろ〳〵の姿をおもふ時、私はおほく常に靜けさを感ずる。なつかしい靜寂を覺ゆる。中で最も親しみ深いそれを感ずるのは樹木を見る時である。また、森林を見、且つおもふ時である。

樹木の持つ靜けさには何やら明るいところがある。柔かさがある。あたゝかさがある。

森となるとやゝ其處に冷い影を落して來る、そして一層その靜けさが深んで來る。森の中でのみは、私は本統に遠慮なく心ゆくばかりに自分の兩眼を見開き、且つ瞑づる事が出來る樣である。山岳を仰ぐ時、溪谷を瞰下す時に同じくそれを感じないではないけれども。

森をおもふと、かすかに〳〵、もろ〳〵の鳥の聲が私の耳にひゞいて來る。

自分の好むところに就して私はおほく山のことをのみ云ふて來た。

海も嫌ひではない。あの靑やかな、大きな海。うねり浪だち、飛沫がとぶ。大洋、入江、海峽、島、岬、そして其處此處の古い港から新しい港。

然し、いまそれに就いて書き始めるといかにも附けたりの樣に聞える嫌がある。

庭さきに立つ一本の樹に向つてゐても、春、夏、秋、冬の移り變りの如何ばかり微妙であるかは知り得べき筈である。況してや其處に川があり畑があり、野あり山あり大森がある。頭の上には常に大きな空がある。

それでゐて人はおほく自然界に於けるこの四季の移り變りのこまかな心持や感覺やを知らずに過して居る樣である。僅かに暑い寒いで、着物のうつりかへで、寧ろ概念的に知り得るのみの樣である。

何といふ不幸なことであらう

一寸にも足らぬ一本の草が芽を出し、伸び、咲き、稔り、枯れ、やがては朽ちて地上から影を消す。そしてまた暖い春が來ると其處に靑やかな生命の芽を見する。いつの間にか一本は二本になり三本になつてゐる。

砂濱の上に何やら黑いものが動いてゐる。

「オ、、もう蟹が出たか！」

といふあの心持。

私はあれを、骨身の痛むまでに感じながらに一生を送つてゆきたいと願つてゐる。それは一面自然界のもろ〳〵のあらはれが自分の身を通して現はれて來る意にもならうかと思はるゝ。

（完）

家庭のためのペエジ

家庭に於ける山羊の飼養を薦む

古屋ゆき子

日本ではまだ普通の家庭で山羊を飼ふことがあまり流行してゐないやうですが、それは鷄や何かほど手がかゝらぬ上に、非常に實益の多いもので、其意味で廣く一般な家庭にまで飼育法をお報らせして置きたいのです。

と申して專門的な知識を山羊の飼育に就て私がもつてゐるわけではないのですが、たゞ私どもの家庭で實際飼育をやつてゐるのと、そのためにずい分な利益を得てゐるのとで、おすゝめのまゝ持ち合せの智識を素人ながら、家庭の主婦としての立場からお話しするだけです。

東京の郊外等では此節は立派な文化式の住宅等も殖えて來て、生活改善とやらがなか〳〵盛んに行はれてゐるやうでございますが、其多くは外觀だけを西洋式にした、しかもあまり趣味のよろしくないアメリカ式建築の惡いところだけを眞似たやうな住宅が一方ずい分と殖えてまゐつたやうに思ふのでございます。恰度それと同樣に生活だつて實際に西洋風な好みが流行してゐる割合に實益的な良い點は輸入されてはゐないと思ふのです。私たちの家族もアメリカ人とは大ぶん密い交際をつづけてゐるのですが、アメリカ人の良いところは、飽くまでも實益を尊ぶ氣質なのだと思ひます。例へば日本に長く移住してゐるアメリカ人は近くに日本の生活法のよいところを見ぬいてそれを自分の生活に利用すると言つた風なのです。例へば住宅等でも然うです日本の家が保温力に富んでゐて、いろ

〳〵な點でよいと知ると、すぐそれを寢室等に利用すると言つた風なのです。一體アメリカ風な建築や生活だといふものは斯うしたアメリカ人の進取の氣象が自ら生んだものではありますまいか。つまり此國の歴史が證明してゐるやうに、各國からの移住民が集つて此國を作らへたのだから、實際自ら各國民の美點が發見せられ、それによつて生活改善といふことが最有効に行はれたのだと見ることは、出來ますまいか。また從つて此氣質が遺傳して今日のアメリカ人の進取の氣象なるものが生れたのではございますまいか。

　此事を知ることは今日のやうにアメリカ風な生活樣式の輸入が激しく流行してゐる日本では大層必要な事だと思ふのでございます。すなはち、然ういふ風にアメリカ人は日本へ來て日本的な美點をどん〳〵取り入れてゐるのに日本人はあべこべにアメリカ人の悪いところを取り入れてゐるといふのは皮肉なことです。無論一概に然うだといふのではございませんが、とにかく實益的な方面ではまだなか〳〵向ふの人に學ぶ點があると思ふのでございます。

　前置きが大そう長くなりましたが、然ういふわけで玆にお話しやうとする「山羊の飼育」も、アメリカ人との親密な交際の間に、自然と教はつた實益的な家庭の副業なので、その點單なる流行に諛ねる研究ではないのです。

　さて私共の交際してゐたアメリカ人は數家族ありますが、殆んど例外なく皆庭先きに山羊を飼つてゐるのです。はじめ私どもはそれを見て、ずい分面倒臭い、いやな趣味だと思つたものですが、よく模樣を觀察してゐると、驚くほど簡單で、手がかゝらず、其割に利益のあるものだといふことを氣が付いたのです。すなはち鷄の飼養所よりもたしかに手がかゝらず、それに要する飼養場の面積も思つた程要らず、費用も一匹の山羊に就て一日八錢內外で足りるのです。そして乳の取れることはいい山羊なら大てい一日に五合から一升ぐらいです。

　だから此人たちが日本に着くとすぐに何處からか山羊を手に入れて飼ふのは無理もないと思つたのです。ずい分とせまい市內の住宅でも庭園の一部分に小舍を作つて、それに一坪內外の運動地を作へてやつて飼つてゐる人もありました。

　そこで私たちも終に山羊が欲しくなり、眞似をして飼ひはじめたのです。今家にゐる山羊は一日五合くらいきり

取れませんが、それでも買へば山羊乳はやすくても一合二十錢も取られますし、損ではありません。殊に山羊乳は牛乳よりも上等であることは誰でも知つて居ることです。醫學者に聞くと營養價に於て牛乳と大差ないといふ人もありますが、營養價だけで表はされない或物が這入つてゐないとも限りません。とにかく殊に發育の不良な乳兒や、腺病質の子供によくきくことは西洋人が熱心に主張してゐることでございます。私の家庭では毎朝この新しい搾り立ての乳を卓に載せることが一の樂しみになつて居ります。家にゐる弟たちが搾るのが樂しみで、面白半分に毎朝搾つてくれます。主人はぢかに乳に口をあてゝ吸つたりしてよろこんでゐます。搾り方には一寸したこつがありますが、要するに乳が逆流しないやうに指の間で締めながら搾るのです。

私共が落合村に越して來てこの乳を朝夕頂くやうになつてからは、主人をはじめ皆の者の健康がたしかにすぐれて來たやうに思ひます。一人の西洋人等は母乳の性質が余り良くないといふので乳兒にこの山羊の乳ばかりを（適宜の濃度に於て）與へて居りました。そして母乳をよして山羊乳にかへてから子供が非常に健康になつて來たと言つて喜んで居りました。此西洋人は夏分は輕井澤に避暑するのが習慣ですがその時にさへ山羊をつれて行くのです。そして自分の家で飲んだあまりを隣りの西洋人にわけてやつて、一夏百圓の收入があつたと言つて居りました。とにかく然ういふわけで、余りがあつたなら弱い子供のある家にわけてやつても、鷄の飼育などとは比較にならぬ利益が得られるのです。

茲で一寸言つて置かねばならぬのは皆から山羊乳を取ることです。何うも西洋人に聞くと日本人の賣つてる山羊下は信用がならぬと言ひます。私はそれを疑つてゐましたが、或時牛乳屋がわざ／＼私の家を訪ねて來て、急に山羊乳の欲しいといふ人があるので二三合賣つて呉れと言つて來ました。弟がそれを渡すと一合二十錢の割合に置いて行きました。そんなに貰つてはもうけがあるまいといふと、一合を四合に薄める（牛乳で）のだから丈夫と言つたとのことです。西洋人が日本人を信用しないのは無理もないことで、これを聞いて恥しくてたまらない氣がしました。

さて山羊乳の利用については申すまでもありませんが、飲用のあまりは料理

や、菓子を燒くのにもつかへます。新鮮な鷄卵を牛乳で煮たもの丶おいしいことは誰も知つてゐます。又私共では苺を植ゑてありますので、春から夏にかけて苺の取れる間は、毎日子供まで一緒になつて苺を取つて來ては新しい乳をかけて卓子の圍を取りかこんで頂きます。お友達やお客様がゐらつした時も、形式的なお茶菓子(それは毎日ですから積つて見るとずい分高價なものにつきます)をやめて、此苺とミルクの原始的な饗應法を取つてゐますお客様も本當によろこんで、八百屋の苺とはちがふと言つて、其風味を賞して下さいます。

猶殘乳の利用法としていゝのは、これを密閉して日向に出して置くと二三日で醱酵します。乳清と酸で凝固した酪分と分れます。これは決して捨つべきものではなく、パンを燒くのに最上等のものです。藥品を使ふよりおいしいパンが、柔かにふつくりと出來上ります。

以上が大體に於て山羊飼養の功徳で御座います。こんな大きな實益があるのに、何故日本の住宅で飼養が流行つてゐないかといふと、それは第一に事情を知らないからと、もう一つは非常に面倒なことのやうに考へるからでせう。また臭氣が立つて穢いといふ人があるかもしれませんが、牡山羊は非常に臭いものですが牝山羊は決して臭いものではありません。此點を誤解してゐる人が可成りあるやうです。また山羊は非常に清潔を好む動物で、何んなおいしい物でも惡い臭がしたり、穢れてゐれば決して食べないことを以て見ても分ります。

飼育場は二坪以上あれば理想的でございます。山の手や郊外の住宅では何處へ行つてもそれ位の餘地はもつておいでだから、家はせまくて飼へない等といふことは出來ません。その一部に夜寢る時の屋根圍ひを作つてやります。何んな見すぼらしい材木の細片でも出來ます。家の山羊小舍も新しき村にゐたIさんが何處からか古材木を見つけて來て一日かゝつて立てゝくれたのです。運動場の圍ひも山羊が出られない程度の丈夫な材木で適宜に作ればよいのです。

次に食物は豆腐屋と特約して毎日八錢内外のおからを持つて來てもらひます。此を朝夕二度に分けてやります。また時々青いものを欲しがりますから、春から夏へかけては庭の刈草でも野菜類でも食べさせます。子供たちは

わざ〳〵引き出して野につれて行つて雑草を自由に食べさせるのをもよろこびます。またフスマを時々やると元氣がつきます。其他、粟の莖でも、菜莖でも、何でも適宜のものをやればよいのです。

次に糞尿の掃除ですが、これも何でもないので、庭を掃くついでに掃除してやればよいのです。殊に糞は固い、大豆大の、ぼろ〳〵の糞ですから鶏の糞等より掃除が樂で清潔です。私は鶏も買ひかけましたが、手がかゝるのとよく犬に取られたり、盗まれたり、病氣にかゝつたりして、一度も實利を擧げたことがありません。これは私が無精者だせいでせうが、私のやうな無精者でも　山羊なら飼へるといふことを一面示してゐる點で皆さまの參考になる事と思ひます。

次に山羊そのものゝねだんですが、これはいいのになると百圓近くもするさうですが、大てい四五十圓くらいでいいかと思ひます。ザアネンとトツケンブルグの混合種がいいなだとの事ですが、要するにいい山羊といふのは乳の出が多く、質がいいのです。

鶏でも純粋のを買ふとずい分高價なもので、そのことを考へれば決して高價すぎるものではありません。乳が出なくなればまた子供を産ませると、其子供も金になります。その時だけ面倒でもタネになる牡のところにつれて行かねばなりません。

山羊の兒供は大そう可愛らしくつて、生れ立ての赤ちやんなんぞは見てゐて笑ひ出さずにはゐられません。「カンジン振り」の馬のやうで後足で元氣よく跳ねます。子供たちはいい友達にしてからかつて遊びます。離れるとすぐお母さんのところへ乳を探しに行きます。誰も教へたものはないのに、よくまあと思ひます。攝理といふのでございませうか。

最も合理的な赤ん坊の改良服

（生後六ヶ月頃まで）

佐賀ふさ

嬰兒期の一年間には其後五十年の生涯と同じ程の生長發達をするものだと云ひます。例へば兒童發育標準寸法表によつて見ますと、身長に於て出生時には十八吋であつたものが、六ヶ月目には二十二吋になり、一年目には二十七吋になります。胸圍は出生時が十二吋であつたのが、六ヶ月目には十三吋、一年目には十七吋となります。つまり身長に於て約十吋を、胸圍に於て約五吋を増す事になります。其後二十七吋の身長に十吋の加はるのは六才であり、胸圍の十七吋に五吋を加へるのは十才にならなければならないと云ふ事を考へて見ても、出生時から一年間の生長の度合が如何に速であるかと云ふ事がお解りになるだらうと思ひます。

それですから、衣服によつて其自然の生長發達を妨げないやうにするには、恰度其生長の度合に應じた衣服を着せるやうにしなければなりません。又活動の状態も、生後六ヶ月位までと其後の六ヶ月とは全然異つて居りますので、即ち前六ヶ月は衣服の中にあつて手足を動かす丈でありますが、其後はハイ〳〵が初まり、そろ〳〵歩き初めて、全身の運動をするやうになります。此やうな自然の發育の状態から考へ合せますと、嬰兒期の服裝はどうしても六ヶ月を境として前期と後期とにわけて、其状態に適當な形と大いさを持つものを用ゐさせるのが最も自然な事であると思ひます。そこでこゝには嬰兒前期に相應はしい服裝に就いて申上て見ませう。

嬰兒服の形について

衣服の中で手足のみを動かして居る此時期のものとしては、寛りと前で合せ、紐で結んでおく和服の着せ方が最も都合よく出來て居りますので、洋服のやうに頭から着せたり、背で合せたりするのは首のしつかりしない此時期の衣服としては隨分[illegible]かせであると思ひます。又ボタンの多い事もわづらはしくもあり不用

な事であると思ひます。併し洋服の裁方は體格中心に考へられて居りますから着せてからは少しも無理がなく、又不用な縫込の爲めにわかな嬰兒の身體を壓する等の心配もありません。それ故裁ち方は洋服の自然さを取り、着せ方は簡單で自由な和服により且つ特殊な改善を加へたものを作つて見ました。

嬰兒服の地質について　膚着は柔かな赤ん坊の膚に直接觸れるものですから最も柔かなものであつて、且つ清潔を保ち得るものとしてはガーゼが最も適當です。一枚では餘り薄くて取り扱ひにくいものですから二枚か三枚合せて使ひます。

間着は柔かくて輕いそして溫いものでなければなりません。それで長襦袢には綿ネルを其上の下着にはタオル地を（タオル地は柔かくもあり、且つ保溫力の點に於てフランネルに匹敵しますし、又洗濯のし易く安價なものですから、フランネル代用として試みたのであります。）

上着は柔かくて彈力に富み、吸水力の強いフランネル、或はメリンスの類が極く適當だと思ひます。それ故單衣の上着はフランネルで、綿入のはメリンスで作りました。

膚衣の裁ち方と縫ひ方



（膚着寫眞）

裁ち方　用布はガーゼ四尺八寸に白テープ五尺を要します。用布は二枚重ねたものを又二つに折り、共わなに次頁の如き型紙の背にあてゝ裁ちます。

縫ひ方　二枚重ねたものを一枚と見て取り扱ひます。

（イ）前後の肩を縫ひ合せ、縫代は開かせてテープでおさへます。

（ロ）袖底を縫ひ開きして、テープで押へ袖口には三つ折だけにして、テープを通し、着せてから口を引きしめるやうにしておきます。

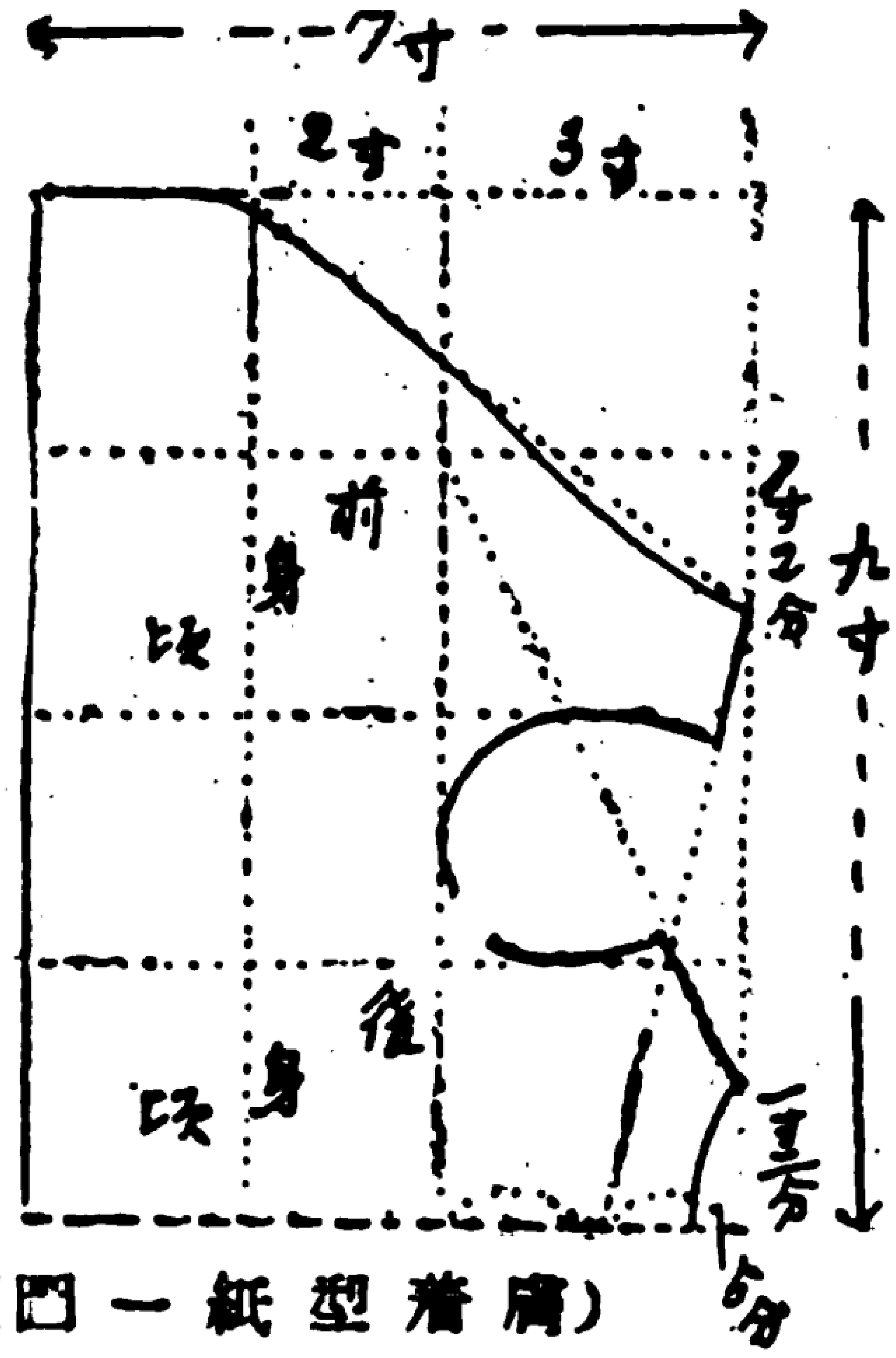
（ハ）袖を附けるには袖底の縫目と脇の眞中とを合せてぐるりと縫ひ、縫代は開いてテープで押へます。

（ニ）衿まはり及前と裾とをテープで包みミシンを掛けます。

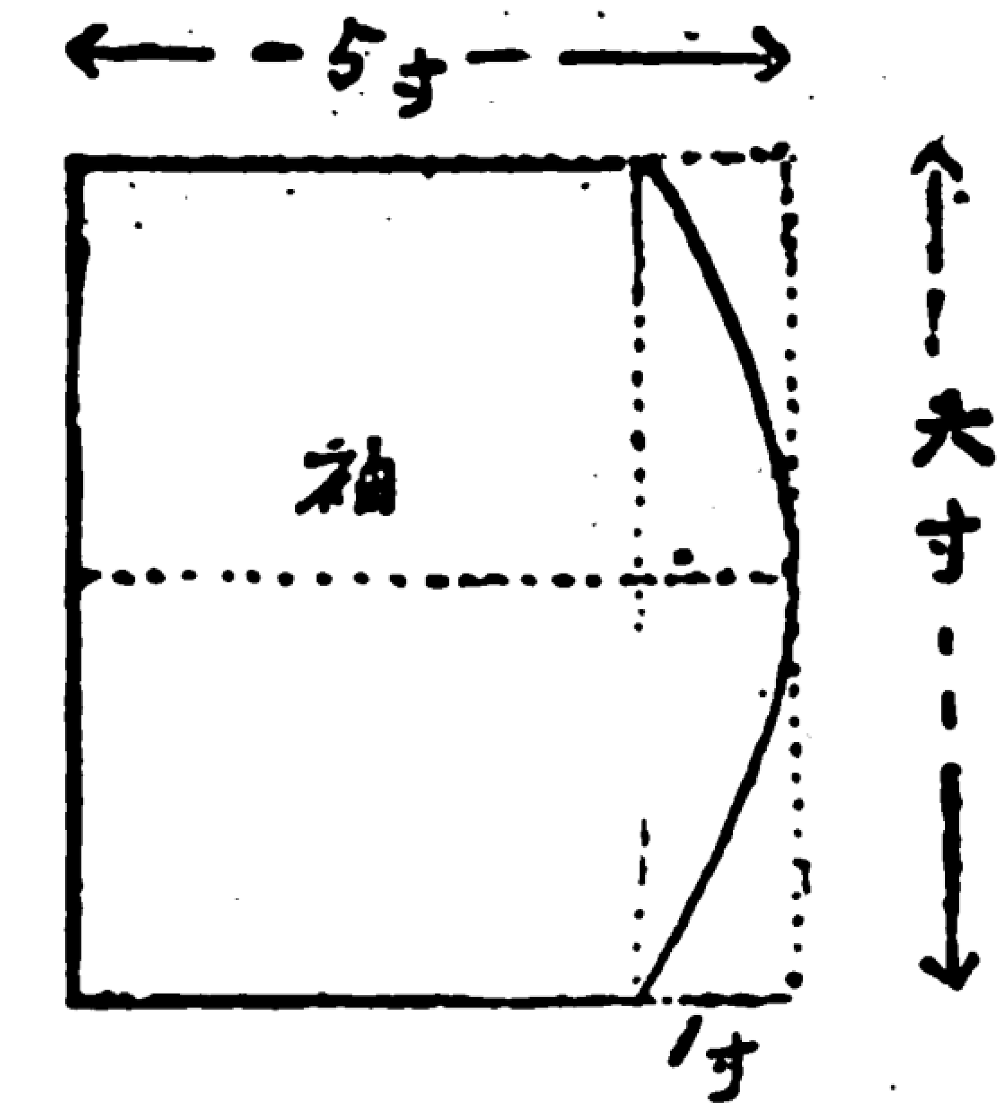
膚着を縫ふには縫込みが多くならぬやうに注意する事が必要です。

長襦袢の裁ち方と縫ひ方

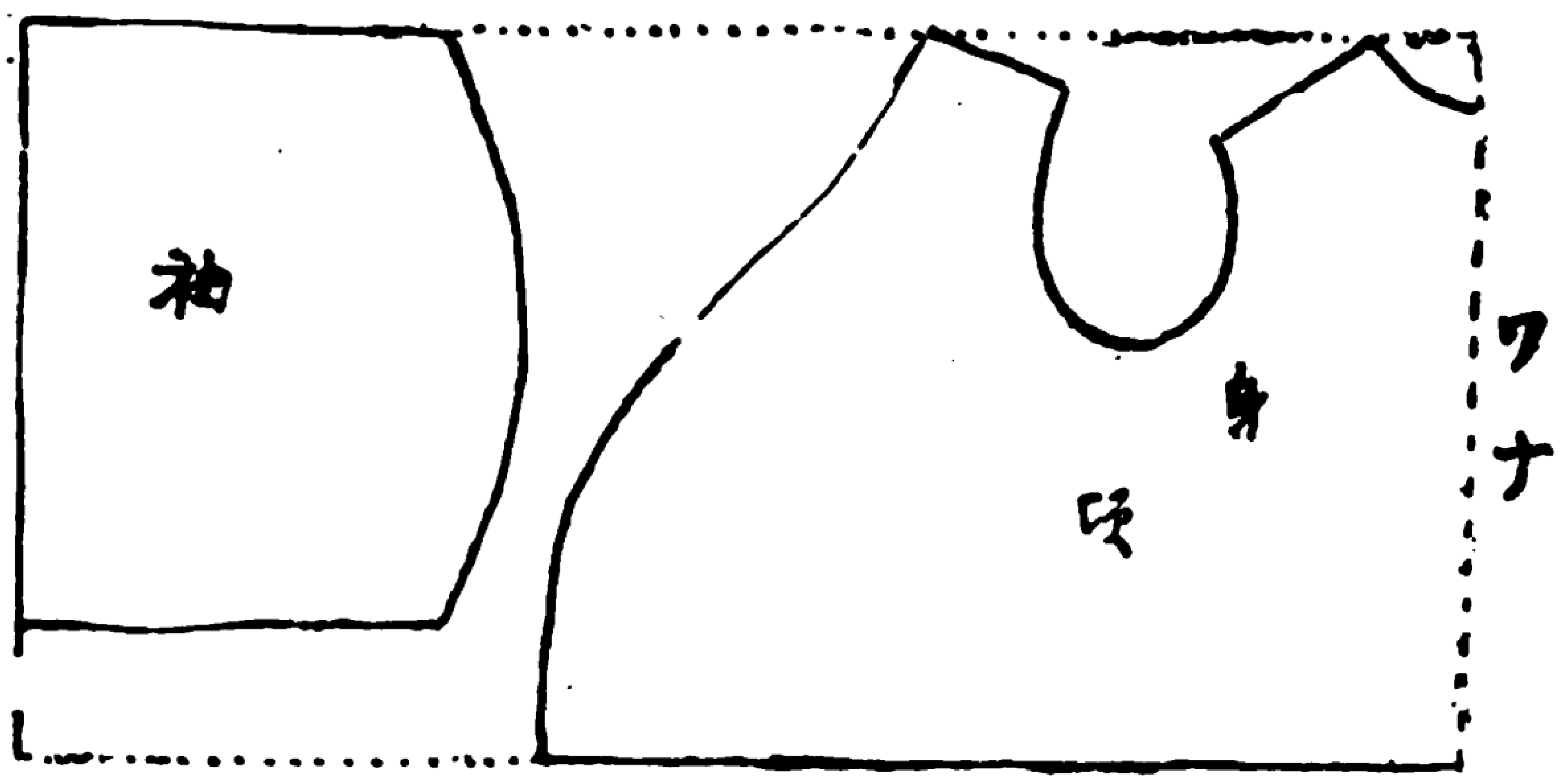
裁ち方用布　白綿ネル大巾一尺六寸。
白綿テープ　五尺。



(肩着型紙一圖)



(型紙二圖)



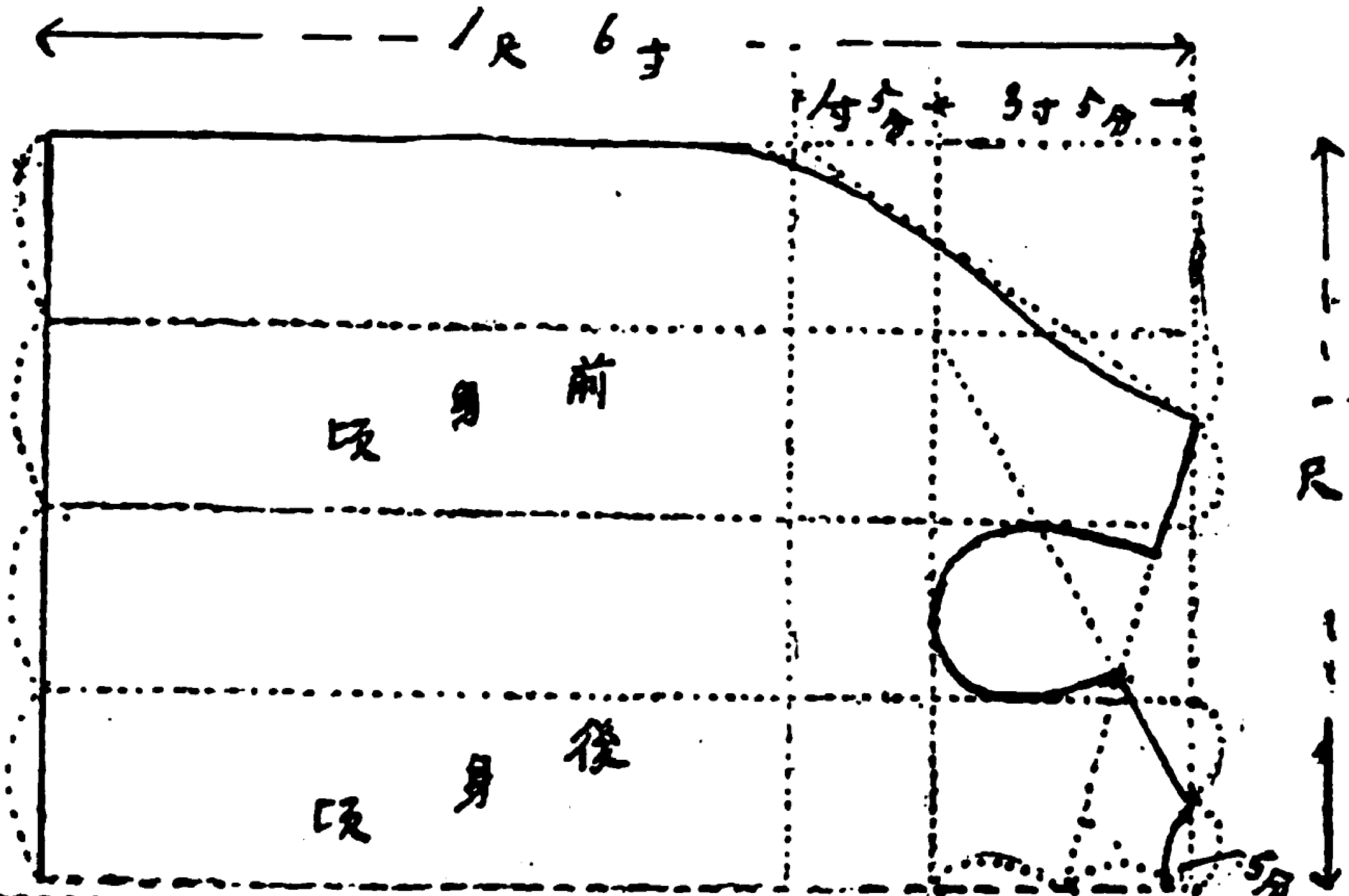
(肩着裁ち方圖)

巾を縦に二つ折にし、布のわなに型紙の背をあてゝ型紙通りに裁ちます。

縫ひ方

(イ)前と後の肩を縫ひ、開かせて縫ひ目をテープで押へます。

(ロ)前は耳にたつてゐますから其まゝに



(長襦袢型紙圖)

してをき、衿まはりと袖ぐちとをテープで包んでミシンをかけます。



(長襦袢寫眞)

(ハ)裾は出來上り五分の三つ折縫にし、テープを通し着せてから引きしめるやうにします。

(ニ)下着は型紙の取り方も縫ひ方も凡て單

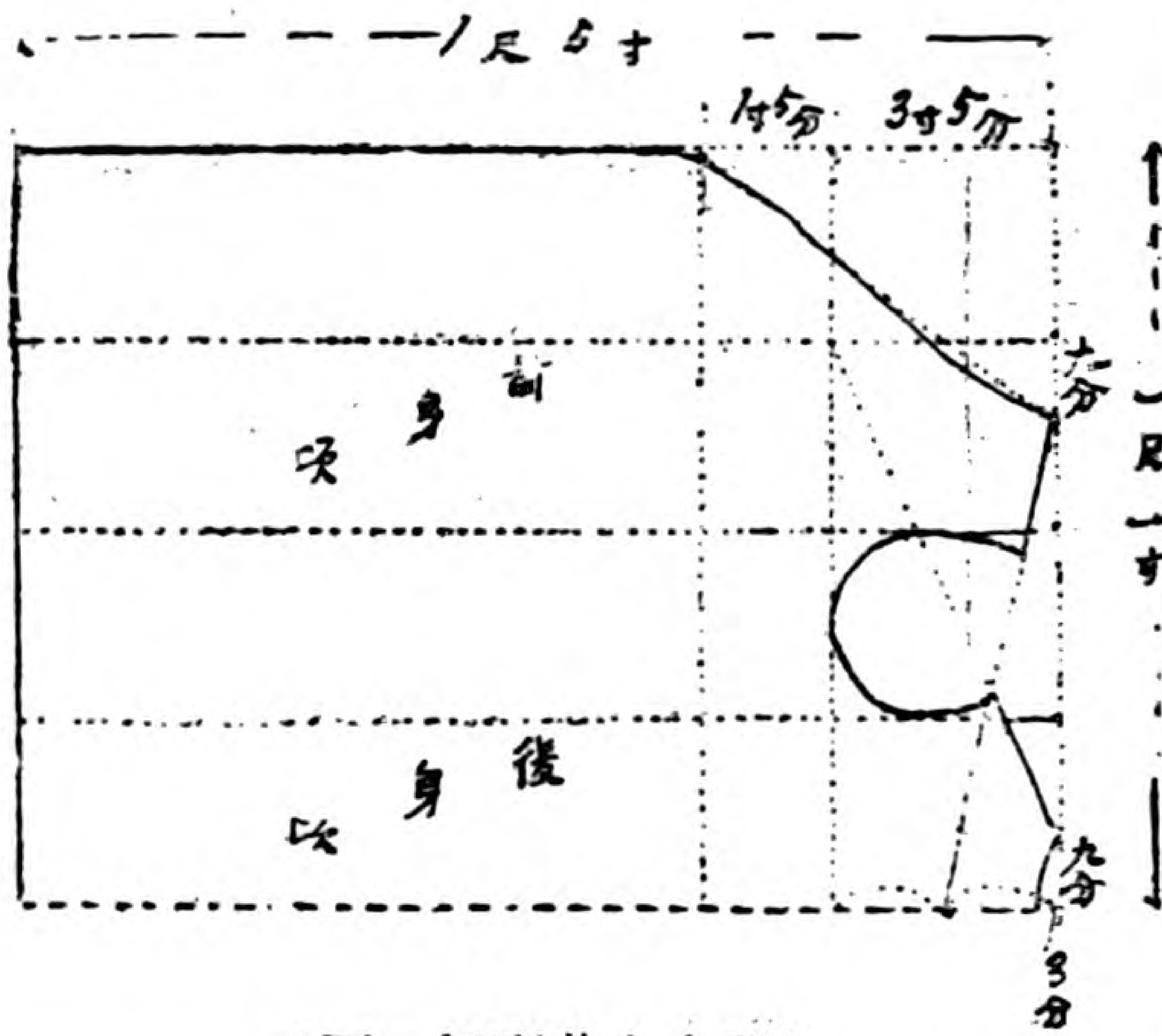


(單衣上着寫眞)

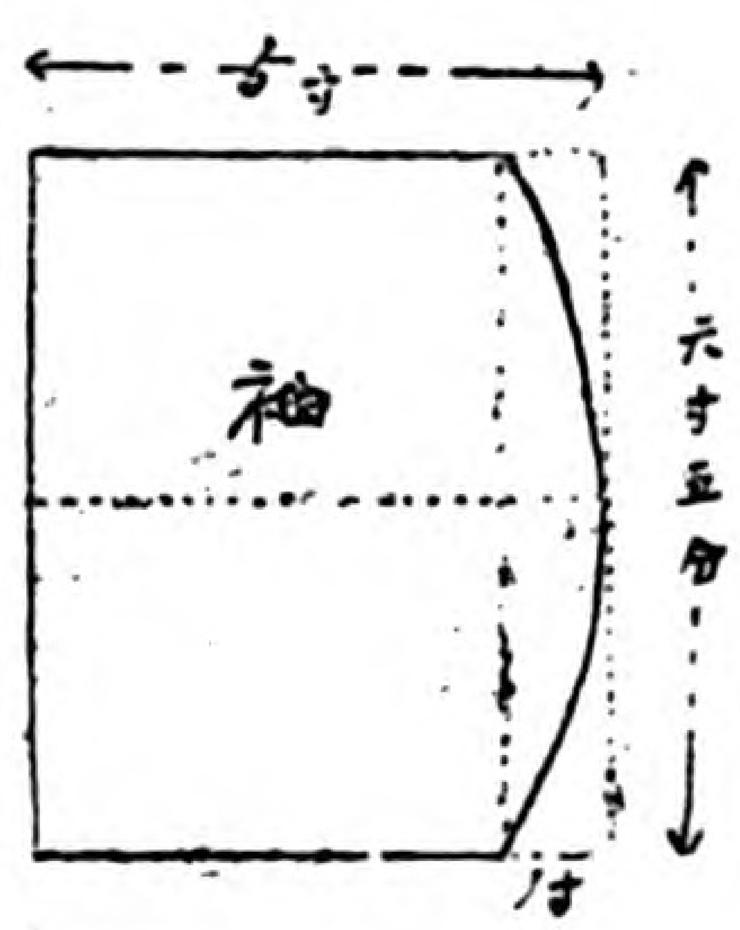
單衣上着の裁ち方と縫ひ方

衣の上着と同一ですから省略します

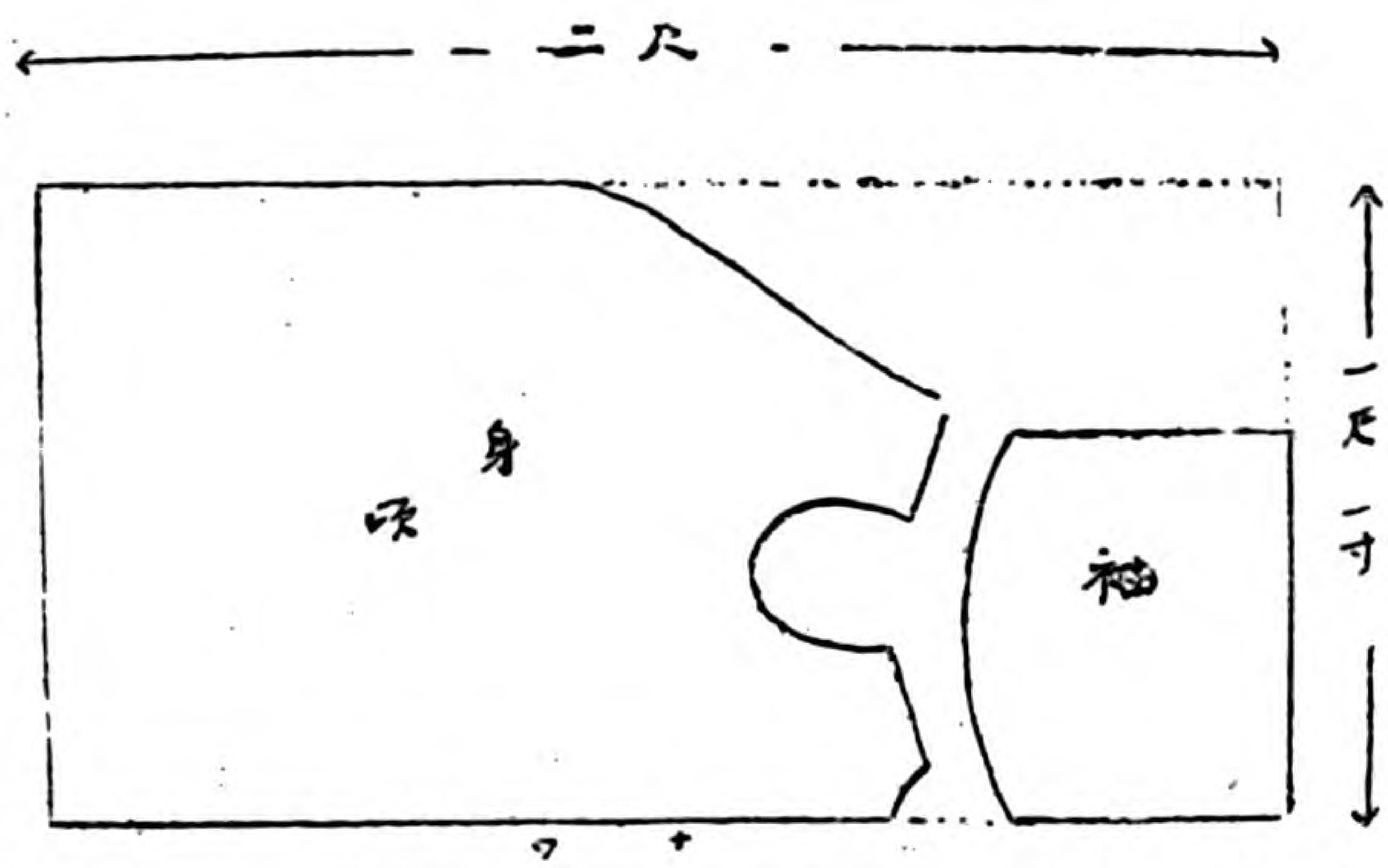
用布はタオルの湯卷地一枚。



(單衣上着型紙一圖)



(型紙二圖)



(單衣上着裁ち方圖)

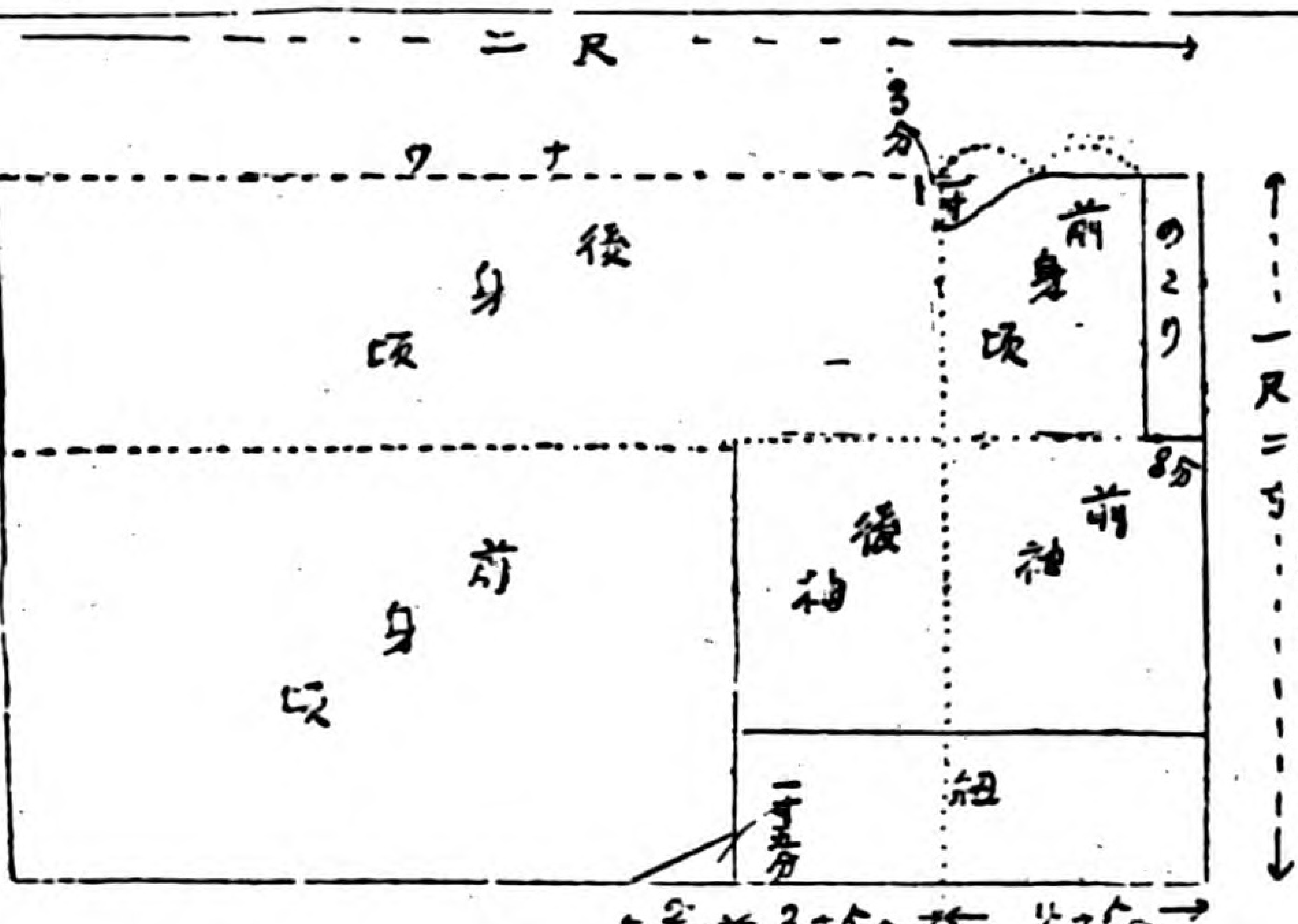
綿入上着の裁ち方と縫ひ方

縫ひ方　唐襦袢の縫方と同じですが、只袵布を使ひますからテープで縁取りします時、襟及袖の何れか耳になつて居るところは、其まゝにしておきます。



（綿入上着の寫眞）

裁ち方　用布　白メリンス大巾四尺八寸と薄地白絹並巾二尺。表裏引き返しにしますから二枚重ねて一緒に裁ちます。二枚一緒に横に二つ折にし、布のわゝなに型紙の背をあてゝ裁ちます。



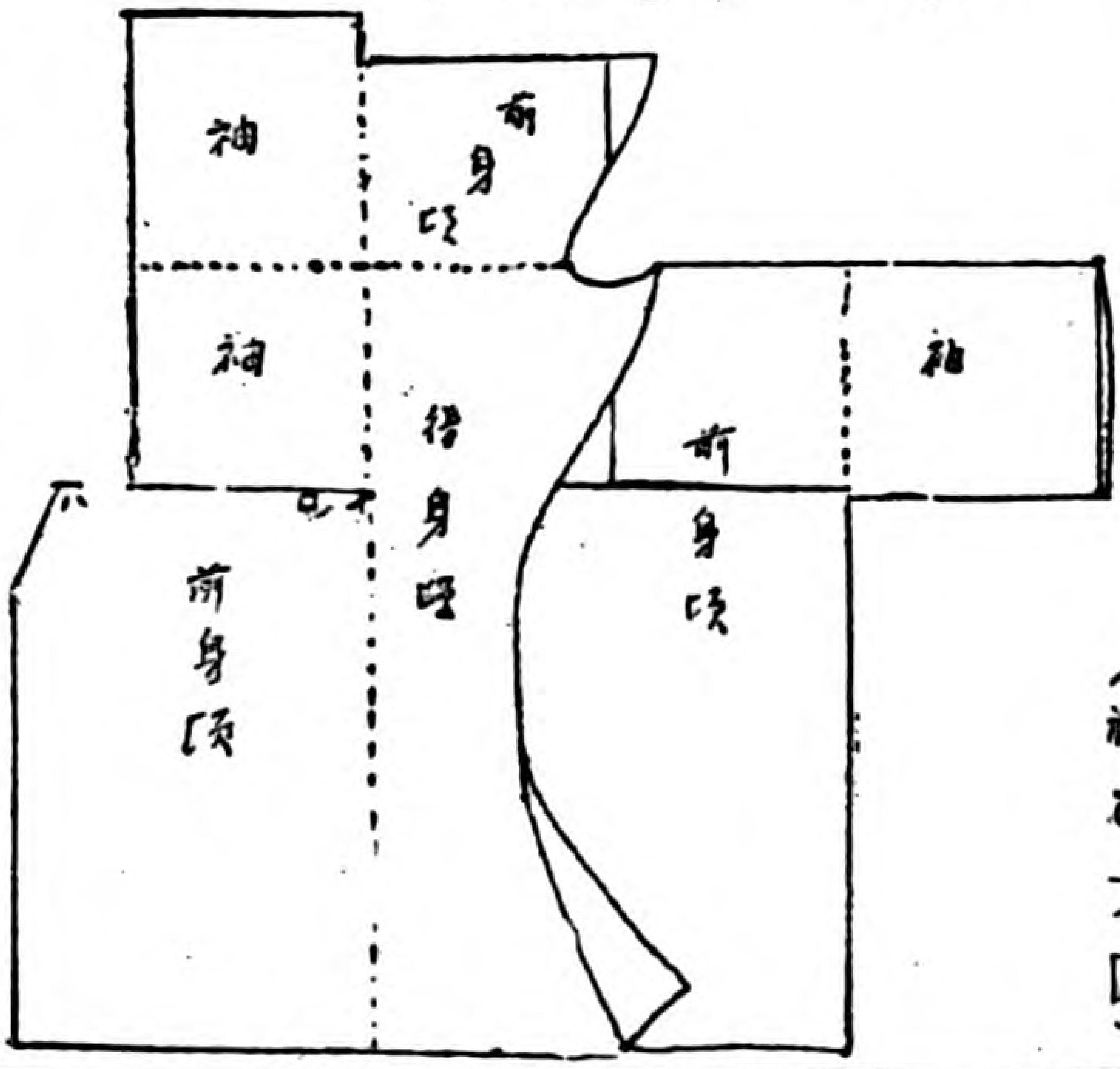
（綿入上着型紙圖）

縫ひ方

（イ）袵の三角布を衿ぐりの斜につゞくやうに前身に附けます。

（ロ）袖底を縫ひ合せ、次にイロハといろはの印を合せて、前身の上下を繼ぎ折を上にかけます。裏も同様に縫つておきます。

（ハ）裏布を外裏にして、青梅綿二枚か三枚でくるみ、外表にして表布の中に綿のちぎれぬやうに引き込みます。



（縫ひ方圖）

(ニ)周圍は假縫をしておき、絹を斜に一寸五分巾に切り縁を取ります。
(ホ)出來上りましたら白か薄色の絹糸で綿入全體に縱横一寸平方位の格子を刺します。尙裾には簡單な模樣を縫へば可愛らしくなります。模樣には周圍の縁布の色と同色を使ふと面白いと思ひます。全體に格子縫ひを刺しますと。丸洗濯がきゝますので、便利です、尙青梅でなく眞綿なら一層洗濯に丈夫です。
(ヘ)紐は共布で作り、後にとぢ附け前で結ぶやうにします。

帽子の作り方

帽子は日數が經つて赤ん坊が大きくなつてからは、表地を絹かメリンスなどで作つてもよいのですが、初めの間は表裏共ガーゼを使ふことをお勸めします。もしもつと暖かいものをとお思ひになるなら、柔い綿ネルを一枚心に入れてもよいと思ひます。

裁ち方はガーゼを巾五寸、長さ一尺二寸に切ります。

縫ひ方

(イ)一尺二寸の長さのものを二つに折り、次に兩端を兩外に二つ折にします、此の時兩外の端を縫代丈餘分に出しておきます。四つ縫ひにして表に返します。
(ロ)返した口を絎けますと袋になりますから、其袋の兩角を八分位兩側の縫目の上に折り返してとぢつけます。

襁褓の作り方

襁褓下。ガーゼが五尺五寸を横に二つ折に――一方はわな一方は裁ち目二枚を合せて四つ縫にしますと輪が出來ます。之を更に縫ひますと、四枚重なつた輪のお襁褓下が出來上ります。

襁褓。一枚は晒木綿の襁褓をしたもの三尺六寸で輪に縫つたもの、一枚はフランネルを一尺二寸に切つたものを用ゐます。

着せ方について

肩襦袢は縫代が膚に觸らぬ爲め、裏返しに着せ、袖口は手の出ぬやうにテープを引きしめておきます。

長襦袢。これも裏返しに着せた方がよいと思ひます。そして裾のテープを引きしめて袋の口のやうにしておきますと、足の運動を妨げないで溫く保つ事が出來ます。

下着と單衣上着。下着は裏返しにし、上着と重ねてそつくり一枚の積りにして着せます。

綿入上着は抱き蒲團兼用の積りですから寛りと着せて前を紐で結んでをきます。

（本號の次號では六ケ月以後の赤ん坊の衣服を紹介いたしませう。）

聖チチアーノの幼時

――（子供のための讀物）――

長澤敏子

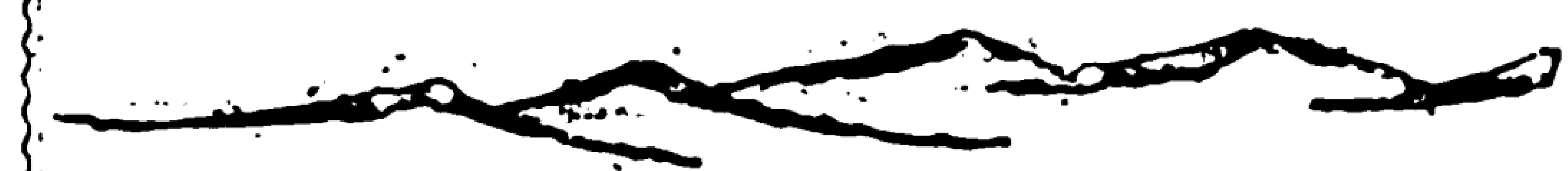
橄欖の小高い丘に向つて際限もなく緑につゞく野には百花が色とり〳〵に咲き亂れてゐる。伊太利の初夏は夢の様にうつくしい。花の精がぬけ出したかの様な涼しい眼を見はりながら野原にねころんでぢつとベニス街道を見つめて居た少年チチアーノは突然起きあがつて

「お姉様ごらんなさい。あの荷車はきつとあの不思議な市へ行くんですよ。あゝいゝな」

と、さもうらやましさうに、これも側に遊んで居た姉のカタリーナに話しかけた。

「まあチヽアーノ、不思議な市つてそんな市がどこにあるの」

リボンの様に南へ〳〵と長くつゞくベニス街道には田舎娘のカタリーナの眼には大都會の様に見える町は少なくはない。然しどの町をも不思議な町！と感心する程のことはないのにと、びつくり顔に弟を見返したがらきいた。



「まあいやだ、知らないの！お姉様は、それやベニスに決つてるぢやありませんか。」

チヽアーノよりは二つも三つも年上で、然かも弟ほどに空想家でない姉はベニスと云ふ名がそれほど珍しくも不思議にもひゞかぬ。それ處か「ベニスは生馬の眼を拔くやうな恐しい所ですね」とよく大人がいふのをきいて居る。

「ベニスのこと！何だつてチーちやんはベニスをそんなに不思議な市づていふの！つまらないわ、あの機屋のおぢさんがいつもさういつてよ。ベニスなんか此村の半分もよくないつて、それやさうだわ、此所のやうに山はないし、それにもあなたは此のきれいなカドレの村やあのドロミテの山がいやになつたとでもいふの。」

「うゝん、さうぢやないの、だけどもね、ベニスには藝術家がどつさり居るでせう。お姉様、それにあの偉いベクニだつて

居るのですもの、あゝ行きたいな、ベクニのお弟子になつて僕のおもつてゐる絵がかけたらどんなにうれしいだらう。」

「あなたはほんたうにいつも絵のことばかり考へてるのね、そして人の見ない様な夢ばつかり見てさ、いゝ加減でおよしなさいよ。村の人がさういつてよ、チーちやんも早く空想をやめてしまはなけりや、ろくな者にはならないつて、それだからお父様も此間ほんたうに心配していらつしやるのよ。そしてね、何でも近いうちにあなたを靴屋の小僧にやつて、一人前の職人にするつて仰つていらしてよ。それや絵の夢なんか見て居るよりはどの位やくにたつか知れやしないことよ。」

弟とはまるで反対に至つて実際的な姉は、たゞ一言のもとに弟をたしなめた。チチアーノは強く頭を振つたが口には何とも答へなかつた。然し彼の心は「絵がかきたい、ベニスに出たい」で一ぱいなのである。長い長い夜の間は家族のものが寝しづまると、どうしたら習はして貰へようか、どうしてお父様を説きふせやうかと考へながら夜をあかすことも稀ではない。昼間はひまさへあれば板の上に、石の上に、砂の上に、手あたり次第見つかり次第のものに絵をかく。然しチチアーノの絵を見て「これはうまい」と心からほめてくれる人は村の牧師様ばつかり、外の人は見むきもしてくれぬ。二人の話はふと往来からけたたましくひゞいて来た笛の音に破られた。むかふからはフランシスコが手招きをして二人をよんで居る。

「チーちやん花祭りのお仕度よ」といふが否や弟の手を引つぱつてカタリーナは村の方へ走つた。

時は六月の初め、花の盛りの伊太利は野も山も牧場もドロミテの山の谷間も、大げさにいへば花を以てうづまつてゐるといつてもよい位、然もその翌日は皆が待ちに待つた花の日の御祝日である。今日は若い娘や子供等が皆野原や山へ、てんでに花をつみに行つて明日の用意をしようといふのである。夕日がドロミテの嶺に真紅な額を匿さうとする頃、花をかゝへた子供の群は賑かに村の宿屋に帰りついた。明日の遊びに何をしようか、どんな衣服を着てゆかうかなどと、たゞもう明日を夢見ながら花束や花輪ごしらへにそれぞれの趣向をこらして居る。皆の心はよろこびにおどつて居る。知らずに口ずさむ歌の声、咲顔に破るゝときの声いやもう賑かなことである。「あのその製粉屋のスラちやんは、こんどベニスへゆくのですてね」

「何しに」

「彫刻を習ひに此頃あそこのお父様がうんと成金とかになつたのですと。それだから、スラちやんはもう製粉屋なんかにしないで、えらい彫刻家にするのですつて、でもスラちやんはそんなものなんかになりたかないのよ。でもね、えらい彫刻家になると貴族様や王様からでもあがめられるんだと、あのお母様がいつてきかしたものだからスラちやんもすつかり、もうそのつもりになつて一寸遊びなんですつて、随分いゝのね、名高い人になつ

て立派な家に住めて。」

「スヲちやんがそんな偉い人になつたら此のカヾレだつて隨分名譽ね。」

「だけど、スヲちやんにそんなことが出來るでせうか、あの子は手工だつてちつとも上手じやないのよ。いくらお金持ちのお父樣があつても、よい先生があつても自分が彫刻が本當に好きでなけりや、えらい彫刻家なんかにはなれやしないでせう。」

「それやさうかも知れないけど、だけど、いくら自分が好きでも、やつぱりお金や先生がなくては駄目ね。」

「えゝ、ほんとにさうよ。うちのチーちやんは繪がかきたい、ペニスへ行きたいつてまるで氣狂みたやうよ、でもね、うちの樣に貧乏ぢや、しやうがないのね。だから私はいつもチーちやんにそれよりか靴屋のルイジのおぢさんの小僧になつて、靴でもこしらへた方がどの位役にたつかも知れないと言つてよ。」

皆の話につい釣り込まれて、カタリーナがから口をはさむと靴屋の小僧がおかしかつたので皆がどつと笑ひくづれた。

「だつてチーちやんはまだ先生について一枚だつて繪を畫いたことはないでせう。そんなのを不頓着かずにお城をたてるつていふのよ。」笑聲がまた一しきりなりひゞく。

チチアーノは顏を眞紅にして、うつむいて居る。「見ていろ、今にきつと皆をびつくりさせる樣な繪を畫いてやるぞ、僕の心にある繪を畫いてやるぞ、僕の心にある繪を一枚でもかゝしたら皆がもう僕のことを空想家だの繪氣狂だのといはなくなるんだがな、ア、繪具がほしいな、繪がかきたいな、そしたらお父樣もきつとベニスへやつて下さるだらうにな」と笑ひ聲なんかはもう忘れてしまつて又も繪のことを思ひつゞけて居る。繪具はその頃なかなかに高價くつてとても手には入らぬ。チヽアーノのお父樣は相當にくらして居る獵夫ではあるが、そん高價な繪具を子供に買つてやる樣な生計でもなけりや子にそんな贅澤をおぼえさせる程の考へなしでもない、どうすれば繪具が得られやうか。

その次の日の朝であつた。チヽアーノは又もこんなおもひに沈みながら野原をブラブラ歩いて來ると、昨日、子供等が取りおとしたらしい花が地面にふみにぢられて敷石の上には美しい色が花模樣に染め出されてゐる。チヽアーノは心にはつーとおもつた。瞬間に何とは知らぬ希望に眼をかゞやかした。それからといふものは花の祭に行つても、人のおどりくるふ樣を見ても一向に面白くも何ともない、よい機會を見つけて彼はそつと村人の群から離れて、ひとり牧場の方へ姿を消した弟の出て行く姿を目ざとく見つけたカタリーナは、何故こんな樂しい場所から離れて行くのだらうと不思議におもひながらも好奇心に引つぱられてつい弟のあとを追つた。

「チーちやん、あんた、こんな所で何してゐるの！」と丘の

遠の花の中に今しも腰をおろした弟にとひかけた。驚いたチヽアーノは自分の心を打ちあけたものだらうか、どうしようかと一寸は迷つたが、姉さんが自分を可愛がつてくれて居ることを常々よく知つてはゐるし、それに姉さんは秘術をもらす人ではないとも思つたので

「僕ね、お姉様、繪をかゝうと思つてるの」とおもひ切つて言つてしまつた。チヽアーノがからかうのだらうと思つた姉は、

「あゝさう、繪具のないのによく繪がかけるわね」

と返した。けれども熱心にもえる弟の顏に動かすべからざる決心の色がありありと讀めたので、急に眞面目な顏にもどつて弟の顏をぢつと見た。

「お姉様、僕ね、こんど花をつかうことにしたの、どらんなさい、こゝにまあ隨分色がどつさり在るでせう。此花から繪具をとらうと僕考へたの、きつと、出來るの、僕今朝見たんですもの。」と今朝から見たこと、考へたこと、そして決心した事を眞心こめて話した。カタリーナは今初めて、弟を信じ初めた。實際姉自身も今朝の花の色を敷石の上に見たのである。そして人の考へもつかぬ事を考へる弟を隨分えらいと思つた。そして弟はきつと、えらい畫家になれるとさへ思ひ初めた。どんな事でも熱心と忍耐と勇氣とがあれば出來ないことはない、さういふ人は神様がきつとお助け下さるのだと、村の牧師様がいつも仰しやるのを思ひ出した。もしも製粉屋のスラちやんがえらい彫刻家になるのがカドレヽ名譽なんだとすると。うちのチーちやんがベニスへ出て偉い畫家になるのもやつぱりカドレの名譽なんだと思ふと嬉しくつてカタリーナはたゞ熱心に弟を助けてやらうと決心した。助けるといつても勿論材料の花を集めることだけしきや出來はしないが。



から決心がつくと二人は腕手を引きあつて丘の奥へおくへと花を集めに出かけた。赤、黄、緑と弟のいふがまゝの色を集めた二人は小川のふちに建つて居るお父様の小舍へといそいだ。此小舍はちつぽけな石の家で年がら年中閉められてゐてあけられもしなければ、つかはれもせぬ、村人は勿論うちの人さへも來ない。こつそり繪をかくには屈強の隱れ家である。

「お姉様も此繪が出來上る迄は此の家の中へ入つてはいけないよ」と見たがる姉をも拒んでたゞひとり、ひまさへあればこつそり、石室に閉ぢこもつては一心不亂に繪をかく、長い間自分の心にしまつておいた繪を非常な力と熱心をこめて壁にかいて行く。カタリーナは又ひまある毎には人に見られぬやうに山に入つては花を集める、そして絞り出した繪具をそつと窓から入れてやつては、そしらぬ顏に歸つてゆく。

繪はだんだんと出來て行くがカタリーナは約束をかたく守つて石小舍へは一歩も足を入れぬ。唯時折群からさまよひ出て、夢のやうにやつて來る白羊の外は絶えて來る者はない。此靜な小舍の中で、未來の畫家が石の壁に向つて汗を流して油をしぼ

つて居ようとは誰が知らう。

ある日の夕方、それは深紅なカドレの夕陽がドロミテの峯に隠れようとする頃であつた。チ、アーノは戸口に出て來て、いつものやうに繪具しぼりに餘念ない姉をよんだ。

「お姉様！出來た」

此聲にとびあがつたカタリーナは思はず小舎におどりこんだ、立派に出來上つた繪の前につつたつた時、姉はある力にうたれた。今迄の浮き〳〵した氣分が急にどこかへとんで行つて聲さへ厳粛に、

「オヽーチ、アーノ、聖母様！」

とあとは感慨に聲が出ない。

「えゝお姉様、聖母とキリスト、そして私のやうな男の子が花束をさし上げて居るでせう。これが長い〳〵間私の心にあつた繪なんです。」

繪の力と美にうたれて暫くはわれを忘れてたゞじつと見入つてばかりゐた。姉はこみ上げて來る嬉しさに、もう一瞬間もぢつとしては居られなくなつた。弟のした偉業を村の人につたへようとびつくりしたやうに村の方へ駈け出した。

「おぢさん。うちのチ、アーノが繪をかいたの、あの石の小舎の壁にマドンナ様をかいたのよ、はやく見にいらつしやい」とまづ靴やのおぢさんを驚かしておいて、その足で村中に弟の繪をふれてあるいた。噂は千里の旅をして数分の後にはもう村中一ぱいのうはさ、われも〳〵と彼小舎へかけつけた。

折しも丁度一日の仕事を終へて山を下つて來たチ、アーノの父は、村人が列をなして自分の石小舎の方へ急ぐのを見て、一たい何事が起つたのだらうかと不思議に思ひ乍ら、自分もやつぱり石室の方へと引つぱられて行つた。然し父がついた頃にはもう群衆は繪の前に黒山のやうで、いくらのび上つても人の頭の外には何も見えぬ。

「どうしてこんな立派な繪をかけたか」「何處で繪具が得られたか」といふ様な質問があつちからも、こつちからもかけられて居る、父には何のことだかさつぱりわからぬ。

「おぢさん、繪具？僕ね、花からとつてたの、カタリーナが山から花を集めて絞つてくれたの」チ、アーノの答が聞える。

「まあ」と驚きの聲がコーラスにひゞく。

「花の汁で聖母様をかく、あゝ聖チ、アーノ！」と感激に満ちた牧師の聲が聞えた。

父は自分の耳をうたがつた。「まてよおれは氣狂ひになつたのぢやないかしら、牧師様が「聖チ、アーノ」と仰つた様に此おれの耳には聞えた。待てよチ、アーノと云ふのは、うちのチ、アーノであるだらうか、いやそんなことはないやつぱり此耳が氣狂ひになつたのだ」とつぶやいた。

「おぢさんが氣狂ひになつたのぢやないんだよ、牧師様がたしかにさう仰つたのだよ」とチ、アーノのしたことを村人から

すつかり聞かされると、あまりの驚きに信じてよいのか悪いのかさへわからぬといつた様な顔をして居る父の前に群衆は路を開いてくれた。父は子の繪の前にたつた。

スラちやんがベニスへ彫刻を習ひに出たか出なかはわからぬが、チ、アーノは確かにベニスへ出た。そして昔のカドレ貧乏少年は單にカドレの名譽ばかりではない、伊太利全土の名譽として世界に其の名をなひゞかせる様になつてしまつた。ベニスに送られた八年といふもの、豫ねて敵の的であつたベクニの教へのもとに、たゞハケに親んで苦心に苦心をかさねた。その作業は實に熱心なものであつた。その色彩はとても人の學び得る所ではない、人の眞似さへも出來ぬ獨特のものとして先生自身も舌をまいた。空想でも實際、伴ふものは決して惡くはないのだといふことを村人たちにも深くさとらせた。

「聖チ、アーノ！」牧師のいはれた此言葉は、そのまゝに、今もなほ、世の隅々にまでなりひゞいた。その繪は彼の名とゝもに今世界に光つてゐる。



氷の寶石

メリー・エフ・バッツ

澤山の可愛ダイヤモンドが
木の上にキラ〳〵してゐました。
と、小さな娘達は云ひました。
（一つ頂戴、どうぞ！）

けれども娘達が手をのべて
奇麗なダイヤモンドをとらうとしたら、
澤山の小さな光線が來て
みんな盗んでいつてしまひました。

（イギリスの童謠）

空箱を利用する面白い箱栽培と園藝趣味

山室靜枝

箱栽培は促成切花を作る際などに多く使用せられてゐる。從つて溫室等では常に此の箱栽培が行はれてゐる、其他家庭果樹園を造る代りに、空箱空樽を利用　て、果樹類や時としてはスウヰートピー等も栽培される事がある。

鉢栽培となると適當な大さの鉢を買入れる面倒があつたり、又植物の種類に依つては可成り大形の鉢が必要で中々思ふやうに行かないが、空箱なら如何な家庭でも、一ッや二ッは物置きに遊んで居る。それを利用すれば鉢を買入れる面倒もなく、又至つて安價に栽培が出來るのである。嘗て震災前日本橋や神田邊の大きな西洋館の側を通り、時々洋館の窓際の所に、細長い箱樣のものを取り付けて其の中で愛らしい花が栽培されてゐるのを通りすがりに見受た事もある。又震災　燒野原となつたバラック建の町を歩いてゐる内、所々で常綠樹が箱植ゑになつて居るのを見た。何處か見た所は記憶してゐないが、可なり大商店であつたらしい燒跡に漸く出來上つたらしいバラックには、店の用意も出來たと見えて、二三人の小僧さんが表で蹲踞で頻りと何かに水を掛けては愉快さうに語り合つてゐる。もの好きな私は其のまゝ行き過ぎる事は出來ないでひかるゝまゝに行つて見ると、何の事はない、それは粗末な空箱に不出來な箱庭を造つて植ゑたものが根付いたとか少し成長したのだとかと云つて悦んでゐるのであつた。私は何と床しい人達だらうと考へながら、其處を去つた。其れ以來私の頭の中には如何に人家が密集した場所でも、適當な方法さへ講ずれば時には手作りの花を見る事が出來、或は市場等で得られない所の新鮮な野菜を收穫しては一家團欒の食膳に供する事も出來ると考へた。又一日の生活につかれた心身の慰撫ともなり、一方には社會敎化上女性の敎育にもなり誠に樂しみの多い慰めだと思ふ。

都會に住む或階級の人々は都市と農村をもつと接近させなければ本當の復興が出來ないと絕叫する人も可成りあるがそれは大都市の全部から判斷すると極めて小部分の人に過ぎないので、培ひの面白さを知らない一般都會人には容易に理解され難い事柄である。故に此の場合一般の人々に培ひの面白さを知らせると云ふ事が最も必要な事の一つである。

箱栽培法は諸種の栽培中最も集約的の栽培であつて場所は主として都市に行はるべきものである。從つて其の方法も亦至つて簡單なもので、到底複雜な栽培等は廣くは實行出來ないのである。故に次に極めて容易な手數のかゝらぬ野菜の箱栽培の一二種を述べて見やうと思ふ。

二三日に出來る箱栽培の理想から云へば、或種のものは適當な硝子障子あるフレーム

を用意して、別に大さは隨意であるが、大體長さ三尺巾二尺内外深さ五寸位の箱を造り、底は排水をよくする爲に割竹で簀張りと爲し、これに前以て其の栽培する種類に適當な配合土を作り置き、それを箱に入れて播種するのである。

播種箱の方法

所定の箱に、養土を箱の縁迄滿し、それを平になし、上部から平な板切か何かで少し強く壓して箱八分目位の平面土を造り、之れに栽培しようとする種子を撒播し、其の上に種子の隠れる程度に、細土をかけ再び上部から壓して平面になし、細目のジョーロにて充分灌水して、フレームの中に入れ、晝間は良く日光に當て、夜は霜覆ひをして夜間の寒氣を防ぐ樣にする。但し箱栽培に使用する配合土と肥料は、出來れば堆肥と土とを半々に混じてこれに少量の灰をまぜ、養土を作れば箱栽培には葉菜類が多いから殆ど之れで間に合つて行く。追肥はあまり施す必要はないが、發育の惡い時には、アンモニヤの類を極く薄い液肥として一回か二回施肥すれば澤山である、

以上の方法は郊外に宅地を持つてゐて、屋敷内に相當の空地を有する人々には誰にも行はれる方法で、人家の密集してゐる所の人々には出來ない相談である。而し斯樣な人々にはもつと簡單な自然の暖さを利用し之れに少しの注意を加へて容易に栽培の出來る方法がある。

それは何れの家庭でも得られるビール箱か、或は他の空箱を利用する事である。若しビールの空箱なら、之れを二つに切つて二箱にする。然し二箱にするのが面倒ならば、そのまゝ使用してもよいが、土が澤山入るから却つて始末に不便である。取扱ひに便利な樣に淺い箱の底に少量の土を入れて栽培してもよいが、箱の高さの爲に日光をうけるのが不平均になると矢張り良いものが出來ないから少し面倒でも二箱にした方が得策である。

此の一方の方の底のない方には小石のもれない位に、何でもよいから底を付け、それに排水を良くする爲に深い箱ならば箱の深さの三分の一、餘り淺い箱なれば四分の一位の分量で小石か煉瓦屑を細かくしたのを箱に入れ其の上に前以て土と臺所屑の肥料になりさうなものを細かになし、之れに少量の木灰を混じて、よく切混ぜて置いてそれを前者と同樣箱の八分目位の所迄入れ、其の上に種子を播き其の後の取扱は前者と同樣にする、唯フレームに入れる代りに日當りのよい場所に持出し、夜間は成可く暖かに保つ樣に、室内等に入れてやり、土が乾燥したら流し水で肥料氣のある樣なものを時々灌水してやればよいのである。

播種する種類としては今は春菊菠薐草等が適當であらう。何れも撒播して發芽して、段々成長するにつれて、厚い所は間引きし終りに株の二寸位になる迄間引きし、適當な大きさとなつた時に全部收穫する。斯樣にして極めて集約的に栽培する時は一箱より五六人の家庭なれば二度位の浸し物には充分出來る。其他間引きしたものもそれぞれ適當なのに調理が出來るから大變面白い。

殊に調理間際に收穫しなければ本當の味を失ふと云ふ樣な特に新鮮を必要とするサラダ用の萵苣等は收穫後時間を經過した市場物を買ふよりも、家庭に於て箱栽培をして必要に應じて新鮮なものを食膳に供した方がどれだけ美味に食事を取る事が出來るかわからない。

斯樣に箱栽培などによつて、都會の人々に幾分土に親しむ興味を持たせる事は引いては都會と農村を接近させ、お互に生活の味を理解しあふことになるのではあるまいか。



家庭洗濯法の改善案

上坂りう子

帝都は日々に復興の氣が滿ちてきます。此際私共婦人としては、家庭生活の中に先づ復興策を計ねばなりません。そこで私はこれから婦人が家庭内に於いて最も多くの時間と勞力を要する洗濯について改良案を述べたいと思ひます。

從來の家庭内に於ける洗濯は、その方法に於いても、又その用具等についても、非常に改良すべき點が多いと思ひます。只盥一つの中で石鹼を使つて揉み洗ひのみする洗濯法は勞力の點に於いて、地質の點に於いて時間及藥品などの浪費も多く、實質を損傷する事が甚だ多いのであります。それでこれらの缺點を深く考へて、方法の上に、用具の上に常に使用者の立場からより一歩進んだ改良を加へつゝ進んで行かなければならないと思ひます。次ぎにその方法について申上げて見ます。しかし只今は水を使つての洗濯には最も寒い時ですから、上着類の洗濯方法は折をみて述べることにして、こゝにはいかに寒くとも洗濯しなければならぬ下着類や、その他について先づ述べたいと思ひます。

白色木綿地類の洗濯法について

シャツ、ズボン、襦袢、足袋、腰卷、ブルアース、カンビネーション、ペテコート、その他テーブルクロース、手巾、シーツ、枕被ひ、仕事着などを洗濯しますに、從來は只水か湯の中にソーダを少し加へ、洗濯物を浸し、直ちに石鹼を使つて所々汚れた部分のみになすりつけては洗ひ、あとは三四回濯いで乾かし、鏝當てなども充分に致さないでその儘、取りかたづけられて居る樣に思はれます。これでは第一に勞力の上に不經濟であり、石鹼なども只汚れた一部分にのみつけると言ふ事は地質をその部分だけ傷める事になり、汚れのおち方もむらになります。尚その上に忘れられて居る事は消毒や仕上

法の不充分なことです。衣服は絶えず塵埃や附着した汚點などにより絶えず無數の細菌を宿して居ります。之等のものを充分に取り除きませんと、汚れは永久に取れがたい物に變化したり、又之等の細菌の分泌物によつて地質を染色したり、傷めたり。更に病人などが家庭内に出來ました時、種々の方面から病原菌など附着しますから、身體の健康にも關係します。

又仕上法が不備な時は、衣服は常に摩擦を受け、其上に洗濯などの工程によつて滑かであつた表面に、毛羽が立つてまゐります。之をそのまゝにしておきますと、塵や埃を多く吸取し、爲に汚れのつき方も早く形も仕上げになつて直さなければ、非常に衣服としての美的價値を失ふ事になると思ひます。故にまづその方法としては、最初に之等の洗濯物を充分に浸る位の水又は湯に洗濯ソーダを加へます。（それは洗濯液を指先につけて見て少しくつるりとする位のアルカリ性を帶びる位の程度）その中に洗濯物を浸しこんでおきます。時間は三十分から長くて二三時間——一夜間位で、之は洗濯の際に水によつて垢がゆるめられ、更にソーダのアルカリによつて直ちに落され易い狀態になります。かうしておきましてから次ぎに石鹼液を作ります。石鹼が固形ならば湯でとかすか、粉石鹼を溶かした液の中に洗濯物を入れ、衿とか袖口とかその他非常に汚れて居る部分だけを刷毛又は手で強く揉み、他は輕く洗濯板の上で石鹼液をつけては揉み出す樣にして大體を洗ひます。それから輕く絞り、そのまゝゆすがずに石鹼液の附着したまゝで、之を少し大きな御飯蒸しの中に入れて、三十分位蒸します。すると熱と石鹼の作用によつて之を蒸器から取り出し、水洗ひしますと、大抵の汚れや汚點はきれいに取れます。之を三四回充分に水洗ひし、糊を施すものには直ちに糊を施して乾燥し、乾きましたら取り入れて布全體に霧を吹き、鏝あてを行ひ形を整へます。

この洗濯のみによつて白くならない場合、又アルカリによつて取れない汚點などありました時は、之を漂白します。地質が白地ですから、染色を犯される恐れもなく、地質は一層白くなりその方法よろしきを得さへすれば決して地質を傷めるものでなく、反つて三四回洗濯をした後に、一回づつ漂白をしますと、汚れを早くとる上からも效果があると思ひます。その方法は漂白

粉一ポンド（市中に賣られてゐるものは大抵一ポンド入になつてゐます）を水五升から一斗位入る甕の中に全部溶かしこんで、よく蓋をしておけば、可成り長く用ゐられます。その上澄液を汲み取つては使用致します。

それにはまづ漂白せんとする材料が充分浸る位の水を盥に取り、襦袢五枚許りに漂白液茶碗に一杯位を加へ、よく水を攪き交ぜて、その中に洗濯物を廣げて入れ、三十分から一時間乃至二三時間して引上げ、更によく水洗ひし次ぎに次亞硫酸ソーダを材料の分量に應じ、水に浸る位の中に大きな匙一杯位をとかし、この液を通し、更に水洗ひします。インクなどの汚點及び大抵の汚點は綺麗にとれます。後の工程は以前に記しました。

この洗濯方法によれば、地質に附着した垢及び汚點は勞力を要する事が少くて、重に藥品と熱の作用によりますから、地質の摩擦も省かれてまゐります。又殺菌の目的も充分に達し得られると思ひます。ですから若し之を煮す事が面倒であつたり、又用具などの持ち合せのない場合には、洗濯物をソーダ液より上げて、石鹸液と共に、少し大きな洗面器に入れて、煮沸してもよろしいのです。只この方法による時は液を少なくとも二三回取り替へないと汚れた液が、反つて洗濯物を一樣に汚す樣に色づけられますからこの點に注意して汚れの酷い物か、少いものに限ると思ひます。

尚蒸器は御飯蒸樣のものをもつと粗雜にしてトタンで作つてもなに程の費用もかゝりません。之が一つあれば染色にも兼用されて、便利だと思ひます。又毛織物など殊に洗濯の際に地質の摩擦をさけなければならないものや、その他毛糸などを編みかへる時ちよれを直す時には、この中で蒸して再び使用するのにも便利だと思ひます。

又洗濯物の數が多い時は、之を一々く手で洗ふ事は面倒でもあり、一方時間も掛りますから之を次頁の圖にある樣な家庭用洗濯機械を一個求めて、此中にソーダと石鹸液とを入れ、洗濯物を全部入れて五分間乃至十分間位まはしますと、藥液の中で絶えず攪拌されますから汚れが取れてきます。尚蒸す事が面倒であれば、此中に石鹸の熱液を加へて、更に之を二回許り取り替へますと、丁度煮沸洗濯と同樣に消毒も行はれ、手を要する事が少なくて數も多く一度に出來てまゐります。只此價格は、一個二圓内外のものに比べて三十八圓位ですから誰方にもすゝめられま

せん。しかし之も考へ方によりますと、たとへ價格は少々高價であつても、勞力の點で經濟になりますれば左程の不經濟ではなく、むしろ經濟的だと思ひます。尚その方法及び藥品の分量、熱の加へ方等は實驗者の工夫と經驗とによつて無限によりよい工夫が見出される事と信じます。

（家庭用洗濯機）



寫眞家庭洗濯機は價格三十圓位から大型四十五圓位まで〻東京府下瀧ノ川町上中里一五三能川製作所で販賣してゐます。

左の御寄稿を願ひます

郷土手藝

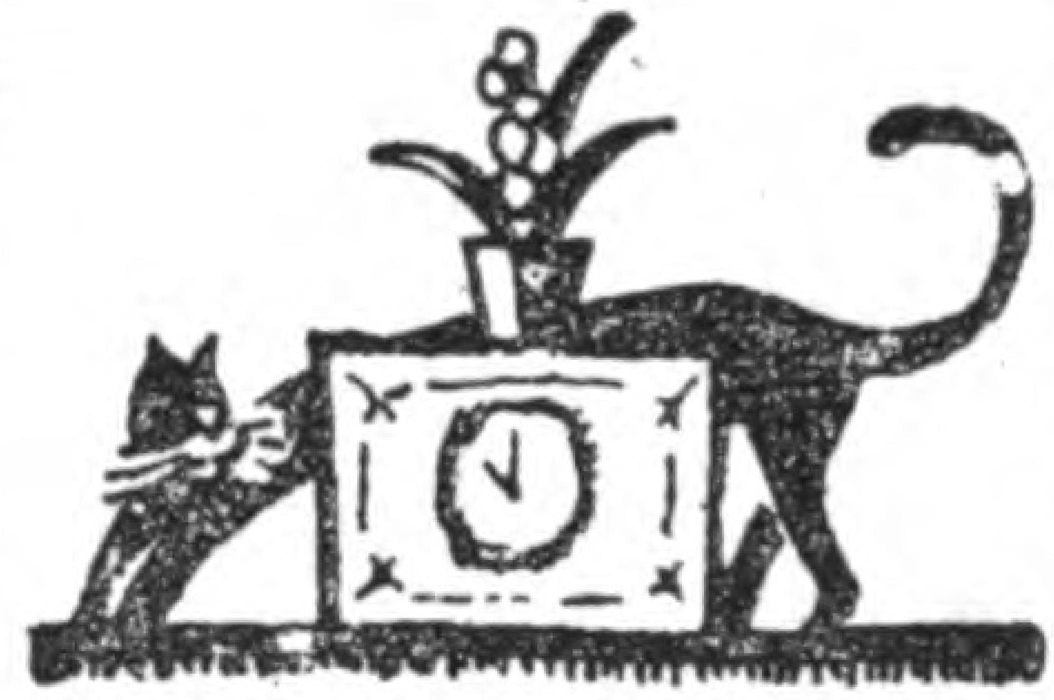
郷土手藝と云ふ言葉は充分に意味を表はして居ません。あなたの村、あなたの國に行はれ傳へられて居る特殊な手工、例へば草の葉を編んで籠を作るとか、樹の果を綴つて玩具にするとか、その他木片を彫んで人形を作つても、材料と方法は何であるとも、それが家庭の副業となり、家庭の娯樂となるやうなものを歡迎します。之れは單に讀物としてゞはなく、一地方にのみ行はれて居る手藝を廣く全國に紹介したい爲めなのであります。

郷土料理

他國では捨てゝ顧ない樹の實や草の葉を、ある地方では珍味佳肴として貴びます。魚肉、野菜類でも地方々々の特殊な料理法では他に較ぶべくもない美味となる事もあります。他國に例のない思ひ切つて特殊な料理法を御知らせ願ひます。

投稿規定

右は二種とも、二十字詰の原稿紙で紙數は制限しません。なるべく一種類五枚以上に亘らぬやうお願ひします。宛名は女性改造家庭部。締切は一月三十日。掲載の分には相當の原稿料を差上げます。



お臺所を何うしませう。

(住宅を新築なさる方の爲に)

森谷延雄

不便ぢやありませんか、腰を下したり立つたり、こごんだり今迄の眞黒なお臺所をあなたは何うなさるお積りなのです。それともこの儘でお滿足なさるんでせうかと私は語氣を強めて改めて御質問を起します。

震災を動機として、漸く復興改善されようとする他の種々な方面と歩調を合せて住宅の各部しかも臺所の甦生から研究をしようではありませんか、しばらく私は女性改造の家庭欄で忠實なあなたの御相談相手に成りませう。

主婦の毎日の仕事を主にして考へますといままで餘り考へられなかつた臺所は他のお居間とか客間等と比較してより以上重要な室であるやうに存じます。

一日主婦が出たり這入つたりせねばならぬ室であると云ふよりも、私共の一番尊い生命を繋ぐ唯一の食料を作る室であるから種々なる方面で臺所の改良を希望するのは當然ではありませんか。

良く考へられた清くしかも働き良い室であればこゝで主婦が一日中氣持よくにこやかに御仕事をなさる事が出來、ひいて家庭全體にも樂しい和氣が溢るゝ事に成ると信じます。

『食料を作る室ですから最も清潔でしかも働き良い室を希望せねばならない』之れが根本の臺所に對する希望條件であるのです。

◇

今こゝに御話致さうとするのは主として外國の有樣で、所謂洋食中心の臺所でありますが、其の根幹を學び結果を和食中心に改めれば何等其處に不都合を來たさない事にな

ると存じます。

良く外國の中層社會の臺所を見學致しますと臺所を食事場に併用したり、洗濯所にしたり、鏝當ての場所にしたりそうかと思ふと長靴や古い破損物が置いてあつたり、裏口から玄關への通路に使つたりしてあります。

しかしそれ等は皆臺所本來の目的の一部分ではないのであつて、特に汚れ物の洗濯等は日本人にはとても夢想する事も出來難い事であります、其の他の事にでも、それ〲他に處理する道があるのであつて、依然臺所は主として食料を作る室であると考へてほしいのです。

◇

室の向きは、北、北東、北西、の何れかを選ぶ事が適當だと思ひます、南東や南東又は東の方は他の居間のやうな猶重要な室に取らねばならぬばかりでなく、夏の暑い時等にはたゞさへ暑いのに臺所の火氣の爲めに暖度を高められ、換氣も大變良くない事に成るのです。

それはかりでなく室内全體の配置から行つても餘り感心が出來ないやうに成る事はあなた方の御存じの通りであります。

北東、や北西が普通選ばれる處であるが北と他の一側と二側に窓を必要とする事は室内の空氣の流通を考へても、又室への明るさを適宜にする爲めから考へてもなるべく希望せねばなりますまい。もし北一方向きの臺所であるとしたらなるべく窓を大きく取る事が必要であるのです。

◇

室の大いさは主として此處で働く人の數と釜は如何なる種類を用ふるかと云ふ事で決定する事が出來る、一人よりも二人で働く臺所が多きい事は勿論であるが瓦斯釜を使用する臺所では普通百五十平方尺以内、石炭釜を使用とすると三百平方尺迄を必要とします。

之れは年來の實驗を經た者でどうしても石炭釜の方は其の火床も大きく釜全體の容量も大きいばかりでなく形式も舊式の者が多い爲めに、其の近所には熱の爲めに他の家具を置く事が出來兼ねるのであります。

普通用ゐらるゝ臺所の廣さを記すと

2尺×12尺	10尺×12尺
10,, ×13,, 又は11尺	11,, ×11,,
11,, ×12, 又は13,,	12,, ×12,,

となります。臺所の形は細長い物よりも、寧ろ四角に近い者が良いのであつて、八尺と云ふ巾寸法は臺所の最少極度であるのです。

近頃臺所は出來るだけ大いさを少なくしてなるべく足數を多く使用せずに用事が出來るやうに『大よりも寧ろ小なれ』と云ふ主義で之を設計する事が良いとされて來ました。

古い設計で施行された物は常に大形に作られておる點は日本も西洋も其の軌を一にしてをります。

第一大きいと足ばかり勞するやうになるばかりでなく拭き掃除が大變でありますから從つて不經濟な結果を生む事に成ります。

第一、單純、第二に仕事の要點から要點への距離が成るべく短いと云ふ事。

第三に皿とか他の器具類を必要の數、大いさに限定して無用の者は其處に入れない事等は「寧ろ小なれ」の主義を強める事ともなると見る事が出來ます。

◇

大いさと室の向きが決定すれば、次に室の出入口を考へなければなりますまい。特に出入口即ち扉の取付け個所は考慮を要する問題で、この扉の個所及數に依つて非常な臺所の仕事能率を低下せしめむしろ數の多すぎる爲めに起因する失敗を見る事が度々あります。

適當な臺所の壁面は他の室よりも一層有用な者で（出入口は二つ又は三つ位で左記數種の目的を達せしめ得るやうにあり度い。）

第一、玄關に他人の訪問の聲を聞いた時なるべく早く達し得る事、

第二、食器室、物置き室又は庫に直接行き得る事、

第三、食堂に食料を運ぶに差支なき事、

第四、廣間並に階段に間接に聯絡を保つ事、

良く御用聞きが臺所の障子を直接開けて其處に立ち働らく力と無駄話をしてをるが大變面白くない事です。

裏扉を開けても其處は洗濯場所であつたり、物置であつたり合の間であつたりして其處で商人と會話する事がない、第一殿様式の御用聞き買ひは多分日本だけではありますまいか。

ミルクとかパンとか云ふ定められた物又は薪、石炭のやうな物を除き日用食料品は必ず歐米の中流家庭では主婦自

ら貸ひ出しに行く事になつてをります。

◇

窓の形式は二枚の外開き窓が良いのです。換氣や光を加減する爲め又住宅の美しさを保つ爲めにも上げ下げ窓よりも之れが良い。

室の內に適當な光を入れる爲めに其の窓の大いさは注意深くなければなりません。

色々の方面から考へて、この臺所の窓の大いさを決定しやうとするには『床の面積の二割五分』と記憶してもらひ度い。

例へば今假りに幅十一尺長さ十一尺の大いさを有する臺所があるとします。そうすると其の床の面積は百二十一平方尺となります。ですから其の二割五分が丁度三十平方尺となり。之れが所要の窓の大いさであります。

之の寸法は三尺幅で五尺の高さの窓二個、或は二尺、五分幅の四尺高さの者が三個と云ふやうに考へられます。

窓の位置は臺所では內部の設備に支障を來たさぬ範圍に於てなるべく散らして之れを作る方が良い。

特に厳禁せねばならない事はこの窓と扉、窓と窓とに依つて對角線狀の氣流が起らぬやうにせねばならぬ事であるから上記の方針は適當な考へであると知つていたゞけるでせう。

又もし窓を天井に接して設けやうと考へるならば色々建築上の立場から直ぐ際に取りつける事はいけません、先づ一尺だけは離さなければなりません。

それから又よく臺所の窓は縦に長い物よりも、横に長い物で比較的形の良い者を見る事が多い。こう云ふ場合窓臺の高さを床から中途半端の處で決めてしまう事があり勝であります。

そう云ふ時には床上端三尺から四尺迄と決めてもらひ度い。そうすると卓子を置いたとしても他の流しを壁に造り付けても使用の方面から不滿足がない、窓に日除や窓枠の下部に薄手の絹地や、レース地で簡單な目隠し等を取り付ける事は勿論必要な事であります。

◇

次いで窓が理解出來ましたら今度は如何にこの室內を設備しようかと云ふ事に成つて來るのです。色々研究の結果建築家の手で出來上つた臺所はいよいよ室內裝飾家の手に

依つて其の利用に適合せしむる爲めに之れを設備せなければなりません。

この場合如何に家具や其の他の造付の造作又は器具を配置したら良いかと云ふ事は最も重要な事項であります。

この臺所の設備は元來工場の機械の設備のやうな者であつて、丁度其れが出來るだけ少數の職工に依つて無駄なくより少時間で、より以上の仕事をしようと心掛けるのと何等の差異がないのであります。

設備は働く爲めに殘された室の中央部分を離れて壁面に添うて自然完成せられる事と成るでありませう。

理論的に考へると床とか卓子等と云ふやうに仕事の行程上高さを度々變へる事や二つ又はそれ以上の仕事個所と仕事個所との間に空間又は距離のある事等は實に仕事を無駄にする重要原因であります。

あらゆる設備が仕事の順序を良くわきまへて、仕事を便利にできるやうにする事は何よりも心がけねばならぬ事であります。

特に設備上肝要である事は、釜、料理臺及流しの配置でありまして、第一は食物を煮て料理を作る場所、第二は食料を用意する場所、最後は食物や食器等を洗ふ爲めの場所であつて、之れ等を中心にして

一、食料設備
二、燃料設備
三、洗場設備

の三つの名稱に區別して取り扱ふ事が出來、計畫上大變便利であります。

第一の食料設備は左記の項目を含むのであります。

イ、物置臺、大いさは八平方尺から十二平方尺
ロ、冷藏庫や普通の戸棚や抽出し、釣棚等すべての食料を入れる場所又は器具、

第二の燃料設備は次ぎのやうに

イ、瓦斯や石炭の煮用の釜、大いさはそれ〴〵約二尺の三尺、又は二尺一寸の五尺と見て良い。
ロ、燃料を薪や石炭を用ゐれば其の庫、料理用湯沸し、釜、鍋等の器具の庫、

第三の洗場設備は次ぎのやうに

イ、流し（大いさは二尺の三尺前後）
ロ、水切板（八平方尺前後――流しの左右共）

へ、食器棚、其の他の器具入れ等、(棚や抽出し)と云ふやうになるのであります。

即ち臺所としては大體それだけの設備を主として考へれば良いと云ふ事に成るのでありまして、常にこの三項目に分けて室内の配置を考へるのが一番簡單であります。

先づ第一の食料設備は普通室の外部に別に一室を取るか仕事の中心を避けて適當な位置を選ぶかと云ふ事になり、第二第三は必ず室の內部に設備せねばならないのです。

食堂が如何なる側に近いか、それからストーブ用の烟突主幹はどこにあるかと云ふ事等で、大體流しと釜の位置即ち第二と第三の經濟的設備個所を決める事が出來ます。

流しが食堂の壁に近く位置すると云ふ事は、一番の都合の良い事で使用後の食器類を洗ふ事等を考ふれば最も便利で釜は論なく烟突の主管を近く取るのが自然經濟に成つて來ます。

もし又出來れば食料又はこの流しの設備を一つにまとめて卓子とか棚とか流し等を作る事が出來れば、高さの相似から自然仕事の能率を良くする事となるのであります。

そして釜即ち燃料設備の位置はこれ等とは少しく離しておくのが良いのです。

臺所內部の家具其の他の設備は、造り付けと据置と何れが良いかと云ふ問題が時々出るが、それは何とも云へないので兩者相互に其の目的を達し得ると答へられます。當然其の位置を變へる必要がないと考へらるゝ流し、戶棚等は造りつけにし釜の如き物は壁から適當の距離を取つて置いた方がよろしい。要はたゞ置いた物は其の背部や下部に塵が溜つて、掃除に少しく困難を感ずる點がありますから、之れを不潔に導く原因にし度くないと云ふことであります。

造り付けは其の點を考へると大變便利で、それ等の心配は比較的少ないと云ふ事が出來るでありませう。

次號では臺所家具を如何に設備するか、配置の設計圖を示して其の批評を致します。

時評

千葉龜雄

山本伯と誠意の價値

山本内閣が、あわたゝしく崩潰して、清浦内閣が煙のやうに現はれて來た。たとへ、同じ超然内閣であつたにしても、山本内閣が首相級の人物を閣内に集め、たとへ、火保問題や、復興案において臨時議會に屈從しても、來るべき議會において充分に政友會にむくひやうとした、とにかく、何等かの成績を、國民の前に提出しやうと意志したのであつたが、思ひ掛けもない虎の門事件が突發して、俄かにあのみじめな崩潰を見るに至つた。誰もがみな氣の毒だといふ。われ等は、この氣の毒が意義する内容について考へて見たい。

いわゆる憲政の常道から云へば、それがたとへ、どんなにすぐれた超然内閣であつたにしても、政黨を土臺としない超然内閣は所詮は反時代的である。民衆は、それが一時、一刻でも早く潰滅することをこそ悦べ、決してその存在を猶豫すべき理由がない。それなのにかゝわらず、なほ山本内閣の倒潰に對して、ひどく氣の毒を感じ、もつとやらせたかつたと思念する人々の多いのは何故であるか。それはたゞに山本内閣が、出生の始めから、偶然に震災の善後策にだけ忙殺されて、山本伯が長い間隱忍して蓄はへて來たところの、精力と、政策を充分に發揮し得なかつたことを惜むからの意義のみではない。たゞ國民は、伯山本内閣が政務に對して抱くところの「誠意」そのものに對して、相應に熱烈な望みをかけ、敬愛し、期待して居たのである。それほど近ごろの民衆は、その生活を支配される誠意に飢えて居たのである。

なるほど歴代の内閣も、多くの政黨も、みな我れ勝ちに誠意を立て看板にしないものがない。が、みな有りやう、その誠意は、政黨人は自己の政黨力に對し、官僚人は官權力の執着に對する誠意であつて、一つも民衆に對する誠意ではあり得ない。これは、すべての官省に、議會に、われわれが、たんのうするほど見せ付けられて居る現實の相では無いか。われ等はもとより、理窟の上から、内閣が政黨の上に立つべきものであることを肯定するのではあるが、さてまた近いところで、故大隈侯の憲政内閣や、原敬氏以來の政友内閣の實情を默想して來れば、理窟はどうでも、彼等政黨人が政務に對する心狀において、堪へられぬ不快と嫌惡を持つことを禁じ得ないのである。かれらがいつも誠意を看板にかけて、鼻むけのならない不誠意を働いて居るからである。しかもその不誠意を立派に成效させるものが、いつも不幸にして、彼等にあたへられた政權の至上力に有るといふことは抑も何といふ不合理な話か。

で、伯山本の他の萬事を疑つてもよろしい。しかし、伯山本が、その内閣によつて行はうとしたところの、執政の誠意に對しては、誰人も多く疑はぬであらう。といつて、彼もまたもちろん人間である。殊に藩閥愛に執着する強固な偏愛性もある。が、彼がかの内閣の國政の上に立つて、現代の民衆生活に何等かの幸福になれよかしといふ信念から、政治を行はうとした微衷だけは確かに認めてやるべき價値がある。彼がそれほどの熱情を持ち合せながらも、なほ審議會に屈し、政友會に屈したのは何故か。それは彼が誠意が無いからでは無くて、却つて彼の復興に對する誠意が強かつたためである。誠意はある。たゞ、彼の年齡が、彼が性來持合せた剛腹と、機略の二つを全く硬化して了つて、その誠意を充分に遂成させる機會を與へなかつたものでは無かつたかとも疑はれる。尤も伯山本の心機關の生理的硬化が、果して事實であるとすれば、伯山本は生きて居ても、それは形骸だけの伯山本に過ぎない。たとへなにほどの誠意があつても、彼を再び國政壇上に立たせる可能性は無いのではあるが……。

が、とにかく、現代の民衆をして、その反憲政的なものを超越してまでも、政治の誠意を擇び取らしめやうとする理由はどこから來たか。これは何人も、充分に考ふべき重大な價値を含むものである。

それとともに、われ等が山本内閣に多少の希望をつないで居たのは、系統や思想の雜多な閣僚中に、多少でも現代思潮の一部を垣のぞきし得る程度の、一二人があつた強味である

普選案が問題になり、土地國有が一寸なりとも彼等の話題に暗示された進潮は、みなそれ等一二人の存在によるものであつた。われ等はもとより原則として、職業政黨や、官僚政治家に、多きを望むものではない。たゞあの内閣において、そういつた暗示だけでもが、假にも舊式政治人を刺激したことは極めて稀有な機會だと思ふ。元來が、何よりも時代を理解することを、政事人の務めだと考へぬやうな、日本のやうな政事人の群在することは、恐らく世界の文明國にあつて、最も稀有とすべき現象であらう。

清浦内閣と文教

山本内閣がたほれた。清浦内閣が後をついだ。もし山本内閣の超然内閣をもつて、時代に逆行したものとすれば、清浦内閣は、更に數倍の輪をかけて時代と逆轉したものである。内容において、精神において、すでに信念がなく、誠意がなく、理想がない。現はれた外面について議論するのは末の末である。貴族院の廢止が民衆の口頭に上る現代に、貴族院議員だけで固められた内閣が現はれた。全く上院一院制度である。内閣の中心たるものが、政友會を上院に變へたやうな研究會の人々である。田中前陸相が、大つぴらに福田氏を排斥して宇垣氏を推し、研究會が有松氏の内務を否定して水野氏を据ゑ、政友會が江木、藤村氏を忌避して、大木氏退却の幕をひらく。そして首相が御尤もとして凡ての無理を通す。さらば眞正の内閣組織の責任者は誰であるか。はた、清浦氏はこの内閣をもつて、どんな時代的な、公平な政治を民衆の上に統治しやうとするのであるか。沙汰の限りである。もつとも奇妙なものは江木氏の文部である。氏は仲小路氏とともに、何事にも意見をはさみ、その言ひ前を押し通すので、默徳を主義とする上院の間に、一種の硬骨漢と考へられ、民間一部の老人達から、痛快がられて居る名物男である。が、勝手な物言ひをいつの場合にも遠慮なく言表することが、必ずしもその識見のすぐれたことと、時代常識に先んずる洞察を證明するもので無い限り、氏の名物男たる事實は、決して七十二歳の氏が、大正十三年の文政の衝に當る理想者たる權利を保障し得ない。わづかにわれ等の記憶する印象によるも、氏はいわゆる梅川忠兵衛事件攻撃の立案者であつた。或る一教授がある官立學校の校長を排斥しやうとした。そして校長に對する有る事無い事の彈劾事實を或る方面に密かに提出した中に、學生が或る祝祭日の餘興に、梅川忠兵衛のかけ落ち劇をやつたといふ一項があつた。江木氏は、それを最も有力な學

風廢頽の實例として、しかもそれを貴族院で、堂々たる彈劾をやつたものだ。吾人は、今それに對してとかく議論する興味も持たぬし、また必ずしも學生に向つて、梅川忠兵衞劇を奬勵するものでも無い。が、氏が當時の論點において、氏が、「驅け落ち」といふ常識だけのものを見たことの外に、それの藝術的醇化について何ほどの知識を持つものかを私は疑つた。そして、なぜ、藝術の見地から、それぐらゐのことが許せなかつたかを怪しんだ。また、三味線による日本劇の戀愛を學校で演ずる事實を批難するに値するとするならば、西洋樂によるロメオ、ジュリエット劇や、その他の西洋戀愛劇の餘興が、多くの官立學校に演ぜられる事實を氏がなぜ批難しなかつたかを怪しむ。少くとも氏の藝術に現はした一片のかうした藝術觀や道德觀念さへもが、現代から將來に向ふ敎育思想の妥當性と、果して何等の矛盾がなくして並行されるか、どうか。氏はまた東洋儒學の主唱者として、東洋文化學院の主腦者であると記憶する。そして日本道德は、たゞ儒敎の復興によつて、始めて維持され得ると思ふ人士の一人のやうに思ふ。が、少くとも、韓愈も說いたやうに、道德が社會意識の派生だと思惟するとする。すれば、支那廿四朝の、易世革命を基調とした支那道德が、果して萬世一系の皇統を持つわが國民の道德に、このまゝ當てはめられて差支へないものかどうか。たとへばそれでもまだよいとする。耶蘇紀元前**五五一年前に、春秋戰國に生れた孔子の實證主義的說理は、そのまゝ今日の文敎に强制されてよいものであらうか。**いなか。

政事家の能力の半は、いかに過去の傳統のみを大切に保存するかではない。いかに現在に合理的に立脚して、いかに鋭く、將來を洞察するかにある。ましてや文敎の職能は、出來上つた成人を啓發することではない。まさに開かうとする知識の芽と蕾の爲に、根に培ひ、土に施肥するにある。事業は全く來るべき世界に屬する。でなくてさへ、とかく將來するもの人間的なものに好意を持たなかつたわが文敎の府が、氏によつて、更に一層その誤まつた自信が固められるならば、禍は悉く來るべき靑少年子女の頭上にふりかゝる。われ等文敎に多少の關心の持つものが淸浦內閣の本質にかへり見て、ことに大きな關心を持つのはこの點にある。

普選の新意義

出來上つた淸浦內閣は、普通選擧に對してどれほどまでの注意を拂ふか。何人にとつても興味ある疑問でなければなら

ない。普選の能力が政府と民衆に採り上げられる場合にあつて、それは當然既成政黨等が撲滅される機會であることを暗示すると共に、殊に貴族院存在の根本的修正の傾向を、なをと急激にすることを意味するものともなる。貴族院內閣が普選を採り上げる刹那は、即ち或る點で、自分を葬むる穴を何ほどかでも掘る刹那である故に、普選を無造作に取扱ふ事を彼等が躊躇するに無理がない。が、彼等がそれを忌避するその事がまたすでにどうしても、普選を急速にものせねばならね必然の理由ともなる。

一體われ等は、わが國民の政治的良心の存在を疑ふものである。それをなぜかといふに、わが民衆は、政黨が橫暴であるとか、議會が下らないとか、內閣が超然だとかいふので、とかくむやみに攻撃する。惡いと思ふものを批難するに別に議論はないのであるが、たゞそれで自分等が、立派に役目を果して居るやうに考へて居るのが不思議でならないのである。なぜなら、一體この橫暴な政黨を、下らぬ議會を、もしくは非立憲な內閣を作り上げて居る支持者は誰であるか。誰でもない、民衆自身では無いか。第一いかな政黨も、議會、內閣も全然民衆の支持なしに出來上り得る筈は無い。たゞその場合の民衆の支持は、民衆の無知が支持する支持であつて、民衆に自覺と聰明さへ加はつて來れば、その支持力は、別に攻撃や批難しなくとも、雪達磨のやうに自然と消滅する支持である。然るに現代の民衆が、いつの間にか、それが自分が作り上げた映像であることを全く忘れ果て、何か突然に眼前に現はれた魔物のやうに考へ、われ劣らじと攻撃非難の洗禮を浴せ、單にその咒符によつて怨敵が退散すると考へる。またもしくは、それだけが自分達の合理的な役目だと思惟し、自惚して居る錯覺は、やはり民衆が、自己の爲の政治、自己の爲の社會といふ自覺までに立もどつて來ない證據である。自分の眼がわるいとて、自分の鼻がそれを攻めたところが、他人には一向交渉がない。それを他人の悉くが交渉でもあるかのやうに、自分の眼や鼻を他人の前に攻撃して、さも自己統治に敏感に滿ちてるやうに思はせやうとするところの、民衆の迷蒙もまた救はれない。

民衆の迷蒙は、政治といふものをもつて、何か非常に特殊な技術として考へるところから始まる、その興味を利用して、職業政治家や職業政黨が生れた。そして民衆の利福の爲に選ばれた彼等が、かへつてその權力を利用して、民衆の禍を來すやうな不思議な機關となつた。政治は元來職業ではない、また在つてはならぬ。政治は生活の一局面に過ぎない。

民衆全體の利福を増大するための、生活の一様式に過ぎないのに、それを職業とすることにより、職業と考へる爲に起る收得心理が、かの職業政治家、政黨屋を驅つて、當然民衆に與へらるべき全體の利益から、亂暴にも、自分だけの私益を獲得しやうとするに至る。だから民衆が、當然享け得るべき筈の、政治から來る民衆の利福を、完全に享受しやうとするならば、どうしてもその手始めは、先づ職業政治家と政黨人の、政治區域からの放逐から着手されねばならない。そしてその着手は、民衆が、政治が別に特殊崇高な技術でも何でもなく、單に個々生活の集積を處理するだけの機能であることを發見し、故にそれは當然に、自分達が自分で處置せねばならぬものであることまでに自覺するやうにならねばならぬ。かつてのギリイスにあつては、十八萬人の奴隷が勞働を受持ち、二萬人の自由市民が、政治と享樂に參加して居た。今日は萬人に勞働の義務があると共に、萬人に政事する責任がある。また享樂する權能がある。

故に政治は職業政治家の私有ではなく、また職業政治家の占有でもない。もともと民衆の資産である。然るに今更に普選權利が與へられるとは何ぞや、制限普選で始めて與へられる豫想に、隨喜し、歡喜するとは何ぞや。かゝ政治者の役目は、民衆の公僕として、それをより好い方法に差し向ける監理を依托されるだけに止まる。後見人の番頭から財産監理を引き渡されて、番頭からその財産をもらつたやうに、歡喜する馬鹿息子が世間にあるかどうか私は知らない。先づ民衆の自覺にかへれ。そして職業政黨と職業政治家を、その心理と事實から放逐せよ。普選は默つて居てそこに生れて來る。

テロリズムを排す

世界は一九二三年九月の地震と火事によつて、自然力のいかに盲目で、慘忍なものであるかを充分に味はつた筈だ。自然力は即ち物理力である。目的をも、意義を持たない力の堆積である。その物理力が人間の手に移された刹那に、人はあの慘忍な鮮人慘殺や、社會主義者の刑殺を見た。物理力の存在はたゞ數と量に依頼する。その物理力をほろぼすものは唯だ二倍の物理力である。二の物理力を壓迫するものは、唯だ三倍の物理力である。かくして物理力だけを比べて行つた日には、たゞ、最大限の物理力を持つたものだけが存在を許されて、より少ない力の一切は、悉く世界からその存在を拒絶される。兵力によつて、世界統一を夢みるものの可能性はここにおいて是認されるであらう。けれどもそれは、事實にお

いては統一ではない。他の一切を絶滅した後の唯一が生存して居るに過ぎない。幼時のアレキサンダア大王が、父王が近國征服の勝利の日に、自分が生長した曉に、征服すべき國土がなかるべきを悲しんだ心理がそこにある。マレンゴオの戰勝の日に、ナポレオンが感じた勝利の悲哀がそこに生れる。破壞をいくら重ねても、そこに統一と融和の芽が決して生れないからである。

然るにわが國は震災以來、恐怖主義といふべき空氣が、どことなく漂つて居るやうに思はれ、凡ての人は、底知らぬ不安にをゝのいて居る。けれども物理力の發動の大規模から見たならば、どこの國でもあつた昔の軍國時代の方が、ずつと大袈裟で慘酷なものであつた。けれどもそれが割合に、その頃の民衆の神經を顚動させなかつたのは、一に彼等の無知と非人類愛の慘忍性が、平氣で物理力をそのまゝに肯定さして居たからである。今日の物理力の發動の量と數が、昔時にくらべれば何千分の一にあるにもかゝはらず、それが昔に比べて民衆の神經を搖動する影響のずつと莫大であるのは、却つてその發動の稀であることにあり、また、彼等が人類愛を肯定し、人類が、次第に物理力と自然力から解放される將來を信ずる時に當り、かくも盲目な物理力を用ゐるものの、未だに存在することに驚く、その否定と悲しみから來る。更に他の一つは、近代人の神經が、極めて纖細であり、敏感であるために、一つの恐怖に當面して、すぐ過大な想像を生むやうになつたところからも來る。

そこで爲政者の手心が大切になつて來る。爲政者はまづこの場合において、無用に民衆の神經をいらだてるやうな、また神經を無用にいらだてることによつて、意識の混亂を起さないやうな風に政治を仕向けることが何よりも必要である。まづ神經を沈靜さして、平靜な意識に還らしめる政治が何よりも肝じんである。人類が生れてからまだ一萬年を經ない。自然人であつた人類は、たかが一世紀や二世紀の文化では、その自然人であつた潛在心理を決して埋沒し得るものではない。だからいさ言論も、知識も、理性も、何の役に立たぬやうな危機に立たせられると、彼等は、すぐ原始の自然人に還元して、唯一物理力をもつて抵抗を試みやうとする。かうした危機に人類を立たせ、そこに追ひつめることは、ひとり社會の破滅であるばかりでない、直ちに人類そのものの破産である。

然るに之が物のわからない爲政者であると、向ふが自然人に還ると同時に、自分もすぐ自然人に還る。そして物理力に

對抗するに同一の物理力を持つて行かうとする。そこで豫見されるものは、たゞ破壞力の交響樂である、その破壞力の交錯した、ものすごい加速度的驅け足である。社會は惡よりただ最惡に進むだけだ。

爲政者よ、覺めた人類は、どんなことをしても破壞力を喜ぶものではない、たゞ喜ぶものは創造であることを意識せよ、そして破壞を以て、破壞に向ふ政策を捨てよ。凡ての人類もまた破壞によつて克ち得るものは、たゞ破壞に過ぎない事を考へて、原人に還元する無知から解放されようでは無いか。たとへ過去のどんな手段に依賴したにしても、それはわれ等が已に墓場に送つたところの、蒙昧な過去人の事業ではなかつたか。將來を創造するものは、たゞ創造の歡喜たゞそれだけである。

イバニエスが來た

スペインの世界的作家であるところのウィンセント・ブラスコ・イバニエスが來た。イバニエスは、やはり想像した通りのイバニエスであつた。彼はおそろしい讀書家ではあるが、觀察に思想家といふほどでは無い。たゞその讀書と體驗と省察から得た題材と創意を、驚くべきスケエルの大きな舞臺にあてはめ、かつ尖銳な社會意識と時代批判を、煮え立つやうな熱情をもつて飛躍させる點において、現代の世界文學に有力な地步を占める作家である。が、一方において、ヴエラスケスや、ゴヤを生んだ南歐スペインに生れて、美に對する憧がれの情緒線が、強く、太くその血管に潛流する。もし彼を前者とし、かれが平生歐洲新人の日本批判に耳を傾けて居るならば、日本は或る點まで、かれの讃稱を購ひ得ない國家であつたらう。なぜなら、かれはスペインの文壇が生んだ最前線の人類愛の高唱者であり、從つて、軍國主義を蛇よりもいみ、きらひ、指彈する作家だからである。かの諸作を通じ、かつ「革命のメキシコ」を讀むものは、最も明確に、彼の意志の表象を知り得る筈だ。けれども、彼はいはゆる軍國日本については何も云はなかつた。たゞ彼は多くの世界週遊家のやうに、富士山を讃美し、鎌倉大佛の雄大や日光の莊嚴をたゝへ、京都奈良の古都美に醉ふてこの山を去つた。但し去るに臨んで、この過去美のイメエジも、何ものかに次第に崩されつゝあつたとほのめかしたところの、その「何ものか」とは何ものであつたか。何にしても日本に來たイバニエスは、やはり多くの世界週遊者のやうに、この日本をもつて、やはり世界週遊家の觀賞品としての、舊日本に押し込めやうとする流

派の一人である、恐らく彼が「何ものか」といふのは、歐米化の新日本そのものの幻滅ではなかつたか。が、われ等は一人の日本人として、一切の世界週遊者の、かうした身勝手な批判には、何等の共鳴をも感じないものである。けれども、他方から云へば、そこに南歐詩人イバニエスの作物の一傾向をつくるところの、ロマンチツクな美の憧憬心を明らかに認め得るとも云ふものである。かくしてわれ等は日本を訪れたイバニエスには、大した啓發を受けなかつたけれども、それが彼の作物を、相かはらず、異彩ある世界精神を表現した、作物として尊敬するには少しも影響しない。

廢娼問題是非

廢娼運動が合理であるか、否かを今更議論する餘地はどこにもない。たゞ、現に在る廢娼運動や、議會に上程され是非された程度の廢娼問題には、われ等は何等の注意をも拂ひ得ない。樓主があり、女衒があつて、始めて娼妓が生れるのではない。貞操を賣つて生活させねばならぬやうな、貧乏に追ひ込む社會組織が原惡なのだ。また貞操を賣つて恥ぢないやうな、女性を生んで置く教育の不平等と、それを不平等ならしめる社會制度の無知が原惡なのだ。また兩性をして、適當な年齢に結婚せしめ、性慾を調整させ得ないところの、生活資料の分配の不平等が原惡なのだ。また女性の貞操を、金錢によつて、或は暴力によつて、心のまゝに支配してよいものと考へるやうな、人格の自覺を男性に與へないところの日本の傳統道德が原惡なのだ。これ等一切の原惡を放つて置いて、玄關ばかりを綺麗にしやうといふものを、歐洲では「白く塗られた墓」といふ。そういふ仕事はペンキ屋に任せれば十分である。われ等は、まだペンキ屋として、營業税を政府に收めては居ない。われ等はペンキ屋よりもむしろ墓掘りをえらぶ。

關西聯合婦人會の組織と其活動

恩田和子

日本の婦人は思想上に、又、利益、權利其他すべての方面に於て禁錮狀態の生活をして來たが、もう我慢が出來なかつた正しい道理の上に立つた自由の世界に自己を生かし伸展させやうといふ意志と努力が熱烈になつて來たと同時に、天と地と二つのもの、恩惠によつて、樹木が生存成長し得られる樣に、人間社會も男性と女性の協力をまたねば其文化生活は生れ得ない。缺陷だらけでしかも行きつまつた社會の改造者としての責任を自覺し、大正七年頃より關西の婦人界は潑溂として動いてまゐりました。大阪に十日會が生れ、京都にPL會が生れたのも此時であります。婦人の集りといへば家事研究か慈善の相談に限られてゐ　頭の持ち方が、氣持ちのよいほど一擊に破られて、經濟、勞働、教育、政治、法律、外交、藝術の各方面の研究をはじめ、稍系統の整つた運動さへ行はれて來ました。大阪の婦人は理論よりも「實際」の力のつよさを十分に知つてをる、力！　力！　個々の生きた力、更にそれを集合統一した力、主義や目的の上に多少の差異はあつても、共通の大目的のためには團結して强い一の力となつて働くべきである。そして又個々の會の主旨目的を達すべく助け合ひ連絡しようといふ度量と聰明さを持ち、その希望に添ふ新しい完全な機關を要求するに至りましたが、これを組織することはなか〳〵容易なわざではありませんでした。

折しも大阪朝日新聞社に於ては時代の傾向、婦人の要求を洞察し婦人團體大團結社の產婆役をつとめることになり、出來あがつたのが大正八年十一月二十四日同社主催で開催の婦人會關西聯合大會（現今は全關西婦人聯合會と改稱）であります。新聞社が關係したといふことは報道機關を以て敏速にことが運ばれた便宜のみでなく、一般社會の意志を代表して、婦人の自由を認め、内的外的にも婦人の伸展向上の希望——即ち日本婦人への聲援と見なし得るのであつてうれしく思ひました。

參加の婦人會は東は名古屋、北は金澤、西は中國四國九州の各地に於ける主なるもの百七個、これが代表者二百名で、午前中は大朝社大廣間で會の趣旨、申合の討議をいたしました、熾んな辯舌を戰はした結果つくりあげられた申合せは、(一)常に進歩せる時代の思潮を汲み見聞を廣くし思想の向上を計る(二)品性を高め趣味を豐かにし社會の一員としての强き信念と活動力を養ふ(三)現代に適合せざる陋習を斥け生活の改造に力を盡す(四)會員は互に協力し組織的に行動することによつて更にその結果を大にすることにつとむの四ケ條、附記として毎年一回聯合大會を開く、各地方に於ても毎年一回以上地方大會を開き聯合大會との連絡を計ることが決議されました。午後は中之島中央會堂で大會を開催し、代表者の五分間演說、平塚明子、塚本濱子、山田わかの三女史、峰道文學博士の講演がありました。會があのやうに終始自律的に眞摯に、整然と行はれたことは第一回として豫期しては居りませんでした。關西は歷史的にも意義ある社會的運動の發源地でありました。今、最も重大問題である婦人運動の機關の組織と發足が、此地から踏み出されたことも日本の文化史上特筆に價しませう。

大會後各地に於ける婦人會には改革の鉈が下されました。新しく出來た會もかぞふるに暇ない位でした。地方の婦人會は實に秩序立つたものです。色々の約束が會に於いてなされても都會ではともすればそれを日常生活に實行することを怠ることがありますが田舍の婦人方は約束は固く守られます。時間の勵行なども地方の方が嚴守されてゐるやうにおもひます。村には村の婦人會があり之を統轄したものに郡婦人會、縣婦人會、地方婦人會があり、恰も芋のつるのやうに一點を引けば全部が頭を揃へて動いて來るやうに出來てゐます。田舍では婦人と周圍の生活が都會に於けるそれのやうに分離してゐません。社會的の働きは都會よりも仕易い。規模は小さいが徹底した仕事をしてゐるところがずゐぶんあります。ある地方では婦人が村會議員の投票をしてゐるときいてゐます參政權の道はかへつて田舍の婦人によつて先に拓かれるかも知れません。

第二回大會には各會から三十二の議案が提出されました。それは主として家庭改善、因襲制度の改善、法律改正、廢娼禁酒問題などでした、この頃は米國に於て排日運動が盛んな時だつたので大會の決議によつて在米同胞に向つて正義と人道のために努力奮闘されんことを望むの電報を發送しました。

第三回大會には英、米、支、朝鮮の代表婦人も加はつた、討議事項は各方面にわたり熱心に研究されました、自由へ、活動へ、數歩を踏み入れて來たことは提出案が前回に比べて社會問題、人類の問題が多かつたのによつても知れます。華盛頓會議の最中だつたので大會より米國婦人團へ軍備縮小の合同的意志表示の決議を打電した、之に對して米國大學婦人協會の紐育州支部長エフ、イー、ペーツ女史から、大いに共鳴全世界の婦人がこぞつて軍縮のために働かうといふ電報が來ました。又、物價調節が行はれず、對外貿易の不利は勿論國民全體の日常生活の上にも容易ならざる困難が來つゝあつた際なので大會の名を以つて政府建議書を提出しました。

第四回には百八十九名の代表出席、提出の重要議案は七十餘で、法律改正、男女共學問題、婦人と事業、禁酒禁煙婦人、少年、幼年雜誌に警告を發すること、府縣社會課に婦人顧問設置の件、兒童保護、朝鮮人に關する問題、節約、衞生、住宅問題などが主であつた。主催者側からの提案に「官私立大學に女子の入學を許し男子卒業生と同等の資格を與ふること」「關西方面に女子大學の設置」「關西方面に音樂學校、體育學校其他各種專問學校の設置」「高等女學校內容の改善」「修業年限の延長、高等科研究科の設置」「公立の女子學校教員の待遇を同程度同規程の男子の學校教員の待遇と同等になすこと」。

週刊朝日よりの提案には「國定教科書の編纂に關係する教科書調査會に婦人委員を加ふるの可否、若し可とすればその目的を達すべき方法如何」がありました。各方面よりの提出案は皆賛成でその實行に努力することになりました。當日代表者の一人として出席してゐた米國人マコーヅランド女史は日本婦人が政治教育、生活、社交其他各種の問題の研究に熱中してゐる有樣を、紐育タイムス其他に詳電して米國婦人に周知させたいとの希望をのべたので大會の名を以て長文の電報を發した。

大正十二年九月一日關東大震災にあたり聯合會は三日より總動員にて衣類の募集を開始、五日には神威(かむい)艦(かん)に托して東方に發達しました、同月十五日迄十三日間奔走によつて集めた品が二百萬點でした。又、大阪への避難者で府市の收容所に入つた人々に對して、會員が親しく慰問の上必需品を頒ちました十月十五日に開催された第五回の大會は、今後の救護方法の研究討議を主題とし代表者二百十二名の會合によつて熱心にとり行はれました。問題は子供及び學校問題が十四件、その中には學用品を送ること、バラック立の學校を建設すること、

子供を關西に收容し身邊を婦人會にて世話すること、夜間高等女學校設置などの具體案がありました。別に大阪私立中等學校長一同より罹災私立中等學校の復興と教職員の救濟についての希望等を一ヶ條提出。

婦人及び職業問題は八件で、授産部と托兒部を設けて婦人及び子供を引取り世話すること、復興院の參與に婦人を任用させるべく運動することなどの案がその中にありました。寄附及び救濟に關しては七件、節約問題は五件で今後一ヶ年間贅物新調を絶體に中止することの案などがありました。朝鮮人問題三件、思想問題五件、その他廢娼廢酒、などでした。英米佛支への感謝の電報もこの席上より發せられました。即刻より運動に着手したのは蒲團三十萬組の募集です。會員の熱誠によつて十一月末までに二萬數千圓の金と五千枚の蒲團毛布が集まりました。大阪に於ては會員が自動車に分乘し、青年團、少年團、在鄕軍人團などのお手傳を受けつゝ五日間大阪全市を隈なく廻つて蒲團を貰ひ歩きました。ある時は人出の多い辻々に立つて一錢二錢の寄附を請ふたこともありました。

十二月を以て第二回の救援事務を打切りましたが、關東のために關西婦人が爲さねばならぬ仕事はまだ澤山あります。新年からは更に陣を立て直してはたらく意氣込みでをります。全關西婦人聯合大會の經過は大體以上の通りでありますが、なほこの間に佛國答禮大使ジョッフル元帥一行の歡迎會、英太子乘組及び供奉艦將卒一同への歡迎簽寄贈、ジエーン、アダムス女史の歡迎會と講演會を大阪部の手によつていたしてをります。

大阪は昔から平民の都で東京の婦人方が煩はされてゐるやうな階級的束縛はありません。その上思想と生活がどこまでも實際的でつよいねばり氣の多い力を持つてゐます。自由な世界とつよい力の上に金の力を備へ持つてゐることは全く鬼に金棒です、大阪婦人は燃え立つてゐます。大阪婦人界の明星といはれる人々の顏が一年或は半年位の短かさでくる／＼と變つて行つて居るのを見ても、此地の婦人の激勵ぶりがうかゞはれませう。そして太陽が燃え狂ひながら一つの大きな軌道を殘しつゝ進んでゐる樣に、大阪婦人のあとには幾多の創造と建設が殘されつゝあるのでございます。太陽はいつも同じ光ですが大阪婦人は今日は昨日より、明日はけふより大きく　しくなるといふ風です。それは大阪婦人のみでありません、この聯合會を中心とした全關西の婦人方たちの生活及活動狀態です。

文學博士 松本亦太郎著

心理學講話

定價四圓
送料二十三錢

社會學、倫理學、美學、教育學その他萬學の根柢學として何人も心理學を必要とす、本學に通ぜずして人間活動の整理は難く、群衆心理、社會心理を知ることも出來ない、本書は我國で心理學の最高權威たる松本氏が、新らしき形式の下に精神動作、人間工學、能率學、智能測定學、産業心理學、行動學を十餘年研究の結果になつた有益な文獻です、本書は初學者にも、了解出來るが、總ての學、及事業に携はる何人も必讀の價値がある。

第十版

本書は火災によって全部焼失しましたが、此程漸く出來いたしました。

東京 改造社 振替長野三二八〇

文藝欄

戯曲　残りもの同志　久米正雄

小説　鏡　南部修太郎

短詩　偶成三篇　佐藤春夫

童話　頬髯の刑　山村暮鳥

長篇　出世五人男　宇野浩二



殘りもの同志（一幕）

久米正雄

——そのかみ、予が一介の演劇學生たりし頃、いたく愛讀せしさる猶太人の名作より飜案し得たるものゝ、特に此處に匡底より取り出して、かのX女に與ふ。吾ら實に此作中の人々なればなり。——

人物

佐野恒子。　裁縫所の持主

大澤三枝子。　音樂學校生徒 ｝恒子の家の同宿人

坂本益雄。　跛者 ｝恒子の家の同宿人

場所

東京の山手に近きところ

時代

現代

情景

(恒子の仕事部屋。古い洋式の室なり。右手と正面とに扉。中央には幅廣き肱掛椅子が置かれ、その側に道具が亂れてゐる卓子。卓子の兩端に裁縫機械が据ゑてある。右の壁には三ツ折の大鏡。隅に衣裳戸棚。之より程近きところに仕立の上着ののつた腰掛が二つある。夕。)

恒子。(正面の扉を遽しく排ね開けて出ていつたが直に一通の手紙を手に持つて歸つてくる。忙しくその封を切り熱心に讀む。欣喜して)ちよいと！――ちよいと！(さう呼び乍ら復手紙に見入り然る後再び呼ぶ。聲高く、)あなたつてばさ！　三枝ちやん！　三枝ちやん！　三枝ちやんてばさ！　まあ憎らしいこと。

三枝子。(登場。音樂會か芝居でなければ滅多に着ない外行の晴着で。わざと恒子の聲を眞似て)なあに？　なあに？　なあに？

恒子。是をお讀みなさいよ。早く！　別府さんからなの。

三枝子。(手紙を手に取る)まあ！　ほんとに別府さんからの御手紙ね。噂をすれば影つて全くこの事だわね。それに屹度この手紙はあの方の脚本が採られたつて云ふお知らせなんでせう。ね、さうでせう？(手紙を見る)

恒子。(嬉しさに一寸頬を赤くし乍ら俯向く。)

三枝子。(讀み終へて)あら素的！　ちやあの方、ほんとに結婚を申し込んでいらつしたのね。まあ恒子さん、お目出度う！

恒子。(一寸冷靜に)あなたにも左樣釋れて？

三枝子。(尚手紙を見つめ乍ら)ちやなくつて一體何なの？　(調子を付けて手紙を讀まうとする。)エヘンだわ。(わざと壯重な口調で)『小生の脚本は愈採用せられてこの暮に上演されることに決りました。報酬の契約は一割との事。劇場支配人は、小生の作が上演の曉は、きつと大當りにあたるだらうと云つてました。』(數行を不明瞭な、鼻聲で、早口に讀んで、さて再び讀みつゞける)『さあ今度こそはあなたは僕のものだ！――小生はそれを考へると云ひやうのない嬉しさが込上げてくる。やつと是で胸を撫下ろしたといふもの、小生も是からは安心して、好いものを書いたり作つたりする事が出來る！』

（以下再び鼻聲で誤魔化し讀みをする、けれども直に、前より一層壯重な口調で讀みつゞける。）『あゝ、今、二人の前に、輝かしい日が、——あなたを引き込まさずにはをけない幸福が、待つてゐる。』（讀むのを止める）少し何だか變ね。でも何でもないんだわ。（手紙を恒子に渡す。さも懐かし氣に）まあほんとに、あなた、隨分仕合せな方ね。——お目出度う！（手を握りしめる）

恒子。でもさうでせうかねえ　？（と不安に、全身を輕く顫はせ乍ら、低聲で、獨語のやうに云ふ。）ほんとうかしら？（手紙を額に當て、それから唇に押し當てる。懐中からハンケチを取出し、兩眼の涙を拭ふ。）

三枝子。（そんな事には頓着せずに、嬉しさうにずつと恒子に近寄り）ちよいと、恒子さん！　私も隨分嬉しいわ。あなたのお陰で、ほんとうに。ねえ！　あなた、私今晩、下町へ行つたらたんとお祝ひ品を買つてくるわよ。よくつて？

恒子。（稍感動して）まあ、三枝ちやん！

三枝子。さうさう！　私の夢はやつぱし正夢だつたんだわよ。

恒子。（肱掛椅子にかけて）あんたの夢ですつて？

三枝子。（卓子から布を出して床に敷き恒子の前にひざまづく）まあ聞いて頂戴。私、英雄の夢を見たの。そりや偉い、見ない先から世間の人々が頭を下げるやうな。私、あんたの爲に、そりや勇ましい、調子の素的な凱旋マーチを夢で聽いたのよ。さうして天才や發明家なんぞの夢も見たの。みんなあなたの爲になのよ。

恒子。まあ！　嫌だ事。そんな話止して頂戴な！

三枝子。いゝえ、私、私が生きてる以上、あんたを讃める事を止めないからいゝわ。よくつて、だつて、あんたのやうないゝ人、世界中にないんですもの。——まあ、どうしてあんたは、自分なんかには見向きもしないで、姉さんばかしにお力をお盡しになつたの。

恒子。だつて、それが私の幸福だつたんですもの。今だつてやつぱしさうよ。妹が關西で早く畫家として世の中に立派に出ればいゝと、そればつかし樂しみにしてるの。

三枝子。まあ、そんな事、あたしちつとも幸福と思はないわ。私、いつもあんたがもつといゝ違つた幸福を得ればいゝと思つてるのよ。——人の妻になること、畢竟母になることによつて、愛したり愛されたりする幸福なの。

恒子。（昔を思ふといふ風で）私はとつくに、戀や家庭を唯一の幸福と思ふやうな考へから遠く離れちやつたのよ。

三枝子。まあ！　隨分。あんたは！

恒子。私の母が亡くなつた時、私の運命はちやんと極つちやつたのね——八つ年下の妹に對して、亡くなつた父母の役目を私がするやうに。私には隨分大きな、けれども神聖な目的だつたわ。私はその時他の事なんか考へる餘裕がなかつたの。でも廿歳代の始め——さうさう廿二三の頃、私にもやつぱし慾心が起つたわよ。妹が、私に厄介になつてきたなんて云ふことぢやないのよ——あら、そんな事を飛んでもない事だわ！　私、もつと他のいゝ事を願つたの。張りつめた生活、幸福——さうして——戀なのよ。その時分は、私、隨分よく泣いたものだつたわ、だから私の枕は、いつも涙で濡れてたものだわ。不幸な時代だつたのね。おまけに、怒りつぽい性までくつついてきて、とう〳〵こんなにひねくれちやつたの。

三枝子。（恒子をずつと近く引き寄せる）まあ、あなた！

恒子。けれどそんな慾心も、直になくなつてしまつたの、魔術師の手にかけられたやうにね。何しろ、あなた、妹の百合子は大きくなるし、あれの才能までどうやら熟し始めると云ふ譯でせう。私、もうもう全然自分と云ふものを忘れて、あの子が私の何よりの心掛りになつてきたの。

三枝子。それでみんな？

恒子。だつて他に仕方がないぢやないの？　そりや勿論妹が關西に行つたんですから、妹はもう私の直接の心配にはならなかつたけれど……私、一人ぼつちでせう、またぞろ古い慾心が、胸の奥に目醒めて來るぢやありませんか。けれど大丈夫、私は自分と云ふものに、ようく云ひ聽かしてやつたわ。私の青春は、幸福とか戀なんかを期待する權利を、てんで持ち合せてなかつたことをね。だから私、欲望の塊を私の胸から突き出して、根扱にしてやらうと決心したのよ。考へれば私、負惜しみに、人生の決勝點がとうに達せられたものと、自分一人で信じやうと努力してたのね。

三枝子。だつてあなた、その時別府さんを愛してたのぢやなくつて？

恒子。えゝ、その時分は愛してたわ。だけれど私は内心戰つてたのよ。私の生活が教へて呉れたのね、欲望なんか怺へて征服するやうに。私、斯ふ思つたの。――あの方は私には過ぎものだつて――

三枝子。過ぎものですつて？

恒子。（つゞけて）私、あの人には隨分苦勞したものよ。だから私、終にはそんな風に無理にも信ずるやうになつたの。――あの人が日となく私の家に訪ねてくるのはほんの氣紛れで、私なんかを訪ねるんぢやなくつて、私の家に泊つてゐる友達や、私の妹が目的なんだつてね。

三枝子。（横を向いて）だつてあの方が、なんであんた無しに訪ねてくるもんですか。あんたは第一、それをあの方の眼に讀んだ筈よ。

恒子。（急に微笑して）さう云へばさうね。ぢや屹度私の氣のせいだわよ。何しろ今が今まで、戀だの愛だのを棄てちやつて、人生を樹とすれば、私なんかは早枯らびた小枝に過ぎないんですものね。――

三枝子。（俯いた風で）まああなた――　隨分謙遜するわねえ。

恒子。（椅子から立ち上つて）けれど私　今は何だか元氣も力も復私の體に流れてきたやうだわ。――もう一遍若やかなくつ

ちや嘘ね、萎びて居たんですもの。——（感激に知らず知らず亢奮して）まあ人生、人生だつて！　享樂したいわねえ、清らかな、豊かな青春の泉の水、飲みほしたいわ、そして脈搏の一つ一つに、人生と云ふものゝほんとの聲を聽いたらどんなでせうねえ。——（夢見る人のやうに）あ！　三枝ちやん、一緒に歌ひませうよ。

三枝子。えゝ、私も歌ふわ（歌ひ乍ら右手の扉にゆく）

もろびとこぞりて　つかへまつれ

ひさしくまちにし　主はきませり……

（突然止める）あら！　坂本さんがいらしつたやうよ。（聞き入る）

恒子。（瞬間閃きの表情、輕く顫へてゐる。指を意味有り氣に唇につけて）默つてゝ頂戴。

三枝子。私、云つてよ！　みんな話すわ。だつてあの方だつてもお喜びになるに違ひないんですもの。もし坂本さんがほんとにあなたを愛してるなら、このことを聽いてきつと幸福に思ふ筈だわ。第一、そうぢやないとしても、あなたを手に入れようなんていふ坂本さんの野心を、安全に防ぐことが出來るといふものぢやないの。

恒子。でも後生だから云ふのはやめて頂戴よ。

三枝子。いゝぢやないの、私にお委せなさいつてば！……坂本さん！　坂本さん！

恒子。あなた、もう下町へ出掛ける時間よ。

三枝子。まだ大丈夫よ。……坂本さん！　坂本さん

坂本。（正面の扉に現はる。强度の眼鏡をかけてゐる。左の脇の下には撞木杖、右の下には書籍三四册挾み、手には麵麭の袋を持つ。）

恒子。（是より先、右手の扉より拔け去る。）

坂本。今晩は。何かありましたか。

三枝子。こつちへいらつしやいな！　早く！あのね、恒――
坂本。あんた濟みませんが私の荷物を部屋に運んではくれませんか。
三枝子。そんな時間私にはないわよ！　恒子さんが――
坂本。（袋から林檎を一つ取出して）林檎は如何です？
三枝子。（これを拒けて）まあ私の云ふことをお聞きなさいよ。いゝでせう。恒――
坂本。（眞面目に）腰かけてもいゝですか。（さう云ひながら痩せぎすな體を椅子におろす。）
三枝子。（眉を決して少し高聲に）恒子さんが別府さんから御手紙を貰つたのよ！
坂本。（居住ひを直し乍ら）ぢやあれの脚本が採用されたつていふんですかい。私も亦別府から手紙を貰ひましたよ。
三枝子。そんなこと私どうでもいゝわ。話つて云ふのはあの方が、恒子さんを貰ひたがつてゐることなのよ。で、とうとう結婚を申込んでいらしつたの。
坂本。（戰く。）なに？　ほんとに申し込んだつて？　恒子さんに？
三枝子。えゝそうなの。ですからあなた、恒子さんが戻つてらしたら、お喜びをおつしやいな。そしてあなた決して――（突然止める。）ほゝ、私くだらないこと云つて御免なさい。――（感激して）まあ、私嬉しいわ、何だか世の中の人がみんなして私と笑つてるやうな氣がするわ。ね、あなたもお笑ひになつて恒子さんのお目出度を祝つてあげて頂戴な、いゝでせう？　ぢやさうよなら。私之から一寸下町へゆかなくちやなりませんから。（歌ひ乍ら右手扉に歩いてゆく。）

もろびとこぞりて　つかへまつれ……

坂本。（最前から蒼褪めた顔をした彼は、彼女を呼び止めて）大澤さん！（吐き出すやうに獨語）畜生！
三枝子。（扉のところで是をきゝつけて、神經的に）まあ、畜生だなんて。私グズグズしてられないのよ。（退場。）

……（忿怒の餘り唸つて、杖を床に敲き棄てる。本や包を邪慳に椅子に投げ、呟く。）あんまり莫迦にしてやがる！
（手紙を上衣の内隠しより取出し幾遍も讀み直す。再びブーブー云ふ。失望した如く頭を低く手に抑へ、失神したやうに、茫然前を見つめてゐる。）

恒子。（登場。當惑し乍ら）今晩は！　坂本さん

坂本。（呟くやうに云ふ、見向きもしないで）今晩は！

恒子。（當惑して一寸彼を見たが、すぐ腰掛の上の外套の仕事にとりかゝる）

坂本。（尙同じ位置。神經質的に足で床を叩く。直に是をやめて、恒子を見ないで話をする）佐野さん、（ぶつきら棒に）別府さんの手紙を見せて下さいませんか？

恒子。（神經質的な微笑で）たいした色男からでもありませんよ。

坂本。（それには耳をかさず、今度は少し强く）別府さんの手紙を見せて下さいませんか？

恒子。（當惑した笑で、手紙を取出し、彼の方に投げてやる。）どうにでもお讀みなさいな。

坂本。（靜かに前に屈んで手紙を取り、讀み始める、呟く。）ふうむ！　さうか！（手紙を膝に落し茫然と前方を見つめる。獨語のやうに呟く。）こんな阿呆陀羅とは！

恒子。（驚いて彼を見る。）

坂本。（稍靜かに）こんな阿呆陀羅とは！

恒子。（冷笑して）誰が？

坂本。私ぢやない。（杖、包、本を拾ひ、身を起し、手紙を恒子に渡す。）

恒子。（懇願する如く）坂本さん、お氣を惡くしないで頂戴な。私、心細くなるんですもの。

坂本。私は部屋にゆくのです。どうぞお構ひなく。

恒子。そんな風に云ふもんぢやなくつてよ。あなたは私のお友達ぢやないの。(低聲で、當惑しつゝ)別府さんにも仲好くね。

坂本。そんなこと、お聽きしたくありません。私は自分が知つてる事丈を知つてるので。あなたを彼是なんか云ひませんよ。

恒子。ぢやなぜあんたはそんなに取亂していらつしやるの？　さうしてなぜひどく御自分をお責めなさるの？

坂本。それは……

恒子。そりや何よ？

坂本。(心の中で激しく苦しんだ後、決然と)それは私が憤激してるからです！　こんな靄のかゝつたやうな曖昧な甘文句を書き連らねやがつて。畜生いまいましい！

恒子。あんた、何をおつしやつてるの！

坂本。(憫みを乞ふやうに)佐野さん、私の心はあなたにお分りの筈です、私があなたの幸福を願つてることを。私は、私は、私の悲しみや望みなんかを、地べたの奥深く、敲き埋めてやります、さうしてあなたの爲に笑つてさしあげます――若しあなたが別府の手紙からお思ひになつてゐるやうに、事柄が運ぶなら。

恒子。(眞面目に)私が別府さんの手紙から思つてるやうにとは？

坂本。(稍顫聲で)――私を憤激させ、私を躊躇はせたことが、軈てあなたにも起るでせう。(必死的に)私は、あなたの白内障を癒す外科醫でなくちやならないのです。

恒子。(何が何やらさつぱり分らずに)まあ大層廻りくどいことを仰るのね。(心配さうに)一體なんだつて云ふのですの？

坂本。(彼女を見ないで、非常に激動して)別府があなたを思つてないのです！

恒子。（色を失ふ）私を……？

坂本。あなたぢやなくつて、あなたの妹さんです！

恒子。（思はず聲をあげる）あゝ！――

坂本。彼奴は私に書いてよこしました。百合子さんと始めて遇つたとき、俺は神の美にうたれたやうに思つた――それから激しい情熱に驅られるやうになつた。なんて書いてよこしたのです。

恒子。（椅子の上に倒れ卓子に頭を俯伏して泣く）何もかも、みんな、彼奴は私から取つちやつた！（深き悲痛によゝと泣く頭の毛を挘るやうにして亢奮する。）

坂本。（本と包を床に落す。跛びきつゝ彼女に近寄り劬はるやうに彼女の手を頭から離してやる）あなたが泣きなさるのは尤もです。

恒子。（ヒステリカルに）みんな取つてつちやつたのです！學問をする野心も、若さも、望みも、おまけに今は……

坂本。おまけに今は？（答がないので）慥かに別府はあなたを愛してなかつたのです。それにしても若しもこの曖昧な文句がなかつたならば……

恒子。（嘆息して）坂本さん、私、もう生きてゆく氣がたくなりました。

坂本。莫迦な！

恒子。私、心臓が二つに裂けたやうな氣がするわ。私の魂は砕けて空ろになつちまつてるんだわ……恰度奈落の底が私の足下に開けてるやうに……何の爲に私は今、生きねばならぬのかしら？　私、もう生きたくない！

坂本。莫迦な！　戯談でせう！

恒子。私はもう生き盡したんだわ……

坂本。（憂色をさへ帶びて）あなた、どうしたつて云ふんです？

恒子。(決死的に)私は、何を話してるのか自分ちやちやんと知つてますわ。さうして何をするかも。

(緊張した沈默がつゞく。)

坂本。(彼女に接近してゆき、鈍い併し沈痛な語勢で)ちやあんたは——死ぬ氣なんですね。

恒子。(無言。一指も動かさぬ。)

坂本。(腰かけ乍ら始める)まあ、私の話をお聽き下さい。或時一人の男が——その男は不可解とか不幸なんかは露知らぬ、寧ろ幸福な人なんでしたが——どうした譯か、人生なんか生きてゆく價値がないと決めてしまつたのです。でその男は連發銃を買ひにゆきました。が、その途中で。街に非常な叫喚が起つたのです。大きな家が火を出して今にも火焰に呑まれやうとしてるぢやありませんか。突然、てつぺんの一つの窓のところに女の姿が見えました。消防夫が建物に一番高い梯子をかけて、一人の男が登り始めると云ふ事になつたのです。その男こそ、誰あらう最前の自殺の志願者だつたのです。彼はすぐ樣、女を窓の外に出し、後から登つてきた消防夫に渡しました。が、彼自身は復窓から家の中に入つてゆくぢやありませんか。さあ邊りの人達はみんな、今にも家全體が崩れ落ちやしないかと、恐ろしさに氣が氣ぢやありません。と、もう火は窓を舐めてます。人々はてつきり男は中で燒け死んだに違ひないと噂し合つてました。けれども男は燒け死にはしなかつたのです。直に彼は屋根に姿を出したのです、しかも腕に一人の嬰兒を抱いて。梯子はそこ迄はもう屆かなかつたので火消は繩を投げてやつたのです。彼は赤兒を繩で結へ下におろしました。が彼自身は最早助かる術もありませんでした、彼は兩手を胸に拱いて、眼からは熱涙が流れてゐました。一寸前まで、あれ程迄に死を求めた彼が、今は死せざらんことを熱望してるのです。いや、(彼自身も自分の雄辯に亢奮して)彼は生きんことを欲してゐるのです——其瞬間、彼に人の一生の目的が分つたのです、生きて善いことをしやうと云ふ。——

恒子。(稍怒つて)善いことをするんですつて!　私はもうたくさんだわ!

坂本。どうしてあなたはそんなに自身を卑しめるのです、恒子さん！

恒子。善い事をなさいな！　私はとつくにしたんですからね。私は自分の爲ぢやなくて、他人の爲に生きて來たやうなものだわ。世界中で一番哀れなものは私のやうな氣がしてよ。だから私一層死なうと思ふの。

坂本。（眼鏡の下からヂツと見て）あんたの妹さんの百合子さんは、あなたが別府に對してどう思つてらつしやるか知つてるんですか？

恒子。（うるささうに）彼妹がどう思つてるか、私知りませんわ。

坂本。何とか分りさうなもんぢやありませんか？

恒子。だつて知つてる筈がないぢやありませんか。そりや彼妹には別府さんに上げた位の手紙は出してやつたつもりですが。

坂本。でも百合子さんは、別府があなたに無關心でない位はその澤山な手紙で分る筈ですがね。

恒子。あなた、そんな訊問めいたことをなさつて一體どうなさるの？

坂本。（判決を下すやうな態度で）私はかう考へてゐます。あなたが若し現在心の中で思つてることを實行なされば――それを私は云ふに忍びない――（低く聲を落して）妹さんは別府の愛をお受けはなさるまい。いや寧ろあの女こそ死を決するかも知れない。妹さんが、あなたの死の原因を見てとつたなら、

恒子。こんなこと云つて、あなたは何を考へてゐなさるの？

坂本。あなたがたつた今お聽きなされた通りのことを。

恒子。（引き込まれるやうに）と云ふのは――？

坂本。あなたが、妹さんのなさりさうなことを信じなくちやならぬと云ふことです。

恒子。（忿怒にみちて）妹は前には私の命を縮め、さうして今は——私に死ぬ事をさへ邪魔するのですね！（頭を卓子に沈める）

坂本。（感激して）這は恒子さんだ、昔の恒子さんです。

恒子。（激しく泣く。）

坂本。あなたが泣きなさるのも尤もです。お泣きなさい、恒子さん、（彼も亦涙ぐむ）お泣きなさい、涙が最早流れ出ぬまで。しかし。涙が一度盡きたとき、眼を乾して下さい。そして二度と泣きなさるな。（聲音で）永久に、永久に、あなたの涙の源を干し乾かして下さい。それは私自身も嘗めた方です。お分りですか？ あなたと私のやうな人間、人としての幸福を奪ひ去られた人間は、いつそ思ひ切つて泣き盡すか、（亢奮して、强く）いや永久に、塵ほども泣いちやならないのです。私は今の今まで、それこそ一遍だつて泣かなかつたのです。氣をしつかり持つて下さい、恒子さん、あなたの兩腕を胸に當てゝ、靜かにあなたの行先を考へて下さい。——あなたの心が命ずる通りに。

恒子。（泣き續けてゐる。）

坂本。（卓子の上の別府の手紙に氣付きそれを取り上げ、怒つて叩き投げる。）何だ、この不手際な人を莫迦にした文章は！ 彼奴は腐れ詩人だ！

恒子。（頭を擧げて。）若しもあなたのお仰る通りなら、妹はどんなことがあつても別府さんの云ふことなんか聽かないでせう。妹は、きつと別府さんを私から横取りしたものと思ひ込んで、私に濟まなく思つてるに違いありませんわ。

坂本。さうでせうねえ。（突然、聲を落して。）そうして一體あなたはどうなることなんでせうかねえ？

恒子。あら厭だ、誰がそんなことを考へるもんですか？ 私は妹とあの人と一緒にしてやりたいと思つてるんです。

坂本。それでこそ元の恒子さんです！

恒子。まあ！　たくさんよ！　そんなことより、あなた、私に智慧を貸して下さらたい？

坂本。智慧を？　はゝあ、仲人になるていふ考ですね。

恒子。（輕く頷く。）で妹は、私が仲人になることに不服がないでせうか。

（間）

恒子。（突然）坂本さん！

坂本。え？

恒子。いゝ考へが、私あるの。

坂本。それは結構ですね。

恒子。けれどあなたの助けが要るの。

坂本。私に出來ることなら、いくら當にしてもいいですよ。

恒子。あなた約束して下すつて？

坂本。（それと察して）盲從ですか？

恒子。盲從なのよ。

坂本。（彼女を見て）何故私は盲從するやうにあなたに約束しなければならないのでせうか？　でも私に出來るなら、お助けすることを保證しますよ。

恒子。（ぶつきら棒に、けれど當惑して）連れてつて下さい、私を！……私と結婚して下さい！

坂本。（暫らく彼女を見つめてゐたが直に撞木杖、書類包を拾ひ上げる。）

恒子。（懇願して、）坂本さん！　若し私が結婚出來れば、百合子は苦勞を知らずに濟むんです。

坂本。佐野さん！　私はあなたを愛してゐたのです、そして—今も、けれど私は、お斷りします、あなたが犧牲になる祭壇になるのは！

恒子。だつて一寸前、あなたは私の死ぬのをお留めになつたのぢやなくつて。そんならあなたは今度は私に死ねとおつしやるのね？

坂本。あなたの妹さんは、別府なんかなくつたつて幸福になれますよ。

恒子。でも若し妹があの人を愛してたら？——

坂本。その時は苦しむでせう、丁度私達が苦んでゐるやうに。

恒子。いゝえ！　百合子を苦しませちやなりません！よござんすか！　私、そんなことをさせない！（段々熱狂して來る。）

坂本。それは又殊勝ですね。

恒子。（涙をためて）坂本さん！　私、もうあんたなんか知りませんわ。

坂本。（扉の方に向いて）ぢやさようなら。

恒子。（咽んで泣いてゐる。）

坂本。（扉の方に跛を引いていつたが、足をとめる。悲しげに下を見、それから恒子に視線をあげる。）佐野さん。隨分長いことあなたの所に御厄介になつてましたが、その間、一度だつて私が戀を打ち明けたり、又結婚を申し込んだりしたことの無かつたのは、一體どういふ理なのかあなた御存じですか？

恒子。（泣いてゐる。）

坂本。ぢやお話いたしませう。それは、あなたが私を愛してないつていふことを私が知つてゐたからなんでせう。又私が生意氣に尊敬ばかしでなく、あなたの愛を欲しやうなぞと思つてゐたからなんでせう。

恒子。（きつぱりと）い丶え違ひます！　あなたはたゞ私が拒絶するだらうとお思ひになつてそれを敢へてしなかつたまでなのです。

坂本。ぢや私はあなたから『許し』を期待してもよかつたとお思ひですか？

恒子。そんならその時結婚を申し込みになればよろしかつたのに。

坂本。さうして今、あなたの愛なくしてあなたと結婚しろとおつしやるのですか？

恒子。え丶、さうです。

坂本。しかし私はあなたが他の男を愛してる事實を知りません。

恒子。（斷案を下すやうに）他の誰ももう私には不必要なのです。

坂本。（再び床の上に目を落す。沈默。）

恒子。坂本さん！

坂本。（默つて顔を上げる。）

恒子。ずつと此方へお出でなさいつてば！

坂本。私は跛者ですよ。

恒子。まあ、あなたは荷物なんか側にお置きなさいな。

坂本。（一寸躊躇したが本と包を下におく。）

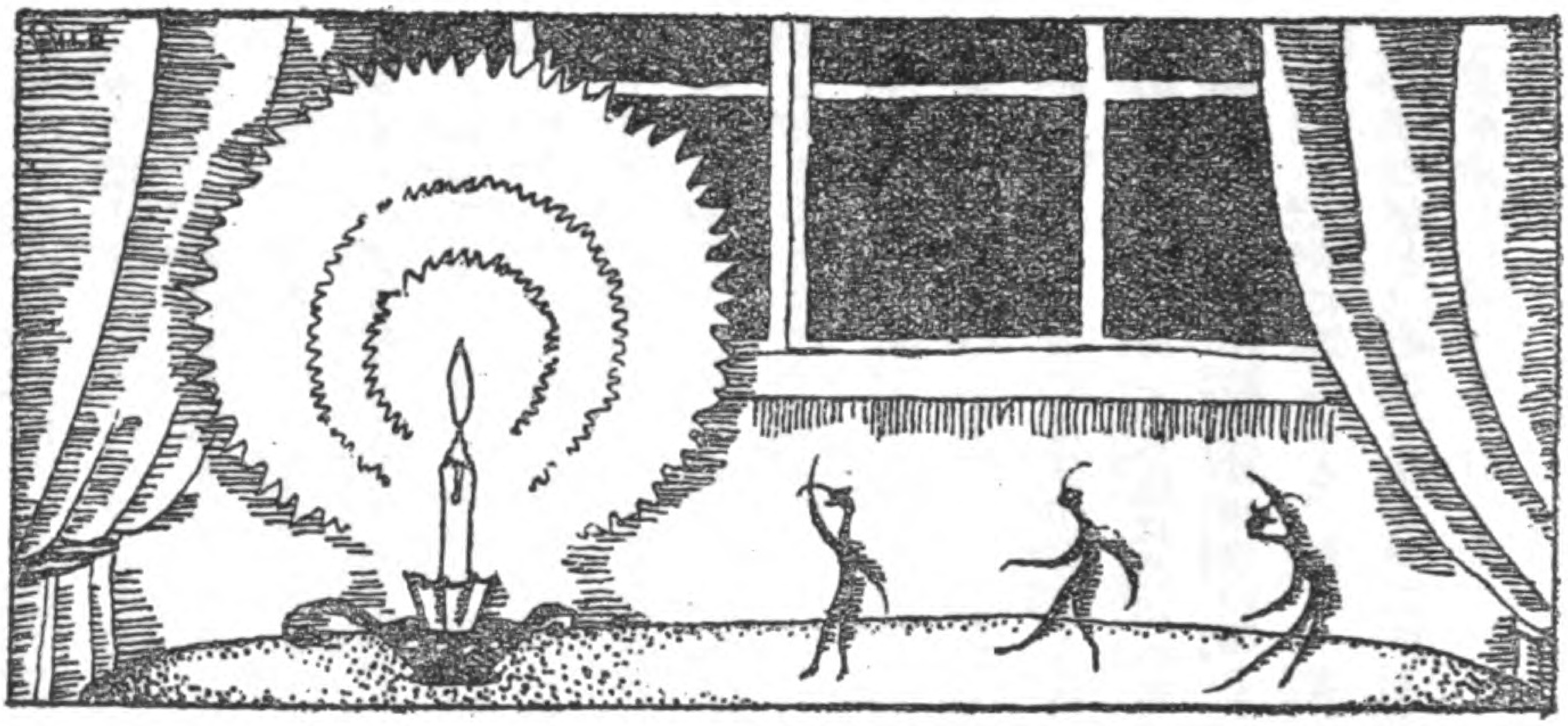
恒子。（感激と羞恥の餘り急に云ふことが出來なくなる。）

坂本。（樣子を始めて察して）さう恥づかしがらたくつてもい丶ですよ。あなたの云はうとすることは（一寸微笑）——『あなた杖もお置きなさいよ！』てつことぢやないのですか。（さう云ひ乍ら杖を側に置く。）

杜子。(立ち上つて手を握る。) 坂本さん、あなたは私があなたを何う思つてるかをちやんと御存じでいらつしやるのね。私どんなにか、あなたを尊敬してゐたことでせう、さうして、あなたのやうな善い眞實の方をお友達に持つなんて、まあなんと云ふ幸福な私なんでせう……(媚びるやうに彼の胸に頭を押しつける。――宛然して) さあ私を抱擁て頂戴。(涙下る。)
私たちの生活は是からきつと幸福になるんだと思ふわ。幸福と云ふものから忘れられた私たちは、やつぱし私たち自身の道の中にそれを見つけ出さなくちやならないのね。(涙を拂つて) いゝえ、きつと幸福にして見せます。三枝ちやんが歸つてくれればあの娘が二人の歡びの歌を歌つて呉れます……さあ、あなた喜んで頂戴!

坂本。(情熱的に涙を出して) 俺たちは救はれた!! (長き接吻)

―靜かに幕―



鏡

南部修太郎

ある通では崩れた煉瓦塀の陰を、それが癖のこころもち首を右にかしげて小刻みに歩いて行く女を思はずうしろから呼びとめて、粗忽を詫びた事もありました。ある川岸ではどぶ泥の上にうつ向いて死んでゐる女の着物の縞柄にひよいと眼を惹かれて、夢中でそこに飛び降り、紫色にふくれ上つた顔を引き起してみて失望した事もありました。ある夜は公園のうす暗い樹陰に坐つてゐた女の影像に詞をかけて、その連れらしい男に呶鳴りつけられた事もありました。とに角さうして三日三晩と云ふものまるで熱病にでもとりつかれてゐるやうなかつと取りのぼせた氣持のまま私はあの混雑した東京の町中を歩き廻つたのでした。恐ろしいとか、悲しいとか、苦しいとか、そんな處はもう通り越してゐるのです。そして、ひどい刺戟や不眠からくる神經の疲れ、づきづきする足腰の痛み、それを氣にとめる心の隙間さへ持てなかつた私は、ある時は知らない家の燒跡の石に腰かけたまま思はず知らず寢こんでし

まつて、冷たい夕風にやつと我に返つた事もありました。

「やつぱりどこかで死んでしまつたに違ひない。」

然し、流石にもう精も根も盡きてしまつた私は、やがてさう思ひ諦めました。張りつめてゐた氣持の綱は一度に斷ち切られました。そして、私は一夜を人眼憚らず泣き明かしてしまひました。

御承知の通り祭日と日曜が土曜を挾んで三日續くと云ふので私が會社の同僚二人と相談し合つて箱根へ出かけたのは祭日の前夜でした。そこへあの日の大地震だつたのです。ちやうどあの時、私達三人は呑氣にカメラなどを肩にしながら山の方へ散歩に行つてゐました。私がそこでどんな事に出會つたか、それは御想像に任せませう。とに角暫くたつてもとへ戻つて來て、私達のとまつてゐたN旅館が打ち碎かれたまま深い谷間へ轉落してゐるのを見た時、何秒間かぼんやりしてゐた三人は飛びつくやうに互に抱き締め合ひました。然し、さうして自分の助かつた嬉しさに我を忘れたあと、私の胸にすぐ思ひ出されたのは、東京の家に中年の婆やと一緒に殘して來た妹のさき子の事でした。通信や交通機關も絶えてどうする事も出來ないまま、あの晩、あの翌晩を明かす内に、きれぎれにも傳はつて來たのは東京の慘狀でした。私の家は本所の北二葉町にあつたのですが、そこも全滅と云ふ噂を聞いた時もうぢつとしてはゐられなくなりました。互に二十代の若者だつた私達三人はすぐに徒歩歸京と極めて、三日目の晝頃山を下りました。途中の事などは申し上げますまい。とに角四日目のほのぼの明けに私達は品川へ著きました。

無論、もうその時私は東京の事をあらまし聞き知つて、家の駄目な事は確かだと思つてゐましたので、それぞれに心配を持つた二人に別れると、私は一番打ちとけ合つた間柄の赤坂青山の叔父の家へ急ぎました。そして、息せきながら門口へ驅けこむと、そこへひよつこりと姿を見せたのはかすり傷一つ負つてゐない婆やだつたのでした。

「さき子は？」

見るなり、啖鳴りつけるやうにして、私はさう尋ねかけました。と、婆やはまるでうつけのやうに眼を開いて私の顔を見上げながら、唇を引きつらせてゐます。そして、やがて表情が變に崩れたかと思ふと、その二つの眼には見る見る内に涙が染んで來たのでした。

さき子、それは兄も姉も弟もない私のたつた一人の妹です。今年の春女學校を出たばかりの十九でしたが、父や母さへ相ついで數年前に喪つた私は、さき子をどんなに愛し、どんなに力にしてゐたか分りません。それに私としてこんな事を申し上げるのも何ですが、すなほな、優しい性質で、丈のすらりとした、母似の顔は時には兄として誇らしい程美しいのでした。聞けば、婆やは私の歸りを全くさき子のそれだと思つたのださうですが、あの日折柄食事中にあの事に出會つた二人は暫くして二手から迫つて來た火の手を見ると、即座に叔父の家へ避難と極めて、風呂敷に包んだ少しばかりの家財を持ち合つて家を立ちのいたのです。然し、ある町角で恐ろしい人波にもまれて二人ははぐれてしまひ、どこをどう歩いたのか婆やが叔父の家へたどりついたのは翌朝の事でしたが、さき子の行衞はその後外の親戚を訪ねても、燒跡を探しても四五の救護所を見舞つても、ある限りの心當りを求めても全く分らないと云ふのでした。叔父や叔母や婆や達が私の無事を喜んでくれるのもそのままにして、疲れを休める心の餘裕もなくなつた私は、死んでしまつたのならたとへ死骸でも骨をでもと云ふ氣持で、さき子を探し求めるために間もなく叔父の家を飛び出たのでした。

すべては人間地獄です。酸鼻以上です。とてもあんな出來事がもう二度と世の中に起るだらうとは思はれません。そして若し私の胸にさき子のためと云ふ一念が凝つてゐなかつたら、どうしてそんな處を歩き廻る事が出來るでせう？　然し、私はその一念でかつとなつてゐたのです。見る影もない我家の燒跡を驅け廻つて、倒れた石燈籠の下までかき起してみました。被服廠の原へはいつて、あのむごたらしい死骸の山の間をさへ探し廻つてみました。そこここの緊急救護所の物凄い患者達の中も尋ね歩きました。燒跡の假小屋も、河中の舟も、公園や學校などの罹災民避難所も、燒け殘つた山の手の

さき子の友達の家も。けれども、すべてが無駄でした。何の手掛かりも得られませんでした。そして、せん方盡きた思ひ諦めの後あのさき子が見分けもつかぬ醜い死骸になつてどこかに横たはつてゐる有樣をひよいと想像した時、私はどんな氣持にされたでせう？　それは泣いても泣いても到底及ばない悲しさでした。

然し、一時は夢かと思ひました。さき子は生きてゐたのです。日比谷近くのある學校内の假救護所に收容されてゐたのです。ちやうどあの日から七日目の夕方近く、突然訪ねて來た二十三四の、頭に繃帶を卷いた仕事師らしい男から、そこの看護婦の言傳てだと云ふさき子の消息を聞いた時、私は息も詰まるやうな嬉しさ、暫くは口もきけずにその男の顏を見詰めてゐました。

「だいぶひどいお怪我をなすつてらつしやるんだつてえます。」

ほんたうに躍り立つやうな氣持でしたが、男がふと云ひ添へたその詞にまた心配さも新になりました。然し、そんな事が何でせうか？　とに角、生てゐてくれたのです、生きてゐてくれたのです。男に厚いお禮を返すと、私は叔父と一緒に全く足も地につかぬやうな思ひで、その救護所へ駈けつけました。

それは何と云ふ無殘な、痛々しい有樣でしたらう？　學校のある數室です。ほこりつぽい床板にはむしろやござや毛布などが敷かれてゐます。そして、その上には或は頭、或は胸、或は手足などに、染んだ血の色も中にはどす黑くなつてしまつたやうな繃帶を卷かれた二十人程の男女が、ごちやごちやに寢かされてゐるのです。夕方近いうすら明りとむつと鼻をつく消毒劑の匂ひと、その中にはかすかな囈言や溜息や、低い呻り聲などが聞えます、叔父と私とは疲れはててゐるやうな看護婦の一人に導かれておづおづそこへはいつて行きましたが、ふと指さされた方を見ると、窓近い片隅に一人の女が荒い、短い寢息を立てながら横たはつてゐるのでした。

「これがさき子だらうか？」

靜に近寄つてその姿をぢつと見降しながら、私は思はずさう疑はずにはゐられませんでした。

頭全體から顔の左半面、左の手首から肘へかけて厚く繃帶を卷かれ、間に合せ物らしい洗ひざらしの浴衣を着せ換へられ、よごれた白毛布を腰から下に覆つて、ござの上に仰向きになつたまま深く眠り落ちてゐるその女の姿、現れた顔の半分は青白くむくみ、唇は妙に紫ずんでゐます。それがほんたうにあのさき子だつたのでせうか？ どうにも信じられない氣持で、私は暫く佇み過してゐましたが、つぶつた眼元や、少しあいた口の間からのぞいてゐる齒並などをぢつと見詰めてゐる內に、それがやつぱりさき子に違ひない事が感じられて來ました。そして、やがてひよいと浮んだ記憶から、その熱ばんだ右手首をそつと裏返しながら、小指の第二の關節にあるほくろを見つけ出した時、私は急に瞼が熱くなつて來て、その手首を思はず握り締めました。

「さき子です。確にさき子です。」

私は叔父を振り返つて、聲を顫はせながらさう囁きました。

看護婦の話によると、どこから救ひ出されて來たのか、さき子はあの日から四日目の晝過ぎに救護班の手でそこへ運ばれて來たのださうです。繃帶の跡は二つ共可成りひどい火傷で、一つには精神上の打擊のために全く意識を喪つてゐたのが、ずつと續いてゐた熱が、その朝少しさがると同時に幾らか意識を回復して來て、問はれるまま僅に自分の名と叔父の住所を告げたのです。そして別に命にかかはるやうな事はないにしても、あまり動かしたりするのはまだ危險だと云ふのでした。然し、手當の十分屆く譯もない假救護所などに置くのは不安心でもあり、また如何にも可哀想な氣持もしましたので、幸ひ叔父が赤坂のある病院長と心安かつたものですから、既に一杯詰まつてゐる病室を無理に都合して貰つて、その晩八時過ぎた頃そこへ入院させてしまひました。さき子はまだ夢うつつの狀態にゐましたが、それは精神感動を怖れてゐた私達には却つて好都合なのでした。

「だいぶ弱つておいでですが、今の處餘病の起る樣子もないから、別に御心配なさる事はありますまい、傷の方は明日よく調べてみますが、先づ御全治までに一ヶ月ぐらゐは十分かかりませうな。」

別に氣休めでもないらしく、さう云つてくれた院長の診斷は私達を一先づほつとさせてくれました。

さき子のために病室の半分を分けてくれたのは、盲腸炎の回復期でもう可成り元氣になつてゐる中年の奥樣風の人でしたが、私からあらましを聞くと、涙をこぼして氣の毒がつてくれました。で、その晩はその婦人と病院の人達にすべてを賴んで、私と叔父は家に引き上げました。あふれるばかりの嬉しさと心の安まりと、私はまるで死んだやうにその晩を寐過ごしました。

その翌日は叔母や小さい從妹達に病氣を見舞つて貰つて、私は一日頭痛心地で休養しました。行きたがる婆やにも控へさせました。やつぱり不意の感動が腦に障りはしないかを怖れたからです。叔母達は夕方近い頃歸つて來ました。その話によると、さき子はまた發熱して胸に氷嚢をあてたまま殆ど眠り續けてゐたさうですが、ある刹那にふと片眼をあけてあたりを見廻したかと思ふと、急に身もだえして泣き出し、なだめる叔母の聲にも夢うつつだつたと云ひます。きつと何かの恐ろしい印象がまださき子を脅えさせてゐるに違ひなかつたのです。婆やはすすり泣き始めました。私も胸がづきづきするやうな氣持でした。が、繃帶もすつかり取り換へられ、頭全體と顔半分をおかしてゐる火傷も存外深くはないと云ふやうな事を聞いて、幾らかその氣持も和げられました。

「けどね、ほんとに可哀想に。いつたいどんな目に會つたのか知ら?」

叔母はやがてそんな事を云つて、たまらなくなつたやうに膝に涙をこぼしました。誰もそれに相槌打たうとはしませんでした。ただ俯向いたままぢつと唇を噛んでゐるばかりです。すべては想像に餘る事でしたから……。

發熱と夢うつつの狀態はそれからなほ三日ばかり續きました。時々うつすり自分に返るらしい時があつても、私達は院

長の注意で出來るだけそつとして置かなければならなかつたのです。然し、やつぱり十分な手當が屆いたせゐでせうか？入院後四日目の眞夜中過ぎから少しづつ熱がさがり出して、譫言も絶え、寢息も靜かになつて、そのまま昏々と眠り續けてゐましたが、翌朝もう可成り日の高くなつた頃、今度こそはほんたうに意識を回復したらしい樣子で、繃帶の蔭に現れてゐる右の眼をぱつちりと見開きました。私は思はずはつと息を呑みながら、それに視線を注ぎました。さき子は枕の上で窮屈さうに頭を動かしながら、ぽかんとした眼附であたりを眺め廻しました。そして、次の刹那に私とさき子の視線はまともにぶつかり合ひました。

「さき子、眼がさめたか？」

咽喉元にぐつと迫つて來た何かを抑へながら、私はわざと刺戟の強い詞を避けて、さりげなくから尋ねかけました。がさき子はまばたきさへ返しませんでした。

「氣分はどう？　ほんとによく寢てゐたね……」

「まあ兄さん……」

その時、さき子は初めてかう呼び掛けました。久振に聞きなれたその呼名を聞いたのです。私は我知らずよろめきさうになりました。

「兄さん、ここどこなの？」

「病院さ。お前何も知らなかつたんだらう。」

「變だわ、變だわ。」

かう呟きながら體をよぢらしたさき子は、右手で初めて氣が附いたやうに左半面と左手の繃帶の上を撫まはしました。

「動いちやいけない。」

から制しながらも、不意に染んで來た涙を感じて、私はそのまゝ俯向いてしまひました。氣が附くと、少し離れた寢臺に横たはるてゐた、同室の婦人もすすり泣いてゐました。暫くして婆やは無事でゐる事、私がどうして箱根から歸つ來てたかなどを手短に話し聞かせた時、さき子自身もとうとう泣き出してしまひました。そして、色々詞を續けようとしました、がそれ以上の興奮の障る事を怖れて、私はそれを押し留めてしまひました。心配した程の事もなく、その後の經過は順調でした。餘病の心配は勿論の事、熱も出ず、意識の狀態も全くもとに歸つて、院長の詞では火傷の方さへ好い結果に進んでゐるらしいのでした。それに一そう都合の好い事には同室の婦人がその二三日あとに退院してしまつたので、もともと一人詰めの室だつたのを樂々使ふ事が出來るやうになりました。大竹と云ふ附添の看護婦も雇ひました。で、それからは主に叔母や婆やに見舞の事を頼み、私は一方燒けた會社の善後の始末に忙しくなつて來ましたので、その間の僅かな暇を偸んで病院通ひに努めました。

さき子がどうして救ひ出されたか？　その經過は全く分らない事でした。然し、さき子のとぎれとぎれの記憶を色々に問いただしてみると婆やとはぐれてからさき子はただ一人で恐ろしい人波にもまれ、惡魔のやうな火焰に迫られて全く無我夢中の內にとうとう小名木川の高橋の側まで追ひつめられたのです。と、橋は燒け落ち、うしろは川、前は火焰、群集の一なれとその川岸の絕對絕命境に何分かを過す內、どつと橫斜に吹きなぐつて來た突風が自分の顏へ眞赤な火焰を投げつけたかと思ふ刹那に、そのまま意識を喪つてしまつたと云ふのでした。すべてはただ不思議な運命の別れ道です。それを呪つていいかそれに感謝して好いか、私には到底判斷する力はありません。然し、さう云ふ話を聞くにつけ、一度はすべてを思ひ諦めてしまつたあの三日三晩の自分の氣持を振り返るにつけ、私の知るものは涙より外になかつたのでした。

「さき子、よく助かつてくれたね。」

簡單な、短い詞ながら、あれ程つき詰めた氣持で人に詞を掛ける事が私の生涯に再びあり得るでせうか？　私の胸には

ただ嬉しさが充ちあふれてゐました。そして、一日も早くさき子の全快を祈りながら、家を燒かれ家財を喪つた不幸などは氣にも留めないで、私は雄々しく新しい生活の一歩を踏み始めたのでした。

　それから二三日たつたある晩、いつもの通り會社の歸りに病院を見舞つた私は、左手の繃帶も幾らか薄くなり、氣分もすつかり元氣づいて來たさき子と、時には高い笑聲さへ交へながら二時間あまりを話し過して、明るい氣持のまま叔父の家へ歸つて來ました。と、暫くしての茶話の時叔母がひよいと顏色を曇らせながら私に問ひかけました。

「今日、さきちやん、あなたには何にも云なかつて？」

「わたしに？　何をです？」

「何つて……」

叔母は何故かちよつとためらひました。

「何か妙な事でも云つたんですか？」

「いいえ、さうぢやないの。實はね、今日あたしが附添に行つてゐると、急に顏の繃帶を撫でてみながら『叔母さん　あたしの顏、ほんとにどうなつてるんでせう？　痛かつたり、むづがゆかつたりするかと思ふと、何だか重いやうな、つつぱられるやうな氣持になるのよ……』と、いきなりそんな事を云ひ出したぢやないの。あたい、思はずはつとしてね……

「どうしてです、叔母さん？」

「どうしてつて……」

叔母はまた不意に口籠りました。が、すぐに眼をしばしばさせながら、

「謙さん、あなたはやつぱり男だわね、きつとこんな事は一度も考へちやみなかつたんでせう。でも、ちよつとたあ考へて御覽なさいな。さきちやんの顏がひどい火傷よ。そして火傷の跡は一體どうなると思つて？」

「あつ……」

私は思はず叫び立てました。

「あたし、もうこの事はこないだからつくづく心配してゐたのよ。頭の方だつて深くはないけど、ずゐぶんひどいらしい……」

叔母はそのまま聲を呑んでしまひました。

男だから——さう云ふ叔母の推量はその場合の私には寧ろ冷た過ぎるものでした。すべてを諦めてしまつたただ一人の妹が思掛なく生きてゐてくれた事、心配した體の經過が順調に進んだ事、それに喜びがあふれてゐた私にどうしてそんな事を考へる心の隙間があつたでせうか? 譬へさき子が片輪者にならうとも死なれる事に較べれば私には何物でもない筈でした。然し、さう云ふ叔母の詞を聞いた時、私はづきりと胸を刺されたやうな氣がしました。今までの喜びも嬉しさもかき消されてしまひました。そして、私は自分の行末までが不意にまつ暗にされてしまつたやうな氣がしました。

「あのさき子の顔に若し醜い傷跡でも出來てしまつたら……」

その晩、床に就いてふとさう考へ始めた私は、何時までも眠りつく事が出來ませんでした。そして、あのまつ白な繃帶の蔭に隱されてゐるものが、色々な形になつて思ひ浮んで來るのです。あの房々した艶の好い髪の毛も燒けちぢらされてはゐないだらうか? あの長い睫毛の蔭の美しい瞳も傷ついてはゐないだらうか? あの小さな愛らしい耳朶は? あのうつすりと血の色を透かせた、しなやかな片頬は? さう一つ一つを眼の前に浮べながら、そこに醜いひつつりの跡ややけ傷をひよつと想像した時私は我知らず身顫ひしましたそれはあんまりむごい事です。痛々し過ぎる事です。そして、若しさう云ふ自分を眺めたとしたら、さき子はどんな氣持になるでせう? それは女にとつては命を奪はれるよりも不幸な事に違ひないのでした。

その翌朝食事を濟ますと、私は何か知らゐても立つてもゐられないやうな氣持のままに病院へ急ぎました。そして、さき子の病室を見舞ふ前に院長室を訪ねました。

「やあ、お早う。お妹さんも大變御經過が好いやうで……」

愛想の好い院長は豐頰を笑ひ崩しながら、穏かな調子でかう云ひかけました。然し、私の氣持はそれ處ではなかつたのです。彈み立つ息を抑へながら、すぐさき子の傷跡の事に就いて問ひ掛けました。と、想像通り院長の顏色は曇つてしまひました。

「やつぱり可成りな痕跡が殘るんでせうか？」

「何しろ手當もおくれましたし、それに相當お重いんですから、治療に十分注意を加へてゐても、到底もと通りと云ふ譯にはまゐりますまい。」

「然し、あんまり可哀想なものですから……」

「そりやもう十分お察しします。然し、今度のやうな非常の場合、ああやつてお命を助かりになつただけでも、全くお仕合せなんですから、そこは御本人もあなたもお諦めにならなきやいけません。まあ出來るだけは手は盡してみますが……」

院長は重々しい聲に深くふくめるやうに云ひました。

とに角禮をのべて、私は廊下に立ち出でました。が、僅かな望みももぎ取られてしまつたのです。どうしてそのままさき子の病室へはいつて行けるでせう？ 患者用の長椅子に體を凭せて見たり、廊下を往き來したりしながら、私は暫く泣き出したいやうな氣持と戰ひました。然し、結局は院長の詞通り諦めるより外はありません。やがて思ひ切つて、私はさき子の病室の扉に手をかけました。

「まあ、今日はお早いのね……」

寢臺に横たはつたまゝ、婆やと何か笑ひ興じてゐたらしいさき子は、思ひの外元氣の好い聲でかう云ひました。

「うむ、氣分はどう？」

私は視線をそらしながら、さりげなく尋ねかけました、

「大變好いのよ。」

南向きの病室の窓にはあの災禍の日も忘れたやうな明るい秋日射が、豐に照してゐました。そして、あたりはたゞ六月前の暗い影もなく、如何にも晴れがましく見えました。その當座何かにつけて泣いてばかりゐた婆やの、中年のたるみの來た淺黑い顏にも和かな微笑が浮んでゐました。私もそれに調子を合せるやうに氣分を引き立たせながら、暫く世間話に時を移してゐましたが、さき子の眞新しい繃帶の白さが眼に映る度ごとに、暗い谷間でも覗くやうな氣持にされるのでした

「ねえ兄さん、あたしさつき大竹さんから鏡を借りて初めて自分の顏を見たのよ。ずゐ分大裂裟な繃帶に見えるんですものびつくりしてしまつたわ。」

或る刹那に、ふと思ひ出したやうにかう云つて、さき子は如何にも意外だつたらしい表情を浮べました。

「そりや仕方がないさ。」

私は不意に起つて來た胸騒ぎを抑へながらさりげなく云ひました。

「だつて、あたしの傷そんなにひどいんでせうか？」

「まさか、そんな繃帶程の事があるものか……」

「でもね、一昨日あたりから急に色々な事が心配になつて來たのよ。髮の毛も燒けてしまつたでせうし。繃帶を換へる時なんか、眼の上の方がづきづき痛むんですもの。ほんとにあたしの顏、變なになるんぢやないでせうか？」

「馬鹿な。そんなつまらない事考へるもんぢやない。髮はその內にまた延びるだらうし、傷跡だつてきつと綺麗に治る

よ。この頃は醫者の技術だつてずつと進歩したからね。」

「さうでせうか？」

さき子は心許なささうな、力のない聲で頷き返して、そのぽつんとした右の眼でぢつと私の顔を見詰めました。それは絶望的と云ふよりも、何か知らしみじみ頼りなささうな寂しい眼差でした。私はまた思はず胸が迫つて來てそつと窓の方へ視線をそらしてしまひました。

「とに角、あんまりくよくよ心配したりしないが好いよ。治る。きつと綺麗に治るに違ひないからね。」

私はやがてさき子の近くに顔寄せて、強く力づけるやうに云ひました。そして、そのまま病室を立ち出でました。婆やはいつもするやうに玄關近くまで見送つて來ました。

「婆や。ちよつと云つて置くがね、當分さき子の側に鏡なんか置かないやうにしてくれ。今はまだ好いが繃帶でも取れるやうになると……。ねえ、分るだらう？」

「はい……」

「大竹さんにもさう云つといてくれ。」

「かしこまりました。」

婆やは眼をしばだたきながらも、強く頷き返しました。

いづれは避け難い事——それは私にも分り過ぎる程分つてゐたのです。然しさき子の出會はなければならない恐ろしい悲しみの刹那を私は一日でも、一時間でも、譬へ一分でもおくれさせてやりたかつたのです。實際その時ばかりは、私は世の中の鏡のすべてがなくなつてしまへば好いとさへ思つたのでした。

ある日の午前でした。私はいつものやうに病室の窓近くの椅子に身を凭せながらさき子と靜に話し合つてゐました。話

話は主として震災に就いてでした。そして、もうそれ程さき子の神經を惱る必要もないと思つた私は、色々見聞きしたその悲話慘話を話し聞かせました。それ等に較べれば、無事に生き殘り、縱へ家は燒かれても別に生活の心配はなく、病院の十分の手當を受けたり、温かな叔父の家に安らかに暮したりしてゐる二人がどんなに幸運で、仕合せであるかを、私はこと更に強く、云ひ聞かせました。さき子は靜に耳を傾けながら、しみじみ頷き返してくれました。と、暫くして當直醫達が係りの看護婦を引き連れて回診に來ました。そして、さき子の側に近寄ると、すぐ繃帶換へに掛かり始めました。私ははつと氣持を緊張させられながら、壁にぴたりと身をもたせかけて、一卷き二卷きとはづされて行く、繃帶に眼を注ぎました。然し、油紙の下の最後のガアゼが靜にはがされて、そこに現れたものをひよいと一眼見た時、私は思はず顏をそむけてしまひました。

「これがどうして幸運だらうか？ 仕合せだらうか？」

私は心の中にさう叫ばずにはゐられなかつたのでした。

經過はその後も順調に進んで、まだ起き上る事は許されなかつたのですが、とに角左の耳から眼のあたりへかけての繃帶がはずされたのは。それから一週間程たつてからの事でした。そして、眉の脇と眼の下に少しばかりの爛れの跡が殘つてはゐましたが、そこは思つたより綺麗に治つてゐました。それはどんなに私を喜ばせたか知れません。禁じてゐた鏡を私自身看護婦から借りて來て。

「ほおら御覧、まるで何でもないだらう。その赤くなつてる跡なんかすぐ消えてしまふよ。きつと外だつてさうに違ひないんだ。」

かう云ひながら、それをさき子の眼の前に差しつけてやつた程でした。さき子もぢつと鏡の中を見詰めながら、案外だつたらしい様子で微笑さへ浮べてゐました。

然し、さうして幾らか誇張しながら現した私の喜び方も、やつぱりさき子のための一時の氣休めに過ぎなかつたのですなほも頭全體から肩すれすれに卷いてある繃帶の下に隱れてゐる火傷の跡、わけても左の眉の角から生え際にかけて額を深くえぐるやうに燒け爛れたのがどんなに痛ましいものであるかを、私は知つてゐたのです。で、その繃帶が取れて行くにつれ、さき子の出會ふ幻滅がだんだん深くなつて行くに違ひない事を考へた時、私はどんな氣持にされたでせうか。今は全治の日がおくれる事をさへ願はずにはゐられなくなつたのでした。

九月の末近くになつて、體の衰弱も回復し、傷に障る心配もなくなつたと云ふので、さき子は少しづつの運動を許されました。然し、處女らしい感じ易さで顏の幽かな傷跡やまだ取れない繃帶姿を氣にしてゐるさき子は深く人眼を恥ぢて、殆と病室の外へ出ようとはしませんでした。そして、それから三四日たつた時、いよいよ一兩日中に頭の後半部を殘して繃帶が取れ、それと同時に退院しても好いと云ふ事が極つたのでした。

「ねえ兄さん、あたしこはくつてこはくつてたまらないつよ。繃帶が取れたら、きたならしい傷跡が見えるやうになるんぢやないでせうか？」

さき子はゐても立つてもゐられないやうな樣子を見せながら、私に尋ねかけました。

その時、私はもう思ひ切つてすべてを話し聞かせようかと決心してゐたのです。然し、さう云ふ樣子を眼の前にしながらその胸に與へる幻滅の痛ましさを考へた時私の決心は忽ち鈍つてしまつたのでした。私はさりげなく答へ返しました。

「そんな、そんな事は決してないよ。」

「さう、ほんと？　きつとね？」

さき子は念を押し返して、滿足らしい微笑を洩らしました。

退院の日の朝、私はさき子の病室の窓際に一人佇んで、たまらなく不安な、苛々しい氣持に胸をかきまはされながら

外科室から歸つてくるさき子を待つてゐました。と、やがて廊下の方に足音が聞えて、婆やと大竹に附き添はれたさき子が靜に扉の蔭に姿を見せました。はつとして思はず振り返りましたが、繃帶の取れたその左の額際に、私は何を見ければならなかつたでせう？ 妙にてらてらしい醜い赤痣、そのまん中になめくぢ形の白茶けたひつつりが出來てゐるのです。餘りの思ひ掛なさにあつと聲を立てようとしましたが、私はそのまま刹那の努力で自分を抑へてしまひました。

「兄さん、額に變ぢやないんですつてね？」

さき子は指先でその傷跡を撫なから、まだ何にも知らないでゐるらしく、輕くかう尋ねかけました。それを聞くと、婆やと大竹とはひよい眼を見交して、顏をゆがめなから俯向いてしまひました。

「うむ、思つた程ぢやないよ。」

殆どよろめいてしまひさうな氣持でした。が、私はそれをぢつとこらへながら、すぐにさう答へたのです。嘘です、明かな嘘です。然し、それ以外に私はどう答へたらよかつたのでせうか？

「でも、あたしちよつと見てみたいわ。大竹さん、鏡を貸て下さらない？」

「さうでございますね……」

大竹はためらひながら、ちらと私を見返りました。

「さき子。好いぢやないか。家へ歸つてからの事にすれば……」

「でも、何だか氣になるんですもの……」

「まああとにおしつたら……」

「さう……」

「それに自動車も待たしてあるんだから……」

今は一分でも一秒でも、幻滅の刹那を延ばしてやりたい氣持でした。で、私はさりげなくも、一心にさき子の望みを遮りました。さき子も流石に强ひては云はずに、そのまま傍の椅子に腰を降ろしてしまひました。

「さあ、いよいよお芽出たい退院だ。ちよつと行つてくるよ。」

それを見てほつとした私は、元氣作つた聲を殘しながら、すぐ事務室の方へ急ぎました。そして、すべての退院手續きを濟ますとまた病室へ引き返しました。流石にいざとなると心惹かれる病室です。病院の看護婦長や、大竹などに禮をのべた私は、片附て置いた入院用具を婆やに持たせ、さき子をうながしながら病室を立ち出でました。

「叔父さん達はきつと待ち兼ねていらつしやるよ。」

退院の嬉しさ、そんなものは少しも私の胸にはなかつたのです。寧ろ私は不安な、悲しい氣持にされてゐたのです。まして俯向いて歩いてゐるさき子にじろじろ注がれる人達の視線をまざまざと感じた時、私はどんな氣持にされた事でせう？　然し、私はそれをまぎらはすやうに强ひて快活らしい聲でさうさき子に囁きました。

「さう、ほんとに嬉しいわ。」

さき子はそれでも流石に退院の喜びを感じてゐるらしく、晴れ晴れしい微笑を洩らしてゐました。

然し、それは何と云ふ呪はしい事でしたらう？　病院の玄關先に待たせて置いた自動車に、何氣なく、さき子をうながし乘せた私は、次の刹那に突然の思掛ないさき子の慟哭を聞かなければならなかつたのでした。そして、殆ど一圖にかつとなつてしまつた私は、それを力任せに叩き碎いてしまひました。鏡――車室の窓枠に塡めこんであつた細長い鏡、それはさき子の痛ましい傷跡をまざまざと映し返してしまつたのです。――十二年十一月作――

偶成三篇

佐藤春夫

雪

雪がふると
山の爐へ、きつと
七人の男がやつて來る。

七人の男は
麓の村々から
父の爐を圍みに集る。

七人の子は
七つの話をする
子供にかへつた父の爲めに。

柳葉歎

支那の詩に擬る

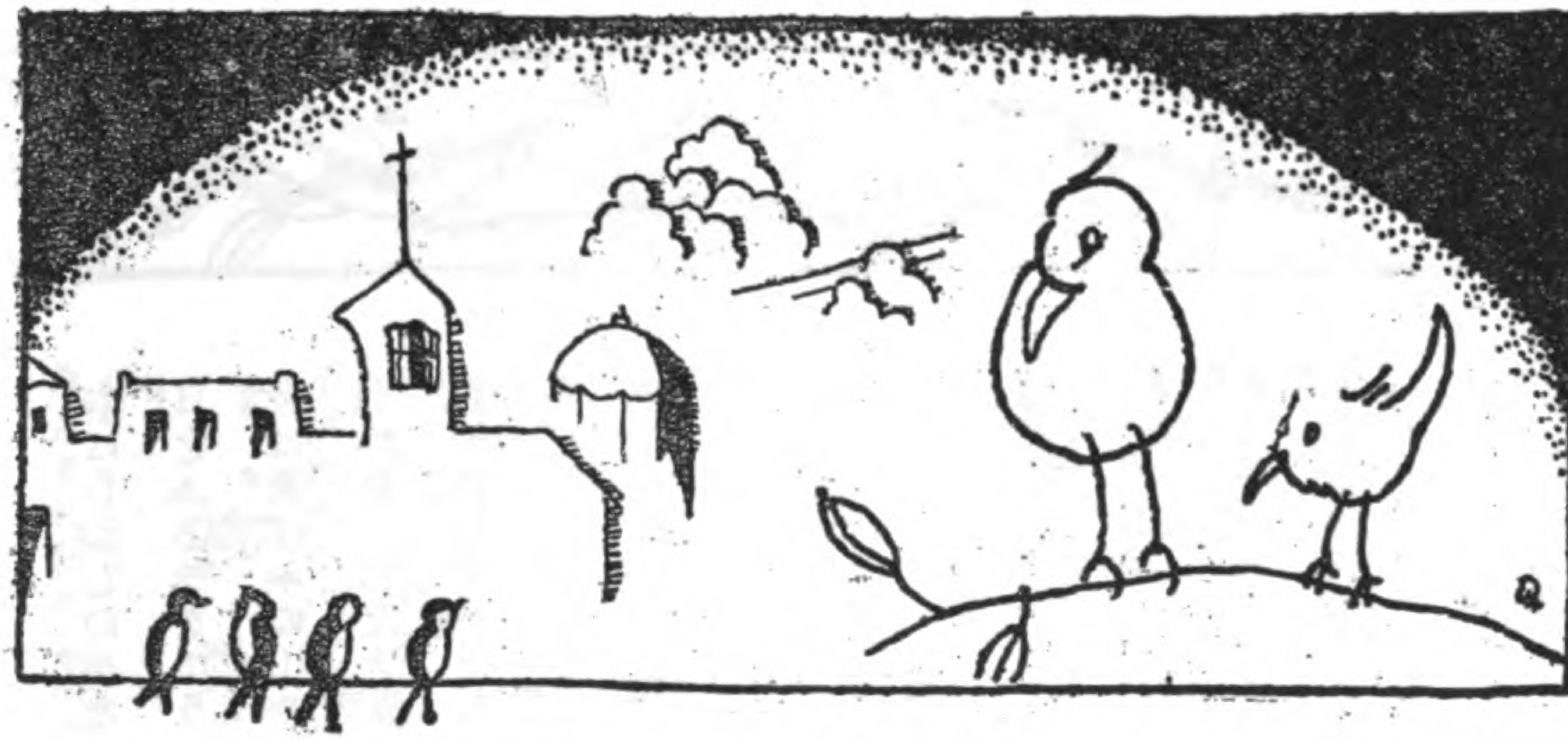
みどりに萌えし川やなぎ

春はむかしの夢なれば
日をふるままにうつろひて
秋は黄ばみぬ川やなぎ
われをよしなき渠となさば
君や絮なす花ならめ
みだれはげしき君がため
やつるるぞかし我がいのち

梨のはな

或る寫眞のうらに記された文字であると思へ

夕月夜の梨のはな
お前は白い。いた〱しい。
私をそぞろごころにする。
私をなみだもろくする



頬鬚の刑（童話）

山村暮鳥

あるところに一人の老齢つたお巡警さんがありました。若い頃のともだちはみなもう立派に出世してくらしてゐるのに、このお巡警さんばかりはいつまでたつても昔のままで、おかみさんもなく子どももなく、ぽろりと單獨で、都からとほいとほい小さな田舎町のみすぼらしい駐在所に勤めてゐました。——獨身者ではあつたけれど、大の酒好きなためにいつもいつも貧乏で、財産といつたらほんとにお臍のあたりまで黄蜀黍の房のようにたれてゐる純白なその頬鬚ぐらゐで、それこそ何一つもつてはゐませんでした。

お巡警さんなどといへば大抵、笑つてゐた子どもでも泣きださずにはゐないほど怖がるものですが、このお巡警さんばかりはまつたくそれとは反對で、その姿でもみえようものなら泣いてゐた子どもでもすぐ泣きやんでにこにこするといふ風でした。どんな子どもでもこのお巡警さんに可愛がられ、また、このお巡警さんに馴れてゐないものはありませんでした。この人のゆくところにはきつと子ども達が待つて

のように群つてきました。そしてみんなはこのお巡警さんを相手に角力をとつたり、獨樂を廻したり、水泳ぎをしたり、また草つ原にねころんでお話などをきいたりしました。時には、その帽子やサアベルをとりあげてこまらせたりしてゐるようなことも、屢々、町の人々はみかけました。

平和な町はいつでも祭のようでした。曾て一ど、お巡警さんの手をわづらはすような出來事もありませんでしたから、かうして毎日々々子どもたちと遊び戲れてゐるのをみても誰も何ともいひませんでした。かへつてそれを何處の親達もよろこんでさえ見て、遠くから笑つてゐました。

――ほんとに珍奇しい人ですね。

――ええ。

――まあ、なんといふ子ども好きなんでせう。まるで自分の眞實の子どもかなんかのように可愛がつてゐるんですよ。

――さうですつてねえ。……よく世間では、自分で持つた經驗がなければ子どもはけつして可愛がれるもんでないなんて言ひますが、あの人のことをおもふと、やつぱりさうばかりもいへませんのね。

――それはさうとあの人は、この齢になるまで一どもおかみさんをもつたことがないんでせうか。

――さうですつて。

――ぢあ、子どももね。

――それは言ふまでもないことぢやありませんか。開闢以來、子どもがひりで出來た例がないんですから。

――どんなにか寂しいでせうねえ。

――!ところがあの通り、年ケ年中にこにこしてゐるから不思議ぢやありませんか。あの人の寂しいような、悲しいよう

な顔をみたものが何處にあるでせう。ほんとにめづらしい人ですよ。あの人の變つた顔をするといつたら、まあ。あの長い草箒のような頬髯を子どもたちにひつぱられた時ぐらゐなもんだらうつて、誰でも言つてゐますよ。

——あのお髯？

——ええ、さうです。あの人があの髯を大事にするつたら、それはそれはとても想像の外なんですつて。

——どうしてね。

——どうしてだか私もその譯は知らないんだが、なんといつても珍らしい人があつたもんですね。

町の人々はときどきおもひだしたように、二人三人あつまるときまつてこんな噂を囁き合ふのでした。

平和なその町はいつでもいつでも春のようだつたと私はいひました。そして誰も彼も。勿論そのお巡警さんも、そのなかで無事に、幸福にくらしてゐました。

ところがある年の冬頃から、遂にその町が物騒になつてきました。放火が幾晩もいくばんもつづいてありました。泥棒があちらにもこちらにも這入りました。町の人達はもうすつかり縮みあがつて、生きた氣持もありませんでした。でも、ぼんやりしてゐられないからみんなして鵜の目鷹の目でその犯人を探しました。けれどもさつぱり捕りません。それぱかりでなく、おそろしい事件はあとからあとへと湧上りました。

さあ、さうなると非難の聲はたちまち嵐のように好々爺のお巡警さんのうへに降りかかりました。

——どうしたもんでせうな。

——まつたく、これぢや壽命も何もちぢまつてしまひますよ。それもこれもあの老耄巡査が悪いんですね。彼奴さえ厳重に見張つてでもくれたらこんなこともないんでせうが……ああして、暢氣に、遊んでばかりゐられたんぢや何とも仕方

がありませんね。

――さうです。さうです。眞實です。

――どうでせう、いい齢をして、あの餓鬼大將になつてよく巫山戯廻つてゐるところは……どうみても、まるで白痴か狂人かですね。

――あれでも服裝だけは巡査だからたまらない。

――だが、あれぢやまつたく、あつてもなくつてもいい案山子ですよ。

――いや、あんなのなら無い方がどんなにいいか解らないぢやありませんか。

――まつく無能ですな。

――第一、あのおいぼれぢや、よし犯人をみつけたところで捕まりつこはありませんよ。老猫鼠に侮らるつていふ奴でさあ。

もう、かうなるとお巡査さんはまつたく酷めなものでした。町の人々はすつかり開いた眼ではみないやうになりましたあれほど愛し愛されてゐたものが、まあ何といふ變り方でせう。評判はだんだん日を追ふて惡くなり、しまひにはもう寂しくも、あの大勢のあんなに仲許しであつた子ども達すら、一人もよりつかなくなつてしまひました。

お巡査さんは、だが、いかに職務のためとはいへかうして幾年も幾年ものながい間、この平和な町の誇りとして、唯一人の犯人もださなかつたことを思ふと實際、途方に暮れて、かんがえこまずにはゐられませんでした。――かうして事實が事實である以上、犯人はかならずあるにきまつてゐる。捕へたら處罰しない譯にはゆくまい。誰がみづから好んで、放火をしたり、泥棒したりするものがあらう。これには必度、それ相應の理由があるにきまつてゐる。ああ、みんな愛しあつて睦じくたのしく生きてゆくべき人間なんだに……同胞なんだに……その一人をでも罪人にするなんて、どうしてそん[illegible]こ

とができよう。だが、また町のことをおもふと、その心得違ひの者のために、たくさんのひとびとが家をうしない、財から離れてくるしんでゐるのだ。ああ、まつたく困つた。これは一體、どうしたものだらう……

町の人達は、いくらまつてゐても、お巡査さんがぐづりぐづりしてゐて、すこしも犯人の捜索を始めるらしくもないのでたうとう火のようになつて怒りだしました。

町長を先頭にして、駐在所に押しかけた町の人々は、けふこそは一つきつぱりと目を覺ましてくれなければならないと思ひました。先方の返事によつては、これを好い機會にして、こんな案山子巡査は逐拂つてしまふがいいなどと拳をふりまして怒鳴るものさへありました。

――さあ、どうしてくれるつもりですか。

――どうするつて……ほんとうにこまつてしまひましたな。

――何が困つたんです。あんたは唯、あんたの役目を果してくだされぱそれでいいんです、

と言はれたお巡査さんの顔は、あのいつもにこにこしてゐたものが、すつかり化石でもしたように變つてゐるのでしたけれどまだ人々には、その譯が解りませんでした。

みんなの口汚い惡態をおもふぞんぶん頭から浴びるだけ浴びてしまふと、おもひきつてお巡査さんはやうやく口を切りました。

――えツ、犯人がだしたくないからですつて……冗談ぢやない。

町長がさういつてまづ目を圓くしてびつくりしました。

――さうです。

——それでは、あんたは私達の困るのをよろこんでゐるんですね。

——な、な、滅相もない。どうして、どうして。私はな、この平和な幸福な理想郷のことより外になんにもおもつためしがないんだ。現在だつて、そのとほりなんだに。

——それなら一刻もはやくこの町の不安をのぞいて、私達をやすやすと枕を高くねむらしてくれてもいいぢやありませんか。

——よろしい。それではあなた方の要求どほりにするとしよう。いまから三日の間に、犯人はきつと捕へてみせる。よし、つかまへられぬまでも、きつといままでのような物騒な事件はまちがつても無いようにしてみせる。だから安心して貰ひたい。……だが、自分が犯人をだしたくないと言つたのは、まつたく、さうした悪漢をだすことによつて此の町のうつくしい名に泥を塗りたくなくおもつたからだと、それだけは必ずかならず記憶に止めておいて欲しいものだ。

人々はそれをきくと

——ああ、さういふお考えだつたんですか。と始めて眉根をひらいて感心しました。

町の人々の激怒はおまはりさんの誓約を聴いてともかくひとまづ靜まりました。だが、おまはりさんの方では、その場合、つひ、うかうかと言ひのけて、町の人々はかへしたものの、さて、どうしたら犯人が捕へられるのか。そんな物騒な事件がふたたびどうしたら湧起らないやうにできるのか。皆目、見當がつきませんでした。それに實をいへば、ああは言切つたものの、まだ何とかして犯人を捕へたくなくおもつてゐることに、かはりはすこしもありません。ああ、なぜ自分は三日の間にきつと検擧してみせるなんてこの舌を辷らしたらうと後悔までが、ときもときとて浮ぶのでした。

そして相不變、ぐづりぐづりと家の中にひきこもつて、深い溜息ばかり洩らしてゐました。

町の人々はそれと知ると、もう、よくよく腹を立てて、むしろ呆れてしまひました。誰も彼もくちぐちに言ひ罵らないものはありませんでした。

——あの老耄の、意氣地なしの、穀潰しの、ものぐさ驢馬め。あんなものはゐなくつていい。ゐてはかへつて目障りだ。ひきずりだして叩き懲してやるがいい。それでも口だけは立派なもんだ……この町の名折になるからどうかして惡漢はあげないですませたいものだつて言ふんださうだよ。

一日過ぎ、二日すぎ、たうとう三日目の日もとつぷりと暮れました。

おまはりさんは獨りしよんぼりと爐邊で、頻りに首をひねつてゐました。明日になつたらまた町の人々がおしかけてくるだらう。そしたら自分はなんと言はう。いくら考へてもどうにもならない。仕方がないから、こんやは一つ犯人の搜索にでもでかけてみようか。捕まらなかつたらどうしよう。いや、もし捕へることができたらどうしよう。それよりは、いつそ今夜のうちにこつそりと夜逃げでもして姿を晦ましてしまはふか。さうすれば犯人をあげないでもすむといふものだ。だがまた、さうして自分だけは町の人々の折檻からのがれえても、そのあとで相不變、放火や泥棒が絶えないのであつたら、さぞ、人々がこまるだらうな。——いくらかんがへても、かんがえはその都度、きまつてそこへぐるぐると廻つて落ちてくるのでした。

さうかうしてゐるうちにも夜はすみやかに更け渡りました。木枯が一しきりごおつと海嘯のような音をたてて町の闇空を、低く高く、吹きすぎました。と、その中からひよつこりと吹き流されでもしたような人影が一つ、こつそりと駐在所の戸口にちかくしのびよつて佇みました。

ことことことこと、ことことこと、ことことこと……

お巡査さんはその音をききつけましたが、いま頃、人が訪ねてきようなどとはすこしもおもつてゐません。多分、風の悪戯ででもあらうと聞流してゐました。

音はちよつと途絶えたが、ふたたび、ことこと、ことことことこととはじまりました。さうかと思ふと――こんばんは、こんばんは、ちよつとお願ひいたします。かういふ聲はまさしく誰か來たらしいのです。

――誰だい。

――…………。

――お這入り、おはいり。うちには鍵なんか掛つてゐないんだから、ずんずんはいつて來ていいんだよ。

と言はれたので、がたぴしと戸を開け、そこへはいつてきた男はなぜかぶるぶると震えてゐました。おまはりさんは見馴れないその顔をちらりと見ました。

――あんたは誰だな。そしてこの夜更にどんな用事があつてきたのかの。

――はい。

――戸外は寒かつたらう。さあさあ、ずつと火の側へよるがいい。

――ありがたうございます。こんなに遅くなつてとんだお邪魔をいたします。實は……

――うむ。

――まことに、どう申上げたらいいのか解りませんので……

――何をな。

――實は……お繩をかけていただきたくつてあがつたような次第でして。

――え、何だつて？ わしに捕縛つて貰いたいんだつて？

——はい。

——それはまたどういふ譯だな。世の中に、惡いことをしても捕まるのがおそろしくつて逃げ廻るものはある。いや、百人が百人みんなそれなんだ。それだのに自分から縛つてくれなんて、あんまり變り過ぎてゐるぢやないかえ。

——はい。ですがもうもう堪らなくなつてしまつたんです。

男は、かういつて、自分がこの町をさわがしたその眞の犯人であること。さうして惡事をつづけてきたが、町の噂によつてお巡査さんがどうしても犯人を出したくないと云つてゐること。それから、それがためにたいへん町の人達から非難され、このまゝにしておいたらどんな酷い目に遇はれるかも知れない。それもこれもみんな自分の爲めだとおもふと、もうもう良心の苛責にゐてもたつてもゐられなくなつてそれで自首してでたのだと、つつまず隱さず打明けました。

流石のお巡査さんもこの男の正直さには、開いた口もふさがらないほど、すつかり打たれてしまひました。

——お前さんは、それで妻も子もあるんかな。

——はい。

——それなら、お前さんが監獄にやられてしまつたら第一、その家族がこまつてしまふぢやないかえ。

——はい。

——さうだらうが……

——はい。それだから……その家族が可愛想なばつかりで惡い事とは知りながら……

——さうだらう。

——で、惡い事とはしりながらもかうして御厄介になるようなことをしてきたのです。私のようなものでもなんとかなれば人樣の家に火をつけたり、物を盜つたりするような、怖しいことはしたくはありません。だが商賣しようにも資本は

なし、百姓になるにも田地はなし……ひとに云はせると、なんでもしようとおもへばできないことはないと云ひますが、そこです。一どでも暗い所にゆき赤袢天なんか着たことがあると、いくら自分では改悛した、眞面目になつたとおもつても世間が信じてくれないんです。そして相手にしないんです。勞働でも何でもいいからと望んでも、てんで雇傭はないどころか見返つてすらくれないんです。

――ふむ。

――旦那、まつたく嘘ぢやありません。いつそ乞食にでもなつたらと、いくど思つたかわかりません。

――…………

――乞食なら、ちよつと外聞が悪いようにも思はれますが、もうかうなつてみれば恥も外聞もありません。おなじことです。それに乞食なら盗みをするような危険もないでせう。まつたく盗人は命懸です。

――…………

――もう俺はつくづく世の中がいやになりました。これはまたこの町に手をかけはじめなかつた頃でしたが、いつか家の子どもが近所の子どもに（てめえの親父は泥棒だらう、えツ此の恥曝し）つて意地目られて、めそめそ泣いてかへつてきたときなんかは、俺も一しよになつて泣いてしまひました。その子どもが云ふぢやありませんか。子ども心にもどんなに口惜しく、恥かしかつたんですか。（ちやんよ、ちやんよ、みんなにああ言つて馬鹿にされねえようにしてくんな、よう、おらは決して我儘なんかいはねえから……そしてなんでも、どんなことでもいやがらずにするから）頑是のねえあの罪のねえ、とつて六つになつたばかりのあれがさういふんです。俺あ辛くつてつらくつて手をついて子どもに謝罪ました。（ああ、ちやんが悪かつた、悪かつた、もう二どとそんなことを云はれるようなまねはしねえから）つて。嬶もおいおい聲をたてて泣いてましたよ。だがねえ、旦那、と云つてそんならどうして着のみきのままの親子三人が明日から暮して

ゆけるでせう。それはとても話したつておわかりにはなりますまいが。この胸元をばりばり熊手でも掻きむしられるようなそんなくるしいおもひでした。で、たうとうその晩もまたちよつとした仕事をしたような譯でした。……だがこんどといふこんどはまつたく譯も非もなくなりました。私がいくら悪黨でもどうして旦那のような方の……。

——いいよ、もう解つてゐるよ。

——私はもう決心しました。

——……うむ、もういい、もういい、解つたよ。それではかうしたらよからう。俺がいい事をおしへて遣る。

お巡査さんはそもそも、どんなことをおしへたでせうか。

そのとき以來、ぱつたりとふたたび町はもとの靜穏さにかへりました。そして人々はやうやくのことでその胸を撫でおろしました。それから二三月すると箱車にのつた躄で盲者のみたこともない乞食がひよつこりとあらはれました。それを女がひつぱつて町をぐるぐると歩きまはつて、そして物乞ひをするのでした。時には、女のかはりに子どもがその綱をひいてゐることもありました。そんなときには躄自身もその子に力をあはせるために兩手で杖をつッぱつてゐました。

みぎやひだりの旦那樣
おなさけ深い奥樣や
御隱居樣……
どうぞ。おゆるしくださりませ
お目の汚れのはこぐるま

一つは
ひとのたましひの
二つはふかき父母の恩
憐れな片輪の
　おねがひの
三つは衆生の御供養に――
南無や、お慈悲でござります
南無や、お慈悲でござります

かうした念佛のようなことを、あはれツぽい調子で、歌のように唄ひながら通街をのろりのろりところがつてとほる箱車をみると、町の人達のどうして同情せずにゐられましたらう。誰も彼もよろこんで食物や小錢を彼等にこつそりとめぐみました。

毎日々々かうして、雨か雪でもふらなければ根氣よくかれらは町にあらはれました。それが實に三年間といふながいながい期間でした。――乞食親子は、そうして天日に曝されながらすつかりその顔を賣つてしまひました。

――どうしたんでせう、あの乞食は。

――さういへば此頃、ちつとも見えないぢやありませんか。

町の人達がこんなことをあちらこちらで喋舌りだしたときには、いつか、その町をすこしはなれた丘の背後の森かげにひよつこりと一つ小さな祠が地からでも湧きだしたようにできてゐました。そしてその祠には、まあ、あのいつもの乞食がゐるではありませんか。而もいまは聾でもなく、盲目でもなく、立派なそして神々しくさえみへる白裝束の修驗者としてゐるではありませんか。ひとびとは狐にでも憑かれたのではなからうかと、なんとしても自分々々を信ずることができませんでした。

――目もぱつちりと、二つとも開いてゐますよ。

――腰もあのように立ちましたよ。

だが、どうしても自分の目ながら、それをすら疑はずにはゐられません、それでもなんでも、そこにいかめしく座りこんで聲高々と祈禱をあげてゐるその實物をどうしませう。それが何よりの證據です。

風聲はたちまち遠近に籾殻でもちらしたように擴がりました。

――まあ、まあ、こんなことがあるものでせうか。

――ほんとにさ。

――まつたく一念つて怖しいもんですね。

――私あ、はじめつからさうおもつてゐたんですよ。なんでも此の乞食は普通のとは違ふつて……

――それではもうその頃から。その摩利支天樣とやらを信心してゐたんですねえ。

――そうだつて云ひますよ。昨日、あそこへお詣りしてきた人の言葉ですが、なんでもまだお祠が建つてから幾日にもならないのにもう十何人もの盲者の目があいたり腰が立つたりしたんですつて。

——へええ。

——まるで嘘のような話ですよ。話半分にしたつて大した事ぢやありませんか。

——それに奇特なことには、ちつともお錢を欲しがらないんですつてね。拜んでもらつたりした人が御禮はどれほど差上げませうつてきくと、きまつて、そんなことはどうでもいい。さう言つてなかなか受けてくれないさうですよ。だが、さう言はれてみると猶々澤山あげたくなるつて誰だつたか話してましたよ。……なんでもあのお祠なんども、やれ寄附の勸化のつて出來たんぢやないんですつてね。

——ええ、ええ、それなら私もちらりと耳にしましたよ。あれは滿願とやらの日の黎明頃、まだ何處でもおきださないうちに、前々からのお默示によつて天からふわりとお授けになつたんだつていふんぢやありませんか。

さあ、さうなると無智な參詣者はだまされてゐるともしらないで、ぞろぞろと蟻の行列のように群りました。乞食であつた修驗者の男は、腹の中ではおかしくつておかしくつてたまりませんでしたが、それをじつとこらえて、やうやく自分達のあの三年間の、贋物の髭の盲者のそのくるしいくるしい辛棒の酬ひられてきたを、ひそかに妻や子どもとよろこびました。

賽錢はあがるし、加持祈禱はたのまれるし、その男はたちまちにしてすばらしい大金持になりました。そうしてしこたま貯めこむと、或る夜、摩利支天大明王をば獨りぽかんとおきざりにして、そのまま、ふいと何處へか吹き消したようにゐなくなつてしまひました。

さて、それだけのことならなんでもありませんでした。ところが頬髯のお巡査さんにとつて、それがたいへんなことになつて來たのです。

と言ふのは。その男がいささかの感謝心から、一通の置手紙をしていつたのです。それですつかり化の皮が剝がれ、いままでのことが残らず知れ渡つてしまつたのです。

やがて裁判の日となりました。

いろいろととりしらべた裁判官は、お巡警さんの大きなその海のような愛情にふかくふかくうごかされました。この神様のような心をもつた人をどうして處罰することができよう。處罰どころが、かへつて世の人々の模範として、どんなにでもして賞譽しなければならないとさへ思ひました。

しかし國法は曲げられません。

一方のその、いかに憐憫からとはいへ、逃げた男に町のひとびとを欺かせる手段を入智慧したといふことは、どう大目にみたところで感服できないことでした。

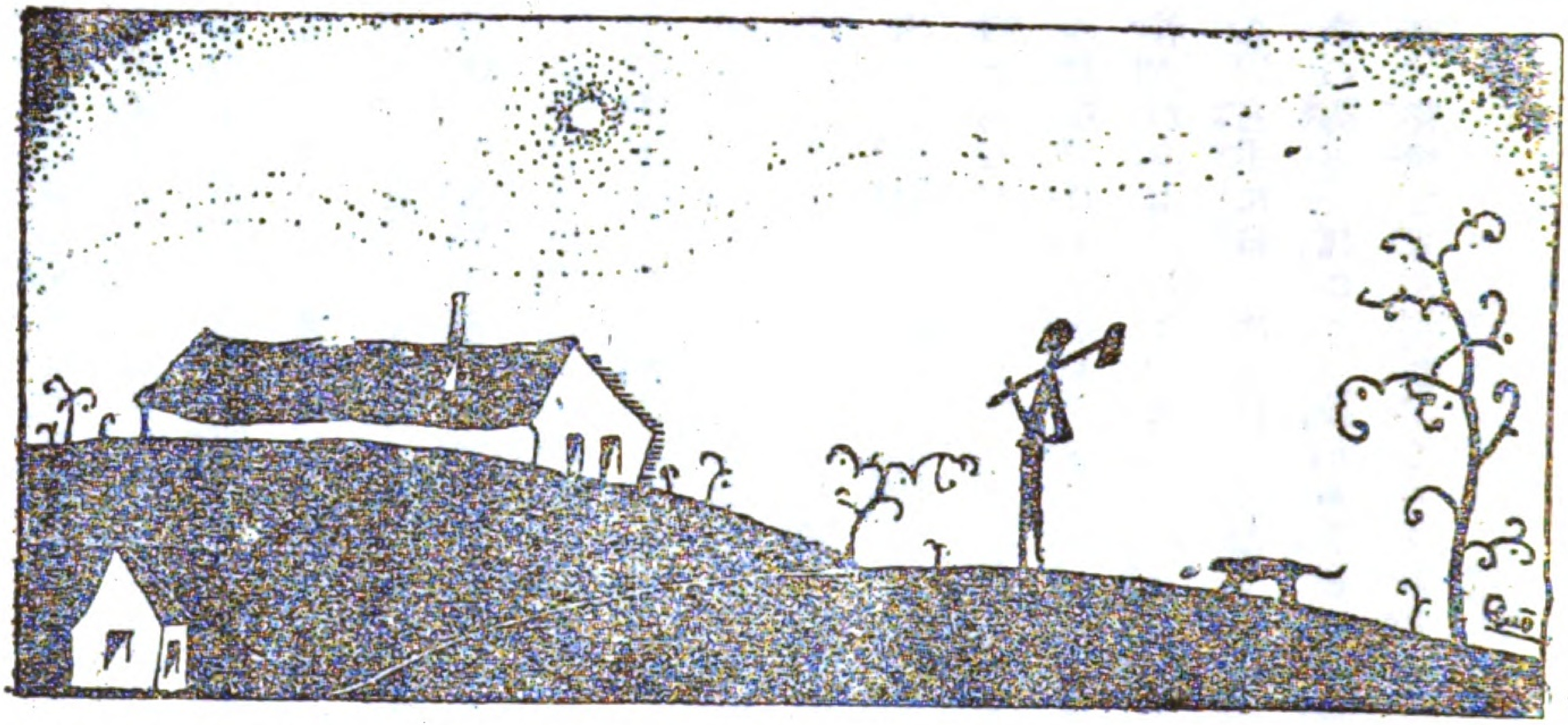
裁判官はしばらくどうしたものかと當惑して、しみじみとおまはりさんの顔をたかいところから俯眺めてゐました。と眼についたのが純白な房々とながくうつくしくたれてゐたその頰髯でした。

はたと膝を打つて裁判官はにつこりと、すぐさまその場で、その頰髯を剃落させ

――これでよろしい。おまはりさん、これであなたは靑天白日の身になりました。と云ひました。

だが、それはお巡警さんにとつては、まつたく首を刎ねられるそれよりどんなに痛苦いことだつたでせう。裁判官は、そんなこととはゆめにも知りませんでした。

法廷には例のおきざりにされた摩利支天大明王も、證據物件の一つとして、ひきいだされてをりましたが、頰髯を剃落されたおまはりさんを見ると、なんともいへない悲じさうなお容顔をして人知れずこつそりとその象嵌の硝子細工の眼から、熱いあつい涙をぽろりとおとされました。



出世五人男

宇野浩二

時は又初夏の頃であつた。

さて、我々の赤木阿珂丸は兩國橋の袂で大淀猪之吉と分れてから、三ケ月程に入井の家を引越して、それからずつと麹町區下——阪の蓬莱館といふ下宿屋に落着いてしまつた。早いもので、三度花が咲いて、三度青葉になつた、そして蓬莱館は六度代が變つて、六人の主人を迎へた。が、殘念なことには、我々の赤木阿珂丸はその間に何等の變化も進歩も見せなかつた。

三年の間、彼は何をしてゐたか？——それは一口で答へることが出來た。言ふのは、彼は押入の中で寢て暮してゐたのである。その下宿屋は二階建で、下——阪の中途にあつたので、向つて左手のあるところは辛うじて往來の高さと並行してゐたが、左手に行くに從つて阪道である往來の面だけが遠慮なく高くなつてゐた。だから、蓬莱館の右手の階下に當る部屋は往來の方から見ると、阪道の傍に斜に、二三尺埋もれてゐるやうに見えた。ところが、赤木阿珂丸の部屋はその埋もれて見える

部屋の二階の間になつてゐたのである、だから彼の部屋は二階でありながら、道を通る人の顔と室内に坐つてゐる彼の顔とが殆ど同じ位の高さに置かれる位地にあつた。すると、窓に向つて左側に一間の押入があつて、その中の上と下とを仕切つてある段の上を片附けて、彼はそこに萬年床を敷いたのである。そこで、窓を明け放して、押入の戸をも適宜に明けておいて、その萬年床の上に横たはりながら、枕に頭をつけたまゝで往來の方を見渡すと、往來の人は男にしても女にしても、まさかそんな押入の中に人がゐるとは思はないから、誰も見てゐる者のない空の部屋のつもりで、その前の舗道を無關心な態度で通つて行くのである。

おゝ、その眺め！　これは赤木阿珂丸ならずとも、『觀察』といふ高尚な道樂に興味を持つてゐる閑人ならば、どんな芝居や見せ物よりも喜ばれる景色に違ひなかつた。

「おや〳〵、今日は頻りに女が澤山通る日だな、」と阿珂丸は枕の上で目を見張りながら獨言つた。「成る程、斯うして見てゐると、日本の女の恰好も追々に變つて行くらしいぞ。ほお！　これは又先の女より一際新型だな。道理で、往來の人たちも大分驚かされて、振返つて見てゐるやうだ。何といふ髮だらう。無論、未だどんな職業の髮結ひも知らない流儀のものだらうが、して見ると、あの女自身が何か西洋雜誌の寫眞でも見て、工夫して結ひ上げたものだらう。大膽になつたものだな？　日本の娘も。さういへば、あの着物だつて、これ迄の日本の着物と別に變つた仕立方のものではないだらうが、着方が違ふのかな、身體の恰好が違ふのかな。否、何も彼も、手の振り方も、歩き方もすつかり違ふんだな。あの樣子なら、右手に細い杖を持つてゐても似合ふかも知れないぞ。歩き歩き口笛を吹いたつてをかしくは見えないぞ。なアんだ、あの男と一緒か？　後から手を振り振り追附いて來たところを見ると、男は遅れて靴の紐でも結んでゐたのかな。おやおや、輕快なもんだな、くるりと手をつなぎ合つたぞ。そオら、矢張り口笛が始まつた。マーチ、マーチ！」

「はて、」と阿珂丸は不覺にも枕から頭を持上げて、この一對の男女を尚詳しく見る爲に、押入の戸の間から、龜のやうに

首を延ばした。「あの連の男の恰好は、あれは又何だ！　あのだぶ〳〵した洋服、鍔の廣い帽子、――あれは、さうだ、恐らく亞米利加の活動寫眞から來た装らしいな。あんまり感じのいゝもんぢやないな。だが、あの大道のまん中を濶歩して行く樣はどうだ？　何といふ俺たちとの違ひだ？　俺たちと言ふと、早い話が女連れで道を歩くのに、滅多にこんな大道を選びはしない、よし又こんな大道を歩くにしたところが、矢張り裏町を行くのと同じやうに、道の片隅の、軒の陰を、こそ〳〵と泥棒のやうに歩くのが常である。謂はゞ、季節で言ふと秋に親みを感じ、時で言ふと暮れ方を好むのが俺たちの傾向だ。ところが、彼はどうだ？　恐らく俺と彼とでは年にして三歳か四歳かの隔たりでしかないに違ひない。而も俺と彼とではまるで足の裏同志に立つてゐる人ほどな違ひがあるではないか。彼は見た通り元氣よく、誰に遠慮する樣子もなく、公然と女と手を取り合つて、初夏の眞晝の大道を濶歩して行くのである。彼は俺の好みではない。然し彼は確に俺から見ると『後より來る者』ではないだらうか。おゝ、俺は何といふ不幸な生れの者であらう、僕が二十四歳にしかならないのに、既に自分の足の裏に立つ『新時代』を見出さなければならぬとは！」

阿珂丸は斯う心の中で叫びながら、彼の眼界から二人の男女の姿が消えると共に、わーッと聲を上げて泣き出したい氣持に陷つた。そしてその瞬間には不斷彼の腹の中に慢性になつてこびりついてゐた輕蔑癖も、剛慢病も、悉く煙のやうに消えてしまつて、腹の中が急にがらん洞になつたやうな感じに襲はれた。彼は常々彼自身が鑑賞眼の廣いことを誇つてゐた。文學や美術は言ふ迄もなく、浪花節でも、講談でも、音曲でも、落語でも、或ひは舊劇でも、新派でも、彼は悉くそれ〳〵それ等のものを味ふことが出來ると信じてゐた。そして人がつまらないと貶すものから一脈の美點を指摘したり、人が賞讃するものに對してはそれに一々急所を突くやうな非難を浴びせたりすることに、彼は彼自身のより優れた鑑賞眼を振り廻すのを得意としてゐた。そして彼はその度毎に心の中で言ふには、「君等にはその邊のところ迄しか分らないだらう。物が分るとか分らぬとか言ふことも、畢竟天から與へられた各々の才分に依ることで、君等のやうな凡庸の徒のあ

づかる事の出來ないものだからね。……早い話が、一人の女に就いてだよ、それがどんな種類の、どういふ女に就いてもだよ、その女のどういふ所にどういふ魅力があるか、又どういふ所にどういふ馬脚を現してゐるか、その女の顏、その女の表情、その女の聲、その女の恰好、その女の着物に就いて、――さあ、それだけでも君等には實に容易ならぬ試驗問題なんだよ、浮世床のやうな觀察もあるだらうし、醫者のやうな見方もあるだらうし、或ひは美術家のやうな鑑賞法もあるだらうし、言ふには何、言ふには何、――が、それ等の一つでも君等には出來るかね？」

　そして、彼自身は實際それが出來たかも知れないのである。それどころか、彼自身は文學でも、美術でも、演藝でも、或ひは浪花節から、音曲に至るまで、人が十年かゝつて修業するところを、三ケ月かゝつたら仕上げられたかも知れないのである。

「さうだ、俺は人から見て、最も俺に不適當に見える角力取になつたとしたところが、無論、幕の内に這入るだけの自信はある。」と彼はつい今先も同じ押入の棚の上で考へたことである。「おゝ、大淀猪之吉！　彼とは三年前に兩國橋で別れた切りだが、此頃ちよい／＼新聞や雜誌で見ると、可成り有望力士に數へられてゐるらしい。あんな奴でも新聞や雜誌に名前を載せられるやうになるんだからな。何でも近い將來大關力士とかしてあつたやうだが、可笑しいのは、彼のことを近來での頭腦の明敏な男だと書いてあつた。中學を優等で卒業したやうにも書いてあつた。今こそもうあいつと角力を取つても敵はないかも知れないが、中學時代に俺はあいつと柔道をやつて、唯の一度も負けたことがない。力で言ふと、俺はあいつの五分の一人分もなかつたらうし、業といつて、元々俺は柔道など輕蔑してゐたから、何一つ碌に知らなかつたが、それでゐて、俺は俺のこの蒟蒻のやうにへな／＼した身體を利用して、相手の力をあべこべに使つて始終あいつを負かしてゐたものだ。俺だつて、あいつだけの修業をしたら、今頃は奇妙な、一癖ある新進力士として謳はれてゐたに違ひない。なアに、乾度、俺があいつに負ける筈はないんだから。」……

だが、今それ等の一切の、彼の慢性病は悉く煙のやうに消えてしまつた。そして、實際彼は今にも泣き出しさうになつた。それは彼のやうな性格にとつて、譬へると、沙漠でオーシスに會ふやうな、救ひに逃ひなかつた。何故と言つて、それは不斷は人間や世間やに對して方圖なしに剛慢になつてゐる彼の前に、謂はゞ神樣が樣々の姿をもつて立つやうなものだつたから。「神よ、私は無力なものであります。生半いろ〳〵な事に少しばかり人より優れた才を與へられた爲に、却つて自分はそれ等の才のどの一つをも育てないで、そして人の才ばかりを輕蔑してゐるうちに、青葉のうちにばさりと地に落ちるやうなのが私の運命でありませうか。頭ばかりが南瓜のやうに發達して、胴體がその反對に瘦せ細つてしまつて道化のやうな恰好で死んでしまふのが私の運命でせうか。おゝ、私にはいつの間にか後より進んで來る『新時代』の顏も見える氣がするのであります。然しそんな事にはかまはないで、或ひはそんな事には氣がつかないで、唯一心不亂に奮鬪する者には惠みがあるのかも知れない。見よ、大淀は大淀で彼の道を猪のやうに突進し、反子は反子でお目出たい馬車馬のやうに彼の道を斷け出し、己は己で龜のやうに彼の道を勉强して歩いて行く、そして、恐らく厨戸のやうな者でも……」

その時、どうだらう、その厨戸が坂の上の方から、道の左側の片隅を、肩に匡を張つた繪らしいものを數枚擔ぎながら、おゝ、彼も亦三年前と殆ど變らない恰好をして！　その白い齒を心持ちむき出した善良な顏に、多少肩の荷物に惱んでゐるやうな表情を浮べて歩いて來るのである。感情の興奮してゐた阿珂丸はそれを見ると、いきなり抑入の中から飛び下りて、窓際に走つて行つた。

「厨戸君、厨戸君！」と彼はいつになく聲の頂點で叫んだ。

厨戸はその突然起つた自分を呼ぶ聲の出處が分らないので狼狽したらしく、立止まつて、その貶のやうな目を見張つて彼方此方を見廻した。

「厨戸君、こゝだよ。」と阿珂丸は二階の窓から叫びながら、いつもなら決してそんな事をしない男なのだが、折から人懷

しい氣持で有頂天になつてゐたことなので、外の往來の人たちの振返るのもかまはないで、ぱち〱と手を叩いて厨戸に合圖した。

到頭、厨戸は道の反對の側の、下宿屋の二階の窓から招いてゐる赤木の姿を見付けると、彼も亦懷しさうにその大砲のやうな巨體を、道を横切つて、その窓の下に運んで來た。

「あ、赤木さんですか、暫くでしたね、あ、あなたこゝにゐたんですか。」と彼は昔ながらの吃り聲で言つた。

「まあ、兎に角、君、お上りなさい、」と赤木は言つた。「そんなに急ぐんぢやないでせう。君の畫ですか、それは？」

「こ、これですか、」と厨戸は肩に擔いでゐる匡に張つた洋畫らしいものを、幾分持上げるやうにして、「い、いえ、僕のぢやないんです。見せませうか。う、うまいもんですよ。」

「見せてくれ給へ、」とそこで赤木が言つたら、厨戸は早速往來でその繪の包を解いて、二階の窓に向つて展覽させたかも知れなかつた。が、赤木は「そんなとこでは可笑しいよ、上り給へ。さ、直そこが入口だから、」と促した。で、厨戸は入口の方へ廻つた。

「君は今何處にゐるんです、矢張り己武良夫と一緒ですか？」と赤木は聞いた。

「いゝえ、ぼ、僕は今芝の南佐久間町にゐるんです、」と厨戸は答へた。「己さんは小石川の、あのい、入井の家の直傍の曾我部といふ、だ、男爵ださうです。そ、その男爵の家へ、書生兼家庭教師といふやうな名目で行つて居られます。もうそれは二年程前からのことですよ。」

「で、」と赤木は己の消息は特別に聞きたくなかつたので、「で、君のその南佐久間町といふのは下宿ですか、何處です？」と聞いた。

「ま、間借りです、巡査の家の二階です。」

「で、此頃は又畫を勉強してゐるんですか！」と赤木が聞くと、

「えゝ、だけど、生活の方をしなければなりませんので、あの、あの、」と厨戸は少し言ひにくさうにした後で、「し、新聞の遞信省へ毎日行つてるんです。」

「何をして居るんです？」

「つ、通信事務員のみ、見習生といふのです、」と厨戸は頭を掻きながら言つた。

「毎日そこへ通つてるんですか？」

「えゝ、だけど、今日は日曜です。」

「ほお、今日は成る程日曜でしたか、」と赤木は感心したやうに言つた。そして後は獨言で、「道理で、何だか人通りが多いと思つた。……そしてその通信事務員は月給は幾らです？」

「月給ぢやありません、に、日給五十錢です、」と厨戸は答へた「し、然し、この頃は國の方から月々三圓だけ繪具代として送つてくれることになつてゐるんです。」

「その繪は誰のです、君のぢやないんですか？」と赤木は話題を變へるつもりで、部屋の隅に立てかけてある、厨戸の持つて來た繪の方を見ながら聞いた。

「こ、これですか？」と厨戸はその方に手を延ばして、「け、せませう、見返按次郎といふ人の繪です。う、うまいもんですよ。實に、う、うまいもんですよ。これから、よ、陽光會へ出品するので、持つて行くんです。」

「誰です、見返按次郎といふのは？」

「ぼ、僕も、さ、最近友達に紹介されて知つたんですが、び、美術學校に居た人です。天才ですよ。も、もつとも本業は日本畫で、號は珊泥といふんです。日本畫家で、そ、そしてこんな立派な洋畫も描くんですからね、」と言ひながら、厨戸

は風呂敷包と、新聞包とを解いて、中から二枚の畫を取出して、それを壁の側にもたせかけた。

並べられたところの見返按次郎といふ男の畫は、成る程、そい頃のものとしては甚だ特色のある畫に違ひなかつた。それは八號と十號との大きさのもので、その何方もが、背景として、くすんだ色のカーテンが一面に張つてある前に、似たやうな色の布をかけた卓子らしいものが臺になつてゐて、主題としてはその上にサイダアか、正宗かの空壜が二三本無雜作に突立つてゐるだけのものであつた。が、それは不斷極彩色の花鳥や大宮人ばかり描いてゐる日本畫家のものとしてばかりでなく、どんな條件なしに見ても、確に特色のある、優れた作品に違ひなかつたので、

「ほお、これはちよつと巧いね、」と赤木は感嘆して言つた。斯ういふ場合、非常にといふ代りに、彼は『ちよつと』といふ言葉を少し長く引張つて、力を入れて發音するのが癖であつた。「然し、」と彼は直に考へた、「この畫のうまいといふ事が厨戸に分るか知ら？」

赤木が感心したのに、厨戸は自分の事のやうに滿足したらしく、「然し、これはほんの、み、見返さんの餘技なんださうですよ、も、元々見返さんは日本畫家なんですから。油畫はこれが、は、初めてなんださうです。實際、み、見返さんは天才なんださうですよ。美術學校の一年生の時、寺崎廣業さんが『春』といふ題を出して、生徒に畫を描かされたことがあつたんださうです。す、すると、み、見返さんは期日になつて、半分まで描いてあつたんですが、間に合はなくなつて、何でも、ぜ、前景が、春の野原になつてゐたらしいんですね、そ、その一番前の未だ何にも描いてないところへ、花屋から菜種の花を一束買つて來て、そ、それを一面にべた〳〵貼りつけて出したので、寺崎先生怒る譯にも行かないで、ぼ、ぼんやりしてしまつたとかいふことですよ。」

赤木はそれを聞きながら、厨戸の話の内容よりも、彼が如何にも吃音家獨得の、變な調子の喋り手であることに驚かされた、そして興味持つた。「なる程、變つた人ですね、それで……」と赤木は厨戸をもつと喋らして見ようと心の中で企

ちんだ。
「もつと天才なことには、ね、赤木さん、」と厨戸はつゞけた。「見返さんといふ人には、自分のものと人のものとの見境がちつとも附かないんださうです。ですから、下宿屋でも、あ、あの人が玄關に下りて行くと、帳場にゐる者から、臺所にゐる者まで、見付けた者は誰でもその傍へどや〳〵と、か、驅けつけて行くさうです。そ、それは、だ、誰の下駄を穿いて行くか、か、傘を持つて行くか分らないからなんださうです。現に、あの人は美術學校の、と、圖書館へ行つて、か、借り出した本の中に一寸でも自分の氣に入つた挿畫があると、びり〳〵と自分のもの見たいに破り取つて、それを、も、勿論隱しもしないで、自分の机の片端に載せておいて、歸りに一まとめにして持つて歸る癖があつたさうです。外の來てゐる學生たちも、又圖書館の係の人たちも、も、勿論それを見ない譯はないんですが、餘りそのやり方が公然なもんですから、ま、まさかそんな借りてゐる本を破つてるんぢやないんだらうと思つてゐたんです。す、すると、一ケ月程して、學校の教師の一人が何か調べ物があつて、と、圖書館で本の挿畫が、か、片つ端から拔き取られてゐるのを見て、そ、そこで大騷ぎになつたんです。それで、初めて、係の者が、み、見返さんに目を付けたんださうですが、も、元より見返さんはそんな事をかまふ筈がありませんから、い、いつもの通り、好きな挿畫をびり〳〵破つて机の端に取つておいて、それを歸りに持つて行つたんださうです。し、調べて見ると、その貸し出した本の中の挿畫があちこち拔けてゐます、それで、係の者は言はれてゐた通り、み、見返さんには何にも言はないで、受持の教師にその事を言つたんださうです。す、すると、その翌日、教師が見返さんたちの組で何か話をすることがあつた時、次手にこの頃圖書館の本の挿畫を持つて歸る人がある、あれは多分、げ、藝術的に興奮の餘り、知らず知らず圖書館のものだといふことを忘れて、持つて歸るんだらうと思ふが、そ、それは、も、もつともだと思ふが、こ、困るから、心に思ひ當る人はどうか明日にでも、元の通り借り出した本の中へ挾んで返しておいてほしい、と斯う言つて、あ、暗に表立てると處分しなければならないやうになるか

らい、今のうちにそつと返しておけといふ風に言つたんださうです。そ、そしたら、その翌日見返さんは教員室へその教師を訪問して、そ、それや見返さんといふ人は無口な人ですからね、默つて、こ、こんなに容積のあつた挿畫を、どさりと教師の机の上に置いて、お、お辭儀をしてそのまゝ返して來たんださうです。教師はその思ひの外澤山であつたのと、な、何百枚とあつたさうです、その又、圖々しい返し方とに呆氣にとられて、そ、その時は見返さんに何にも言はなかつたさうですが、教員室のことですから、直にそれが外の教師の目にもつきますし、ど、どうしても見返さんを處罰しなければならないことになつたんださうです。何でもそれが卒業の一ケ月ほど前のことださうですがね、そ、その爲に見返さんは學校を卒業しなかつたとか、そ、卒業が一年遲れたとか言ふ話です。」

「面白いですな、」と赤木は相變らず話そのものよりも、厨戸の吃音の雄辯の方に興味を寄せながら、「まだありませんか、その見返といふ人の話は？」

「いや、どうも、あ、赤木さんは、ひ、人が惡いですな。ひ、人に話をさしておいてにや〳〵笑つてばかりゐて……」と厨戸はその大きな勞働者のやうな手で頭を掻きながら言つたが、急に恥かしさうな表情になつて、「あ、赤木さん　ぼ、僕の繪がこゝに二枚あるんですが、見てくれませんか、」と言つた。そして彼は元の隅に殘してあつた新聞紙包みを開いて、中から二枚の畫を取出して、それを例の見返の畫の立てかけてある前に重ねておいた。それは二枚とも十號の風景畫であつた。それは點描派の一種の筆法で、一枚は秋の收穫の野の景色で、他は柿の木の實のつてゐる田舍家を現したもので、いふ迄もなく、先の見返某の作とは比較にならない程拙劣なものであつた。

「ど、どうです、あ、赤木さん、批評してくれませんか、」と厨戸は言つた。が、赤木が批評の言葉に困つて、

「はあ、これは君の國の方の景色ですか、」とか、「あちこちの稻の束の間にちら〳〵見えるのは、何です、水溜りですか、」とか言ふばかりで、急に批評らしいことを言はなかつた。

「ど、どうです、あ、赤木さん、」と厨戸は催促した。「でも、いつかの小說よりはこの方がいゝでせう、矢張り僕には繪の方がいゝと思へるんですが……」

「無論、小說よりはいゝですよ、」と言つたが、赤木はさういつた後で、成る程、と氣がついた。そしていつかの古雜誌の頁に挿かれてあつた小說を思出して、危く吹き出しさうになつた。

「どうでせう、」厨戸は然し次第に悲しさうな調子になつて言つた、そしてそれでも急に相手から返事が得られなかつたので、獨言のやうな調子で「あゝあゝ、やつぱり厨戸夏生は物にならないかなア！」と言つたかと思ふと、又氣を取り直したやうに「然し、ね、あ、赤木さん、こゝの草のところと、こつちの柿の木のところは一寸うまく描けてゐるつもりたんだがな、どうでせう？」

「はあ、そこはうまいですな、」と赤木はやつと彼自身も氣を取り直したやうに言つた。が、それだけでは餘り白々しい氣がしたので、「だが、一體に、さあ何と言つたらいゝかな、つまり印象が薄過ぎるやうな氣がしますな。」

「い、印象が薄い！」と厨戸は相手の言葉を鸚鵡のやうにくり返して、「なる程、印象が薄い。さうです、實にうまいことを言ひますね。なる程、い、印象が薄い。……然し、あ、赤木さん、それを濃くするのにはどうしたらいいでせう？」

「……」が、流石の赤木もそれには返答に困つてしまつて、「さうですね、さうですね、」と口の中でくり返してゐる外なかつた。

「ぼ、ぼ、僕は矢張り駄目かな、」と暫くして厨戸は泣くやうに、半訴へるやうに言つた。「駄目かな、まつたく、僕の繪はまづいよ。僕が自分でまづいと思ふ位だから、赤木さんが見ても矢張りまづいだらうな。どうです、はつきり言つて下さい、厨戸夏生の繪は見込がないか？……僕の繪のどういふところが拙くて見込がないんでせう？……さうだな。どこがどうと言へない程、全體が、や、矢張りいけないんでせうな。」

間は、この一二年ほどの間、赤木阿珂丸もどちらかといふと文學よりも繪の方を彼並の熱心でやつてゐた。もつとも、それも文學の方だと折角一つのものを仕上げても、それを發表するのに先輩の家に頭を下げて歩いたり、雜誌社を頼んで廻つたりする面倒があるのに比べて、繪の方ならそれを展覽會のある時に、仲屋にでも賴んで屆けさしておけば、そしてそれが審査に通りさへすれば、一通りは發表する事が出來るといふ便宜もあつたからである。現に彼はもうこれ迄にそんな風にして、二三回展覽會に匿名で出品したことがあるのだつた。出品さへすれば、彼は一度も落選したことはなかつたが、又それが飛び拔けて優れてもゐたかつた證據に、未だ一度も『賞』といふ名譽を與へられたことはなかつた。然し、彼はいつでも、自分が匿名でやる仕事でさへ、この位のものであるから、もう少し生活に餘裕が出來て、もう少し外のことに氣を散らさずに、一心にやりさへすれば。……と始終腹の中で思つてゐた。が、今この厨戸の眞に迫つた悲しい言葉を聞くと、彼は亦不斷なるべく觸らぬやうにしてゐた、心の扉を叩かれた氣がした。

「いや、君。君ばかりぢやありませんよ、見込がないのは。」と阿珂丸もつい眞面目になつて言つた。「藝術といふものは千人に一人、否、萬人に一人といふやうな、許された天才の關係することで、普通のものには毒藥だよ。天才のない者がこの藝術に迷ひ出したのは、薄情な女に血道を上げる男より慘めですよ。……」

すると、だん〳〵厨戸の樣子が變に見え出したと思ふ間もなく、彼は隱しおほせなくなつてほろ〳〵と泣き出した。赤木もその樣子に氣を拔かれたやうになつて、言葉を止めて暫くぼんやりしてゐた。と厨戸は泣きながら、

「ぢやあ、ぼ、僕にとつて、げ、藝術とは矢張り輕子のやうなものでせうか。」と言つた。

突然、輕子と言はれて、咄嗟の間、赤木には分らなかつたが、忽ちそれがいつかの厨戸の小說に書いてあつた彼の逃げられた女の名だと氣がつくと、急に可笑しさが込み上げて來さうになつたので、

「おゝ、さういふと、輕子さんとかいふ人とは、その後それつ切りなんですか？」と聞いて見た。

「そ、それつ切りです。」と厨戸は答へた。「去年、國の方へ三箇月兵隊に召集されて行つた時に、た、大砲を引張つて行軍して居る途で一度ちらと見たことがあつた切りです。」

「まあ、さうくよ／＼ばかりしてゐても始まらないから、」と赤木は彼自身の氣持をも同時に鞭打つつもりで、「どうです、その邊を散歩して見ようぢやありませんか？」

「えゝ。有難う、」と厨戸は言つた「ですけれど、ぼ、僕、これを會場まで持つてかなければなりませんから。」

「會場つて、どうせ上野でせう。ぢや、一緒に附合ひますよ、」と赤木は言つて、立上つた。「見返といふ人は矢張り芝の君の家の近くにゐるんですか？」

「いゝえ、み、見返さんは谷中です、」と厨戸は四枚い畫を元の通り新聞紙と風呂敷とに、規丁面に包みながら、「ど、どうです、上野から、見返さんの家へ一緒に廻つて見ませんか？」

「えゝ、都合で廻つて見てもいゝですな、」と赤木は言つて、「それにしても、ぢやあ、その見返といふ人の方が展覽會場に近い譯ぢやありませんか。それをどうして、そんな畫を持ち廻つてゐるんです？」と聞くと、

「こ、これはこの前の日曜に見返さんとこから借りて來たんです、う、家へ持つて歸つて、十分に見せて貰うつもりで。そ、そして、丁度今日が締切日ですから、僕の畫と一緒に今日中に會場へ持つて行く約束だつたんです。」

赤木は心の中で、彼自身とは正反對にも、何といふこの男は、才のない者とは言ひながら、謙遜な性質だらう、と感歎した。そして二三日振りで接しる、戸外の空氣の中に厨戸夏生と一緒に出かけた。

その日、上野公園からの歸りに、厨戸に連れられて、初めて見返按次郎の下宿屋を訪問した時のことを、赤木阿珂丸は

いつ迄も忘れることが出來なかつた。それはこの邊の、平家建の多い、マッチ箱のやうな背の低い家並の中に、タンクのやうにどつしりと聳え立つて見える、三階建の下宿屋であつた。が、それは唯大きいだけで、家全體を塗つてある青ペンキの色も、殆ど灰色かと思ふ程に變色して、至るところ剝げちよろけてゐるのだが、その剝げた部分と、剝げない部分さへ區別が附かない程、古び切つてゐた。建て方は、遊廓の建物とか、西洋館のビルディング風の建物とかに見るやうに、まん中に庭を持つて、四方が悉く一階二階三階の部屋々々で取圍まれてゐるところの、厖大な構へで、それの三階の西南の隅の六疊の部屋が、尋ねる見返安次郎のものであつた。

厨戸は來馴れてゐるものと見えて、「三十七號」と書いたその部屋の前まで、別に女中の案内も乞はないで、赤木阿珂丸と共にやつて來ると、そこでコツ〳〵と扉をノツクした。が、初め、五六度ノツクしても返事がないと見ると、「留守ぢあないんですか？」と躊躇する赤木の言葉にも耳傾けないで、改めて拳固でトン〳〵トン〳〵とその扉を破れるやうに叩いておいてから、その扉の鍵口のところへ口をつけて「み、見返さん。厨戸です、い、今綸を持つて行つたんですが……」と言ふ言葉を大きな聲で二三度も繰り返した。

「悪いぢやないですか、そんな大きな聲をしちやあ、近所の部屋の人たちに、」と氣の小さい赤木は、こんな大變な手續きをしなければ會へない男を訪問に來たことを後悔しながら、「だけど、一體どうしたんです、變なんですか、見返といふ人は？」と聞くと、

「い、いゝえ、寢てゐるんですよ、」と厨戸は答へた。「寢るのに、この人は部屋の扉の鍵をした上に、押入の中に這入つて而もそれを又中から鍵を掛けないと寢られないんださうです。」

「押入の中を寢床にしてゐるのは、自分だけぢやないんだな、」と赤木は心で思ひながら、「ぢやあ、叩くだけで聞えるでせう、何もそんな綸を持つて行つたてことまでこゝから呶鳴らなくつたつて……」と言ふと、

「そ、それが我儘な人で、扉を叩く位ちや、き、氣が向かないと開けてくれないんです。今日はそれでも展覽會の繪のことが氣に掛つて居るだらうと思ひましたので、そ、それであゝ言つたんです。」

そして、扉の外で二人が無言になつて居ると、果して、中の方で唐紙らしいもの丶開く音がして、やがてそろ／＼と戸に進んで來る氣配がした。赤木は何か人間でない、動物の熊か何かゞそこに現れるやうな氣がして、先づ氣を呑まれた形で、息を凝らさねばならなかつた。そのうちに、鍵の音がして、のつそりと扉が開かれた。

現れたのは、厨戸と殆ど變らないほどの大男で、然し案外にも色の白い、目鼻立の整つた、頭の毛を角刈にした男だつた。彼は扉を半分ほど開けて、そこに厨戸の立つてゐる姿を見ると、笑ひ顔もしないで、微かに唇を動かした。それは「おゝ、」とか何とか言つたのであらうが、誰にも聞えない聲であつた。すると、厨戸は何故か濟まなさゝうに、頭に手を上げながら「つ、連の方と、い、一緒なんですが？」と赤木の方を目で指しながら言つた。と、相手は、その時まで全然赤木の存在に氣がつかなかつたらしく、言はれて、厨戸の斜め後に立つて居る阿珂丸の方をちらと見て、そして又直に厨戸の方を見て、微かに唇を動かしたゞけで、どん／＼部屋の中に這入つて行つた。が、それでよかつたものと見えて、厨戸は赤木に合圖して、つゞいて部屋の中に這入つて行つた。

部屋の中で、先づ第一番に赤木の目を見張らせたのは、六疊の疊が一枚缺けて居て、おまけにその部分の床板が外してあつて、その底から天井までの高さの、一枚の大きな繪絹で張つた匡が、上の天井の棧に依つて倒れることから支へるやうにして、立てかけてある光景だつた。見ると、右手の、開け放したまゝになつて居る押入の中には、そこの中の段に、例の部屋の中で一枚缺けて居るのがそれなのであらう、疊が敷いてあつて、その上に蒲團が敷き放しになつて居た。「これや、俺より大分上手だな。」と赤木は心の中で驚嘆しながら思つた。

さて、厨戸が吃り吃り、赤木を見返に紹介すると、見返は無愛想な樣子で、首から上をこくりと搖すつた切りで、例の

唇を微かに動かすことさへしなかつた。

「展……覽會、どう……した？」と暫くして見返は殆ど聞きとれない程の、初めて彼の言葉を聞く赤木などには、それだけの簡單な言葉が、一分以上後にやつと判斷がついた程の、低い聲で言つた。

「い、今持つて行つて來ました、」と厨戸は答へた。そして彼も甚だ手持無沙汰に陥つたらしく、例の床を打ち拔いて立て掛けてある、未だ何にも描いてない白絹を張つた匡の方に目をやりながら、「こ、この間のはもう出來たんですか、ま、又あれも破つてしまつたんですか？」と聞いた。

が、見返はそれには返事もしないで、彼は兩膝を立てゝ、それを片手で抱くやうにして坐つて居たが、別の方の片手で頻りに着物の下の足をぼり／＼掻いて居た。その後、赤木はだん／＼彼と交際するにつけて知つたことであるが、この男は始終身體のどこかが痒いと見えて、いつ會つた時でもこのぼり／＼とどこかを痒いて居ないのを見たことはなかつた。

それにしても、その時當の見返だけは一向平氣らしかつたが、後の二人は話の取つ附き場がなくて、息苦しいやうな沈默な味はされねばならなかつた。が、その時、ふと赤木はその下宿の太郎館といふ名前を思ひ出して、谷中の太郎館、太郎館……と考へて居るうちに、ふと彼の友達の先輩に當る杉尾といふ文學者の住居が、何でもその谷中の太郎館といふ下宿屋だといふことを聞いたことがあるやうな記憶を思ひ出した。で、彼はいゝ話口を見つけたつもりで、

「この下宿屋に杉尾といふ小說家がゐないでせうか？」と見返に向つて聞くと、

「こ、この下に……」と見返は半分聞える聲で、ぶつきら棒な手附で人差指を下に向けて、自分の坐つてゐる疊の面を指さしながら言つた。

「え？　ゐるんですか、その人？」と相手のする意味がよく分らないので、赤木が斯う聞き返すと、

「この……下の部屋に……ますよ、」とやつと聞きとることが出來た。

が、少しづつ馴れて來ると、赤木にも幾分か、この變屈者らしい男の、ぼそ〳〵いふ低い聲の言葉が、だん〳〵聞きとることが出來るやうになつた。
「君は己武良夫といふ男を知つてますか？」と見返が聞いた。
「えゝ、知つてます、」赤木は答へた。「ですが、あなたは又どうして己を知つてるんです？」
「僕の書を時々買つてくれる、曾我部といふ人の家の書生兼家庭教師をしてるから、」と見返は答へた。
「始終會ひますか？」と赤木は聞き返した。
「いゝや、」と見返はぶつきら棒に答へた切りであつた。
そして又一座がすつかり無言になつて、五分間近くもそれがつゞいたかと思ふと、見返は、それは流石に厨戸の方を向いてだが、例の不鮮明な言葉で、
「もう歸つてほしい、」と言つた。つまりそれは歸つてくれないか、といふ意味であるらしかつた。
で、厨戸と赤木とが太郎館を出て、歸る途で、
「何か氣に入らない事があるんでせうか、」と赤木が歩き歩き厨戸に聞くと、
「いゝえ、い、いつでもあれです、あ、あゝ言ふんです。」と厨戸は彼自身のことのやうに濟まなさうに言つた。（つゞく）

編輯室より皆さんへ

◇粗々な編輯室の硝子戸にも麗かな日影がさして、紅い紙鳶のうなりが靜かな美しい早春の空から聞えてきます。今國の皆さまの中にはまだ深い雪にとざされていらつしやる御方もありませうが、誰方も新らしい抱負と情熱と思慮とを持つて、意義ある生活を始めてをられることだらうと編輯室でも、新たなる意義に燃え立つてゐます。

◇即今、政治公議の各種機關に表明されたものを御覽になつて、皆さんは何を感じてをられますか。曾ては國民の代表的と見做された先輩達の理想や情熱は既に時代の要求から遊ざかつてしまひ、世界文化の潮流は若い民衆、時代を私共の眼前に押出してきました。若い民衆　その中には嘗て社會の坐席を與へられなかつた女性が加つてゐるのは云ふまでもありません。わが國の女性の社會史はまだつら若い。長い間女性が懐胎してきた國民の理想と情熱との新兒を今こそ勇敢に生み出すべき時がきました。しかし飛上りをしてはならない。あわてゝはならない。私達は先づ自分自身の足場をしつかり踏みしめてかゝりませう。

◇本誌所載の河田嗣郎氏の「女權より人權へ」、安部磯雄氏の「衆議院議員の公娼觀」、それに千葉龜雄氏の「時評」、それに年末多忙の一夜、私共の五先覺者が、白いテーブルクロースを圍んで深更に至るまでも我が國今後の經濟界と女性の經濟的生活の改造に就て思考を練られ、意見を戰はされた女性改造の談話會は、何れも時機にふさはしい好個の讀物として皆さんを深く滿足させるだらうと信じます。

◇それから獨逸文學研究のため、一月末に歐洲へ旅立たれる茅野蕭々氏が、我が國婦人への置土産として「永遠に女性なるもの」の一篇を本誌に託されました。罪を犯した可憐なグレエチヘンが、どうして救濟されたか。皆さんはこの一篇によつて又失つてはならない女性の生命を把捉されるだらうと思ひます。茅野氏の置土産と並んで編者が特ん皆さんに熟讀玩味して貰ひたい他の一篇は、阿部次郎氏が歐洲からお持ち歸り下すつた土産話です。氏の深意の籠るところを了察して下さい。

◇淸々しい朝日や、點々しい夕陽と顏を合す時のみでなく、私達は絶えずお互に生活の更生に努めませう。そして一ケ月後の本誌こそは一層の元氣で皆さんとお目にかゝるのを樂んでゐます。

◇芥川氏の文藝講話はいよいよ本月より登載いたします筈のところ筆者の都合で三月號より連載いたします。婦人雜誌界の呼びものとして歡迎さるゝことでありませう。

女性改造定價表

冊數	定價	郵税
壹冊	五十錢	壹錢五厘
六冊	參圓	郵税共
十二冊	六圓	郵税共

註文の注意

◇時大雜其他定價變更に依る前金拂込み不足ノ不足金の拂込みを待つて發送す
◇註文は凡て前金とす
◇前金切れの際は發送を停止す
◇外國發送の註文は毎部郵税拾六錢を申受く(但し支那を除く)
◇見本は發送せず
◇郵便切手代用は壹割增のこと
◇拂込みは振替によらるゝが最も便利なり

本誌一頁廣告料　一等[illegible]圓　二等七拾圓

◎本社廣告取次所　博報堂　弘盛舍　日本電報通信社

大正十三年一月十三日印刷納本
大正十三年二月一日發行
(二月號金六十錢)

編輯兼發行印刷者　東京市芝區愛宕下町一ノ一　平田貫一郎
印刷所　東京市牛込區榎町一ノ一　株式會社　秀英舍
發行所　東京市芝區愛宕下町一ノ一　改造社
電話芝一六三八、振替東京三二八〇



御買物は三越

品が良く、値段の廉い三越

御買物は三越に限ります。三越には呉服類を始め諸雑貨に至るまでの流行品、實用品を豊富に取揃へて御座います。地方からの御注文は三越呉服店通信販賣部宛に御一報下さいます様御願ひ申上げます

尚地方からの御注文には、御參考として、季節々々の「御注文の栞」を御申込次第進呈致します

東京

三越呉服店



大正十一年九月十三日第三種郵便物認可
大正十三年二月一日發行（毎月一日一回）
大正十三年一月十三日印刷納本
二月號
定價六拾錢（送料二錢）